

refrain regretシリーズ

りづ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気付いたら逆行して新しい人生をスタートしていたドラコマルフォイクくんが、前回手に入れられなかった「ハリーポッター」を我が手におさめんと（友人になろうと）頑張る話です。最終的にドラハリ、ハリドラ。少し共依存的なところがあるかも知れません。愛はハリーのほうが重ため。かっこいいドラコはいません。かわいいドラコになってます（？）

ドラコよいしよが根本なので、蛇寮優遇ですが、ヘイトはありません。みんな良い子でみんなはハッピー！

pixivさんの方でも投稿をしています。

同一のものです。

オリ主ではないですが、2巻あたりから物語の展開上、オリキャラが出てきます。あしからず

目次

賢者の石編

1 | 1

2 | 1

2 | 2

3 | 1

3 | 2

4 | 1

4 | 2

4 | 3

5 | 1

5 | 2

5 | 3

s o m e b o d y , ' s r e g r e t

1 | 1

1 | 2

1 | 3

秘密の部屋編

1 | 1

1 | 2

2 | 1

3 | 1

3 | 2

4 | 1

190 182 171 158 153 146 135 119 103 91 1 84 75 66 60 49 43 36 27 20 11 1

2 3	2 2	2 1	1 2	1 1 つ	s o m e b o d y s r e g r e t H a r r y s i d e	4 3
終了						終了
466	457	446	433	424		417

賢者の石編

1—1

やり直したい人生なんていくらでもある。

人生をやりなおしたいと幾度思ったかわからない。

きっとこうのは人間の道理なのだろう。

例にももれず自分自身もそうだった。

やりなおしたい。できることなら学生時代から。

いや、入学する前のあの、出会いから。

けれど、そんなことは不可能で、人生は進んでいく。

元死喰い人として、一人の父親として。

昔スコープウスに人生をやりなおしたいと思ったことはないか、と聞いた。するとあの子は笑って「なんで？」と問い返してきた。「昔は思っていたけど、やりなおしたいと思う今じゃないし、未来じゃないよ。アルバスがいて父さんがいて……。それに僕は失う怖さを知ってる。」だから、人生に「ああすればよかった」「こうすればよかった」なんて思わない。その結果が今だし。これが僕の生きる人生だよ。

眩しい。と素直に思った。あのハリー・ポッターの息子と大冒険をしてきたからこそその、捉えかたで、彼の真理なのだろうと思った。きっと、自分にはきつと理解できる日はこないだろう。いや、理解は出来ている。それを認められる日はこない。自分自身はこの20数年間ずっと後悔してきたのだ。

あのとき、もうすこし違う態度をとっていたら。

あのとき、ちゃんと名乗っていたら。

あのとき、凝り固まった純血主義に惑わされていなければ。

思い出すのは、いつもダイアゴン横丁でのマダムマルキンの洋装店

での場面だった。

あの場面さえやり直せれば、ハリーポッターと友人になれていたかもしれない。

寮が違っていたとしても、もうすこし、多少はましなものになっていたかもしれない。

彼らの背負ってきた人生と一緒に背負うことができたかもしれない。

スリザリンだからこそ、マルフォイに生まれたからこそその手伝いが、フォロー出来たかもしれない「あなたはいつもその話ね」と、いつもアストリアに笑われていた。それぐらいの、胸の内に秘めておくことすらできなかつた僕の最大の後悔だ。

「ドラコと一緒にいると意外と楽しくて、楽なんだよね。」

ハリーがいつかの夜そうつぶやいていた。息子同士が親友のおかげで二人で晩酌をするほどの仲になっていた。

2

「どういう意味だそれは。」

「そのまんまの意味だよ。なんだろう。窮屈さがない！」

「ほう英雄殿。それは多分に解釈できるがよろしいか？」

「うっわ。卑屈やろうだ。素直に『嬉しい。僕もだ』って言えばいいのにー」

「嬉しい。僕もだ」

「白々しい。ここまで白々しいセリフ僕初めて聞いたよ。」

「奇遇だな。僕もだ」

ニヤリと二人で笑って声をだして爆笑する。こんな日が来るなんて。こんな日が来るなんて。アステリアが知ったら「良かったわね」と息子を見ると同じ微笑みで僕のことを見るに違いない。

ふと、ハリーが真剣な顔をしてこちらを見ていう。「本当に、アルバスたちのおかげだね。僕は君と友達になれて今は本当に良かったと思っているよ。当時からそんなだったらよかったのに」

「当時から？当時から僕はこんなだが」

「は？うそだね。本当にあのころの君といたら…」

「なんだ」

「いけ好かなくて偉そ気で、ほんつとーに大嫌いだった！」

かなりショックを受けた。それを言い放ったハリーは、特段変わった様子もなく違う話にうつっていったこともショックだった。やはり自分は嫌われている。今の自分は嫌われていないとは断言できない。あんなことをしたのだ。あんな子だったのだ。状況が変わったといっても過去が消えるわけではない。過去を消し去りたい。変えたい。

ハリーに嫌悪感を抱かれている自分の存在を抹消したい。しかし、そんなことできるはずもない。自分は、今手にいれた関係を大切にしていくなさくて、いかなければならない。それを固く、かたく決心した。

ここは、どこだ？

私は誰で、ここはどこだ？

記憶喪失者お決まりの文言でめざめれば、そこは旧マルフォイ邸であつた。しかも、非常にみなれた元自分の部屋。

「いやいやいやいやどういふことだ。」

壁に掛かっていた鏡に向く。そこにうつる姿は：スコープウス!? いやいや自分だ。パニックで状況がうまくつかめない。うーんうーんと頭を悩ませていると、徐に扉がひらき、母のナルシッサが現れる。

「あら。目が覚めましたか? 熱は…」

そっくりながら額に手をあてる。

懐かしい母の姿に涙腺が緩む。うるうると涙が自然とでてきてしまい涙がポタリと落ちた。

「まだお熱がありますね。まあ涙を流して、そんなに辛いのですね。横になっておやすみなさい。しっかりとおすのですよ」

そっくりながら僕をベッドに横たわらせ、布団をかけ直してくれる。そうか、熱があるのか、どうりでぼーっとするし、涙もでてくる…ほんのり冷たい母の手に心地よさを感じながら、僕は再び眠りに就いた。

状況を確認しよう。

逆行ものには状況整理がセオリーだ。

5歳児の体で腕組みをし、庭でドラコ・マルフォイこと私ドラコ・マルフォイは考える。

この場合メタ発言は許されるやつだ。とりあえずわかったことは、自分の体が5歳であること。そして、自分が知りうる当時の状況と、何も変わらずほほほ同じ世界、状況であること。だ。

確かに自分は死んだ記憶がある。急なことだったけれどもあのあとの記憶がないということはやはりあれば僕の死だったのだろう。

でも僕には記憶があるし、生まれ変わったとかではない。なにせ過去の自分自身に戻っているのだ。

：両腕でガッツポーズをする。つまり、まさかの僕は僕の人生をやり直せる：ということか。そういうことだろポッター！失敬。そういうことだろ神様！

これほどまで神に感謝したことがあっただろうか。ありがとう神様。ありがとう。僕はこの第二の人生（？）を謳歌します。ハリーポッターと素敵な出会いをして。友人関係を築き上げ、そしてハリーの、あいつの不幸と一緒に背負っていきます。

かならず、必ず約束します。

僕は決して不幸にならないし。

あいつも決して不幸にならない。

ということで、まずやるべきことは父上の意識改革！何度妄想したかわからない。もしやり直せたとしても、父上が変わっていないければ十分な活動ができない。きつとどこの世界線のドラコでも逆行してしまえばやっているに違いないと断言できる。父上の意識改革。

といっても、やはりじゅんけつでそれなりに立場や地位のあるスリザリンのマルフォイ家が、例のあの方から目をつけられないわけもない。しかも、正直言つて死喰い人になることは、免れない運命だったと思う。悔しいが。

だから、「やめてほしい」とか「どうなんだ」というのは私から言うのはやめておいたほうがいいだろうという結論になった。自然と、父上の意識や考えが変わればいいのだ。人は体験や経験、関わってきた人で変わる。事実自分自身がそうだった。

ということ、三つほど目標を立てる。

①「英雄大好き。ハリーポッターすごい。僕お友達になりたい」

をアピールする。

②「マグルグッズが気になる」をアピールする。

そして、③「人の死が恐ろしい。怖い。傷つけて何かを手に入れるのはダメだ」というのを子どもらしく呟く訴える。僕には理解できないと、絵本をよんで父上と母上に報告する

これでどうなるとも言えないが、両親は僕のことを可愛がってくれていたから、僕のために少しでも変わってくれることを期待する。

いいのだ。もし父上が抜け出せなくても。

僕はもう流されないと決めているのだから。

さて、まずは作戦②

これは、割とおおきな計画である。

「父上。母上。お願いがあるのですが。」

「ドラコ。なんだい改まって」

僕はギュツと抱えていた絵本を抱きしめる。ちなみにこの本、僕が大好き（ということになっている）絵本だ。何度も繰り返し読み、父上にも母上にも預けたことはない。二人は微笑ましくその光景を見ていたからきつと効果があるはずだ。

「この絵本に書かれているマグルの使う万年筆とルーズリーフというものが欲しいのです！」

言っただけで。ちなみにこの本にマグルの使う万年筆とルーズ

リーフなんてものは書かれていない。ただ単に本当に僕が欲しいだけだ。羽ペンと羊皮紙で勉強なんてやってられない。

おずおずと顔をあげて父上の顔をみる。

非常に険しい顔をしていた。しかし、僕だって簡単に諦められない。

「あの、万年筆というのは、インクが筒の中に入っていて、そのインクがなくならない限り使えるペンらしいのです。あと、実はしゃーぷペんしるというものは、消しゴムというものでセットで使うと簡単に消せるらしいのです……！」

どうだ。すばらしいだろう。と僕は興奮した顔で伝える。「ほう」と父上が少し興味をもった様子が聞こえる。

「僕。お勉強がたくさんしたいと思っています。これがあれば、勉強がはかどるのではと考えています……！」

「……知り合いに。グリフィンドルのだが、本当に名前を知っているぐらいの間柄なのだが、マグル製品に詳しい知り合いが居る。しかし、あまり関わり合いがなくてな。『息子が興味あるといっている』という言い方しかできませんが、それでもいいなら頼んでみよう。」

「はい……ありがとうございます！」

父上が、おそらく連絡を取るためだろう。席をたち部屋を出るのを見届ける。知り合いって父上。ウィーズリーとは知り合いレベルではないだろう。確かもうこのときには二人は不仲だったはずだ。それにもかかわらず僕のお願いのために、あのロンの父上に「頼み」に行くとは、甘すぎやしないか。まあ、結果良かったのだが。

そこまで考えてふと、スコープウスのことか頭によぎった。…そう

だな、父上。僕ももしあの宝物に頼まれたなら、多少は我慢してでもその願いを叶えようとするだろう。

父上の僕を思う愛がくすぐったくなつて、年甲斐もなく、いや見た目相応に顔を赤らめた。

「うわあ……！すごいですね！」

というわけで in 隠れ穴。

思ったよりも簡単に約束は取り付けられた。やはり人がいいな。ウィーズリー家は自分とは全く違う環境ですこし照れる。全く違いすぎて自分にとっては居心地が悪いが、しかし、世間ではこれは素敵な家族像なのだろうと、今の僕は知っていたし。そういうロンが幼いなりに愛されていることも知っていた。そういうところにグレンジャー嬢も惚れたのだろうか。

次々と紹介されるマグルグッズに、感動の反応を示していると、いつまでも終わりそうにないことに気づいた。

「あ、あのウィーズリーさん」

「アーサーでいいぞ」

「あっありがとうございます。では、アーサーさん。あのアーサーさんには、僕と同じ年の息子がいらっしやるとお伺いしたのですが」

チラリと隣で無心に努める父を伺う。何も反応を示さないととなると、もうなにも触れない。無心でいつづけるという意思表示か。

「ああ。ロナウドのことかな。さつきからチラリチラリとこちらを

伺っているよ。こつちにおいでロナウド！ロン！あつ逃げた！」

後ろを振り向くと、確かに自分と同じぐらいの男の子がパタパタと走り去っていくのが見えた。

「あの、僕彼のところに行つてきてもいいでしょうか」

アーサーは一瞬固まったが、いつてらっしやいと言つてくれた。そんなにも父上と二人きりになるのが嫌か。まあ、ここに来て最初の挨拶をしたきり一言もしゃべらない父上と話したいひともいないだろうな。二人の気持ちはなんとなく伝わってきたが、僕には僕の作戦がある。お言葉に甘えて、とロンを追いかけた。

「やあ。ファイファイ・フィズビー食べるかい？」

僕は、ロンにそう声をかけた。この言葉は用意していたものだ。スコープウスが初めてアルバスに声をかけたときにいった言葉らしい。「スイーツがあれば、きつと友達になれる」アステリアとスコープウスの可愛いまじないだ。ついそれを思い出して顔がゆるんでしまう。これで友達になれなければ恨むぞスコープウス。

「……食べる」

単純かよ。ロンらしいな。いや、子供はそんなものか。現に息子たちはそうだったのだから。「はい。」と渡しながら隣に座る。間違えない。練習だ。

「僕の名前はドラコ・マルフォイ。君は？」

「ロン。ロナウド・ウィーズリー」

「ロナウド。君のことはロンって呼んだほうがいい？それどもロナウド？僕のごとはドラコと呼んでくれ……ると嬉しい」

危ない。不遜な態度がまだ抜けきらない。

「ドラコ。わかった。僕のことはロンでいいよ。」

「ああ。ロン。僕たち友達にならないか？」

彼の前に右手をだす、しかし彼はその手を凝視するだけで、なにもアクションを起こさない。ミスをしたか。間違えたか。と何を間違えたか考えていると向こうから言葉が返ってきた。

「君。マルフォイだろ。純血のスリザリンの」

「…ああ…」

「僕、ウィーズリーだよ！グリフィンドールの」

「…ああ…！」

何が言いたいのか合点がいき、目の前のロンを抱きしめる。そうかそうだった、こいつも純血だった。僕とはスリザリンとグリフィントールという「組み分け」の「カテゴリ」が違うだけで以外と純血に囚われていたのはお互い同じらしい。その「同じ」であることに少し安心し、つい抱きしめるなんてことをしてしまった。

「なんだ、そんなこと。僕は君と友達になりたいんだ。ダメかい？」

「…ダメなんかじゃない！」

第二話

あの日から、僕とロンは友人になった。

「ウィーズリーと友達になる」というのは、僕が目的を達成するためには、どうしてもクリアしなければいけない条件だった。前世(?)の事を考えると、到底ロンとは友人になれそうにもないだろうなと薄々と想像していた。大人になってロンとも時々過ごすことがあったが、やはり「二人きり」は無理だった。互いに互を変に意識してしまうし、学生時代のあの応酬こそ消えるものじゃない。なによりもあいつはハリーポッターの「親友」だったのだ。

思ったとおり、ロンには色々といライラさせられた。その度に「いやこいつはまだ幼いんだ」と自分を納得させていた。納得させていたら、気づいた。僕がこいつを育てればいいのか? 自分ごのみの友人にすればいいのでは? ホグワーツに行くまでまだ6年はある。いける。スコープピウスを天使に育てた僕だ。いける。

いけた。むしろ、最近はロンが可愛くて仕方ない。息子とは言いたくないが、甥っ子とは言えるぐらいにはなんだか可愛い。それは、1才になっていた僕と、前の僕がきいたら卒倒しそうな、ロンとの関係だった。

「明日ダイアゴン横丁に行く。色々と買い物を楽しみだ。ハリーポッターにあつたらどうしよう」

「僕たちはもう行ったよ! って君はいつもそればかりだね。『生き残った男の子』」

「ああ。両親の愛の深さを感じるからな。幼いことの僕には衝撃的で

羨ましかつたんだ」

「そしてそれ。普通はあの出来事の中で『生き残った』ことに感動するんだよ。僕の家族はみんなそうだ」

本気で「わかんない」とため息をつくロン。

それは、そうだろう。以前の僕もそうだった…。けれども彼はただ『生き残った』だけなのだ。そこに偉大さもなければ特別もない。むしろ生きていたことに、命がひとつ失われなかったことに感動をすべきなのだ。世間はそれを忘れている。それに彼自身が悩んでいたことに気づけたのは一体どれくらいの人だったのだろうか。

そうして、自分たちの息子たちを脳裏に浮かべる。スコープピウス。アルバス。確かに、誰しもが、何らかのレットテルの中で、苦しみがくのかもしれない。けれども、やはり自分にはその負担はハリーに強いことはできない。

「つていうか、噂じゃん。本当にこっちの世界に来るかわからないよ？」

「いや。魔法界にくる。」

「それに、会うかも知れないって、どれだけの可能性に緊張してるの。」

くすくすとロンが笑う。

「いや、本当に会う気がする。」

「わかんないよー。」

「いや、むしろ会うー！」

「……怖い。キモイ。ストーカー」

「何か言ったか？」

「いいや。会えるといいね！嫌な態度取らないようにね！」

身に覚えのない悪口と、自分の黒歴史をえぐるような言葉が耳に入ったので、むしやくして彼のおやつを全部食べた。どうやってかって？モリーに色々と告げ口してやったさ。その奥で見える涙目の恨めしい顔が可愛くてつい笑ってしまったが、やはり悪い気もした。明日、なにか美味しいお菓子を買って置いてやろう。

というわけで、マダムマルキンの洋装店入口。

父上と母上とは別行動。同じように僕一人だ。日付も時間帯もほぼ一緒。もうこれは彼と出会う。であってしまおうと確信しかなかった。

やつとこの日が来た。戻りたいと何度も思ったこの日。やりなおしたいと何度も何度も呟いたこの日。神様が僕をこの時ではなく、5歳児に戻したのにはなにか意味があるのだらうと思い、行動してきた6年間。準備は万端だ。頑張れ僕：とここに来て4回は繰り返した意気込み、5回目を繰り返す。

だめだ。緊張がやばい。色々やってきたとかいいながら自分にはよく考えたらロンしか友人がいない。父上が連れて行って下さるパーティで同い年の知り合いは何人かできてはいたが、自分から友人を作りに行くのとはわけが違う。

スコープウスとアステリアのお菓子作戦は今日は使えない。どうしたものか。とうんうん唸っているとお店の方から声をかけられた。

「ぼっちゃん。ずっとそこにいるけど Hogwarts の新入生？全部ここで揃いますよ。」

藤色ずくめの服を着た、愛想のよい、ずんぐりとした魔女。マダム

マルキンが声をかけてきた。ええいままよ！

「もうひとりお若い方が丈を合わせているところよ」

そういいながら僕を踏み台へとうながす。ん？もうひとり？そうか、客はほかにもいるのか、と前回と状況が変わっていることに納得しつつパニックになる。僕のイメトレが完全に無駄になる！どうするドラコ！どうすることもないまま踏み台に立ち横を見ると、そこにはみなれた顔があつた。

ハリーポッター。

懐かしさで泣きそうになる。叫ばなかった自分を褒めてやりたい。以前となにもかわない。くせつ毛の黒髪に、母親似のきれいな緑色の瞳。まだ幼い彼は、僕が知らない純粋な、経験も何もない無垢な顔をしてそこに立っていた。

声をかけなければ、声を、かけろ……！ドキドキしながら自分を奮い立たせようと頑張るが、緊張しすぎて、なんと声をかければいいのかわからない。なにせあんなにイメトレしたといっても、想定していたのは、僕が丈を合わせている時にハリーがやってくる場面なのだ。イメトレしすぎて、展開の違いにパニックを起こしてしまうなんて、よくある話だろう。僕の中身の精神年齢はこの際おいといて、だ……！

「君もホグワーツ？」

ぐるぐると思考を悩ませている僕に、ハリーはそう静かに声をかけた。

なにか、なにかを言わなければ……！

「あ、ああ！今年からホグワーツだ。君も：だろうな。ローブ合わせ

てるし…！」

バカ丸出しで返事をする。ああ。あんなにもやりなおしたいと願った僕の第一声はこれか！くすくすとハリーが笑うのが聞こえる。くすくすと笑っている。だと…。彼が僕に向けてこんなにも優しく笑うのなんて、大人になってからも含めて当然、ない。可愛い。

「ぼ、僕はドラコマルフォイ！君の名前はなんて言うんだ？」

「僕？僕はハリーポッター」

「ハリー・ポッター…僕と友達にならないか…！」

言った！言ってやったぞ！へんな自慢も皮肉もイヤミも、馬鹿な発言をしてしまうまえに言っただけ！どうだロン見直したか！とここにはいない友人にドヤ顔をする。しかしなかなか返ってこない状況に変な既視感を覚える。おずおずと顔を上げるとびっくりにした表情のハリーがそこにたっていた。

「僕、ハリーポッターだよ？」

「え？ああ。それは聞いたが…」

「生き残った男の子」

「ああ…！それが…なんだ？友達にはなってもらえないのか？」

断られることも何度もイメトレをしてきた。してきたがこれはなかなか辛い。久しぶりに抱く胸の痛みに、ぎゅつと涙をこらえる。

「…：ううん。僕友達って初めてだ！君のことドラコって呼んでもいい？」

「勿論！僕も、ハリーって呼んでもいいかな。」

「もちろんだよ！」

ハリーって呼んでもいいかな。

この言葉を普通に言えた自分を褒めて欲しい。あのハリーが、あのハリーポッターが僕と友達に、しかも友達第一号だ。なんという幸福なんという幸せ。ありがとう神様。なんどあなたにお礼をいつたかわかりませんが、本当に、僕にやりなおすチャンスをくれてありがとうございます。さっきのドキドキした痛みとは全く違った興奮だった。億万回あのセリフを練習しておいて本当によかった。

それからは他愛もない話を二人でした。丈も計りおわり、少しだけ立ち話をする。最後は寮の話になった。

「そうだな。やはり僕はスリザリンだろうな」

「スリザリン？」

「ああ、一家みんなスリザリンなんだ。ハリーはグリフィンドールかな」

「どうだろう。でも君と一緒にだと楽しそうだな。」

ドラコはきよとんとして隣の少年をみる。そんなことを言われることは想定していなかった。

「それは嬉しいね。確かにグリフィンドールもなかなか楽しそうだ。」

「僕には君しかいない。」

「何を不安になっているハリー。どこの寮でもそれぞれの良さがあるんだ。グリフィンドールには僕の知り合いもいる。きつと友人もそこにはいるだろう。レイブンクローもハッフルパフもそれぞれ魅力的なひとたちでいっぱいだよ」

すらすらと彼を慰める言葉がでてくる。寂しそうなハリーをどう

にかして心やわらげたいと思った。当時の自分だったら、こんなことは言っていないだろうし、思ってもみなかった。ハリーと友人になるためなら、好まれる自分を演じるつもりだった。しかしそれは不要な決意だったかもしれない。こんな穏やかな気持ちで話ができるなんて、誰が想像できただろう。大人のハリーが今の様子をみたらゲラゲラ笑うかも知れない。そう考えているとハリーが「違う。」とつぶやくのが聞こえた。「ん？」と聞き返すとふるふると首をふりなかつたことにする。

「だって、僕には友達はいない。君にはたくさんいるみたいだけど」「なんと、まあ。ハリー。君からそんな言葉を聞く日がこようとは、安心しろ。僕たちは愛されている。愛されていない子供なんていない。君は今までの分を取り返すくらいに愛されるんだ」

そういいながら極上の笑顔を向ける。これはちよつと演技、スコーピウス直伝だ。

「ねえドラコ。僕たち寮が違ってても友達かな」「当然だ。」

ふわり。とハリーは笑った。
笑ったかと思うと抱きついてきた。いわゆるハグだ。

僕の脳みそは要領オーバーと固まりかける。どういうことだ、は？え？いいの神様いいのですか?!それともこれはアルバスですか。スコーピウスとよくハグしているのを見る。何度か「ありがとうございます

ます！」といって自分自身も抱きつかれたことがある。ああアルバスなるほどアルバス。これはアルバスか。つてそんなわけないだろ！落ち着けドラコ！まだ試練は終わっていない。このままこのまま好印象で別れなければならぬのだ。このままだと余計なことを言っ
てしまいそうだ。昔の皮肉屋のイヤミなドラコが……。

そろそろ限界だ。とどうにかしなければならぬと考えはじめたとき、僕を抱きしめていたハリーが離れる。「約束だよ」そういつて彼は外にいたハグリットを見つけて外に出る。ドアにから外に出るときに「ばいばい」と振り向いた彼の姿を僕は一生忘れないと思った。

「はい。気持ち悪い。本当ドラコつて気持ち悪い」

「君もあつてみればわかる。」

「つてか、本当に今日出会えちゃうつてなんなの？しかも二人きり？ドラコつてストーカーなの？」

「しかも友達第一号らしい」

「うっわー…よかつたね。気持ち悪い。」

「察が違つても友達かなつていわれたから勿論答えたら…」

「ねえドラコそれ聞いて君に対する株が落ちてくだけなんだけど。僕もう眠い」

「…チョコレート。君の好きなウイディッチチームのシーカーがお菓子店とコラボレーションして作つたお菓子。しかも限定グッズ付き。君のために買ってきたのだが…」

「はい…それでドラコくん！ハリーポッターくんと出会つてどうだったんだい…?!」

ニヤリと笑って話を続ける。買物に行くまでは本気で昨日の謝罪のつもりでお菓子を買おうと思っていたんだ。行くまでは。しかし、出会ってしまったのがいけない。そのあとは、ロンに話を聞いてもらうための餌としてお菓子の物色をしていた。さあて、思うぞんぶん聞いてもらおうか。

さて、9と4分の3番線。果たして彼はたどり着けるのだろうか。荷物は収め、コンパートメントも確保した。あとは友人達を待つだけなのだが、一向に現れない。まあ。ロンは…ロンだしな。あの大家族が遅刻したら何人が遅刻することになるんだ。そう思い心配することはやめる。問題はハリード。あいつ、方法知ってるのか？人間界と魔法界を物理的に結んでいるエリア。自分は利用したこともないが、彼はマグルの世界からくるのだ……。唸りつつも自分ではどうすることもできないことも同時に悟る。まあ、学校にはどうにかしてくるだろうし、ロンは汽車にのったら連絡をするように言っていた。

それよりも懐かしの駅と汽車を堪能しよう。大人になってからは校内の近くに姿現しばかりを使っていたし、息子も卒業してしまっただけからはほんとうに来なくなった。しかもそれでも年に二回だ。ましてや汽車の内部なんて卒業（黒歴史）ぶりではないだろうか。こんなところだったか、とマグルの世界と大して変わらない汽車に、どこまでそれぞれの文化を取り入れているのだろうか。

汽車が滑り出す。緩やかに。

ロンを探すか、と座席からたち共の二人に声をかける。最後尾。最後尾。って遠い！やはりギリギリの時間に来たのか。とため息を落とす。家族と行動だから仕方がないのだろうか、やはり時間には厳しくなっておいてもらわないと……。

「僕はスリザリンは嫌だね。もしスリザリンなんかにはいったらそれこそ最悪だ。」

「ほう。それは僕への悪口かい？」

やっとロンのいるコンパートメントについたドラコの第一声はこれだった。ふとその正面をみるとハリーが座っている。どうりでいないと思った。端から端までの移動になり、ついでにとハリーを探しながらここまでやってきたのか。

いうよりさすがロンウィーズリー既に会って友達になっているのか。ハリーの真の友人。自分が一番目の友達と言ってもらえた嬉しさをほんのり思い出しながら、抗えない運命の存在に辟易する。素直に羨ましいぞロナウドウィーズリー

「そう聞こえたのならそうかもしれない。」

「ほう…」

「こいつはドラコマルフォイ。二人はダイアゴン横丁で出会ってるんだよね。さっき言ってた僕が一番の友達だよ。そろそろ格下げになるかもしれないけどね」

「よくわかってるじゃないか、ロニー坊や」

「僕のほうが格下げしちゃうかもよ？ドラコ坊ちゃん」

ふふふと笑いながら「失礼しても？」とコンパートメントに入る。ロンの隣に座ろうと思ったのだが、彼にそれとなく防御されてしまう。くっ以前の彼と比べて出来る子になっているぞロン。さすが僕…！しかし、ハリーの隣なんて口から心臓が出てしまう。「手をどかせ」と口パクで伝えてみても、聞こえないふりをロンは貫き通した。

そういえば、ハーマイオニーのヒキガエル探しのターンはもう終わったのだろうか。と思いながら（現実逃避しながら）座ると、さきほどの寮の話に話題が戻る。

「君たち友達なの？」

そう問うのはハリーだ。

「そうなんだよ。ドラコが僕の家に来てきてね！その時からだから…えっと」

「六年だ」

すかさずドラコがフォローにはいる。

「こいつきつとスリザリンだぜ。僕はスリザリンは好かないけど、まあドラコはいいやつだよ」

「はは、全くだ。君にも同じことを言うよ。ロンはきつとグリフィンドールだ。まあなかなか幼くてかわいいやつだ。」

「なんだと…！」

「ほら、こういうところかな。」

あははとドラコは声に出して笑う。隣のハリーは唾然としてこちらを見ていた。なにがなんだかわからないといった表情だ。自分が友人になった人たちがつながったことに驚いているのだろうか。確かなかなかない確率のような気がする。

「ドラコ、グリフィンドールになればいいのに。僕は狡猾さはないし、スリザリンつてことはまずないと思うけど、ドラコはありうるとおもうよ。狡猾度たかいけどそれと同じぐらい勇猛果敢で勇気あると思うな。」

幼馴染の、ふとして言葉にドラコは驚く。そのように自分のことを評価していたとは、あまり改まって話をするともないため、なんだかむず痒さをかんじる。それになおさら、なのだ、あのロンウィーズリーの幼少期に言われている事実。おかしくなっつてついニヤリとも

との笑い方をしてしまう。

「ありがとうロン。しかし、やはり僕はスリザリンだろう。そうでないと父上に申し訳が立たない。それでなくても自由にやらせていただいているんだ。さすがに、ここぐらいは父上の信頼に報いなければならぬだろう。」

それもたしかに、とロンは首をすくめる。

「それにハリーは、僕たちが寮が違ってても友達でいてくれるんだろう？僕にはそれで十分だ。」

目の前でロンの顔が引きつっているのがわかる。どうとも思え。僕は素直になる。イヤミや皮肉をこめずに、素直な言葉自分の思いを相手に伝えるんだ。それができなかつたからこそそのあの人生だ。スコーピウスのように、素直に、あの子のように。

そのときハーマイオニーが顔をだした。そして、ここに座っても？とロンのとなりに指をさす。しかし、誰も服を着ていないことにきづきみんなに「早く服を着替えなきゃ」と急かす。

「ああ。じゃあ僕は自分のコンパートメントにもどるよ。二人の友人を置いてきてしまっていた」

「あいつらと縁切れよ。」

「ロン。嫉妬してくれるのは嬉しいが、そういうわけにもいかない。」

は？。何言ってるんだよ。と本気の嫌悪で睨まれる。

「どうせ君らはグリフィンボールだ。寮が違ってても仲良くしてくれよ」

はははと笑いながらドラコは戻っていった。ウィンクしてしまっ

たのはやりすぎたかなと、若干の後悔をしながら…

「ABC順に名前を呼ばれたら、帽子をかぶって椅子に座り、組み分けを受けてください。」

マクゴナガル先生の声が響く。新入生はすこしぎざぎざと声を立てた。そりやそうだ。これで人生が変わるといつても過言ではない。家族関係、友人関係、ひいては将来の仕事での関係にも左右してくる一大イベントだ。

そう考えると11才の青少年たちに人生の岐路にたたせるのはいささかはやくないか？という疑問さえ浮かんでくる。

名前順。名前順でなければこうも悩まなかったものを。ドラコはDだ。どうしても前の方になる。ハリーよりも後であったならば、やはりもうすこし悩んだかもしれない。家が、父上がと言っておきながらも、「ハリーのいる寮がいい」と願わずにはいられないだろう。そうなると思ひ分け帽子も空気をよんで自分をグリフィンドールに入れてくれるかも知れない。

そんなたれば話について考えたていたらいつのまに自分の名前を呼ばれていた。

『さてはて、ふむ。おまえさんはどちらから？』

『……質問の意図がわからない。がしいいのであれば、20数年後の未来から』

『なんとなんと、ようこそ20数年前のホグワーツへ。して、希望の寮

「は、おありかな?」

『希望を聞くのか!? 組み分け帽子は!』

ドラコはびつくりして、帽子を落としそうになる。それもそうだ。前回の組み分けのときは、帽子をかぶるかかぶらないかのレベルで「スリザリン」と言われたのだ。

『君は意味があつてここにいるようだからな。希望がないならマルフォイ家の嫡男スリザリンだが…』

『そうですか。はいスリザリンでいいです。』

『本当か? グリフィンドールでなくても?』

組み分け帽子は、確認をするように、そこに後悔はないかと問うかのように聞く。なんだってそんなことを自分の決心がゆらいでしまうではないか。ぎゅつとドラコは目をつむり自分の決断を確かなものにする。

『ああ。僕にグリフィンドールの素質があっただけでも、安心した。これで彼らの助けができる。』

につこりと、顔があるのかも不確かな。かぶっているのに表情が見えるはずもないのに、そう組み分け帽子が微笑んだ気がした。

「それでは、スリザリン!!!」

ドラコは堂々と、椅子から立ち上がり帽子に礼をした。そんなことをした生徒は今までいなかったからか、しんと注目を浴びてしまった。しかし、そんな視線ものともせず、スリザリンの席にむかう。これでよかったんだ。僕は僕ができることをする。僕には記憶がある。あまり、物語から逸脱した行動をとってしまうと、流れが狂ってしまう

う。そうなるかと彼らを助けることができない。

そうして、組み分けの続きを眺める。ちょうどハリーの番になっていたらしく、広間一体に異様な静けさが広がっていた。

ハリーは組み分け困難者の部類だったな。さきほどの自分も随分と時間をかけてしまったが、今回ハリーはグリフィンボールになるまでどれくらいの時間を使うのやら…：そう思いながらじつとハリーを見つめる。

ふと、目があった気がした。そしてにっこりと微笑んだのだ。

「よろしい、君は君の歩む道を進め。スリザリン…：…！」

第三話

スリザリンの席へハリーポッターが歩いてくる。

未だに周りは静けさを残していた。ひとりひとりの唾を飲み込む音が聞こえてきそうなほど静まった広間。誰もこの空気を変えることはできないだろう。そう、当の本人以外は。

「ねえドラコ。君との学校生活楽しいだろうなって思ってたつちに来たんだけど、なにかいけないことをしたのかなあ」

どうしよう。と困った顔でハリーは僕に問う。バツが悪そうに頭をかく姿に僕も何も言えず。空いている隣の席に彼を座らせる。そうに決まっているポッター！

いけないことをしたのか。と問われるといけないことはしてはいない。ああ。特に。組み分け帽子が決めたことだし、ホグワーツの組み分けはあの帽子によってずつと行われている。その決定に誰も文句は言わないし、言えるはずもない。言えるはずもないが、この展開はまずい。なにがまずいかというと、即答できることは二つ。一つはスリザリン生になったこと。そして、静まり返った、みんなが聞き耳をたてているところで、僕との友情(?)宣言をしてしまったことだ。

『生き残った男の子』がスリザリンになったこと、それは「英雄」とは何か、を改めて問うことになる。かの「名前を言っではいけないあの人」「我が君」の卒業したスリザリン。ヴォルデモートを倒した英雄像を求めるためにはハリーはグリフィンドールであることが、望ましかった。美談にもなる。対立構造が見えやすくなる。世間は、ハリーを英雄だ。と、もてはやしたくなる。それが人間心理だ。

そして、スリザリンの、マルフォイの血をもつ僕。ブラック家の存続が危ぶまれる今、マルフォイ家はそれなりの、立場にあった。それこそ、「名前を言っただけはいけないあの人」にまだ通じているのではないかと、考えている人が一定数いるのが現状だ。

そんな僕とハリーの友情関係。これってもしかしくなくてもひよつとしなくても、大問題なのでは？

と、まあ冷静に考えられたのはここまでで、隣に座って美味しそうに夕飯を食べるハリーをみていたら全てがどうでもよくなってしまう。

色々考えるべきことはあるのだろうが、その殆どを据え置いた。ある意味の目標は達成されたことに気づいてしまったからだ。

僕はハリーと友人関係を築き上げ、ホグワーツライフを謳歌することが目的だったのだ。ハリーがスリザリンになったことは、むしろ望ましいことなのではないか。何を悩んでいたのだ。と自分自身に問うた。いや、本当に悩んでいたのだ。

ハリーとの学校生活は本当に楽しかった。いや、まだ数日しか経っていないが僕は声を大にしていう「本当に楽しい」。僕が夢みた学校生活がそこにあつた。

「ホグワーツってすごいねドラコ。先輩たちも優しいし。みんなもいい人ばかりだ」

「だろう。みんな仲間、身内みたいなもんさ。ロンは誤解しているんだ」

「本当に！ほかの寮はスリザリンの認識を改めたほうがいいね」

そういうながら談話室で、優雅なティータイムだ。

先輩たちが授業でいないのいいことに、勝手知ったるというやつだ。母上にお願いで持ってきた、お気に入りハーブティ。カップもすっかり温めて静かに注ぐ。スコーンも厨房で拝借してきた。ハリーに「それどうしたの」と聞かれたから深くは答えず「せっかくだから用意したんだ」とだけ答えておいた。可能であることをいちいち見せる必要はない。なにせ自分は一応まだ11歳なのだから。怪しまれないようにだけは気を付けないと。

薬草学。に魔法史、妖精の魔法、変身術。闇の魔術の防衛術。

何もかもが懐かしかった。ああこの当時はまだ平和だったなあと感慨深く思ってしまうほどに。ハリーが魔法史の授業で「無理。ねる。寝てもいい？」と連呼していたのには苦笑した。たしかに“ポッター”も苦手だった。「ヘドウィグはそこからもらったんだけどね…」と“ハーマイオニー”たちと話をしていたのをよく聞いていた。

「明日はとうとう『魔法薬学』の授業だね。僕一番楽しみにしてきたんだ」

「ほう…では『アスフォデルの球根の粉末にニガヨモギを煎じたものを加えると何になるか』」

「えっ…！何!?いきなり！えっと眠り薬！」

「正解だ。あまりに協力なため『生ける屍の水薬』とも言われている」

おつちよつと怒った。

「いきなり何ドラコ。びっくりしたんだけど。こんなことも答えられないのかって笑うつもりだった？」

「いやいやそんなわけないだろ。スネイプ先生はお父上がいうには、お勉強できる人がお好きなようだ。だから折角なら予習をしようと思っただけさ」

そう。君とスネイプ先生の最後を僕は知っているから。

君が何度も後悔して、胸を痛めていたのか知っているから。

僕でさえ知っているのだから、それは相当なものだろう。

僕は、ハリーと友達になりたくて、人生のやり直しを図ったけど、きつとハリーが人生のやり直しができるなら、僕ではなくスネイプ先生だろうな。と思った。だから、二人の中をとりもちたいと思った。ハリーが『英雄』であつてあのスネイプ先生のオモイビトの息子である限り難しいのかもしれないけれど。それでも今回はスリザリンだ。少しはお互いの関係が変わるのではないかと期待をしたのだ。

「なるほどね。じゃあ僕からも問題。君は『ベアゾール石を見つけてこい』と言われたらどこを探す？」

「簡単だ。山羊の胃からだな。」

ニヤリと二人で笑う。そのあともずっと談話室が賑わうまで魔法薬学のクイズを出し合った。不思議なことに最初のやり取りが過去のスネイプ先生とハリーがしたやり取りと全く同じであった。ああ。こうやって運命は繰り返されるのだな。と実感した。

「では、モンクスフードとウルフスベーンの違いはなんだね？」

彼は、しずかに、つぶやくようにハリーに質問していた。以前とおなじ三つ目の質問だ。それまでの質問にハリーは全て完璧に答え、クラスの視線を独り占めしていた。グリフィンドールの席でグレンジャーとロンが驚いた顔をしている。

「その二つに違いはありません。どちらもとるかぶとのこと。別名はアコナイトです。」

きっぱりとハリーは答える。

スネイプ先生はちらりとハリーを、そして僕をみた。そして言った。

「よろしい。しっかりと予習をしていると見える。スリザリンに5点。諸君。なぜ今のを全部ノートに取らないのだ」

そうして教壇にさつそうと戻っていく。

ハリーにスネイプ先生が点数をあげた。練習の成果だ。少しは二人の関係は以前よりましになるのではないか。ドラコは心のなかでガッツポーズをした。

そのあとはペアでおできを直す簡単な薬を調合した。ネビル・ロングボトムがやらかしたが、まあ仕方がない。彼の成長はこれからだし、魔法薬学は彼の専門分野ではない。

「ハリー！君ってすごいね！スネイプのあの意地悪な問題に全て答えちゃうなんてさ！」

「本当！私も感動しちゃった！」

グリフィンボールの生徒二人とスリザリンの生徒ふたり。コミュニケーションルームでさきほどの授業の復習をしていた。こんな部屋以前はあったか？と思いつつも、今回はあるのだから使わないのもつたいない。入学してロンとはゆつくり話す機会もなかったが、こうして集まって話せる場所があることに少し安堵をした。

「ロン。スネイプ先生だろ。先生のことを呼び捨てにするな」

「はあ？だってスネイプだぜ！調合中細かいところでぐちぐちぐちぐち。君たちだけだよ。あいつに文句いわれなかったの」

ロンは嫌なものを思い出すかのように顔をつぶす。

「あたりまえだろう。スネイプ先生もおっしゃられていただろうが。微妙な科学と厳密な芸術なんだ。」細かいことが命とりなんだぞ。

僕は呆れ顔で彼に返す。となりでハリーはくすくすと笑っていた。

「ねえハーマイオニー。君もすごいんだね。隣で堂々と手をあげているのを見たよ」

「まあありがとう。でもあれは本をよんでいたら分かることだわ。」

さも、あたりまえだとかのようには彼女は微笑む。さすがグレンジャー嬢。隣のロンを見てみる、君のことを妖怪かのような目で見て

るぞ。

「あなたたちもすごいわ。私感心しちゃった。どんどん質問には答えるし。おできの治す薬もふたりテキパキやっちゃって。今度私に教えてくれないかしら。」

「何言ってるの。君もすごかったよ！」

「僕は？」

『えーと…』

あははと笑いが巻き起こる。さすがロン。

そう話しているとお互いの好きな授業の話になった。まだ一度しか受けていな授業もあるだろうに、まったこ楽しそうでありよりである。

「僕、魔法薬学の授業が一番好きだな。学年で一番目指そうかな！」

ふと、聞き捨てならない言葉が聞こえてつい。応戦してしまう。

「いいや、魔法薬学トップの座は渡さない。僕のほうが得意だ。」

「いやドラコ。渡さないってなんだよ。まだ始まったばかりだろ。」

「ごもつともな意見がロンからでてる。」

いや絶対に譲るものか。元癒者であるプライドがある。

というより、僕はマグルという医者免許もとったんだぞ。愛するアステリアの命が少しでも伸びる方法があれば、という思いでマグルの大学にかよい、研修生もやったのだ。純血の皆様からは白い目でみられたな……。

「魔法薬学だけは、僕のプライドが許さない。あきらめてくれ」

「なに、ドラコ。その先に敵を蹴落としとくスタイル。」

「敵は少ない方がいい。あきらめてくれ」

ハリーはまたくすくすと笑う。なんだその楽しそうな笑みは

「そういわれると、ドラコを蹴落としたくなるよねえ。ハーマイオニー。」

「ええ。そうね。ハリー」

不敵な笑みを浮かべるふたり。おや。グレンジャー嬢はスリザリンドだったか？と見間違うほどの完璧な笑みだった。いやいや。負けなからな。本気で負けないからな！

先ほどの授業の振り返りといいながら、楽しく談笑をする。

ウィーズリーの双子の話は一際盛り上がった。もうこの数日感で新入生が誰でも知ってる先輩になるだろう。それぐらい彼らは派手で、自由でセンサーショナルな存在だった。

ロンがおどけてみせてハリーが笑う。ハーマイオニーが嗜める素振りをみせてくすくすと一緒になって笑う。

本当に、懐かしいものだな。

仲良し三人組が目の前で楽しそうに会話を繰り広げているのが眩しくてつい目を細めてしまう。僕もこの中に入りたかった。羨ましかった。そう本人に伝えた過去……未来”も同時に思いだしてしまう。

そして、やはり、この三人は三人でひとつなのだ。自分は彼らの未来にいないことを実感してすこし胸が痛んだ。

次のグリフィンロールとの合同授業は「飛行訓練」か。
心の中でつぶやき、体が重くなるのを感じた。

「今日は飛行訓練だね！」

今日一番のいい笑顔でハリーがいう。「そうだな。」ハリーは一年生でシーカーを務めた。とても上手で、なにせ百年ぶりの最年少シーカーだったんだ。奥方なんて、クイディッチ選手だった。そんなことを昨晚から思い出して、うなだれる。あのきっかけを作ったのは自分だった。ネビルロングボトムに多少のいじわるをして：多少？多少まあ多少だろ。それを取り返すハリーの技にマクゴナガル先生は感動したのだから。

なににうなだれているのかって。別に黒歴史に悲しんでいるわけでも恥じているわけでもない。やってしまったことはしようがないからだ。むしろやってしまえないことにショックを受けている。

僕はハリーに嫌われたくないし、ロングボトムの未来の勇敢さを知っている。だからというわけでもなくただ単に僕が成長しただけのはなしだが、あいつをいじめることは当然ありえない。となると、だ。ハリーがハリーの飛行術を見せつける場面がなくなるといふことを示している。

つまり、だ。ハリーがクイディッチの選手に選ばれる可能性がない。ということだ。

まあ、それでもその技術を買われて来年にはシーカーの座に収まるんだろうが。：そうなると、どうなる？僕がシーカーになれないではないか!!という問題に直面する。ああ：どうする。僕がシーカー目

指して努力をするか。でもハリーのシーカー姿をこの世でも見たい。くそう。なぜ一年後のことで悩まなければならぬのか……！

「あと、グリフィンボールも一緒だからロンとハーマイオニーも一緒だね。あ、あとネビルも！」

「そうだな。ってネビル？ネビルって魔法薬学でやらかした？」

「やらかしたって言わないの。いい子なんだよ。この間。教科書をなくしたっていつて一緒に探したんだよ。」

あははと笑いながら、本当に楽しそうに正面階段から校庭に移動する。

そうか、すでにそこはつながったのか「さすが、はやいな。」と歴史のあり方に感心する。寮が違っていても、そこに関係性は持ち込んでくる……か。

「いいやつなら僕にも紹介してくれ。」

「えー。ドラコはなあ。いじめそうだからダメ。」

「いじめない。」

「えー。」

「いじめるならロンがいるから、足りてる。」

「ちよつとそれ！ロンがかわいそう！」

「愛ゆえだ。あいつはいじられて怒っているときがかわいい」

「え、キモイ」

うるさい。何が嬉しくて二人ともに気持ち悪がられなきやいけな
いんだ。

飛行訓練は問題なく始まり、経過していた。

僕とハリーの箒はすぐさま飛び上がって手におさまった。隣の口ンもだ。二人で顔を見合わせてニヤリと笑う。まあ、僕たちは幼い頃から、家にある箒を拝借して遊んでいたからな。ついでにいうとロンが「学校に行くまでに自分にも得意なことが作りたい」と言っていたため練習していたというのもある。「勉強に予習はつきものだろう」ともってもらいしことをいってモリーを説得していたな。まあその成果が出た。ということか。ハーマイオニーの箒はすこし動いたがネビルの箒は全く動かなかった。

練習がおわり、自由時間。決められた範囲を自由に飛んでいらしくふわふわとハリーとロンと三人で空中散歩。ロンがいなければ二人きりだったのにと少し睨んだら、逆に向こうから「お前の好きにさせてたまるか変態。」と睨み返された。「変態。」の部分には自信がある。癩だけど。

今回は自由時間なんてなかったよなと頭をよぎるが、それは自分のせいだった気がしたから考えるのをやめた。いやいや。あれはネビルの箒が暴走したせいであって僕のものではない。ああ決してだ。

グリフィンドールとスリザリンが同じ授業なのは魔法薬学だけだからなのか、ハリーとロンはここぞとばかりにおしゃべりに花を咲かせていた。なんだか悔しい。今度からは頻繁にコミュニケーションで落ち合おうと決心した。このことを夜、ロンに伝えるとまた「君たち寮でも授業でも一緒なんだろう？ いいじゃないか！ 独占欲強すぎこわい。おまわりさんよぶよ！」と言われたので少しだけ反省した。少しだけ。

さて、時間になるし、と三人で集合場所に戻ってきたときに事件は起きた。

ネビルが戻ってこれなくなった。箒の暴走だ。
何をしたんだあいつは。

一度暴走した箒を扱えるほどネビルは冷静ではなかった。というより、冷静に戻るといふことが今の彼には不可能なのだ。どんどんパニックになり、みんなが「落ち着いて」「大丈夫」だよと声をかければかけるほどネビルは焦る。いやいや、まじで大丈夫か。未来は勇敢な男なのに、愚図なのは愚図のままか。とつい舌打ちしそうになる自分を飲みこむ。いやあ成長するってすごい。

マダムフーチはと思って周りを見回すが、どこにもいない。怪我をした生徒を医務室に連れて行っているらしい。ふざけるなよまじで。監督不行届だろうが。マグルの教員だったら一発で上司に上がるぞ。

どうしたものかと考えていると隣のハリーが僕のローブを引っ張ってきた。

「ドラコ。箒乗れるよね。」

「は？いや。まあ乗れるがそれはハリーもだろう」

「基礎的な技術は聞いてない。きみ、箒に乗りこなせるよね。ロンに聞いた」

ハリーの隣のロンを見れば、大げさに目を逸らされた。

「ねえネビルを助けて。」

「無理だ。さすがにあんなに暴れているのをどうこうできない。」

そしてなにより目立ちたくない。

「大丈夫だよドラコなら。もしかなにかあっても僕が責任もって先生に言うし。」

「そして僕は医務室に連れてってやる」と後ろからひよっこり乱入してくるロナウドウィーズリー。くそ。お前は黙っとけ。

「もたもたしてる暇はない！さあ乗って！いつてらしゃい！」

嫌だ嫌だとだだをこねる僕に、ハリーは容赦なかった。そのまま空の世界へリターンズ。くそ。こうなったらヤケだ。それにハリーに頼まれたのだから仕方ない。いい友人ポジション維持のためだ。行ってやる。

あばれるネビルの元へ急ぐ。彼はもうすでに限界だった。自分にとってもフルスピードで。練習用の箒の限界なんてしれているけれど、そんなことを気にしてられない。彼の箒と並走して「掴まれ」と叫ぶが、箒にしがみつくばかりでこちらに意識を向ける余裕が彼にはない。あばれる箒の攻撃を避けながら、ならばと懐から杖を取り出そうとしたらネビル箒が真つ二つに割れた。それはもうとてもきれいに。

いやいやいや落ちる落ちる！

ふざけるな！と咄嗟に浮遊呪文をかけていた。距離も長いし、お世辞にもネビルの軽いとはいえない。浮遊呪文の力を借りて自分の箒に載せる。最初からこうしていれば良かったと思いつつ、ロングボトムも箒にも「ウインガーダイヤモンドレヴィオーサ」と浮遊呪文をかけておいた。

と思った矢先の後ろから聞こえる。間抜けな声。

「おばあちゃんから思い出し玉が！」考えるよりも先に体が動いていた。僕も人が良くなったもんだ。後ろにロングボトムを乗せたまま急降下していたー。

戻ってきたマダムフーチからスリザリンは10点加点していただいた。それよりも、ご自身の教師としてのあるまじき行為について自省なさるべきなのではないだろうか。とつい睨んでしまう。無事だったからよかったものの、僕だって11歳だぞ。一応。10点どころの加点ではすまない案件なのでは!?

父上に報告しよう、そうしてしまおう。と大きなため息をついたら両隣から方を叩かれた。「ナイスガッツ」「さっすがドラコく」まあ、いか。別に。ほんとうに甘くなったものだ。

そのあとロングボトムが、僕に謝罪と感謝をのべに来た。隣にハーマイオニーがいたからそういうことなのだろう。別に僕には怪我はなかったし、「別に問題ない。ネビルに怪我がないならよかった」と伝えておいた。ちなみにファーストネームで呼んだのはわざとだ。ハーリーの友達とはそれなりの友好関係を築いておきたい。

ふと、ネビルの持っていた箒に目が止まった。不自然な折れ方だった。まるでデイフィンドを使った時のような。ネビルが太いから(失礼)とか劣化による破壊には見えなかった。まあ、僕は闇払いでもないし、そっちには詳しいわけではないので自信はないけど。

あ、そういえばさっきの浮遊呪文。ネビルを助けるときとつきに無言呪文を使ってしまった。ばれたかもしれないと思いながら周

りを伺うが特に気になる視線はなかった。だから、まあ大丈夫か。と
思っ
て安
心し
きつ
ていた。

第四話

その日の夕食は、「良く」はなかった。今日の飛行訓練で、すでに広まっていたのだ。まあ今回のことはハリーに無理矢理やらされたことであつたし、いふなれば人命救助である。ひそひそと話にあがるほどのことではない。

まあ、だから気にしないでもいいか。と開き直っていたのだが、そうもいかなかった。フリントが目の前に現れたのである。いや、今僕食事中なんですけど先輩。

来年は、是非ともクイディッチの寮選手に立候補してくれだの。まあ今でも十分強いけれど、君がいたらなんとかかんとか。いや、素直に頭下げてくださいしろよ。そしたら考えてやる。まわりくどい、面倒くさい。

ちらり。と横をみたらハリーが美味しそうに糖蜜パイを食べていたから、なんだか腹が立って足のすねをけっしておいた。糖蜜パイを主食にするなどいつも言っていただろう！

なんだか疲れたので、ロンをよんでコミュニケーションルームで食後の団欒をしていた。ハリーと僕とロンでおしゃべりをしていたら、微かにドアがあいてハーマイオニーが顔をのぞかせた。「ロンがいないから、もしかしてここかなって思ったのよ。」

「ハーマイオニーもお茶どう？ドラコの入れてくれる紅茶おいしいよ！」

「え、ええ…でも。」

「貴族様ご用達だぜ。飲んでいて損はないって！」

二人にさそわれてあれよあれよと、連れてこられるハーマイオニーにドラコはしずかに「ミルクは？」と聞く。男三人で集まるよりも彼女がいたほうが花がある。それに……。ん？なぜ自分が給仕の真似事のようなことをしているんだ。ということが頭によぎり、思考が切り替わる。なんか癩だ。見返りに高級お菓子の要求する。

ハーマイオニーの前に音もなくティーカップとシュガーを差し出す。シュガーはこの部屋に備え付けのものだ。ここが寮なら自分達や、女性陣が愛用しているはちみつを出せるのにな、とも思うが、持ち運びも面倒くさい。今度自分のローブのポケットに検知不可能拡大呪文をかけておこう

「あ、ありがとう。」こくりと一口。

「そういえば。私知らなかったの。あなた…ドラコは無言呪文が使えるのね。ネビルの体の浮き方が魔法にかかったようだったから、どういふことかと思つて調べたの。そうしたらそういうのもあるつて知つて。本当、ここでの生活が楽しみになつてきたわ。あなたたちには少し出遅れてる気がするけど、私頑張るから」

おおつとホグワーツの才媛。未来の魔法大臣の火をつけてしまった。

「そうみえたのか？それなら恥をさらしてないみたいで安心した。」

「あら、どういふこと？」

「必死だったつてことだ。あれは使えたのではなくて、なぜかそうなつていただけだ。自分で扱えたわけではない。あるいみ魔力の暴

走みたいなもんだ。」

「けれども、箒の技術については事実だ。」

「ロン…おまえ」

そうして、話は飛行訓練の話からクイデッチの話になった。た。

前回と違い今回のクイデッチには、ハリーは出場しない。もともとのメンバーだ。ハリーが選手じゃないといけない理由があったろうか。と記憶を探ってみるが、自分の記憶ではないので特に思い当たることもない。かつての友人たちの会話を切り替えてみても、引つかかることもなかったので、スルー案件だな。と納得する。

「ねえ。」

後ろから聞こえる声に四人はびっくりして動きをとめる。

振り向くとそこには、ネビル・ロングボロムの姿があった。

「マルフォイ。きよ、今日はあり、ありがとう。き、君にも怪我がなくて良かった。」

「ああ、怪我がなくて良かったな。それより、君は僕のことをファミリーネームで呼ぶことを選ぶのかい」

「えっ」

「僕は君のことをファーストネームで呼んでしまったと思って、な。やめておいたほうがいいのかな。」

「あつネビルでいいよ！僕も君のことをドラコって呼んでもいい？」
「もちろんだ。」

隣でハリーとロンが「やめといたほうがいい！」「こいつは王子に見せかけた悪魔だぞ！」「外見に騙されるな！」とか叫んでいるけど、聞

こえない。というより大概失礼ではないだろうか。ネビルのように感謝されこそすれ、そんなふうになんか言われる筋合いはないのだ。特にロン。

話が終わったあとも、ネビルは何か言いたそうにもじもじもとそこに残る。仲間に入りたいのだろうか。お湯を沸かし直さなきゃいけないかなと考えていると、彼の口から発させたものは意外なものだった。

「ハーマイオニー、ロン。きみたち今夜決闘するって本当？」

いやいやまてまて、僕は何もしていない。僕は無実だ！前は僕がけしかけたけど今回は無実だ！やってもない上に疑われているわけでもない事象についていい訳をしよう。あと何回この現象があるのだろうかと思うと、ため息がでる。

「ハーマイオニー、ロン。決闘ってどういうこと？本当？」

ハリーが二人に質問する。いいぞ。

「ああ、本当だよ。今夜トロフィー室で、介添え人はハーマイオニーだ」

既視感。既視感しか覚ええない。

「なんで」

「理由はいいたくない。」

「私も、言いたくないわ」

「危険だ。やめておいたほうがいい。誰かに文句言われたの？そんなの無視しておけばいいんだよ。」

「ああ、誰かになにか言われたね」

「ええ。そうよ。無視すればいいのよ。けどロンが売り言葉に買い言葉で、けど、その気持ちも分からないでもなかったからいつそのこと私がついていけばいいんだわって」

おいおい未来の魔法大臣。自信過剰にもほどがあるぞ。とんだお転婆だな。知ってたけど。誰に何を言われたのか知らないが、まあ行くべきではないだろうな。どうせ、騙されてる。おなじ時期におなじ現象が起きるといふことは、おそらく、まあ。そうだろう。

「僕もハリーに同感。行かないことをおすすめるよ。」

「でも…！」

「でもじゃない。夜に寮の抜け出すなんて、罰則ものだぞ。それにまあそのお相手が誰かは知らないがきつと来ないだろうな。」

「えっ」

「僕なら、フィルチとかスネイプ先生に『グリフィンボールの生徒が今日の夜、トロフィー室できもだめしするっていつてました。気のせいならいいんですけど』って伝えて、にやにやししながら暖かい布団で寝てる。」

「えげつな…！これだからスリザリン生は！」

まあ、実際に僕がやってことだしな。

信憑性、あるだろう。

そのあと、ハリーと二人でなんとか説き伏せて、行かないと言わし

めた。「退学になってもいいのか」「寮生にうらまれるぞ」

ロンは「ビビリだっつていわれるかもしれない！逃げたあいつは、情けないって笑いものになるかもしれない」と最後まで言っていたけれども、そんなの無視だ。

ハリーと二人で寮に戻りながらまたロンの話になる。

「彼は、なんとというか単純だよな。」

「まあな。単純なところがかわいいのかもしれないが、時々腹が立つ」

「はははっ」

「もう少し上手に人生歩んでくれと、ずっと思っているさ」

寮に戻ると、一人の先輩が自慢げに今日のことを語っていた。ひとりグリフィンボール生をはめてやったぞ。と。情けないものだ。自分分は、言いふらしはしなかったぞ。周りの他のスリザリン生も彼の発言には耳をかしていなかった。懸命だな。と思う。誰もこんな馬鹿に巻き込まれたくはない。隣でハリーは憎らしげに見つめていた。

なぜ、こんなことになっているのか。理由を、僕が納得できる理由をください。

朝起きると、隣には幸せそうに寝息を立てるハリーがいました。気絶するかと思いました。

なんで、こんなことになっているのでしょうか？

昨日は、ロンとハーマイオニーを説得したあと、寮に戻ってきてそのまま寝たはずだ。「おやすみ」という彼がなんだか、寂しそうだったのでおやすみと頭を撫でた記憶はある。つい、やってしまったと思った記憶まで残っているから絶対だ。「ドラコありがとう」といつてくしやりと笑ったのだ。感動で泣くかと思った。

その流れでもしかして「一緒に寝るか」とか口走ってしまったのだろうか。いや、もしそんなことを口走っていたら、それこそ強烈で記憶に残ってないとおかしいし、死んでいても不思議ではない：は！これは死後の世界か！

！
二人部屋なんだ（神様ありがとう）寝床を間違えようもないはずだ

混乱する自分の気持ちも知らずハリーは寝返りを打つ。足が、あたる。

この距離が許されているのか。とふと心が落ち着いた。

そうだ、“今の世”では、この距離が僕とハリーの関係性なんだ。ハリーの頭をなげる。

ほしくてほしくてたまらなかつたものを手に入れてるにすぎない。そろそろなれなければ、せつかく手に入れたものをなくしてしま

う。

そういつてハリーを起こさないようにと静かにベッドをたち、身支度を始める。

しかし、その努力もむなしくドラコの叫びでハリーを起こしてしま
うのだった。

「あいつは！ 馬鹿か!!」

「は！えっなにになに!？」

朝食へむかうドラコとハリー。

ドラコは、今朝からのイライラが収まらないらしく仏頂面で廊下を歩いている。ハリーが「怖いよー、笑顔笑顔」とほっぺをつつくもな
んの反応も返さない。するり、とハリーがドラコの腕に手を回した。

「なんとなく想像できてたじゃん。ロンがそんな簡単にあきらめるわ
けないよ」

「……」

「まあほら、ロンもハーマイオニーも何もなかったわけだし、減点もさ
れていた無かったってことは、バレてもないってことだよ」

ピタリ。と歩くのをやめ、静止する。

「立ち入ってはいけない4階。そこにいる大きな犬。ホグワーツは何
を守っている?」

ドラコの眩きは朝の騒音にかき消される。

本人も誰かに伝えようとして眩いたわけではない。

自分の脳内の整理をするためだ。

しかしその言葉は、そばで引っ付いていたハリーの耳にはしっかりと届いていた。

最近、ハリーが時々きえる。

いや、自分たちもずっと離れず一緒にいるわけではないのだが、なんだか妙な胸騒ぎがする。ふとしたときにいないだけで、「そういえばハリー」と声をかける時には、隣にいて「なにドラコ」と返事をしてくれる。だからそんな頻繁に消えているわけではないのだろう。過保護もすぎるぞ。と自分に言い聞かせるのだが、もうすでに、クイレルの手にかかってしまったのではないかと不安さえよぎる。

ちなみに自分が、一年生の時の黒幕が闇の魔術の防衛術の教師であるクイリナス・クイレルだったことを思い出したのは先日である。

ハリーが先日ブチギレて

「もういやだ！あのニンニク臭い授業！スコージファイしてもいい？もしくはファブリーズ！しゅっしゅっ！」と叫んだからである。

ファブリーズとは、と聞き返すのは忘れた。

我ながらなんでこんな叫びで思い出すのか、苦笑してしまっただが、思い出してしまったものは仕方がない。まあおそらく彼の教授に対

する怒りで思い出したのだろう。そういうことにしておこう。「いつそのこと……」とぶつぶついなながら呪文学の教科書とにらめっこしているのは、無視しておこう。なるようにしかならないし、もしなにか仕掛けたらとめるのみだ。あれには、名前を言っていらいけないあの人が寄生しているのだ。なにも知らず攻撃をして返り討ちにあうのだけは避けたい。

あー、ハロウインの飾り付けきれいだなー。

現実逃避しよう。自分で言うのもなんだが、すこしハリーのことばかり考えすぎている気がする。まあ隣にしつかり彼を座らせておきながら言うことでもないが。

こいつは、糖蜜パイしか食べ物を知らないのではないか。と不安がよぎったので、更にパンプキンパイとスイートポテトも突っ込んでおく。通りすがりにパンジーたちが「餌付けをするならちゃんど、野菜も食べさせなさいよー」とつぶやいたので、生野菜を入れておいた。どうせ食べないんだろうな。野菜のキツシュも入れておくか。

「ねえドラコ」

されるがままだったハリーが、急に話しかけてくる。

謝らないからな。野菜も食べないとお前の従兄弟どのみたいになるぞ。

「ロン。今日一人なんだね」

「ん？ネビルもシェーマスもいるじゃないか。デインもいるな」

「きみが彼らをなぜファーストネームで呼んでいるのかは、聞かない

「からな」

「いいのか」

「いい」

それは残念。と大きさに肩をすくめる。

「そうじゃなくてハーマイオニーがいないんだよ。」

「ん？ああそうだな。けどあいつらもいつも一緒にいるわけじゃないだろ。」

男女がペアなんて、まだ11歳で思春期もまだといえどなかなかいだろうしな。いや、あいつらならやりかねないけど。

「ラベンダーや、パドマたちともいない。」

「それは君がなぜ彼らをファーストネームで呼んでいるのか、聞いて欲しい振りか…痛い！」

そのときクイレルが全速力で部屋にかけこんできた。その顔は青ざめていて、恐怖が張り付いていた。

「トロールが……地下室に……お知らせしなくてはと思って」

ガタン！ハリーが勢いよく立ち上がる。びっくりして「大丈夫か」と、彼を見ると、その顔は恐怖ではなく怒りでいっぱいだった。

「ドラコ。僕は今から女子トイレに行く、いそいでロンを連れてきて！」

「ば・女子トイレだと！なぜそんなところ……わかった。しかし、なぜ地下室ではない」

「思い出したんだ。さつきパーティが、ハーマイオニーが女子トイレにいるって聞いていたのを！急がなきゃー！」

そういつて振り向かずには走っていく。

こんなことはしてられない。ハリーが女子トイレにといつたのだ。彼の勘はあたる。闇被い仕事も、攻撃のしかたもクイディッチも、あれは勘と発想で切り抜けていた。

「ロンー！」

「えっ……なにー！」

「ハーマイオニーを助けに行くぞー！」

監督生や先生に見つからないようにロンを引っ張って、女子トイレに向かう。その道中、ハーマイオニーと何があつたのかも聞いた。呪文学？発音ごときで？いやいやいや誰も友達がいなくて？「それでもお前は英国紳士か」怒りでついロンのほっぺを叩いてしまった。

「女性にも優しくできない。自分にアドバイスしてくれた人に感謝どころか傷つけるような言葉をいう。彼女はマグルで、僕たちみたいに入学前から知り合いがいるわけじゃないんだ。周りに友人がいないのはあたりまえだろう。ひとり不安で入学してきているんだ。貴様が守ってやらなくてどうするんだ。」

「貴様って……」

「揚げ足をとるな。」

「……ごめん。」

「貴様が謝る相手は僕ではない。彼女だ。はやくいつて助けるぞ。」

ロンに怒ってしまった自分に腹が立った。手をあげてしまったことも。聞いて呆れる。あれは散々過去の自分自身がいじめ抜いてきたことだ。マグルだからと、「穢れた血」と罵ったことさえも覚えている。傷つけられて怒るなんて、ましてや自分が傷つけてきた相手を擁護する形で。

ロンには彼女の盾でいてほしかった。ハリーがスリザリンに来てしまったおかげで、守る相手が分散されてしまった。きっとこのままだと、以前と同じようにロンとハーマイオニーは名前を言っていないあの人討伐戦に組み込まれる。そのとき、彼女を守るのはお前の役目なんだ。

途中スネイプ先生とすれ違った。

異臭がする。女子トイレでビンゴか。

ドアをあけると、そこはトロールが暴れていた。洗面台はぐちゃぐちゃで、ソイツはハリーとハーマイオニーと対峙していた。ハリーはハーマイオニーを抱えて一生懸命に守っている。

「ドラコ！ロン！」

「待ってろいま助ける」

こっちの存在に気づいたトロールが緩慢な動きでこちらを向く、そして振り上げる棍棒。一瞬のことで「プロテゴ」を捉えるので精一杯だ。動きはのろいくせに、棍棒を振り下ろすときだけはやいな！しか

も腕力がえぐい。

プロテゴでは心もとない。

行けるか?と思いつながら「プロテゴ・マキシマ」を唱える。トロールの一撃を受け止めたことを確認して「レダクト」を唱えるが、びくともしない。くそ、トロールのくせに、低脳で頑丈とかしようもなさに怒りが沸く。

「プロテゴ!」ひっしに唱えるが、魔力がおいつかない。どうにかしないと、どうにかせねば、

「ウインガーダイヤモンド レビオーサ!」

隣のロンが必死に杖を降っていた。ふわり、とトロールの手から棍棒が飛び出す。空中でくるくると回転し、トロールの頭の上に落ちた。トロールはフラフラしたかと思うと、ドサツと音をたてて倒れた。

ロン、お前やったな。そういつてハイタッチを決めようと振り向いたら、走って逃げられた。いや、違うか。「ハーマイオニー!」ロンは彼女しか見えてなかったのだ。

ハーマイオニーにかけより「ごめん、ごめん。」と呟くロン。彼女も涙をながしながら「ごめんなさい。本当にごめんなさい」とつぶやいていた。

二人のそばにいたハリーはなにが起こったのかとびつくりして二人を見つめていたが、すぐにふわりと笑って「よかったねえ」と二人を抱きしめていた。

あのあと、僕らは先生方に保護？され、無事にトロール事件は幕をとじた。それぞれ減点されたり加点されたりもあつた、が。怪我がなくて、死人がでなくて、本当によかつた。

十一月。クイディッチシーズンの到来だ。

前回のハリーの初戦はこのタイミングでスリザリンとの勝負だつた。

今回は、特に何もないので、観戦するだけだ。ハリーもクイディッチの話になると「楽しみだね！」興奮を隠しきれないようだった。

「ねえドラコ。引き受ければよかつたのに」

「馬鹿を言うな。無理に決まっているだろう」

「けど！代打といえど、シーカーを、一年生が務めることなんてなかなかないんだよ！」

「練習もしてない。チームのこともわからない。僕がはいることのリスクが高すぎる。」

「でも……！」

「ハリー、君が僕に期待？してくれているのは素直にうれしい、うれしいが、僕には無理だ。『テレンス・ヒッグスが試合に出れなくなった』と言われても『そうですか』としか思わない。チームの足は引っ張りたくない」

それに、スリザリンのシーカーには君がなるんだ。来年の選手選抜で君が選ばれて、君がシーカーをする。その邪魔はしたくない。

「本音は？」

「代打とかふぎけるな。失礼だ。と思っている。」

「そして？」

「二軍ぐらい用意しとけ！」

けらけらと、隣でわらう。「実に君らしいよ」とバンバン背中を叩かれるが、当然だろう。ものには頼み方っていうものと、自分たちがどこまで予測して動いていたかがいるんだ。ちよ、痛い。叩きすぎだろ。痛いぞポッター！

ちなみにこの出来事を知ったロンは、わかりやすくすねてた。愛いやつ。

この時期の特筆しておくべきとといえば、クイディッチのことでなくて、ハグリットとの会話だろう。グリフィンドールVSスリザリンの試合のあと、さすがに僕たち四人で一緒にうろつくことはできなくて（コミュニケーションも同様）ハグリットの小屋で紅茶を頂いていた。

頂いていたつといても、淹れたのは自分自身だが。彼が入れてくれようとしたのだが、茶器をみてめまいがした。「僕がいます」といって変わり、ローブから必要なものをとりだす。拡大呪文かけていて良かった。便利だ。

お湯を沸かし、カップを温めながら、四人の会話に耳を傾ける。「フラッフィー？」あれは、貴様のかハグリット。やめろ、僕の古傷が痛む。「いたたたたた」と一人茶番をしていたら、もうひとりともない名前が聞こえてきた。

「ニコラス・フラメル」

有名な、錬金術師だ。
そうか、この学校が守っているものは……。
神様。

クリスマスも目前12月

あれから、彼らは「ニコラス・フラメル」について調べているようだった。彼が誰かも、守っているものが何かも検討がついている自分が教えてもいいのだが気が進まなかった。これに気づかなければ、意外と、思ったより彼らは平穩に一年目を終えることが出来るのではないかとこの考えに行き着いたからだ。

ホグワーツが守っているのであれば、ダンブルドアが目を光らせているだろうし、こちら側がなにかをする必要もないことなのだ。本来は。

まあ、ハリーの出生や巻き込み体質を考えるとそうともいつてられないのだろうけど。彼と交流をもつてから何度巻き込まれたか。

クリスマス休暇。帰ったら何をしようか。

「え？僕？帰らないよ。というより帰る家もないもん。プリペット通り四番地のあの家は僕の家じゃない」

「そうか。なら僕の家に来るか？」

「えっ……！えー行きたい。いききたい！」

「じゃあ父上と母上にいって」

「だが断るついてっ」

思わず持っていたノートで目の前のハリーを殴っていた。

「なぜだ。わりと楽しいと思うぞ。まあダンスパーティーは面倒だ

が、普通のクリスマスパーティーもある。」

「うげえ。貴族のパーティーって大変そう」

「まあ、一つの仕事みたいなものだな。君は美味しいもの食べて上質な音楽に耳を傾けていればいいだけだぞ」

「本音は」

「面倒くさすぎる。君と一緒に帰ってくれたら、退屈な休暇も楽しくなるかなと」

「正直なドラコに花まるゝ。」そういって髪をぐしゃぐしゃとされる。犬じゃないぞ。こう乱暴にあたまをなでられるたびに、最初の頃はオールバックをやめるとして良かったと思っていたが、ここまできると苛立ちになる。「ふふふ。直してあげよう」ま、いいか。

「わかった。出席すべきパーティーが終わったらすぐ戻る。ロンは残るっていつていたからまあ退屈はしないだろう」

「えー。ゆっくりしてきてもいいのに」

「いつとくがスリザリン生の中でのこるの、おまえだけだぞ。」

「え？まじ？」

当たり前だろう。

クリスマスプレゼントとは、悩んだ。

ハーマイオニーは直ぐに決まった。マグル製の万年筆だ。モンブランの上質デザイン。いろはレックゴールド。彼女の髪色と合わせ

て似合うだろうなと思つて直ぐに決めた。

星の王子様とコラボレーションしているものもあったが、さすがに恋人でもない女性に贈るには質が良すぎた。

ロンは、お菓子の詰め合わせでいいだろう！と思つて選んでいたのだが「いつまでも子供扱いするなよ！」と天の声が届いたのでやめた。スニーカーにしよう。課業日には向かないが休日や家で遊ぶときなんかにはいいだろう。モスグリーンをベースにしたハイカットのスニーカーで芥子色のラインがかっこいい。こういう渋い色があいつには似合う。

そして、ハリー。

悩みすぎていつそのことこいつこそお菓子でいいのでは？と考え始めた。いや、さすがに品が無さ過ぎる。うんうん。唸りながら探しているときれいな葉があった。そういえば、よく本をよんでいたリ、ノートになにか書き付けていたりするな。と思い立ち、その購入を考えた。透かしのデザインでステンドグラスのようにきれいに色はめ込んである。ユリにしよう。白いユリ。ハリーの母上の名前だ。あ、あとあれも足しておこう。

毎日のようにハリーとロンから連絡がくる。ずるい。

早くホグワーツに戻りたい。休暇はまだ残っているのに、と母上が寂しそうに僕に声をかけたが、僕は「いつてきます母上」とハグをしてすぐに、学校へ戻った。そんな顔をさせたいわけではないのだが。

寮の部屋に戻ると、そこにハリーの姿が見えなかった。ロンと大広

間の方にもいるのだろうか。今日帰るといつていたのだが：「ハリー」と、すこし寂しく思いながらどんだん強欲になつていく自分に自分で首をさす。魔法を使って荷解きをすると、「くすくす」と笑い声が聞こえてきた。

振り向くと、そこには生首のハリーが横たわっていた。

あー…透明マント。まて、変なことつぶやいてないよな。

部屋に戻ってから自分の発言と行動を振り返るべくかたまつてみると、ハリーのほうから寄ってきた「びっくりさせちゃった？すごいでしょ」と生首の状態のままくるくと回る。

「ドラコが帰ってくるの楽しみにしてたんだよ。ロンも多分大広間で待ってる。いこう」

パサリと、羽織っていたローブをベッドのうえに投げ、僕を引っ張っていく。なんと、無用心なんだ。あれがどんな価値があるのかわかっているのか。…わかってないのだろうか。

深夜。小さな物音で目が覚めた。

本当に小さな物音だったと思う。隣をみるとハリーの姿はなく、音の主は彼だったのか、と。眠れないなら暖かい飲み物でも用意しようか、とおもい談話室に降りる。そこには丁度、寮から出ようとするハリーの姿があった。

「こんな夜更けにどこにいくんだ。マイリトルフレンド」

「ドラコ…リトルって失礼じゃないか。」

「夜中にこっそり抜け出そうとする子供はそれで十分だ。それで？」

「…ドラコもくる？夜の散歩だよ」

そういつてハリーは手に持っている透明マントをあげた。

散歩といったわりには、ハリーの足取りは、どこかに向かっているかのようだった。それが正しかったと思ったのは連れてこられた部屋にあった道具を見た時だった。

「みぞの…鏡か。」

「ドラコ知っているの」

「ああ、心の一番奥底にある強い『のぞみ』を見せる。これに魅入られて人生を狂わした人もいると聞いている。」

「そう、そうなの。」

長い沈黙だった。お互いにじつとみぞの鏡を見ていた。

そこには、たしかに自分の「のぞみ」が写っていた。

手に入れられるところまできているのに、いまだ「強い『のぞみ』か。情けない。」

どこまでいっても情けないな。どこまでも不安が押し寄せる。いつまでも抱き続けることになるだろうことに、気づいていて、今日この瞬間でそれが決まった。僕は、それを「のぞみ」だと思い続けて終わるのだろうか。

「ドラコ。何が見えてる？」

「いわないと、ダメか」

「ううん。僕も言いたくない。」

「そうか。」

それから、何度か、ハリーは夜中に部屋を抜け出していた。

ただの散歩なのか、みぞの鏡の所に行っているのか、僕は聞かないでおいた。

僕は、もう二度とあの鏡には会いたくないと思った。

少しでもハリーのなぐさめになるのであれば。

限界がきたら、スネイプ先生かマクゴナガル先生に伝えようとは決めておいた。

第五話

イースター休暇も終わり、試験勉強を進めていた。

ハーマイオニーなんて「もう一か月前からやっておくべきだったわ」とぶつぶつ言っていたので、やはり秀才というのはそのレベルで学習を積み重ねているのだな。と感心した。

まあ、自分自身は人生二回目なので、適切に復習をしておけば、簡単なものだった。それよりも、もうすこし上級なレベルを今のうちに勉強しておこうと思う。

ハリーは魔法史のテストが大変そうだった。「別に大丈夫！」とかいってるが、たぶんそうは簡単にいかないだろう。なんていったってこいつは、魔法史のほぼ全ての授業を仮眠の時間に当てているのだ。テスト前に泣きつかれる前に、少しづつでも復習をしてやる。ついでにロンのテスト勉強に付き合っていたら、ハーマイオニーにも色々質問されて知らず知らずに小さなサロンと化していた。

「さすが、ドラコ・マルフォイ。サンキューな！」

「別に問題ないですけど、一年生に教えてもらって恥ずかしくないですか。フレッド先輩・ジョージ先輩」

「え？何が？別に、わかっているひとがわからない人に教えてるだけだし、俺たちは君ならわかるとおもって聞いたまでだ！無駄な時間は過ぎしたくない！」

まったく、本当に豪快なお人たちだ。

二人のおかげで、ちよこちよこ先輩方にも声をかけられることになった。

これは、自分の勉強にもなるからいいな。一石二鳥。

集まっていた人々が寮に戻り、いつもの四人のメンバーになる。

ロンが「もうダメ。まだ先じゃんか。」と机につつぶしてうなだれていた。かわいそうに。(ほぼ自分のせいだけでも) 四人分の紅茶とお茶請け(今日はチョコレートだ)を机に並べる。

「そういえば、ニコラス・フラメルについてわかったの。錬金術師だったのよ。」

「賢者の石の想像に成功した唯一の錬金術師だったんだ。だから、彼女はあそこに隠されているのは『賢者の石』ではないかって考えてる」
「それでね。ロンが見ちゃったらしいの」

「何を」

「スネイプ先生がクイレル先生を脅してるところ」

そういつて、ひそひそと、ここ数日でわかった事実を整理していく。
スネイプ先生? いや、彼らはあの黒幕はスネイプと見せかけたクイレルだといっていた。となると、おもしろいくらいに今回もスネイプ先生が黒幕であると世界が「ミスリード」しているということか。

「それは誤解だ」と言ってしまうたかった。けれども、僕がいったところで「寮監」だから、とかなんとかで、僕の発言が危ぶまれるかもしれない。結局最後には「真実」がわかるのだ、今誤解してしまっていることは、未来に対して、そんなに大きな問題ではないか。と静観することに決める。

「あ、そういえばハリー。土曜零時な。」
「了解」

ん？

「土曜零時って、何かあるのか？」

「何もないよ。ただ、夜の散歩。透明マント使ったときどき散歩して
るんだよね」

「は…君たちはそんなことを、ほどほどにしとけよ」

『はーい』

それからは、平穩に過ぎていった。

本当に忘れていたんだ。ロンが怪我をしていて、どんどん腫れてい
くのを見て「どうしたんだ」ときいても何も答えないし、答えたくな
いなら無理矢理聞いても意味がないとおもって黙って薬を渡してお
いた。(手作り)「ありがとドラコ」って言っていたしハーマイオ
ニーも告げ口をするような様子もなかったから、本気で思い出さな
かった。怪我が大事にいたらなくてよかったと安心していただけら
いだ。

そうしたら、このぎまだ。

「どういうことだ。グリフィンボール150点？スリザリンも…？」

なにがなんだかわからない、「説明を求めろ」と彼らを見ると、三人
とも罰が悪そうに顔を背けただけだった。そうか、あのドラゴンか！

しどろもどろになりながら三人は僕に何があつたかの一切を説明した。

きつとその間の僕の表情や態度は不遜極まりなかつただろう。説明している彼らがどンドン萎縮していくのがわかつた。

「除け者か」出た言葉はそれだつた。「無事で良かった」とか「退学にならなくてすんでよかつたじゃないか」とかそういう優しい言葉は、僕の口から発せられることはなかつた。ドラゴンのことも、それを外に出すことも全ての計画が僕には知らされていなかった。悔しい。察は違えど、四人で仲良く出来ていたと思つていたのは自分だけだつたのだ。恥ずかしい。勘違いしたなドラコ・マルフォイ。

つつつー。

と、涙が頬に伝つていくのがわかつた。すぐに拭おうとするが、それはすでに三人に見られていた。

「そんなつもりはなかつた！」

「じゃあどういうつもりだつたんだ！」

ああ、ロンに怒鳴つてしまった。嫌われる。

「言い訳でいいから話をさせて頂戴！」

「十分にわかつている」

ハーマイオニー。

「とりあえず落ち着こうよ。ドラコ」

するり、手を握ろうとするハリーの手をはじく。

「勝手にしろ。どうせ僕は邪魔者だろう。ハリーと僕は違う。どうせ生粋のスリザリンだ。仲間に入れたくないだろうよ。僕にしれたら、『父上』に話が行くかもしれないもんな。ああ、ああおりこうなことだ。今回のことで、君たちが僕のことをどう思っているのか十分にされたさ」

そして席をたつ、握られた腕を払い除け「触るな」と僕は一人ですの部屋を後にした。

やってしまったとは思った。中身大人の自分があんな11才の子供みたくないことをしてしまった。けれど、あんなにわかりやすく古傷をえぐられて平気でいられるわけもなかったんだ。友達だと思っていたのは自分だけ。仲間だと思っていたのは自分だけ。辛いし恥ずかしいし、なんなら死んでしまいたい。

友人たちに嫌われたかもしれない。ハリーにも。その夜戻ってきたハリーは僕に声を掛けることもなく静かに眠りについた。僕もハリーに声をかけなかったし、朝も一人で身支度して寮をでた。

それから数日間彼らに対するバッシングは続いた。僕は、そんな様子を外から眺めているだけだった。あれからもうずっと彼らとは話をしていない。

結局、この形か。と思うと悔しかった。なんのための二度目の人生なんだ。このままじゃ、同じことになるだけだ。

頭ではそう分かっているけど、何もできなかった。「仲直り」なんてしたことがないんだ。

「ねえ。ドラコ」

先に声をかけてきたのはハリーだった。

部屋に戻って本を読んでいる時に声をかけてきたのだ。なんて返したらいいかわからず、目線だけ彼におくる。

「僕たちは、君にも声をかけようっていったんだ。だけど、ロンか『あいつには知らせないでおこう』って」

「それは、自分は気にしてたけど、ロンのせいだという非難か？最悪だな。」

しょうもない。と本に目を戻す。

もう、自分の中でも「子供みたいなことをした。仲直りしたい」と思っているのに口をついて出てくるのは、ひどく否定的な言葉だ。

「そうじゃない！そうじゃなくて。なんでロンがそんなことをいったのか。君は知っておくべきだと思うんだ。ロンは、『これ以上ドラコの立場を危うくしたくない。』って」

「『それでなくても僕たちと一緒にいて色々言われているのに、もし何か起きて、それこそノーバートにことで問題が起きて、あいつに何かあったらお父様がなんとおっしゃるか。ドラコ優しいからわかりにくいけど、本当に貴族なんだよ。アツパークラスの人間なんだ。ルシウスさんもナルシツサさんも、子供のしていることの範疇ならわりと柔らかいけど、沽券に関わるレベルになると…：そうもいつてられないだろ』って」

「それを、あいつが言ったのか。」
「うん」

「そんな心配求めてない。僕は僕だ。僕のこととは自分で決める。あいつはそういうところがある。純血だの、スリザリンだのグリフィンだのの貴族だの。そういうカテゴライズをされて、一人除け者にされて、僕か喜ぶとも思ったのか。」

「うん。思っただよ。思っただよ。でも、それは間違いだったってロンも気づいてる。」

ロンもきづいてる。間違いは、誰しもある。自分だって、経験があるんじゃないか。

「ごめんなさい。ドラコ。僕は君がそんなふうショックを受けるなんておもってなかったんだ。浅はかだよね僕。」

ゆつくりと近づいてきて、僕の持っていた本をとりあげる。

はー、とため息をついて彼にとう。

「お前と僕は、友達か？」

「なにを言ってるの。友達じゃなかった時があるの？ロンと君も、ハーマイオニーと君も友達だよ」

目の前の手を握る「心配して伸ばしてくれたこの手を払い除けてごめん」と、やっと素直に謝ることができた。

「ねえドラコ。僕、君と離れている期間に、ロンとハーマイオニーに理由を聞いたんだ。覚えてる？決闘するっていつてトロフィー室いたやつ。」

徐にハリーは投げかけてくる。今回のことと関係はないだろうと、眉をひそめるとハリーは嬉しそうに笑った。

「あれはね。君の悪口を言われて腹が立ったんだって。君がグリフィンドール生の彼らと一緒にいるのをみてよく思わなかった先輩の仕業だよ」

「はっ馬鹿か。それこそ僕に告げ口すればいいのに、マルフォイの僕に害をなそうなんて、それこそお父上に訴えてやる。」

「ははは。わかってやってよ。照れくさいんだよ」

そのあとは、ケンカ中離れていた期間のそれぞれの近況を話した。といっても、僕は基本一人で行動していたし、面白いことはない。ときどきパンジーやミリセントに「何かあったの？」と心配されたことや、終いにはそこにダフネも追加した女子会ティーパーティーに無理矢理引っ張って行かれたことぐらいか。

「罰則は今日か？」

「そうだよ。まあ大丈夫でしょ」

「お前は、罰則なのに反省の色がないな。減点されても堂々としているように見えたな」

「まあやっちゃったもんは仕方ないしね」

「それもそうだ」

そういつて、僕は彼に「透明マント」を貸してくれないか。と、真
剣は表情でお願いをしたのだった。

目が覚めたのは、マダムポンフリーのいる医務室でのことだった。昨晚の出来事を思い出して「やってしまった」と顔をおおう。右手がなにかに掴まれているのにきづき、そちらに視線やる。

「ハリー」

「う…え。あ、ドラコ！起きたの！」

よかったあ。と抱きついてくるハリー。「心配したんだよ！」という声に昨日のアレはやはり夢じゃなかったのかと羞恥でいっぱいになる。

「ハリー、僕は昨晚…」

「昨晚じゃなくて一日前ね！」

「ああ、一日前。そうか、あれは、例のあの人…だったのか。」

「ドラコ。怖かったよね。」

そういつて抱きついてきたまま背中をトントンとされる。

「あれは仕方ないよ。僕だって気絶するかと思った。だって例のあの
人だよ。しかも、グロテスクだった」

「そうか…」

「僕、誰にも言っていない。例のあの人を見たことも、あの人が生きていた事実も。僕の勘違いだったら嫌だったし。」

「ああ…」

「もー！大丈夫だって。なんとかなるし、きつとダンブルドア先生もきづいてる。なんとかなるよ。怖がるのはやめよ！」

そういつてガバツと離れたかと思うと、「ちやっちやらー」と変な効果音をたててポツケから何かをとりだす。それはクリスマスにハリーがくれたハンドクリームだった。使うのがもつたいなくて、使わずに収めていた。

「ドラコの私物から拝借ー。といつても、僕のプレゼントだけど。はい、塗ってあげるから手をだして」

問答無用で僕の手を掴み、クリームを塗っていくハリー。あああ、あ、もつたいない。

「これね。僕の手作りなんだ。スネイプ先生に相談して、気持ちが落ち着く特別な香り付き」

「手作り？」

「そうだよー！いい匂いでしょ。ドラコぜんぜん使ってくれないんだもん。せっかく作ったのにさ。スネイプ先生監修だよ！効果あるよきつとー！」

「この匂いは…百合か？」

「うん…そう、僕の母さんの香りだよ」

「そうか…」

そうか、スネイプ先生監修か。かすかに、ヘレボルス匂いがする。これは、「安らぎの水薬」をもとにして作られているのだろうと、ドラコは気づいた。長年「薬」に携わってきたのは伊達ではない。きづいたけれど、それをハリーに問うような野暮なことはしなかった。あれ

を作るのは難しかったはずだ。魔法薬学が苦手なハリーにとってはなおさら、だろう。それを、僕のために手作りして、手の込んだものに作り替えて……。「ありがとう」と感謝の気持ちを精一杯に伝えた。

物音がして振り返ると、そこにはロンもいた。

泣きそうな顔をしていたので、本当に申し訳なくなつてつい謝っていた。

彼も「ごめん」といいながら、チョコレートを差し出してきた。

こいつは昔から仲直りの仕方が下手だなと笑った。

そうだ。いつも彼は仲直りをするために頑張ってくれていたじゃないか。

「仲直り」をしたことがないと、思ってしまったことが申し訳なくなつた。

試験は思った以上に簡単だった。ねずみを嗅ぎたばこ入れに変える試験では、箱の模様をマクゴナガル先生のシルエットにしておいた。細工レベルでちよつと手の込んだものにしていたら、満足そうに先生は横を通つていった。

魔法薬学の「忘れ薬」は、自分で言うのもなんだが完璧だったと思う。

ハリーは魔法史の試験でそうそうに手が止まっていた。あれほど復習したのに、やはり、彼の脳内には「魔法史」のための受け皿がないのではないかと心配になった。終わったあと、いつもの四人で会った時、ロンとハリーの「終わったー！」という声がシンクロしていたのにはちよつと笑った。

四人でハグリットのところへ向かった。ハーマイオニーが「確認し

たいことがあるの」といったからだ。その確認したいことというのは、例の賢者の石、4階のあの部屋にまつわることだった。まだあきらめてなかったのか。試験勉強に忙殺されて、忘れているかと思っていたのに。

最近ハリーの寝つきがわるい。

きつと例のあの人の気配を察知しているのだろう。ひどく眠れないときは、僕がもらったあのハンドクリームを塗ってやって、僕のベットへ招き入れた。「お休みハリー。何も心配することはない」そうやって抱きしめてやると彼も僕に「お休みドラコ。僕たちは大丈夫だ」と返すのだった。

きつと、今誰より不安なのは彼だ。あの、例のあの人がそばにいるような恐怖は、僕たちには到底想像できない。

とうとう、この日が来てしまった。

ハリーが例のあの人と対峙する日だ。

そのあとは学校に戻り四人で作戦会議をした。

最初はマクゴナガル先生の所にいった。そこで僕たちの考えは強固のものとなる。そしてダンブルドアが今日は外出をしないでいることも同時に知った。僕たちの焦りはピークに達していた。

スネイプより先に石を手に入れる。決行は今夜だ。

僕とハリーは先に透明マントを使って寮を抜け出し、グリフィンホールに二人を迎えに行く手はずになった。

僕が知っていることは、黒幕がクイレルだということと、そこに賢者の石があるということだけだ。道中に何かがあるかは聞いた覚えがない。おそらくフラッツフィーのあとにも何かしかけが用意されているのだろう。今まで集めた情報から察するに、各先生方からの試練があるに違いない。

とりあえず、スネイプ先生のところでしつかり役目を果たそうと。ぎゅつと手を握る。そして、例のあの人、そうヴオルデモートへのトラウマを克服する。二度と倒れるなんてことはあってはならない。彼に怖気ついてどうやってハリーを守るというのだ。

「遅かったね」

「あー、そうネビルにね」

「とっさのことで私全身金縛りかけちゃったあとで謝らないと」

「謝らないと」といつているくせに顔は、堂々としているものだからつい吹き出しそうになる。こいつらといると飽きがこない。

四階の目的の部屋にたどり着く。部屋は少しあいていて、もうすでに侵入を許していることがよくわかった。

最初の罨は聞いていたとおり三頭犬のフラッツフィーだった。やばい、正直これはきがしれない。ハグリットから聞いていたように音楽を奏でて眠らす。次は「悪魔の罨」だ。とっさに「インセンディオ」を無言呪文でつぶやいてしまった。

ハーマイオニーが「そうだわ！悪魔の罨は、暗闇と湿気を好むの。火をつけるのよ！」彼女も「インセンディオ」と唱え脱出をはかる。同様にしてハリーとロンも降りてくる。

「やはりあなた無言呪文つかえるでしょ」といったハーマイオニーの

言葉には聞こえないふりをしておいた。

そのあとは、何百本とある鍵を捕らえ、人間チェスの試練だった。ひとつひとつをクリアしていきながら、彼らはあのころこんなことに巻き込まれたのか。と辛い気持ちになっていた。自分の息子がこんな目にあっていると知ったら自分なら冷静でいられる自信がない。だから、彼らは勇敢だったのだ。得心がいったと、おもった。だから彼らは唯一無二の友人同士だったのだ。

人間チェスでは、ロンが犠牲になった。すぐに駆け寄るが、気絶をしているようで安心する。

ハリーがハーマイオニーに「戻って欲しい」とお願いをしていた。「このままロンといて。ロンがめざめたらそのままさっきの鍵の部屋までもどってくれる。ロンは箒が上手だから大丈夫だよ。そうして、待っていて欲しいんだ。」

「助けは呼ばなくていいの?」

「実はもう呼んでるんだ。君たちは外のドアで待っているといい。大丈夫。」

でも、とハーマイオニーは食い下がる。

「大丈夫、残るはおそらくクイレルとスネイプの罫だ。ドラコがいる。あいつの成績知ってるだろう」

ちらり、と彼女が僕の顔をみる。大丈夫だと安心させるように笑いかける。

「わかったわ。お願いよ。二人とも気を付けてね」

「ああ、行ってくるよ」

次の部屋ではトロールがすでに伸びていた。そうか、つまりはスネイプ先生の試練が最後になるのか。こんな状況なのに、どんな試練かがとても楽しみになる。

扉の敷居をまたぐと入口は紫の炎に包まれる。と、同時に次の部屋へと続く入口も黒い炎に包まれた。なるほど閉じ込められた。

「ドラコ。これ、とける？」

そういつてハリーが渡してきたのは、七つの瓶のそばにあった巻き紙だ。「なるほど。これは面白い」そうだな「一番小さい瓶が、あの黒い炎を通してくれるらしい」

「そう、じゃあ紫の炎をくぐって戻れるようにする薬はどれ？」

「それは、なんの質問だ。」

「ドラコは、それを飲んでハーマイオニーとロンと一緒にいてくれ。この先は僕ひとりで行く。」

「僕も一緒に行く」

「だめだ！」

ひどい剣幕でハリーは叫ぶ。「君はきちやダメだ」僕の両腕を掴み、懇願する。

「そんなに、僕は信用ならないのか。」

「そうじゃない！心配なんだ」

「僕も君が心配だ。だから一緒に行く」

「ダメ！ヴォルデモートがいるんだ。君は、彼が怖いだろう。ダメだ」
「随分と弱虫レッテルを貼られたな。まあ実際倒れたし仕方ないが」

「じゃあ」

「汚名を晴らすためにもいく」

僕は彼の意見を聞き入れない。聞き入れてたまるものか。前回の君が、「幸運」で帰って来れたとしても、今回の君が返ってくる保証はないじゃないか。僕は君の亡骸は見たくない。

「僕は、君に死んで欲しくない。」

「同意だ。同じ言葉を君に返そう。君の亡骸を見る趣味は僕にはないぞ」

「……っ！」

「だから、二人でいって、二人で帰ろう。」

そういつていつもの笑みでハリーに返すと、彼の表情はより険しいものになる。なんで、そんな泣きそうな顔をするんだ。「嘘つき」

「え？」

「ドラコの嘘つき。二人でとかいって自分が犠牲になればいいとか考えてるんだろう。」

「……」

「僕がそんなこととして喜ぶとおもってるの！自己犠牲は美しくない。残されたもののことを考えろ！」

「落ち着けハリー」

なだめようとするが、ひどく興奮状態にある彼は、言葉を滑らす。

「僕をおいていったくせに」「僕が独りになっても『私がいる』って言ったくせに、僕をおいていったのは君じゃないか。僕を一人にしないって、ずっとそばにいるっていつてくれたくせに、裏切ったのはドラコ

だ」

「ハリー……。君は何をいって」

「もういい。勝手にすれば。」

そういって、彼は小さい瓶を一口のみ、僕によこす。

「透明マントを羽織っておいて。僕は生き残る。何があっても出てこないで。約束できる？」

「あ、ああ」

返事をしながら残った薬を飲み干す。

「もし、僕を助けようとしたり、クイレルを殺そうとしたりして出てきたら、僕が自分の首をかつきって死んでやる。」

目が覚めたのは、それから三日後だった。

あのあと、あの部屋にはクイレルがいた、そしてターバンのなかにはヴォルデモートが。ハリーは臆することなく彼らと対峙し、クイレルを消滅させた。ダンブルドアとスネイプがきて説明をしたあたりまでは記憶にあるが……。

「はいドラコ。ご機嫌麗しゅう」

「ハリー」

仕切られていたカーテンが開きハリーが現れる。

「つて、実際にヴォルデモートと対峙した僕より寝込むってなんなの。ハリーはタフ。ドラコはナイーブってロンとハーマイオニーにかわられたんだけど」

まっ、からかってくるぐらいにはみんな元気になったってことだよ
ねー。

そういいながら、そばにあった椅子を寄せる。そしてあのあと会ったこと、ダンブルドアから告げられたことを詳細に教えてくれた。

「ハリーは、僕の知っているハリーなのか」

「その質問、どういう意味」

「きみは、ジエームス・シリウス・ポッターとアルバス・セブルス・ポッターとリリー・ルーナ・ポッターの父親のハリーか」

ハリーの動作がとまる。

「そういう君は、僕のかわいいアルバスの大親友のスコルピウスのお父さん?」

時が一瞬とまる。

「っはああああああ! はやくいえ貴様!」

「まってまで、僕も整理がつかない。ちよつとまって、いやほら。同じ世界線の完全ちがう平行世界かもしれないから! もうすこし確認をしよう。アルバスとスコルピウスは正確には大親友かい?」

「:正確に言えば大親友ではない……。僕の職業は?」

「だよね。君の仕事は癒者だ。だけどマグルの大学もでていて医者 of 免許も持つてる」

「完全に私ではないか。」

っはあああああ? どういうことだ。どういうことだ。

目の前にいるハリーが僕の知っているハリーであった事実よりも、今までの僕たちの関係を考えて赤面する気持ちがまさる。

しばらく身悶えしたのち、自分たちには色々と確認しておかなければならないことに気づいた。

「なあ、ハリー。先に死んだのはどっちだ」

「それを君がいう? ドラコだよ」

「だよね。私も私だと記憶している。たしかホグズミードでやられたんだよな」

「……そこか。」

「違うのか」

「ううん。そうだよ。ホグズミードで僕をかばったんだ」

「そうか、それで、あのときの『自己犠牲』の訴えにつながるのだな」

沈黙が流れる。きまずい。なんというかいろんな感情と考えがぐるぐるしてきまずい。

「うーん。僕たち無駄な一年過ごしたよね？」

「どういうことだ」

さきに沈黙をやぶったのはハリーだった。

僕は、返事をするのがやっとだ。

「だって、ドラコが僕の知ってるドラコならこんな回りくどいことしなくてもとつととクイレル倒しちやえばよかったもん」

「よかったもん」

「透明マント手に入れたあたりでさ、『いくぞ！ドラコ！』とかいつてクイレルに『喰らえ！母さんの愛の守り攻撃』とかいつてかちこみにいつて、そのまま賢者の石をゲットしにいけばよかつたくない？」

「あ、ああ」

「賢者の石あつたらさー。色々できるじゃん？それこそ来るヴォルデモート戦にそなえて新兵器の作製とかさー。」

ぶつぶつとハリーは唱える。というか、饒舌すぎやしないか。キラが崩壊している。「ハリー」そういつてかれの腕を掴むと、動作がとまる。顔が…赤い。

「顔が、赤いな」

「えっ」

「僕も、少し照れている。ハリーとすごした一年間が、ふつうに友達のように楽しかったからな。僕が望んだものだった。」

「…おまえが照れると、逆に冷静になるわ」

「なんだとー」

「ははは！僕もだよ。僕も。こういう関係性があつたんだなって思うと嬉しくてね。ついつい記憶がないのをいいことに甘えてしまった」

「記憶は、あつたのだが」

「記憶は、あつたね」

この一年間の互の失態は流そう「なかったことにしよう」と提案する。すると、何言ってるのときよんとんとして表情のハリーがいた。

「なかったことにしないよ。僕はドラコのが好きだから」

「はい？」

「せっかく築いたこの関係。僕はこの一年間通りすぎすよ。ときどきは一緒にねようね！ドラコ！」

「はい？」

ふふふ、といつてハリーは立ち上がる。ロンとハーマイオニーも心配してた。君が目を見ましたこと伝えておくからね。とウインクされる。明日は学年度末パーティーだよ。元気になったらおいでね。僕一人だから。そういつて彼は逃げるようにさつていった。

色々整理させなければならぬことがある。しかし、それはまた今度にしよう。きつと寮杯はグリフィンボールが獲る。前回もそうだったのだ。あれ、今回はハリーがスリザリンだし、僕も一応加点対象では？つまり：そこまで巡らせたところで思考を放棄する。眠たい。とりあえず一年は終わったのだ。僕も彼も色々あつたにせよ。無事にいき一年を終わらせることができた。そして、僕はハリーと友達になった。ケンカなんてものもした。しかもあのハリーと。

僕にしては上場うまくやったのではないかと思う。目標クリアの一年だった。友達つて大変だけど、なかなかスリリングだ。アステリ

了。なかなか僕は頑張っただろう。

汽車のコンパートメントの中は穏やかだった。

防音呪文あんど耳塞ぎの術を使い外部の音も入ってこないし、僕たちの会話も外にはもれない。ロンたちには申し訳ないが検知不可呪文もかけさせてもらった。

あれから、色々自分たちの記憶を整理させた。

彼は、今年はドビーがきて散々だから、よくいつて聞かせといてよ。と何度も何度もいつていた。「善処する」とアジアの曖昧な返事で返しておく。ハリーは不満そうだったが、あいつらの思考回路は読めないんだ。突拍子もないことをしでかす。

「そういうえば、リドルの日記はマルフォイ家？」

「ああ、それだが、探したけど、そのようなものは見つからなかったんだ。」

「まじ……。でもきつとこのままだと同じこと起こるよね」

「ひとつ、あてがある。エイブリー家が持つてるのではないかと僕は推測してる」

「なんでまた」

僕の推測といえど、ある意味の確信めいた物言いにハリーは疑問を投げてくる。残念ながら、九割型自信があるんだな。この考えには。僕は読んでいた本から顔をあげ、防音呪文がすっかりかかっていることを確認する。

「エイブリー家にな。僕の弟が養子にいつてるんだ」

「っは!?!」

あ、そっちタイプか。絶叫はしなかったな。

「たぶん。僕の黒歴史ハリーの邪魔もたぶんあいつがやってくると思うぞ」

「ついやいやいやいや聞いてない。聞いてないよ!?!」

「言っていないからな。来年入学だ。性格、過去の僕のままだから。見かけに騙されないようにな」

ハリーが口をぱくぱくと動かす。

ふ。間抜けな顔。言っていなかったからな。わざと。前の世界にはいなかった存在だ。言うべき時が来たらいえばいいかと思っていたし、この顔がみたかった。くつくつと笑うとハリーが「ずるい!」と叫ぶ。ずるいとはなんだずるいとは、ある意味完全イレギュラーな存在なんだぞあいつは。動きに予測がつかない。

ブブつとポケットに入れていた物体が震える。

携帯電話を取り出すとそこには、ロンからのメッセージだった。

検知不可呪文をとくか。自分の居場所をうち、携帯を片付ける。

「それだつて、ずるいよね。やけに君とロンの情報共有がはやいと思っていたんだ」とぶつぶついつているが無視だ。二年生は、なんだか大変な年になりそうだな。と本にまた視線を戻すのだった。

【賢者の石編 完結】

【秘密の部屋 o r 賢者の石番外編に続く】

somebody's regret Harry
side 1-1

僕にとっては、あの日がある意味の分岐点だったんだ。

「日常」を捨てても手に入れたかった「日々」

その光景を頭に浮かべて、高揚感を抱えて向かっていた。

それが、一瞬で崩れ去るなんてだれが考えたのか。

あの日は、ドラコと会う約束をしていた。一週間以上も前から約束をしていた日で、いつもは「今日、飲むぞ」と有無を言わさず連れ回していたからか、彼からは「約束を取り付けるなんてその日は槍がふるのか」と言われたっけ。

向かうのはドラコが今一人で暮らしているマグル界診療所。小高い丘にはきれいな花が咲き誇る、診療所。正面が病院になっていて、裏が通常過ごす住まいの様相を呈していた。実際は、室内がマグルのロンドンと魔法界をつなげていただけ、彼は一人になってからはどちらかという診療所のほうでいつも過ごしていた。

何度か、診療所の方の庭にお邪魔させてもらってスコープウスとアルバスが楽しそうに過ごしているのを見たっけ。あのときの二人の姿に色々なことに気づけた自分は、なかなか冴えていたと思う。

隣に座るドラコが、何とも言えない自愛の目で見ていたのがこっちも恥ずかしくなるレベルだった。

ふと、目の前に一通の手紙が落ちた。

「予定変更。買いたいものができたので、ホグズミードで」

はろー。僕ハリーポッター！生き残った男の子だよ！

とまあどうでもいい自己紹介。目が覚めるとそこは「ハリーポッター」二度目の人生でした。しかも、何も変化のない二度目の人生。せつかく二度目をするのなら、もうちよつとマシな生活になっていればよかったのに。例えば女の子になつてるとかさあ。

ひとりごちても何も状況は変わらない。とりあえずまあ、ダーズリー一家には媚を売っておこうと思う。三年生になったときにホグズミード許可書にサイン書いてもらえるレベルにはね！

僕が「僕」になつて始めたことは、前の記憶のメモだった。全てを覚えきれているわけではないが、とりあえず、思い出せるだけはメモをする。いくら強烈であったといつても、どんどん新しい日々が入ってくるのだ。忘れてはいけない。いま思い出そうとメモをしているこの時でもすでに思いだけないこともたくさんあった。だからこそ、とりあえず僕にとっての忘れてはいけない七年間を念入りにメモをした。

そして、せつかくの二度目の人生の目標。

せつかくなのだ。だったら前の世でやりたかったことをやる。

一つ目はドラコを死喰い人にしないこと。これが絶対だ。大人になつて、彼と交流するようになって色々とわかった。彼は、本来あちら側ではなく、こちら側の人間だ。ただ生まれた家の環境が悪かっただけ。だから、彼はこちら側にいればもう少し明るい生活ができたはずだ。

そして二つ目は、学校生活を謳歌すること。僕の前の世の学校生活は散々だった。学生としては。なかなか頑張った。ヴォルデモートを倒し、あるいみ成功したけれど、やはりあれは学生としてはどうだったのだ？と思ってしまうのだ。特に息子たちを見ていると。今回の人生、ある意味ヴォルデモートを倒す攻略本をもっているようにもんだし。

さて、僕は僕のできる準備をして、ホグワーツ入学挑みますか！

入学に関しては、何もかも前と同じで真顔になった。ハグリット。そんなに大きかったつけ？とりあえず、今度は人間としてのマナーを学ぼうか。ね。僕としてはダーズリー家での立場が悪くなのはいやだったので、子供らしくペチュニアに泣きついておいた。母性本能をくすぐる作戦。ペチュニアが僕のことを抱きしめたのには驚いたけど。

というわけで、ダイアゴン横丁。

この日をなによりも楽しみにしていた。なにせここは、ドラコと初めてあったところだ。ここで僕はあいつを「ダドリーみたいだ」と思っ嫌な印象をもってしまったんだよね。今思えば、本当仕方が無かったことなんだったってわかってるから、僕から歩み寄ろうと決めていた。絶対。彼はほんとうにいいやつなんだ。じやなきやスコープウ

スがあんなにいい子に育つはずもない。そして僕もあいつの隣が心地いと思うはずもない。

人は、体験や経験、関わってきた人でかわる。

これはあいつの、口癖だった。

マダムマルキンの洋装店に入ると、そこには新入生らしき人は一人もいなかった。あれ？日付も変わらないし時間もだいたいの時間だと思っただけど……。そう思いながらも僕は促されるままに踏み台まです移動をした。

服を合わせていると、後ろからひとりお客さんが入ってくる。目に入ってきたその姿は、見間違えうわけもない、真正正銘のドラコ・マルフォイだった。男も俺ぼれするようなきれいなプラチナブロンドに、アイスグレーの瞳。ああこんなだった。と懐かしさで胸が高鳴る。それにしても、昔からくつそ美人だったけど、こんなにだったか？と思っつまじまじみると、その理由にきずく。ちよ！オールバックじゃない！しかも少し髪長くない！女の子じゃん！

「君もホグワーツ？」

君に聞かれたあの言葉と同じものを返す。どんな回答が帰ってくるのだろうか。と顔にはださないように待っていたら、予想外の言葉が返ってきた。

「あ、ああ！今年からホグワーツだ。君も…だろうな。ローブ合わせてるし…！」

えー……。素直。まじかよ。以前とは違うドラコに少し笑いがこみ上げてきて、つくづくすと笑ってしまふ。あ、笑っちゃったら怒るかな。ドラコプライド高いからなー。特にこのころは。ミスをしたかなー、と思っっていると彼から続いて出た言葉は意外なものだった。

「ぼ、僕はドラコマルフォイ！君の名前はなんて言うんだ？」

「僕？僕はハリーポッター」

「ハリー・ポッター……僕と友達にならないか……！」

僕が呆然としてみると、彼は不安そうに僕の顔を覗く。いやいや、え。友達？僕と君が？いや、願ったり叶ったりだよ！僕がこの世界に来た理由がある意味叶うんだから！

この機会を逃してはいけない。ドラコの手を、取らなければ、彼の末路は前と同じだ。

友達になった僕たちはいろんな話をした。

主に話したのは Hogwーツの寮の話だった。彼からは当然スリザリン最良の話を聞くのだろうと思って「仕方ないな」と心の準備をしていたのに、その内容は違った。「グリフィンドールもいいな」とか、まさかのハツフルパフにもそれぞれの魅力があるとか言い始めた。

あ、この子は僕のドラコではない。

そんな当たり前のことに気づいた。

僕のドラコはこんなことを言わない。スリザリンに誇りをもっていて、堂々とほかの寮をけなすような子だ。そうじゃなかったとしても、ほかの寮のことをけなして「あ、しまった」という表情を浮かべ

つつも、あやまりかたがわからず、そのまま悪口を重ねてしまう子だ。それが、僕のドラコだ。

つい「違う」とつぶやいてしまっていた。

仕方のないことなのに、つい。

悲しくて、つい。

惨めで、つい。

ドラコが心配そうにこっちを見ている。

「だって、僕には友達はいない。君にはたくさんいるみたいだけど」

と、誤魔化した。そして帰ってきたのはドラコの笑顔だった。

なにその笑顔、スコープウスみたい。君はだれ？もしかしてドラコという名前のスコープウスなの？そう、じゃあ僕はアルバスなのかな。

「ねえドラコ。僕たち寮が違っても友達かな」

「当然だ。」

なぜか悲しくなつて、笑うしかなかった。そう、目の前の彼を抱きしめる。アルバスならきつとこうする。アルバスはいつもスコープウスを抱きしめていたから。

そうやってしばらく抱きしめっていると、外にハグリットの姿を見つ

けた。ああ、彼が待つてるからいけないと。「約束だよ」そういって、彼の初対面を終えた。スコープピウスで、アルバスなら、チークキスをしてしまってもよかったかな、と大胆ななことを考えながら…。

さて、どうやって9と4分の3番線に行こうか。

ここでいう疑問は、どうやって行けばいいのだろうか。ではない。だって僕は当然知っている。リリーのとき含めるとなんどここに迎えに彼らを迎えに来たか。ここで、当然のように行ってしまった「なんで方法を知っているんだ」と咎める人はいないだろう。別にこのまま逝ってしまった方がいいのだけど、このままでは、ロンと出会うというイベントをスルーしてしまう気がする。

悩んでおいてモリー、義理の母に助けてもらおうほうが、無難な気がする。うん。そうしよう！

そこで困ったように悩んでいると。案の定にモリーが声をかけてくれ、一緒に移動することができた。しかも今回は「この子もことし入学なの。友達になってくれるかしら」の言葉付きだった。「勿論！」と答えたが、自分の名前は名乗らなかつた。面倒なことになると嫌だし、あとでコンパートメントでロンにだけ自己紹介すればいいさ。

二人で汽車の中を移動しみつけたコンパートメントは後ろの方。ないよりましか。と二人で座る。

「自己紹介。したっけ。僕はロナウド・ウィーズリー。ロンってよんで。さっきのは僕の家族。目立つからまあ、おいおいわかると思う。だけどフレッドとジョージには気をつけたほうがいいと思う。いたずらが好きで…なんといううるさい。」

そういつて肩をすくめるロンがおかしくって、僕は肩を揺らして笑ってしまった。

「僕は…ええと。そのハリー。ハリーポッターだよ。よろしく」

どんな反応をするかな。と思つて彼をみるとびつくりした表情を浮かべていた。まあそうだよな。びつくりするよね。生き残った男の子、ヴォルデモートを倒した英雄。またあの時のことを聞かれるのかな。と思つて「緑に光がいった気がする」とアバダられたときの様子を伝える準備にはいる。

「君が！君が！あのお母さんに守られて生き残った子！うわー！本当に黒髪で緑の瞳！」
「はっ。」

そこ？え？黒髪緑は特に珍しくくない？え？

ロンの反応に突っ込みが追いつかず、僕のほうが固まってしまふ。

「ああ。ごめん。僕の友達に「生き残った男の子」オタクがいてね。まあ「英雄」とか表現すると怒るから君のこと「生き残った男の子」っていつも言ってるんだけど。ほら、名前をいうのも失礼だからさ。で、そいつも、ことし新入生なんだけど、もうずっとうるさいの

君にあえるとか、ダイアゴン横丁であつたとか。」

「そう、なんだ？その子僕にあつたって？」

「うん。その日大変だったんだから。僕が眠たい寝るっていつても、ぜんぜん寝かしてくれなくてさ……。しかもこっちは限定お菓子が人質に取られてた！」

「お菓子が人質に取られてたんだ……」

「一応一番の友達。」

照れながらいうロンに、一番の友達は何じゃないのか。とくだらないう嫉妬心をもやす。そうか、彼も僕のロンじゃないんだ。

それにしても誰だろう。シエーマスかな。デインかな……ああネビルかもしれないな。思考を巡らせていると、ここでも寮の話になる。ドラコの時もおもったけど、やはり新入生にとっての一大イベントは組み分けなんだな。

「僕はスリザリンは嫌だね。もしスリザリンなんかにはいったらそれこそ最悪だ。」

「ほう。それは僕への悪口かい」

前日も聞いたようなスリザリンヘイトの発言を聞いていると、ドアから新しい声が降ってくる。ドラコ・マルフォイ。君ってやつは、なんてタイミングが最悪なんだ。

ロンとドラコはとことん仲が悪い。前の世界でも最後はハーマイオニーと僕との関わりで、それなりにはなっていたけど、やはり学生時代の確執は拭えていなかった。犬と猿。油と水。僕がもう少し上手にアシストして二人を出会わせるはずだったのに！

ぐるぐるといろんな考えが一瞬で浮かんだが、ロンから放たれた言葉はそれ以上に僕のことを悩ませた。

「こいつはドラコマルフォイ。二人はダイアゴン横丁で出会ってるんだよね。さっき言ってた僕の一番の友達だよ。そろそろ格下げになるかもしれないけどね」

はい？

「よくわかってるじゃないか、ロニー坊や」

「僕のほうが格下げしちゃうかもよ？ドラコ坊ちゃん」

え？なになに。理解不能。なに笑いながら嫌味言い合ってるの
だれ君たち。

僕の混乱をよそにドラコは「失礼しても？」とイケメンに僕の隣に
すわる。

いやいやちよつとまってよ。いい匂いする。違う違う。ふたりが
友達だって？二人は、友達？

頭が痛い。理解できない。このいい香りに埋もれてかんがること
を放棄したい。

「きみたち友達なの？」

やっとできた質問にも驚きの返事が返ってくる。

オーケイわかった予定変更だ。僕の七年間予定変更

そんな感じである意味平和に汽車の中は過ごした。

途中ネビルのヒキガエルを探しに来たハーマイオニーと友達に
なったり、ドラコのくっつきかっこいいウインクを頂いたりして脳内は
忙しかったけど。

「ドラコは僕たちがグリフィンドールになるって決め付けてる。あれ昔からなんだよ。そして自分はスリザリンだって思い込んでるんだ。そんなのわからないじゃないか」

うん。たしかにわからない。

組み分け帽子は絶対だけど。絶対じゃないから。

まー。知ってたよ。ドラコはスリザリンだよね。

けど、もしかしたら。とも思った。だって、組み分け帽子がめっちゃくちや悩んでたから。いや、もしかしてレイブンクローと悩んでたのかな。ドラコ実は本当に見かけ通りくっそあたまいいから。腹立つけど。

けど、ドラコは自分の入る寮は、周りの環境とかとは別に、自分の意思でスリザリンって言ってたから。まあ、当然の流れだったんだろ
うな。

そうして僕の番。

『はてさて、おまえさんもか。どちらから?』

『僕のがわかるのですか』

『わかるとも、わかるとも。君は一度私がグリフィンドールと組み分けだ君だ。』

『あなたが僕を組み分けた…?ここはパラレルワールドではなくて、もとの世界の過去ということですか?』

『さて、どうだろう。それはわからない。もしかしたらワシはワシ以外がいるのかもしれないし、つながっているかも知れない。自分だけかもしれないしな。それは確かめたこともないし、確かめる必要もない。』

『ふうん。そうですか』

『して。今回は「スリザリンはいやだ」と唱えなくていいのかね？』

帽子の姿は見えないが、笑われている気がした。

くそ、燃やすぞ。インセンディオ

『僕はスリザリンがいいです。』

『おや、なんでまた。君は、グリフィンドールでたくさん心許せる仲間とであいい、巨大なる悪を打ち負かしただろう。君は英雄に、なるものだ。それはグリフィンドールで叶えてきただろう。』

僕は小さく息をはく

『ああ。僕はグリフィンドールで愛する仲間、愛する奥さん、家族と出会った。だからこそです。だからこそだ。僕は今度はスリザリンで愛する仲間とであう』

『強欲だな』

「強欲だな」そう呟く組み分け帽子は、咎める風でも呆れる風でもなく、ただ「面白い」というようなふうだった。

『ええ。だって二回目の人生だし。今回は人生謳歌して、その片手間で世界を救ってみようかなって』

こうして、僕はスリザリンのハリーポッターという存在を勝ち得たのである。

いやあー。楽しい！二度目の学校生活超楽しい！
僕はスリザリン生生活を本気で満喫していた。

みんな優しい。先輩たちもめっちゃやさしい！

グリフィンドールのときだって、友人や先輩は優しくかった。優しいというより面白かった、ひょうきんで、面白くて……。けどスリザリンの先輩方の優しさは質が違った。

寮に戻るとだれかがお茶を入れてくれる。お菓子をくれる。最初は戸惑っていたけど、この人たちは新入生を可愛がるのが趣味なのだとおもって、「ありがとうございます。美味しいです！」と感想をいうことに徹した。めっちゃくちや嬉しそう。先輩うれしそう。

先生方がどんな先生か、どんな授業か。前日にいつも教えてくれた。

基本的に「予習はしておけよ」という先輩たち。しかも言いっぱなしじゃなくて、教科書広げて一緒にかっつけてくれる。神かな？

まあ自分は二度目の学生だし、そんなに勉強しなくてもぼちぼちだろうし、頑張らなくてもいつかと思っていた自分を改めた。

これは僕、秀才になっちゃうのでは？

正直、数日間でたくさんひそひそ話にはであった。

勿論寮の外で、そんなに僕が珍しいかな。

まあ、以前の僕だったら、「なんだよ！見世物じゃないんだよ！」とか怒ってたかもしれないけど、今回の僕はそんなに短気じゃない。だって僕が彼らでもきつと遠巻きに噂に参加しただろうから。それに、先輩たちが「気にすんなよ！」といって美味しいお菓子をたくさ

んくれた。ありがとうございます！ご心配痛み入ります！

薬草学も妖精の魔法もたのしかった。先生もなんだかかわいい。

魔法史は相変わらず眠たくて、ずっとドラコに「寝てもいい？」と確認していた。ドラコはちらりと睨んできたただけだったか、ねちやおとおもって伏せたら横からこずかれた。くそ、この優等生め。

変身学のマクゴナガル先生は本当に懐かしくて、はりきっちゃった。マツチを針に変えるのに、色んな針を作って遊んでたらドラコにバレた。「すごいな」といつつドラコも一緒になって針を作って遊んでたから同罪。というか、やっぱドラコって魔力高いんだね。すごい。僕はほら、チート使ってるからね。

闇の魔術の防衛術ははっきりいって最悪。いやあ違う意味で古傷が痛むよ。平気のつもりだったけど、やっぱり気持ち重かった。隣でしきりにドラコが「大丈夫か？」とか「スネイプ先生に薬もらうか？」とか心配してくれて、嬉しすぎてハグしていた。なんだよこいつ。友達にはそんな風だったのかよ。悔やむ！

ドラコと二人で談話室ティータイム。ようやく慣れてきた、この貴族タイム。話題は明日の魔法薬学の話題だった。いや、なれない。めっちゃおいしいこの紅茶。貴族様こわ。

なによりも楽しみにしていて、実はなによりも「こわい」
僕はスネイプの前で、平常人でいられるのだろうか。

彼の人生は僕と父親のせいでめちやくちやになったのに…。

……あとダンブルドア……。

スネイプ先生に点数をもらって上機嫌だった。うれしい。めっちゃうれしい。スリザリン鼻肩だろうとなんだろうと「僕」に「スネイプ」が点数をくれた。うれしい。

以前はなかったコミュニケーションルームでグリフィンドールの二人とドラコとおしゃべりタイムを楽しんでいた。なるほど。僕がハーマイオニーとロンと離れてしまったけど、歴史的に大丈夫なのだろうか。ドラコと対ヴォルデモートをすればいいのか。とふわっと脳みその一部で考えていたけどこういうことか。こうすれば、問題ないってわけだ。歴史の修正力ってこわー。ロンとドラコは仲がいいし、ドラコは以前のような純血主義でもなくハーマイオニーとも普通に接している。ふむ、なるほどつまりは今回はこの四人でクエスト攻略ってことだね。オーケーオーケーって…わりと最強パーティーなのでは？

「あー、僕、魔法薬学の授業が一番すきだな。学年で一番目指そうかな！」

そうつぶやくとドラコに反抗された。そうか、そうだったなきみつて癒者であり医者だったな。ごめんごめん。目の前でドラコとロンのしようなもない会話が始まる。本当仲がいいなあ。僕だって中身は大人だから、嫉妬とかしたくないのに、もやっと心の中で嫌な気持ちが出てくる。だめだめ収めないと。必死に負の感情を抑えこむ。無理矢理に会話に参加する。変じゃないかな。自然かな。

ふと隣のドラコの表情が見えた。

辛そうな、切なそうなかお。

ねえきみどうしてそんな表情をしているんだい？

ま、飛行訓練何も起きないわけなかったよねー。知ってたしってた。

知らなかったのはロンが上手に箒を扱っていたことだけ。

あ、あとドラコがネビルと友達になりたいっていった。やだよ。前科があるもん。絶対いじめる。そういうと彼は「それはロンで足りてる」とかいった笑ったけど。納得しそうになっただけ。

ふわふわと空中散歩をしながら、「あ、このままいくと僕のシーカーイベント」発生しないということに気づいた。気づいたけど正直「べつにいつかー」とも同時に思った。グリフィンドールじゃないし。スリザリンでクイデッチ選手とかプリントうるさそうだし。

そうして集合時間に集まってみれば、ネビルの箒が暴走していた。何をしたらああも箒が暴れるんだ。助けに行こうかともおもったけど、悪目立ちするのは嫌だった。隣のドラコをみる。彼も焦った表情でネビルをおっていた。いや、以前の君だったらいまこは「ニヤニヤと嫌な表情を浮かべてネビルのことを馬鹿にする」が正解だからな。お前は誰だ！やはり僕のドラコじゃない！

つとまあ茶番はおいといて。たしか、以前ドラコはクイデッチをしているときがあるいやしの時間だったといっていた。選手になりた

かったんだとも……よし。

「ドラコ。箒乗れるよね。」

「はっ、いや。まあ乗れるがそれはハリーもだろう」

いや、僕のことはいいから。お願いしても「めだちたくない」と表情をしかめる。そうそうそれぞれその顔がみたかった！ありがとう。じゃなくて！行ってこいつつてんの！今年は無理でも来年のクイデッチ選手の選抜に有利になるかもしれないだろう！

そういつて無理矢理追い出した。

のを、ちよつと後悔。

あれは、さすが大変かも。僕でも無理かも。

ああああ、だからネビル。暴れちやダメだって。君自身があばれるとああああああ……

仕方……ないよね。背に腹は変えられない。

ドラコを無理矢理送った手前彼が怪我するのも見たくはないし。

そうしてちよつとみんなから離れて杖をとりだす。なくてもできるんだけど、ミスってネビルやドラコに当たったらいけないから。はい「デイフィンド」

あとはうまくやってくれよ。ドラコ

バレないうちにロンの隣にもどる。

彼は思った以上にうまくやったみたいだった。おお……急転直下。ぶつからずにそのまま上昇するか……元シーカーは伊達じゃないね。

あのあとは、ドラコが大変そうだった。クイディッチのキャプテンであるマーカスフリントが彼を来年の選手選抜に声をかけていた。来年のことを今から言わなくても思ったし、どうでもいいことばかりつらつら並べ立てるから聞いていて面倒くさかった。やはりフリントがキャプテンだと考えちやうよな。ウツドのときも正直大変だったけど。ベクトルが違う。

「疲れた。夕食とって疲れるとかありえない。」とぶつぶつぶやいていたから、目の前を歩くロンに声をかけて、一緒に食後のティータイムに興じることにした。途中からハーマイオニーも参加して四人で。懐かしい光景。

前の世でも最後の方は、四人だった。そう、四人か。僕とドラコの二人か。

最初は気まずそうにしていたロンも、次第に溶けて楽しく四人で談笑することも増えてたつ。あの頃は「こういう学生時代もあったのかもね」と笑いあってたけど、“こういう学生時代”もあったよ。君に伝えたい。時々不安そうに僕たちと一緒にいたあのドラコに。

楽しくて、このまま日々の生活が終わればいいなあなんて、始まったばかりなのに考えた罰なのか。平和な日常に安穏とするなどという警告なのか。途中、顔をだしたネビルの言葉で、現実に戻される。

「ハーマイオニー、ロン。きみたち今夜決闘するって本当？」

なんですか？決闘？

決闘？あれか！誰と！

「ハーマイオニー、ロン。決闘ってどういうこと？本当？」

前はドラコだった、ドラコは僕とずっと一緒にいたしそんなやり取りはなかったはずだ。なにより、今の世のロンとドラコがする理由が思い当たらない。あつたとして、将来好きな人をかけてとかそういうやつだ。

理由をきいても二人は答えしてくれなかった。「言いたくない」の一点張り、なのに「絶対行く」とロンはいうのだ。ドラコが一生懸命説得しても二人は聞く耳をもたない。つてドラコ、それ、君がいつちゃうの。まんま君が前僕たちにした仕打ちだよ！と心の中でつつこむ。いや、だからこのドラコは違うんだって。

なんやかんや。なんとかかんとかで二人を説得し、ドラコと寮に帰る。寮に帰ると、見た子も聞いたこともないモブっぽい先輩が、今日の決闘のことを声たかだかに自慢していた。こいつか。まじでレダクトするぞ。

なるほど。ドラコは質のいいいいじめっ子だったんだなあと思う。なんというか品のあるいいじめ？いや、どういう言い方をしようとやったことには変わりはないんだけど。そう思うと、やはり目の前にいる

優しいドラコは僕の知っているドラコじゃないんだなあと思って、悲しさと怒りが沸いてきた。

一人ぼっちじゃんか。

僕のそういう感情を読み取ったのか、ドラコが「おやすみ」といつて頭をなでてくれた。そういうことをされると余計悲しくなるんだって。僕の知ってるドラコはそこで鼻で笑って「親がいないというのは、いつまでも赤ちやんのままでいられるんだな」とか傷をえぐってくるんだ。あ、なんか地味に辛かった今の。想像なのに、ごめんドラコ。

ごめんドラコの言葉を飲み込んで「ドラコありがとう」と返すと、優しく微笑んでくれた。

それぞれの布団にはいつて、ふと、ロンのことを考えた。

ロンはなんとというか単純だ。それは前も今も変わらない。ドラコがそばにいたぶん考え方は大人などころがあるが、やはり性質そのものは僕の知っているロンのままだ。

…そう、ロンのままだ。

まさか、とは思うが…あれは、何時頃だったか。ああー。

ぐしやぐしやとつい頭をかきむしった。

ほら、絶対ロンは約束破って来ると思った。

来なかったらこなかったで安心してかえればいい、そうおもいながらハリーもトロフィー室にきていた。なぜかネビルもメンバーに増えていた。といつてもあの時も四人だったのか、と、つくづく歴史は繰り返すな。と笑うのをこらえる。

案の定、フィルチはくるし、ピーブスはくる。三人は物音を立てながら一生懸命に走り去る。

「はあ、」とこれみよがしにため息をつきながらハリーは四階の例の部屋にむかう。道をしていければ、最短で来れる自分の方が付くのが早い。かわいい仲間たちのために「アロホモラ」と部屋の鍵かあらかじめ開けておく。するとパタパタと走ってくる音が聞こえ、ハリーは、近くに身を潜めた。

あの部屋にいるのはフラッツフィーだ。僕の魔力でどこまで持続できるかわからないけど、とー歳歳の自分の魔力を不安にもいながら三人にプロテゴをかける。物理攻撃にも効くはずだから、もし万が一にフラッツフィーに攻撃されても一度なら大丈夫だろう。

ああ、もう眠い。

もし、攻撃されたら、自分にもわかるし、ハーマイオニーもいる。前回のことを思い出すと、このまま逃げるだろうし。大丈夫かな。ドラコのいる寮に戻ろう。なんかも疲れたし、ドラコのベッドに侵入してもいいかな。僕11歳だしいいよね。うん。許可する。

いい眠りはいい香りから。

いい眠りを貪っていた僕は、ドラコの叫び声で目が覚めるのだった。

これは、怒っていらっしやる。

イケメンが怒るとこわいというのは、全世界共通の常識である。怖すぎて「笑顔笑顔」とほっぺをつつくも反応がない。もー、しかたないじゃん。やっちゃったものはさ。意外と根にもつんだよね。この男。

いくらつついても反応が帰ってこないの、ハリーはここぞとばかりにドラコにくつつく。するりと腕を回しても特に怒られないし嫌がられなかった。

「なんとなく想像できてたじゃん。ロンがそんな簡単にあきらめるわけがないよ」

ピタリ。と足がとまる。

あ、機嫌治ったかな。と声をかけようとしたら、彼のつぶやきが耳に入ってきた。「立ち入ってはいけない4階。そこにいる大きな犬。ホグワーツは何を守っている?」ふうん。さすがドラコ。やっぱりすぐ気づいちやうね。

「スネイプ先生！遊びに来ましたー！」

「帰れ馬鹿者」

「帰りません」

我が物顔でハリーは、スネイプ教授の部屋に入りソファにすわる。「許可してない」「自由か」と色々スネイプはつぶやいているが、全部無視だ。

今の自分にとって、ここは安らぎの場所だった。

彼の態度は冷たいが、それは前の世でも同じだった。むしろ僕のことをずっと守ってくれていたことを知って、なにも返せていないことを悔やんでいた。きつと今回のスネイプ先生もそうなのだろう。だったら、文句を言われても、彼と過ごす時間がほしい。

でも、実は友人たちと一緒にいるのがときどき疲れるのだ。

「疲れる」というと語弊があるかも知れない。「僕の」「知っている」「彼らじゃない。」と思ってしまうだけで、悲しくなっすこし心が荒む。

その点。今の世も前の世もおなじ態度のスネイプ先生と一緒にいるのは、気が楽だったのである。

「ねースネイプ先生。『安らぎの水薬』ってあるじゃないですか。一年生の僕でも作れそうなレベルで似たような効用のある薬ってありません?」

「何に使うのだ」

「薄くていいんですよー」

「だから」

「…ドラコがね。ときどきうなされているんです。」

「これは本当。」

「ただひたすらに苦しそうにするだけで、なにかを口走ったりしないから、理由はわからないんですけど。なんとかしてあげたいなあと思っています。調べたら「安らぎの水薬」があるって知りまして。」

これは、嘘。

「あ、あと実は僕もときどき目覚めよくないんですよ！」
これは、

スネイプは、口を挟まずに聞いてくれた。聞いてくれていたが、返事もなかった。やっぱダメだったかな。勝手に材料盗んで作っちゃうか。と、邪な考えが浮かぶ。

「だったら、そのものを作ればよからう」

「え……いいんですか！」

「勿論。吾輩がみているところで、だ。あれは非常に難しい。フクロウ試験にでるレベルだ」

「あ、はい！」

「まあ、おまえなら、できないこともなからう。」

ありがとうございます！ハリーは、スネイプから許可が得られたこと。そして尊敬する先生直々に教えてもらい見てもらうことが、最高に嬉しかった。前回とは違う。僕と先生の距離。

ってあー！ハロウィンだった！忘れてたまじで。糖蜜パイ食べてる場合じゃなかった！ドラコが入れてくるもの、むしやむしや食べている場合じゃなかった。今日はトロールイベントの日じゃん！あー

！クイレルきちやった！

本気で忘れていた。ロンとハーマイオニーが別行動するなんてこの時期は普通だった。特に今回は僕と一緒にいないのだ。男女二人で行動することは減るだろうとも、思っていた。から、忘れていた。一緒にいないのはおかしくはないけど、大広間に表れてすらいらないのは、「おかしい」

気づいてすぐに向かおうと思ったならクイレルの登場である。くそう。ニンニクターバン！

「ドラコ。僕は今から女子トイレに行く、いそいでロンを連れてきて！」

「ば・女子トイレだと！なぜそんなところ……わかった。しかし、なぜ地下室ではない」

「思い出したんだ。さつきパーティが、ハーマイオニーが女子トイレにいるって聞いていたのを！急がなきゃ！」

そんなこと聞いてないけど、「さつき」っていつだよ。ずっと僕と一緒にいただろう。ドラコ……。僕不安だよ。そうおもいながらハーマイオニーのもとに急ぐ。

間に合った！まだトロールは来ていない。

「ハーマイオニー！大丈夫!?!」

「その声……ハリー!?!ここ女子トイレよ!」

「そんなの知ってる！……ここは危ない。いまトロールが現れたって連絡があったんだ。はやく逃げよう！」

「えっ…でも、ちよつと、待って」

ああああ、いやな臭い。臭い匂い。待てないよ! 「アロホモラ」そういつてドアを無理やり開けて、ハーマイオニーを個室から連れ出す。彼女の手をとり、外へ出ようとするが、おそかった。果たしてトロールはすでにそこにいた。出入り口が塞がれた。

「ひっ」

ハーマイオニーは恐怖で腰を抜かす。

無理だ。僕が大人ならまだしも、この体ではまだ彼女を抱えて逃げることはできない。じりじりと後ろに下がる。「プロテゴ」と防御魔法をかながら。

抱えながら逃げることは無理でも、倒すことはできる。最悪の場合悪霊の火をだしてしまおう。けれど、こうなってしまったら、こうなってしまった場合の計画に変更する。それは、ロンの救出を待つことだ。

自分が助けられるうちなら、自分自身で助けだそうと思っていた。でもこう来たらせつかくだ。彼に頑張ってもらおう。前回もできている。今までのことを思うと、きつとおなじことになるし、同じように成功するはずだ。

洗面台はどんだんなぎ倒されていく。大丈夫。盾役はまかせて

「ハリー! ハーマイオニー!」

「ドラコ! ロン!」

「待ってろいま助ける」

ロンを連れてドラコが、現れる。その声を聞いてトロールは的を切り替える。

ドラコが一生懸命にトロールの動きを止めようとするが、効かない。何やってるんだロン。君の、君の呪文が今この場では必要なんだ。

「ウインガーダイヤモンド レビオーサ」

彼のその呪文でトロールはノックアウト。

間一髪だった。「やったねー」と声を掛けるまもなくロンはハーマイオニーにかけより「ごめん、ごめん」と必死に謝っていた。それを聞いてハーマイオニーは涙を流す。そりゃあ、怖かったよな。頑張ったなきみたち。よしよし「よかったねえ」と二人を抱きしめた。

そういえば、と。

ドラコと一緒に寮に帰る道でハリーは呟く

「ロンの右頬、赤く腫れてたよね。あれなんでか知ってる？」

「あー…」

「今わかりやすく目をそらしたね。」

「んー…」

「ドラコ！まさか君…」

「さて、話を聞け！理由がある！理由があるんだ！」

ついやってしまったと。彼は僕に暴露した。

なんだ、そんなことか。むしろすつきりした。

だから、あんなふうに関は彼女に謝ったし、彼女もロンの言外の謝罪を汲み取ったんだね。なるほどなるほど。ドラコにしてはナイスファインプレー。

サムズアップしたら、罰が悪そうにドラコは微笑んだ。
うーん。なんだかなあ。

十一月。クイデツチシーズン。

前の時はウツドのスパルタでこの時期大変だったなあと懐かしむ。しかもあの時はスニツチを食べちやったのだ。あれは後にも先にもない経験だった。今思うと恥ずかしいなあ。そして、スネイプ先生はこのころから僕のことを守ってくれていた。勘違いしてしまったけど。今年は、僕は出場しないし、特にやることないな。

って、思ってたら起きましたよ。おもしろいこと。

なんと、スリザリンのシーカーであるヒッグスが階段から落ちて、出場ができなくなったらしい。そこで回ってきたのがドラコ。飛行訓練のときの話をプリントが思い出したらしく声をかけに来たのだ。

でも断固拒否をしていた。すればいいのに。クイデイツチしたかったでしょう。好きだったでしょう。自分にとっての息抜きだったっていつてたじゃん。不思議に思うが、すぐに、前ほど窮屈じゃなかったんだらうな。家の思いと自身の思いのズレに。

僕は、彼の手を取らなかったし。

今僕がそばにいること。まあロンも。

それがかれにとつての慰みになっているのかもしれない。

自分がここにいる意味があるというものだ。

もう二度と繰り返さない。君が不幸になる人生なんて。だれも幸せにならないんだよ。

プリントにこっそり「僕が代打ではいろうか?」といったら、鼻で笑われてあたまぽんぽんされた。馬鹿にしているのかなんなのか!失礼しちゃうよまったく!来年みとけよ!

「ねえドラコ。ニコラ・フラメルについてなにか知ってる?」

「さあ。」

「だよなー。ハーマイオニーたちとここまで探してもないなら、禁書の棚探す?って話になってるんだよね。」

「禁書の意味しってるか…?」

賢いドラコだから気づいているかな。と思ったけど気づいていないようで安心する。というより、彼らには気づいて欲しくない。最後の対決は僕一人でなんとかできる。彼らが、ニコラ・フラメルという錬金術師に思い当たらないようミスリードを繰り返していた。

「そんなことより、ハリーはクリスマス休暇どうするんだ」

「え?僕?帰らないよ。というより帰る家もないもん。プリペット通り四番地のあの家は僕の家じゃない」

「そうか。なら僕の家に来るか?」

「えっ……!えー行きたい。いききたい!」

「じゃあ父上と母上にいって」

「だが断るついてっ」

殴られた。ノートのはしで。

わりと痛くておおげさに自分の頭をなでる。

いや、行きたいよ！きつと楽しいんだろうな！一応前の世のおかげでダンスもおどれないこともないし、美味しいご飯にあったかいお布団。ぜったい幸せ！

しかも、このドラコを育てた、ルシウスとナルシッサにも会ってみたい。僕の知っているおふたりとは違うのだからなあ。ナルシッサさんは、変わらず子煩悩なのかな。などと考える。

けれど、自分はこのクリスマスは残らないといけない。

「透明マント」をあのだンブルドアから貰い受けなければならない。なければならないで行動するし、作らせればいい（幸い金はある。ないのは伝手だけだ）。でもそれはあくまでもレプリカであって。オリジナルのように死すら欺くほどのものはない。しかもあのマントは「死の秘宝」なのだ。

さらにいうとポッター家のもの。

残る。そして、クリスマスプレゼントとしてもらって、みぞの鏡に行かなければならない。自分がかわいそうな子供であると、彼に見せつけねばなるまい。ある程度は前と同じように動くことが必要であるように感じた。

知識はあっても魔力は子供のそのままなんだもんな。

「スネイプ先生——！『安らぎの水薬』ハリー特別製受け取りに来ました——！」

勢いよくドアをあけると、額をおおうスネイプ先生の姿が。何かあったのかな。

「どうしましたー？大丈夫ですかー？」

「ポッター。もう少しおとなしく訪問できないのかね？」

「えー、だってドラコいないし」

「そこに、因果関係は!？」

「ドラコいないからいい子ぶらなくていいかなって」

「つまり、これが君の本性だと」

「本性というより、ドラコがいないVerハリーです！」

「ほう」

「本性というならもっと、いろんなことがどうでもいいハリーになりますー！」

「帰れ！」

二人でつくった『安らぎの水薬』を最終調整をする。

僕のレベルではほんの少量作るので精一杯だった。まあ、魔法薬学は得意ではないのだ。もうすこし、「どーん」とやって「ぼーん」とやるほうが僕の性はあってる。

それに、もともと少しで良かった。アロマのように、ほのかな香りで落ち着くことができたならそれでいい。その方法として考えていたことをスネイプ教授に伝えると「なるほどな」と同意を頂いた。

そう、ハンドクリームにすることにしたのだ。

ナイト用ハンドクリーム。寮の女子生徒たちが使っているのをみ

て閃いた。ハンドクリーム自体はジニーやリリーも使っていたら知っていたけど、「ナイト用」があるのは今回初めて知った。スリザリンの嬢様方のあの白くてやわくくて、みるからにすべすべな手は、こうした彼女たちの努力によって成り立っていることを初めて知ったよ。

しかも、男性も普通に使うんだって。使うんだってよ！元同僚生のみなさん！グリフィンドールじゃこんなことはなかった！

これは、ドラコへのクリスマスプレゼントだ。

とりあえずクリスマス朝には届いているようにして、使い方については僕が説明しよう。

そうおもいながらにこにことクリームを器にいれていたら、スネイプ先生が怪訝な目でこつちを見ているのに気づいた。

「どうしましたか？」

「いや……マルフォイの前ではいい子になるということとはだ……その……無理して一緒にいるのかと思ってな」

そうなる!?!そうなるのか！

「違いますよ。僕がドラコが好きなんです。彼に嫌われたくないんです。」

「そう、か。吾輩にはマルフォイがそなたに構っているようにみえるのだが」

「そう見えますかー。それは良かったです。でも独占欲強いのは、やっぱり僕です。僕がかれの一番でありたいし、誰にも寄せ付けたくありません。彼が幸せに生きるために僕はなんだってやってあげたいし、そういう環境をつくってあげたいんです。そのための「今」なんです」

「今」という言葉には二重の意味をこめる。

「それは、互いに身を滅ぼす考え方だぞ」

「ええ、重々」

にっこり。と、

あー、クリスマスが楽しみだなあ。

そして、クリスマス当日の朝。

ここでの出来事は割愛しておく。簡潔に言うと、いままでで一番クリスマスプレゼントをもらったし、たぶん一番相場がえげつなかった。スリザリン怖いよ！いまからプレゼント買い足すよ！

「おはようハリー」

「おはようロン」

クリスマス休暇でみんなが帰ってからは、ずっと二人でご飯を食べていた。ロンのお母様にも特製セーターを頂いたのでお礼を言っておく。聞けば「それ毎年ドラコのところにも送ってんの。あの、おぼっちゃまに！恥ずかしい！」らしい。ドラコがこのセーターを着ている

のを想像して笑いが漏れる。隣でロンが「だろ!？」と共感を求めていた。

「そういえばハリー。ドラコからのプレゼントなんだった。ちなみに僕は靴」

「へえ! また今度見せてよ! 僕はね。うーんと。栞と」

「栞!?! あいつにしては地味なチョイスだな。つて続きがあるのか」

「うん。アクセサリー?」

うわ。汚い。盛大に吹いたぞこいつ。

「なんだろう。レザーっていうのかな。紐の部分がレザーで留め具? のところが金属でできてた。ゴールドでさ。緑とゴールドの組み合わせが意外とかっこよくて。みる?」

そういうがロンからやんわりと断られる。

「友達のそういうところ見たくない。」「あいつほんとないわ」とぶつぶつつぶやくのが聞こえてくる。ふつうにかっこいいんだけどな。僕が女性ならまだしも、男性にアクセサリーおくるのはあってもよくない?」

「あ、ねえロン。クリスマスプレゼントに面白いもの届いたんだけど、夜の散歩行かない?」

ひそひそと小さな声で話す。

「面白いもの?」

「そ、夜寮の外で待っててよ。迎えに行くから」

みぞの鏡。心の一番奥底にある『のぞみ』をみせるもの。僕の望みは僕自身が一番わかっている。だから、一度ぐらいダンブルドアに見せつけるつもりで行けばいいかなって思っていたんだ。

なのに、そこに映っていたものは「のぞみ」なんかじゃなく「残酷」な真実で。

心の奥底で望んでいるものが、「これ」かと思うと。自分の首をかっきつてやりたくなった。

どこまでいっても自己中心的だなポッター。本当に、自分のことしか考えてない。

見たくはなかったけど、
これが僕の「罰」かと。
これが僕への「罰」かと。

やらかした自分の罪だと思うと、
目に焼き付けておかなければならないと、
何度もそこに通っていた。

イースター休暇が終わってからは、学生の本分に取り組まされていた。声を大にしていうぞ。取り組まされていた。ハーマイオニーもドラコも異常だよ！テストまでにまだ10週間もあるんだぞ！ハーマイオニーがガリ勉強だつてというのは、前から知っていたけど、ドラコまでとは。

ロンと二人で「信じられない」「気が狂ってる！」と二人に文句を言ってみただけで完全に無視された。むしろ「そっちが何言ってるの？」と、かわいそうな目で見られた。なぜだ。

まあ、僕は一度やっている内容だからそこまで大変ではないけど。うん。魔法薬学と魔法史以外ね。いや、魔法薬学はあれだ、相性の問題だ！難しくなればなるほど丁寧に、材料を切っていくのが面倒になる。座学としてはわかっていいるのだ、わかっていいるのだけど……まあ実技が及第点ではないだけよしとしよう。

なによりドラコがすごかった。授業の内容が頭にしっかりと入り込んでるんだろうな。毎日、その日のことを簡単に復習していつも予習をしていた。上級学年の勉強も暇さえあれば勉強していて、ハーマイオニーとは違うそのスマートさに感心していた。あの頃もこうだったんだろうか。鼻負されてるって思ってたことをちよつと反省。

彼は本当にすごかったらしくて、先輩たちからも質問を浴びせられる。しかも、また嫌味がないんだよね。質問して申し訳なかったなっと思わせるような態度をとらない。素直に「ありがとう」といつて受け取ってもらえる。そんな対応はドラコはしていた。誰だよお前本当。

ロンがもう限界とばかり机に突っ伏したのを頃合に勉強会は雑談会へと変わっていった。まってました！ドラコの入れてくれる紅茶すごく好きなんだよね。なんというか落ち着く。あのころ、彼が僕に入れてくれていた紅茶の暖かさとかわからなくて、懐かしさでじんわりとする。彼の家で飲んだあとは、最後の締めと言わんばかりにいつも紅茶を淹れてくれていたっけ……。

その懐かしさを思い出していたら、ロンとハーマイオニーが調べ学習の成果を披露してきた。おおう。さすが、「賢者の石」にたどりついちゃったか。一生懸命ミスリードしてたのになあ。まあ、想定内。今回は、そんな危険でもないし、最後のみぞの鏡のところで僕一人だけでいい。

まあ危ないだろうけど、せつかくならまたあの冒険をこの四人でしたい。あの時は三人だったけど、今回はこのまま行けば四人だ。四人でするあの試練がどんなものになるか気になったし、あの時あの冒険の共有が僕たち三人の仲を強固にしたと思っている。

だから、そこにドラコがいれば、今度は四人の仲がより深まるのではないかと打算するのだ。僕とドラコの仲が……。危ないことはさせないから、彼らを危険に犯すことをお許し下さい。名も知らぬ誰かへ。

「あ、そういえばハリー。土曜零時な。」

「了解」

ふともらしたロンの言葉に、何も考えずに肯定していた僕。

いやいや。ドラコに隠そうっていったのロンじゃん！何即バラしてるの！一瞬焦ったが、ドラコはすこし聞いただけで納得していた。

素直。

ただ、それが、どんなことになるのか考えてなかった。だって、そうじゃん。まさか彼がそこまで劣等感をいだいてるなんて誰が想像したさ。

ロンの腫れは、ドラコが目ざとくみつけた。「動物性の毒だな」といって彼が持つてる塗り薬をロンに手渡していた。あれってみてわかるもんなの？けれど、そのファインプレーでロンの腫れはそこまでひどくならず、そのおかげで、チャーリーに手渡すのは三人で行くことができた。

まじかよ。ネビルおまえ…。

まずはグリフィンドール寮。透明マントを羽織って向かうとそこにはマクゴナガル先生とネビルがいた。やばいとおもって身を翻すも、そこでロンがこける。ロンがこけたことよってハーマイオニーそして僕もこけてしまった。僕たち三人と目があったマクゴナガル先生は盛大にため息をつく。

任務遂行の達成感でいっぱいだった僕たちは、その日は、一瞬で最悪の日になってしまったのである。

次の日の朝。スリザリンの減点を思い出して憂鬱な気分になる。ドラコにもバレるだろうしお説教かなあ。だけど。まあお説教ぐらいなら聞き流せばいいや！

そう思い、早々に身支度をしてドラコと大広間にむかう「今日は準備が早いな」といって頭を撫でてくれるドラコに、わずかばかりの良心がいたんだ気がした。

「どういうことだ。グリフィンドール150点？スリザリンも…？」

ドラコがひどい形相で僕たちを見る。はい！説明します！一切の説明をするから、その顔やめて！まじで！と、まあ説明さえすれば解決するって思った。スリザリンが減点されてしまったこと、正直にあやまろう。

そうしたら彼は傷ついた顔をして「除け者か」と泣いた。

びっくりした。本当に。彼はなんで泣いてる。

何を理由に泣いてる？一緒にいられなかったこと。一緒に活動できなかつたこと。

僕たちと「共有」できなかつたこと。それら全部だ。

「そんなつもりはなかつた」

「ドラコだもの。説明したらきつと許してくれるわ」

「話を聞き入れるってレベルじゃなかつた！あれは！」

「でも…」

「僕、ドラコとこんなケンカしたことない。喧嘩って言ってもしようもない争いばかりで、僕が『ごめんね』っていつも言うんだけど、あいつも『しょうがないなあ』って」

ロンが珍しくショックをうけて体操座りしている足に顔をうずめる。

「僕たちは、間違えたんだろうね」

「ハリー……？間違えたって」

「勝手にかれの考えを決めつけてしまっていたってことさ」

そう、きつとこうだろう。そうだろう。これが最善だろう。こうすべきだろう。こっちの勝手な判断と思い込みで僕たちは大切な友人を傷つけたんだ。

「ロンの考えが間違ってたって意味じゃないよ。けど、こうなって僕も初めて気づいたけど、『内緒事』って友達にされて一番辛いことだった。」

「うん。」

「僕たちは僕たちの考えを言った上で彼に、彼自身の判断を求めなきゃいけないかったんだ」

勝手に判断して、よかれと思って行動に移す。しかも本人はそれが「善意」だと疑ってもいない。そういう腹立たしさを、僕は十二分に知っていたはずじゃないか。

「大丈夫よ。謝りましょう。」

「僕、こんなにドラコと話さなかった事ないんだ、結構きついね」

「僕もだよロン。結構心にくる。だけど、こういうケンカって大切なんだよ。色んなことに気づかせてくれる。そうして次失敗しないように学んでいくんだ」

ね。そういつてドラコの真似。ウィンクをする。「ふ、ははは」「へたくそねえ」そういつてふたりが笑ってくれるからいいんだ。ねえ。

ドラコ、一緒に笑い合おう。

ドラコと仲直りするタイミングを三人で探す。けれども、何も考えていないような。我関せずを貫くドラコは正直怖かった。暇さえあれば本を読んで、声をかけるなオーラをまとっている。そうして、「今度、今度」としているうちに結構な時間が経っていた。最初は、「大丈夫かしら」と様子見をしていたパンジーたちだったが、最終的には「それはそれ。これはこれ」で僕ともドラコとも話していた。

授業中、魔法史で起こしてくれることはなかったけど、ペアを組む時はそれでも一緒に組んでいた。目も合わせず、会話をせずにペアをくみこなしていた自分たちは、ひどく優秀だなあと、呆れながらも感心した。

「ねえパンジー、ドラコ。どんな感じ？まだ怒ってる？」

「あら、最初の頃とくらべたら普通ね。けどあなたの名前が会話にでると固まるわ」

「固まるの」

「ええ。本人は、なんでもなしのようにしているつもりみたいだけどね」

「ばればれよねー。そういつて彼女たちはくすくすと笑う。「本当、情けないわよね。」おお、女の子って結構辛辣だな。」

「いい加減仲直りしてもらえないかしら」

「本当。したいんだよ」

「ハリーもドラコも弱虫なのよ。相手の様子ばっか伺って、ばっかみたい。そういうふうにお互い関係を作るからこんなことになっちゃう

のよ。まだ私たちが子供なんだから失敗すればいいの、損得勘定で仲良
くできる友人作っておかなきゃ、成長すればするほど『お家』がつい
てまわるわよ」

「特にドラコのところはなおさら」とういつてまた、彼女たちは目配せ
をする。まあそうだよ。あいつのところは、立場が強いもんね。一
瞬グラツブの顔が思い浮かぶが、失礼だ、と首をふる。「まあ、さらに
こじれるまでに仲直りしなさいね。」私たちはあなたたちが完全に仲
違いしたら、マルフォイにつくわよ。くすくすと冗談とも本気ともと
れない笑みで、彼女たちは楽しそうに去っていく。それは、さすがに
いやだ。後ろ盾がない自分は、ぼっちになっちゃうじゃん。と悪寒を
感じつつ、本日中の仲直りを決意するのだった。

「ねえ。ドラコ」

夕食を食べ、談話室での少しの団欒がおわり、部屋にもどってきた
ところを狙う。ドラコはこの少しの時間を勉強が読書にいつもあてて
いた。だから、落ち着いて話ができると思った。

まずは、ロンの誤解をとかなきゃって思っただけを伝えようとする。
けれど以外に上手に説明できなくて、より彼を怒らせることにな
ってしまった。

一生懸命に説明しようとするけど、できなくて。中身大人なのに。
なんでこんな簡単なこともできないんだと情けなくなる。大人だか
らこそ、「謝罪」ができなくなっていることにも気づかず。大人だか
らこそ、「なんとなく」でいつも「やり過ぎ」してしまっていた「ことに
気づかずに。目の前の不安を解決させる方法がわからない。どうし
よう。

切羽詰まった僕の口からでた言葉。それは、やっとでた。着飾らな
い、僕の言葉だった。

「ごめんなさい。ドラコ。僕は君がそんなふうにショックを受けるなんておもってなかったんだ。浅はかだよね僕。」

ねえドラコ。僕の目をみてよ。

もうしばらく君の目を見ていない。

君の目に見られていない。

見つめられていない。

ひよいとドラコがもっていた本をとりあげる。そのときの僕の表情はいったいどんな表情だったんだろう。こまったような顔をして、ため息をついてドラコが僕に問う。

「お前と僕は、友達か？」

「なにを言ってるの。友達じゃなかった時があるの？ロンと君も、ハーマイオニーと君も友達だよ」

仲直りの言葉はそれだけだった。それから、罪滅ぼしとばかりにいろんなことを話した。あんなに一緒に居いたから、一緒にいなかった期間が、本当に寂しくて悔しくて、心に穴がぽっかり空いたようだったよ。と伝えるとドラコは真っ赤になって目をそらしたんだ。かわいいい。

だから、その後のドラコの提案にはびっくりした。まあ、それで透明マントを貸した僕も僕なんだけれどさ。

1—4終了

*

玄関ホールで、ネビルとハーマイオニー、ロンが待っていた。フィールチももうすでにそこにおいて、最後にきた僕を睨んできたが、遅れてはいない。怒られる筋はないと言わんばかりに平気な顔をして、駆け寄った。

ハグリットの小屋に行くまでの間、フィールチはいろいろなことをつぶつとつぶやいていた。そんな風に子供達を脅すようなこといわずに、かえっていいじゃんか。と思いつつも、これがかれの生きがいの一つなんだろうなと思つてため息だけをこぼす。本当しようもない。

ハグリットと合流し、チーム分けだ。

今回は、僕とネビルとファング。そして、ロンとハーマイオニーとハグリッドでグループわけだった。さて、かわいそうなユニコーン探しという名目でかわいそうなヴォルデモートでも探しに行きますか！

当時のことを思い出して、一直線へその場所へむかう。

あの時は会おうまで額の傷はいたまなかつたはずだが、と痛む額にイライラしていた。見つけた瞬間アバダリたい。でも分霊箱があるからどうせ無駄におわってしまう。

「ね、ねえハリーあれ……。」

ネビルが指差す方へ目をむけると、いた。ユニコーンだ。

死に伏したユニコーン。美しい彼らの、その見慣れない様子は、月

明かりに助けられより恐ろしい妖艶さを醸し出していた。

一步近づこうとするネビルを制止し、その奥を凝視する。

痛い。久しぶりの激痛がハリーに警鐘を鳴らす。いる。ヴォルデモートがそこに。

血を啜るその黒い影は、ゆつくりを顔をあげる。その姿にネビルは声を失い、後ずさりをする。ネビルとの距離ができたことを確認したハリーは杖をぎゅつと握りなおす。殺せないまでも、多少怪我をさせることができるかもしれない。

しかし、久しぶりの対面は思った以上の衝撃をハリーに与えたらしい。明確な答えがでないまま、膠着状態が続く。会うことはわかっていたのに、どうせ殺せないのだからスルー案件にすればいい。そう思っていたはずなのに、なぜか「こいつはここでやっておいたほうがいいじゃないか」という考えが拭えない。

心に決めて、杖をかざしたその瞬間。ネビルの「…ドラコ」という呟きに咄嗟に後ろを振りかえる。その目を話した瞬間、ユニコーンの血をすする黒い影も消え去っていた。

「ハリー。ドラコが…」

ネビルのもとに駆けつける。

そこには顔面蒼白のドラコが倒れていた。

いそいで、息を確認する。静かな上下運動を確認し、彼がただ気絶しただけのことに安堵する。ネビルに、「大丈夫？」と声をかけドラコのことは内緒にしておいて。と有無を言わずに承諾させ、ハグリットたちのところに戻っていった。

まさか、ヴォルデモートとの遭遇でドラコが倒れるとは思わなかった。一瞬あの蛇頭になにかされたのかと焦ったけど、ただ気絶しただけだったのが不幸中の幸いだった。不幸？あそこにあいつがいると僕は知っていたのに、それは不幸なのだろうか。回避させることも回避させることも僕は知っていた。ネビルをつれ、ドラコの同行を許した僕は、彼らを危険にさらしたただけだ。いくら前の世と同じように物が展開しているとはいえ、何があるかわからない。あの時、ヴォウルデモートから、何かしらの攻撃があつた可能性も否定はできないのだ。肝を冷やした。

僕は絶対にドラコを殺させはしないと、そのためにあいつを死喰い人にしないと決めているはずなのに、僕が危険にさらして一体どういうつもりなんだハリー・ポッター。

自分自身を責めていると、「ハリー」とドラコの声があった。

「う……え。あ、ドラコ！起きたの！」

思わず、彼に抱きつく。不安そうな彼の様子に、我が子をあやすように背中をトントンと叩いた。やはり、聞かれるのはあの時のこと、「仕方ない」仕方ないよ。別にだれもドラコのことを臆病だなんて指さしたりしない。僕だって怖かったもん。大丈夫。大丈夫だよ。怖がるやめよ。

そう伝えて、僕はポケットから例のハンドクリームを出す。

僕がクリスマスプレゼントにドラコに渡したクリーム。彼は一度も使っている様子はなく、棚の中にずっと入っていた。せっかく作つたのに意味ないじゃん！とすこしはぶてていたから、ここぞとばかり

にもってきた。丁寧に、馴染むように彼の手に塗りこんでいく。広がる百合の香りは上品で、ドラコに合う気がした。僕の母さんの名前。匂い。それをドラコにまもってほしいと、心の狭い僕は願っていた。

物音がしてみるとカーテンから顔をだしたのはロンだ。手にはチョコレートを持ってきている。謝りに来たのだな。と思っても言わないでおくとドラコのほうから「ごめん」と謝っていた。

なぜか、つい悔しくて、握っていた手をぎゅつと握ってしまう。その僕の腕からはドラコからプレゼントされたブレスレットが見え隠れしていた。

「終わったー！」

テストが終了し、ロンと抱き合って喜びを全面に表現する。僕の隣のドラコと通りかかったハーマイオニーが呆れ顔でこちらを見ていた。うるさい！前回よりはこれでも断然にいいぞ！実技はそれなりできたし！座学だって落第点じゃないやい！魔法史だって、さすがにあそこまでドラコにテスト対策をしてもらっておいて赤点をとるほど失礼な僕ではない。かけるところは書いたぞ。覚えているところは埋めたぞ！

それに、この一年での一大イベントはこのテストではない。このあと待ちうける来るヴォルデモートの再会なのだから。それさえクリアすれば、僕的にはこの一年はクリアだ！今回はどうせ序章にすぎないのだから、なにもできないしすることはない。ひよひよいとあいつ

の顔を触って賢者の石をまもればいいだけだ。

そうやって、気丈に振舞ってみるが、痛いものは痛かった。わかっ
ていても痛みには耐えられないじゃんね！痛みを感じると同時に
ヴォルデモートのこと、そして前の世のことを思い出す。道中で死ん
でしまったもの、守りきれなかったもの、僕の「ために」死んでしまっ
たもの。全部が全部僕のせいであるとは、思わない。その考えについ
ては何度かハーマイオニーやドラコに怒られている。ドラコに関し
ては「何様だ」という嫌味のこもった麗しい表情付きで……。くそ

そういう日は、ドラコが気づいて僕を彼のベッドに誘ってくれた。
クリームを塗ってもらって、二人で一緒に寝るのだ。「お休みハリー。
何も心配することはない」そうやって優しく抱きしめてくれるから、
僕は涙を彼に悟られないように「お休みドラコ。僕たちは大丈夫だ」
と返すのだった。

そして、その日は突然来た。ハーマイオニーの「確認したいことが
あるの」という言葉が一年生最終決戦への幕開けだった。

「ドラコ。これ、とけるっ。」

僕は、スネイプ先生から出された試練の紙をドラコに渡す。

僕は、この問題はレベルが高すぎてとけない。当時のハーマイオ
ニーが解けていた問題がとけないというのもなんとも情けない話だ
か、挑戦してみたけどやはりわからなかった。前回と同じ瓶とはかぎ

らない。

ドラコはすこし考えたあと「一番小さい瓶」と答えた。前回と同じか

「そう、じゃあ紫の炎をくぐって戻れるようにする薬はどれ？」

「それは、なんの質問だ。」

「ドラコは、それを飲んでハーマイオニーとロンと一緒にいてくれ。この先は僕ひとりで行く。」

「僕も一緒に行く」

「だめだ！」

何を馬鹿なことをやっているんだ。向こうにはヴォルデモートがいるんだぞ。クイレルに寄生しているといっても、そこにあいつがいることには間違いない。ヴォルデモートに会って倒れたほどに、シヨックを受けるドラコが耐えられるわけがない。

耐えられたとしても、僕がそれを許せない。

しかし、ドラコはドラコで強情だった。

信頼していないわけじゃない。君のことは信頼している。前の世でも大人になってからだけどあんなに仲良くなったんだ。君のことを信頼していないとあそこまで仲良くなるわけないじゃないか。それに、この一年間でより君のことがわかった。君がひどく友達思いで、世話好きで優しいやつだったこと。そんな君だから傷ついて欲しくないんだよ。わかってよ。

「僕は、君に死んで欲しくない。」

「同意だ。同じ言葉を君に返そう。君の亡骸を見る趣味は僕にはないぞ」

「……っ！」

「だから、二人でいって、二人で帰ろう。」

何かが切れる音がした。

二人でいって、二人で帰る。それを、君がいうのか、僕をおいてけぼりにした君が。僕を一人にした君が。僕を不幸せにした君が。「嘘つき」僕が次に呟いた言葉だった。

ドラコの嘘つき。二人でとかいって自分が犠牲になればいいとか考えているんだろう。僕がそんなこととして喜ぶと思っっているの！自己犠牲は美しくない。残されたもののことを考えろ！僕をおいていったくせに、僕が一人になっても「私がいる」っていったくせに、僕をおいていったのは君じゃないか。僕を一人にしないで、ずっとそばにいるっていつてくれたくせに、裏切ったのはドラコだ。僕は残された。苦痛だった。嬉しくなかった。君に守られて、よかったなんて幸せだったなんて少しも思わなかった。そういうところまで考えが行かないドラコって、本当相変わらずすぎて反吐がでる。

ああ、こつちのドラコに言ったって意味がないんだった。

そうだ。このドラコは僕のドラコじゃあない。

「もういい。勝手にすれば」

そうだ、勝手にすればいい。

僕は透明マントを彼に渡す。

わかった、好きにしろ。

けれども僕はお前を絶対に殺させない。

つぎこそは「僕が」「お前」を守って死んでやる。

そうして、久しぶりのヴォルデモートには、ドラコの怒りと八つ当たりで対応してしまった。そもそも、お前のせいでこんなことになってんだわ。賢者の石なんてだれがくれてやるかよ。三年後の復活の時をむしろ、覚えてろよ。

ドラコが目覚めない。

こいつ、本当に弱くないか精神。大丈夫かな。きっとロンでもこうならないぜ。今後のパーティに加えるの考えたほうがいいかな。後方支援と僕の親友要員でもらったほうがいいかな。とかぐつぐつ考えていたら、とんでもない爆弾落としやがった。なるほどそういうこと、そういうことできみはヴォルデモートがトラウマなのねって、ちよいまで。

「っはああああああ！はやくいえ貴様！」

ドラコが絶叫する。てかまって貴様とかもはや僕のドラコ。

って僕だって叫びたいんだけど！

「まっつてまで、僕も整理がつかない。ちよつとまっつて、いやほら。同じ世界線の完全ちがう平行世界かもしれないから！もうすこし確認をしよう。アルバスとスコープウスは正確には大親友かい？」

「…正確に言えば大親友ではない……。僕の職業は？」

「だよね。君の仕事は癒者だ。だけどマグルの大学もでていて医者 of 免許も持つてる」

「完全に私ではないか。」

ドラコ一人称私になつてるよー。

だよね。そうだよね。たくさん平行世界があつたとしても、純血嫡男のドラコくんが癒者で、そんなでもってマグルで医療免許もってるなんてそんなチート、僕のドラコでしかないよね！！！！

いやいやいや、ちよつとまって、じゃああれらは？

僕に笑いかけて、抱きしめて怒って一緒に寝たドラコは僕のドラコってこと？プレイバック。めっちゃもつたいたいことした。思い出せあの時のドラコを思い出せあの幸福を……。

僕が必死にあの時そのときのことを考えていると、またもやドラコが爆弾発言をする。

「なあ、ハリー。先に死んだのはどっちだ」

「それを君がいう？ドラコだよ」

「だよね。私も私だと記憶している。たしかホグズミードでやられたんだよな」

「……そこか。」

そこか。ついもらった言葉。ホグズミードが彼の記憶の彼の最後なのか。僕はその言葉を自分の中で繰り返す。覚えていないのも無理はない。それならば、それで話を通すまでだ。

そのあとは、お互い気づいてたら、この一年間もすこしスムーズに動いていたのではないか(なにせstage1だ。)とか、自分たちの前の世では考えられない関係性やあれやこれを話した。途中あいつが「なかったことにしよう」と提案するから。何言ってるんだコイツ。と本気で思った。こっちの気持ち知ってるの？あ、知らないのかこいつ知る前に死んだから。

「なかったことにしないよ。僕はドラコのが好きだから」
「はい？」

照れてる。どうせ、友情のことだと思ってるんだろうな。こいつ、友情に飢えてるから。しばらくはそれでいい。しばらくは、ね。来年はジニーもくるし再来年はアストリアが来る。そしてダンスパーティーだ。本当どうしてくれようか。

目の前のドラコがぼくのドラコなら、違うアプローチが必要になる。計画変更が余儀なくされる。君がぼくのドラコじゃないなら、大親友という立場でもいいかなって思ってた。だけどそうじゃない。これは正真正銘人生コンテニューだ。

僕は、ストレスフリーで帰りの汽車にのりこんだ。ドラコが検知不可呪文をかけたから、僕は防音呪文と耳塞ぎをかける。ゆっくりと話す間もなかったから、ここで二人の記憶の帳尻合わせだ。ドビーが散々だったことを思い出し、彼には再三どうかしとけよ。と伝えておいた。

そうしたら来たよ。また爆弾発言
弟がいる。だと？しかも養子にいつているだと？

思考回路はショート寸前。叫ぶ脳内指令さえだせなかったぞ？
笑ってんじゃないドラコ！

そうか、エイブリー家が。

なるほど、彼の弟が前回のドラコポジション。また計画をかえなければな。と、ぼくの脳内は忙しかった。だから、気づかなかったのだ。こんなギリギリにいうドラコが悪いと今度八つ当たりをしておこう。ドビーがドビーではなく。違う屋敷しもべ妖精の可能性を。

N e x t 【秘密の部屋編】

秘密の部屋編

1—1

一話

ホグワーツ魔法学校一年生。

前の世でさんざんに聞かされた（読まされた）彼らの大冒険の一部を体験した。一部というのが癩であるが（現にノーバート事件は仲間はずれにされたし）まあ、そういうことだろう。例の：いや、ヴォルデモートにも遭遇し、これから僕たち、もといハリーが戦っていく理不尽さを痛感したところだ。

それにしても、とドラコはため息を落とす。

彼が僕の知っている彼だったなんて……。夏休みにはいつて一度もあっていないし連絡も取れていないが、ふとしたとき思い出すのはハリーのことばかりだった。あのハリーじゃないと思っていたから甘えてみせし、甘やかしたのに。思い出すたびに羞恥でいっぱいになる。向こうもむこうで、恥ずかしいはずだろうと思ってみても、ハリー自身はそれをそれとして楽しんでいるからまた腹が立つ。理解できない。

ドラコは夏休みの宿題を始まって五日でおわらせていた。残りの時間は、色々と研究やら準備やらにあてようと思っていたのだ。というわけで in ウィーズリー家。

「ドラコ……。ノート写させてください」
「断る」

目の前で、うんうん唸っている友人様にちらりと目をやるが、すぐ

に自分の作業に戻る。

「わかんないんだよー！」

「わからないわけあるか。お前のそれは面倒くさくなっているだけだ。教えてください。ではなく写させてと懇願しているところが、証拠だ。まだまだ夏休みはある。ギリギリまでは努力するんだな」

「だって、せっかくドラコ遊びに来てるのに、学校では寮が違うから一緒にいけないのに。僕だって早く終わらせて、ドラコと遊びたい」

ロンは、わざと「ドラコと」を強調してお願いする。この友人様が「友達」に弱いことはこの一年間で重々に知った。半分本気で半分嘘だ。さっさと宿題を終わらせて遊びたい。海に行きたい山に行きたい筈に乗りたい！そうおもいながら、うなだれてみせる。

「はー」と盛大なため息が聞こえたかと思うと、ロンに教科書の束が投げつけられた。

「宿題に関わるところに付箋を貼っている。探す手間が省けるだろう。ないよりは早く宿題が終わるはずだ」

「いったああああああ。痛いー！いたいけどありがとうドラコー！」

ふん。と鼻を鳴らし、また作業に戻る。大概自分も甘い。クラブとゴイルほど手がかからないせいか、逆に甘やかしてしまう。ロンにこんなにしてやる僕なんて以前の自分がいたら泣きながら気絶してしまうかもしれない。「違い」というのは恐ろしいものだ。

「そういえばドラコ。一生懸命に何してるの」

「ん？これか。携帯電話をもつと使いやすくなるかなと思って試しているんだ」

「ああ！これとても便利だったよね！寮が違っても連絡取り合えるし」

「そうなんだが、ハリーがいいなあと言っていてな。もともとマグルが使用する携帯電話を活用しているとはいえ、ホグワーツではマグルとしての携帯は使えない。さらに言うとなんかの家でも君の家でも、そういう用途としては使えない。ハーマイオニーとハリー間では使えるだろうがな。」

「うん。それでドラコが魔法界でも使えるように、なんだったっけ『でんぱ』がなくても使えるように改良したんだよね」

ロンは言い慣れない単語を一生懸命に絞りだす。

「改良したというか、機能を追加した。が正確だな。一方が打ち込んだものをペアとなる機会に表すという魔法を応用したんだ。マグルのこの機械のおかげでストックができるのが、今までとは違う良さだな。まあ、それでだ。一体一だけでなく複数でやり取りができるようにして、僕たちがそれぞれ持てば連絡が取りやすいんじゃないかな。と思っっているんだ」

「すごいねーさすがドラコー」

素直に感心する。目の前の友人はとても賢い。

「それが、うまくいかない。親になる人が、ほかの人にいつぺんに伝える。というふうには、機能をひとつに固定することはできるが、うむむ。」

やはり、マグルのつかう「電波」とは、不可思議だ。見えなくせ

に繋がっている。両面鏡も遠くにいる人と確認ができるが、持ち運ぶ「ポータブル」には即さない。我々は、「なんでも」でいるかわりに「簡単に」を求めてこなかった。しかし、マグルは「なんでも」できないからこそ、目の前の事象を「簡単に」「効率よく」していく方法を身につけてきたんだろう。本当に実感する。ちなみに「なんでも」という言葉選びについては笑うところである。

「そういえば、ハリーに手紙送っても一枚も返ってきてない」

ああ。とドラコは適当な返事をする。「ドラコはハリーが心配じゃないの！」と声が聞こえるが、心配もなにもどうせあの糞みたいな一家に止められているか、どっかの屋敷しもべ妖精に邪魔されているかだろう。

屋敷しもべ妖精といえば、ドビーには一応「あのハリーポッターに余計なことをするな。あいつはホグワーツにいる時が一番の幸せらしい」というようなことを色んな角度・言い方で伝えておいた。これでとりあえず僕のできることはしたし、ハリーに怒られる筋合いはない。というとりあえずのアクションだ。

むしろ「坊ちゃんは何を言っておられるの？」と怪訝な顔をされた。「だよな。」

僕が僕でなく僕であることがなによりもの証拠だろう。

どんまいハリー。うちのドビーじゃないどっかの屋敷しもべ妖精に今頃邪魔されているんだろうな。エイブリーの家のしもべ妖精かな。これに関しては助ける必要はないと無視を決めている。命に関するわけじゃないし。どうせなんとかするんだ。あいつなら。

「それに、今日はハリーの誕生日だろ。ドラコプレゼント何送った？」
「送ってない」

「は!?何で!こわい気持ち悪い!」

「何で送ってないことが、『こわい』『気持ち悪い』になるんだ!」

ドラコは作業した手をとめてロンに向く!「心外だ」とばかりに声を荒らげてしまった」

「君がハリーに送っていないなんて、僕知ってるんだからな君がクリスマスに何を送ったかなんて。いい加減にしろよ。ハリーをそっちの道に引き込むな!」

「そっちの道とはなんだ。そっちとは!ただ僕はあいつにとっての完璧な友人でいたいだけだ!」

「ああああああもおおおおおそういうところおおおおお」

ロンは髪をぐしゃぐしゃとかき乱す。そういうとこだよそういうところ!」

「プレゼントは手渡ししようと思っているだけだ。」

どうせ送ったところでスムーズにあいつの手には届かない。だってら当日よりも直接渡してやろうと思ったただけだ。いまだぶつぶつぶやくロンに「さっさと宿題を終わらせろ」と放ち作業をはじめめる。

階下でバタバタと騒がしい音が聞こえる。

ああ、この家の主が帰ってきたのだな。

父上とアーサーは未だに仲が悪い。僕がここに遊びに来ることも文句を言わないし、ロンがマルフォイのお屋敷に遊びに来ることも文句を言わないから、まあ子どもにまで自分たちの不仲を押し付けるつもりはないのだろう。と違って好き勝手させてもらっている。まあ好き勝手といっても、父上が「許す」であろう範囲内と「許さな

「い」のラインはきつちりと見分けているつもりだ。
それこそ、こんなロンなんか心配されるようなことはないのだ。

「やあ！ドラコ」

「うちのロンの面倒を見るのは大変だろう！」

『ご苦労！』

夕方、宿題を隅におき、二人でおやつタイムを楽しんでいたら後ろから声をかけられる。フレッドとジョージだ。

「いや、まあもうずっとなんで。大丈夫です」

「ドラコ！そこは謙遜するところだぞ！」

「君相手に謙遜：全く不似合いな言葉の組み合わせだな」

「ひどい！」

フレッドとジョージはニタニタと笑っている。おや、これはいつものお二人とは違う。度をすぎたいはずらを考えている時のお二人だ。「ふふふ」と気持ち悪い笑みを携えたままフレッドはドラコの右に、ジョージはドラコの左に構えて顔を突き合わせた。

「なあ。ドラコ、今夜面白いことをするんだけど」

「面白い？最高では？兄弟。」

「そうさな最高なことさ兄弟」

『ともに来ないか』

「兄さん！ドラコは参加しないよ！そう話しただろ！」

二人がドラコをけしかけているのにきづきロンは叫ぶ。だからこいつをそういうのに巻き込みたくないんだって！

「そうはいつでもロニー。こんな楽しいことは共有しなくちや！」
「そうそうー！というより、ドラコがいたら、何か起きててももみ消してくれそう！」

二人はサムズアップをしながらいい顔で答える。やはりまたよろしくないことを企んでいたな。とドラコはあきれるも、誘われたことが、ちよつとした冒険心と嬉しさを感じた。

「お兄様方、うれしいお誘いですが。僕は今晚夕食前に母上と父上の待つ家にかえらなければなりません。こちらにお邪魔している間毎日のように母上から手紙が届くのですよ。もともと今日帰る予定にしておりましたし、それを伸ばすのは…」

とても残念だ。というふうに見せる。
こういう表情回しが大切なのだ。今後のためにも。

若干の後ろ指を惹かれながらも実家にかえるドラコ。後ろ髪を引かれるってなんだ。向こうの家の方がいいみたいな表現だ。思いながらもそう思ってしまったのだから仕方がない。母上に「ただいま」のキスをして、自室に戻る。無駄に広い自分の部屋とこの屋敷が隠れ穴と真逆であることに、ある種の面白さを感じる。

父上が返ってきた気配がして、身支度を整える。

どこにも粗相がないことを確認し、階下に降りた。

「父上、ただいま戻りました。」

「ドラコ、久しぶりだな。」

「はい。父上に『久しぶり』と言わせてしまったこと、申し訳なく思います。」

それからは家族の団欒だ。団欒という言葉の意味を辞書で引き直したくなるようなものではあるが、それは彼らが不器用なだけだということを知っている。

「そういえば、ドラコ。友人はこの家にはよばないのか」

「友人ですか。ロンなら僕があちらに行く前にこちらに遊びにきましたか」

父は心底「どうでもいい」という顔で目をそらす。

「そちらの赤髪の少年ではなく。ドラコが新しく友人になったモノの方だ。」

「ハリーですか？」

「ああ。」

「ハリーは、マグルの世界で夏を過ごすので連絡手段がないのです。あの家で過ごすのが苦痛だと本人は言っていたので、本当に不安です。僕の友人が『家族』に虐げられているかと思うと……。けれどもあそこが『保護者殿』の家のようで……。」

ドラコは心の底からかわいそうだという振りをする。僕の大切な友人がかわいそうだという演出を試みせるのだ。父上は騙せなくても、お優しい母上なら「同情」ぐらいしてくださるだろう。

「まあドラコ。あなたが心を痛める必要なんて。そうね、今度彼を連れてきてくださいな。その辛い分、たくさんこの家で不自由なく過ごしてもらいましょう」

「母上！ハリーも喜ぶと思います！父上！次のクリスマス休暇に連れてきてもよろしいでしょうか。」

「勿論だ。私もその友人に会ってみたいと思っている。」

やはり、父上は母上には甘い。

言質はとれたぞ。と心の中でつぶやく。

それを抜きにしても、今回の父上は甘い気がする。最初からハリーをこの家に呼ぶことに積極的な姿勢だ。どこかに死喰人を潜ませてハリーを殺すつもりか……。などと邪推をしてしまう。もしそうだとしたら、4年生のヴォルデモート復活まではまだ、大丈夫なはずだ。父上は、ヴォルデモートが復活する前の期間はどっちつかずの態度を取っていたはずだ。それまでに、僕たちの家族とハリーが少しでも親交を深めることができれば……

「そうだ。ドラコ。ホグワーツから手紙が届いていた。ダイアゴン横丁には、水曜日に買い物にでかける。そのつもりで用意をしておきなさい。」

「水曜日、ですか。わかりました。」

水曜日、ロンたちもこの日だと言っていた。

つまりあの「フローリツシユアンドブロッツシユ書店」での遭遇イベントが行われるわけか。

「ああ。あとサジツタも一緒だ。来年新入生だ。よく目をかけてやるように」

なるほど。その日が我が弟のお披露目式になるわけだ。

ハリーがどんな反応をするか、すこし想像して、「疲れた」とつぶやいてしまった。

「兄様。お久しぶりです。昨年一年はお会いできなくて、非常に寂しくありません」

目の前で恭しく礼をする少年。サジツタ・エイブリー。正真正銘の弟である。彼が5・6歳ぐらいの時にエイブリー家に養子にいつてからも、機会があるごとに遊び、交流をしている。

サジツタは自分とは似ていない。顔立ちは母親のナルシツサ似で笑った顔なんて母親と瓜二つだ。しかし、彼が僕たち本当の家族とい

ると目立つことは間違いないだろう。なぜなら、サジーはブロンドではない、美しい黒髪をしていた。ナルシツサの兄弟も黒髪であるからなにも不思議なことはないだろう。肩につくつかつかないかのゆるくウェーブがかった長い髪を結ぶことなくそのまま流している。左側の髪はピンでとめて耳にかけ、表情がはつきりと見えるようになっていた。

待ち合わせていた店の前でマルフォイ家とエイブリー家は合流する。「私たちはそれぞれやりたいことがあるから」と二人で先にフロリッツシュ・アンド・ブロッツ書店で必要なものを購入しておきなさいといわれ、二人で向かう。

「兄様はスリザリンですよね。ああいえ、スリザリン以外に所属する考えなど持つてはおりません。私もスリザリンであるとは疑っていません。楽しみです。」

「まあそうだろうな。仲間思いで楽しいところだ」

「素敵ですね！そういうえば兄様はあのハリー・ポッターとご友人になられたのだとか。あの生き残った男の子がスリザリンだと聞いて僕は驚きと歓喜で胸がいっぱいになりました。そして、しっかりとご友人の座をいただいていらつしやる兄様には尊敬です。」

「サジッタ。そういう言い方はよしなさい。ハリーとは友人だ、そういう利害のようなもので友人になったのではない。」

サジッタは横にいる兄の顔をみてにっこりと笑う。

「兄様。体面を取り繕わなくてもいいのです。大丈夫です。僕はハリー様には真実はお伝えしません。兄様の邪魔をする気はありません。」

ダメだ。やはり通じない。昔から怪しかったが、サジーはいわゆる

「古き良き名家」の子息のような考え方を持っている。本当にスリザリン向きだ。家のために、自分のために、純血のために。」

「そういえば兄様はまだあの赤毛とつきあっているのですか」

「赤毛ではないロン・ウィーズリーという名前がある。何度も伝えているだろう。」

「申し訳ありません。聖28一族であろうと興味ない人間の名前を覚えることほど苦痛なことではなくて……どうせ兄様も時期に彼とは縁を切られるわけですし、覚える必要はありませんよね。」

にこにこ失礼なことをいうものだ。と、ため息をつく。これはなんだろうあきれているのか、感心しているのか……。とりあえず、このあとの書店でのことを考えると気が重い。サジーは、気は荒くないから乱闘のようなことにはならないだろう。が、ハリーは……どうだろうか。気は荒くはないけど気が短い。ロンなんていつも口論で負けている。ああ、そうだ、サジーとロンが久しぶりにあう。

極力二人を会わせないでいこう。ロンとサジーのことを思うと、ハリーとサジーが会うのはなんの問題もない気がしていききた。意外と二人ひょうひょうと皮肉でも言い合うかも知れない。サジーはハリーをないがしろにすることはないだろうし、表面的にはうまくいく気もしてくる。ああ、ハリーはハリーで好きにやってくれ！

久しぶりにハリーに会うというのに、なぜ素直に「楽しめないのか」どうしてこういう運命なのかと、自身を呪ってしまおうのだった。

二話

とりあえず連絡だけはしておくか、と、サジーから少し距離をとってロンに連絡を入れておく。

【サジツタと今から本屋へ向かう。鉢合わせないように気をつけろ。会っても喧嘩なんてするなよ】

携帯をポケットに戻そうとすると微かな振動がある。向こうも一度みていたのかすぐに返事が来たようで、そこには「子供扱いするな」とだけ書かれていた。

子供扱いするなというなら子供っぽさをみせるんじゃない。とあきれてみるが、当の本人が目の前にいるわけではない。「はあ」とため息をついて、そのままポケットの中に片付けた。

「ええと。失礼。ドナルド・ウィーズリー？」

「ロナウド・ウィーズリーだ。」

「失礼。噛みました。」

につこりと、サジーは謝罪をする。それに対し、「わざとだ！」と文句をいうロンに、あきれ以外のため息が出てこない。この件何度目だ。もうサジーがロンの名前を覚える気がないのなんてわかっているだろう。適当にあしらえばいいのに、毎回毎回ご丁寧に怒るからサジーが付け上がるんだろう。

「ええと。ゴン・フィズさん？そんなに大量の本を買われるなんてたいへん勉強熱心でいらっしやるのですね。尊敬します。兄上の手を煩わせないと宿題ができない人間とは大違いでいらっしやる。」

「ロン・ウィーズリーだ。かすりもしてないぞ。記憶力の悪いやつには到底学校の勉強にはついてこれないだろうね。ああ、僕が教えてやるのか？そのかわいそうなおつむに」

面倒くさい。うるさい。もうこの場から離れてもいいかな。逃げようかな。別にここに僕が居る必要はないんじゃないかな。よし、無意味な空間で無意味な時間を過ごす必要はない。さっさと出て、外で待とう。そう決めて出入り口へ向かう。するゝ出入り口のドアのそばにハリーがいた。

「久しぶりだね。ドラコ」

「うわ。ああ。ひさしぶりだなハリー」

とても、とてもとても笑顔のハリーがそこにいました。

「いつから？」

「ずっといたよ。君が気づいたらどうしてやろうか思案していたところ」

「普通に声かければいいだろう。」

それじゃ面白くないじゃん。そういつて微笑むハリーが可愛い。

冤罪だ！やしきしもベ妖精については冤罪だ！僕にはどうしようもなかったんだ！隠れ穴から屋敷に戻った次の日にロンから手紙が届いた。ハリーをマグルのあの家に迎えにいったから今は隠れ穴にいるんだと。「迎えにいった」というところに少しの恐怖を感じながら読み進めるとそこには「ご愁傷様」としかいいようのない方法と、ハリーの状況が書かれていた。

それを受け取った僕はすぐさまハリーに手紙を送った。友人らしい色々のことと、この休み中の進捗状況について、そしてドビーのことなどなど。自分でも気持ち悪い分量の手紙になっていたことに気づいていたが、そのまま送った。

そしてハリーから返ってきた手紙は「おぼえておけよ」の一言のみだったのだ。ハリーに会うのが楽しみではない理由の一つがそれだった。

「色々と誤解がある。手紙でも伝えただろう

「君の言ったとおり、ドビーにも再三伝えておいた。

「日記についても

「ストップ」

自分の無実を証明しようと言葉を紡ぐドラコにハリーは待ったをかけた。流れるようにマフリアートをかけ「重要なことはこのあと話そう。時間ある？」と。なければつくればいいだけだ。「Yes」とだけ答えると、その術は解かれる。いやいや未成年だろ。ナチュラルに魔法使うなよ。抜け技使うなよ。僕もときどきするけど。

「ドラコ。僕が『おぼえておけよ』と言った理由について、君が誤解をしていることはわかりました。」

「なぜ敬語なんだ。そして違うのか。」

「ええ。違います」

「だから……」

「きみは僕に『happy Birthday』も言えないのか。」

先ほど以上の満面の笑みで、

「僕はね、夏休み。あのダーズリーの家に帰ってから何もかもを隠されたんだ。階段下の物置にね。ヘドウィグもだよ。辛かったし悲しかったな。でも、僕は頑張れる気がしてたんだ。なぜなら、君からの手紙がくると思っていたからね。」

「いや、ロンが……」

「僕は君に『住所』を教えた。どうせ手紙は毎日僕が確認するんだ。ロンたちには『住所』は教えてない」

なるほど、なぜ帰り道に僕に住所を伝えたのかわかった。正直あのときなぜ住所を僕を教えるのかわからず、あのメモはローブの中に入ったままだ。って言われなければわかるわけないだろう！僕は純血で、あの家で育ってるんだ。あたりまえのようにマグルの方法が思いつくなと思うな！

「前の君。マグル式で手紙のやり取りを、普通にしてたよね。やり方がわからなかったとは言わせないよ」

これは、反論したほうが馬鹿をみるやつだ。素直に謝る方がいい：でも、これ僕が謝る案件か？ 不必要な謝罪は、必要な時もあるとは知っているが、なんだかここで謝罪するのは癪だ。というより、実は今脳内が忙しい。この一年間とキャラクター違うじゃないか。猫か

ぶるのやめたのか。という叫びと、僕からバースデーカードが届かなくて怒っているのか？という嬉しさもある。目の前のハリーにどっちの対応でいけばいいかわからないのだ。

なんの反論もしない僕の様子をみて、ハリーは、笑顔のまま僕の隣に来て腕をからませる。

「お願い事、ひとつ聞いて。ね」「ずるいなー！」

あはは。とハリーが笑う。「君意外とアルに弱かったよね！スコピウスと一緒にあいつのことも甘やかしてた！これは今後も使おうっと」それは結構。くそう。悔しい。

「そういうえば、僕、すでにギロルデイ済み。相変わらずの男だったよ」「ギロルデイ済って…まあ何があったのかわかる明確な表現…だな」

「そう。だから僕とても疲れています。さつさと次に行きませんか？」

「ああ、ちよつと待ってくれ。」

そういえば、とサジーを目で探すといまだロンと一緒にいる姿を見かける。そばには妹御のジネブラ・ウィーズリーも一緒にいた。「見た目は可愛いのに」と昔サジーがつぶやいたのを思い出し、同学年同士仲良くしろよ。と、微笑む。すると、サジーと目が合い、こちらにやってくるのがわかった。

とりあえず、顔合わせはしておくか。「このこは僕の弟のサジツタ・エイブリー。訳合ってファミリーネームは違うがな」

サジーに「友人のハリーポッターだ。」と伝えると、彼は恭しく頭をさげ自己紹介をした。

「初めまして。ハリー・ポッター様。お会いできて光栄です。僕はサジッタ・エイブリーといいます。以後お見知りおきを」

「僕の名前に『様』はつかないよ。ハリーってよんでくれるかな」

「はい。では、私のことは気軽に、サジーとお呼び下さい。兄様しか私のことはサジーと呼ばないのでそうしていただけるとうれいす。」

「オーケイわかった。サジー。よろしく」

そういつてハリーは握手を求める。サジーも「ありがとうございます」と満面の笑みでその手を取った。それから、また寮のことや学校生活について二人は簡単に話を交わす。

「そういえばサジーもロンと仲がいいの？ドラコとロンが仲いいから君の仲がいいんだろうね」

サジーからきつい睨みが僕に飛んでくる。珍しい、感情を顕にするなんて。つまり、わざとか。

「ハリー。失礼ですが、ロンというのがどなたを指すのか私にはわかりかねます。もしかしてですが、あなたも兄様と同じでウィーズリーと仲が良いので？」

「……ロン・ウィーズリーのことかな？仲がいいよ」

サジーは心底困ったような様子でハリーをみるが、ハリーはいつものどおりの表情で返す。

「そうですか。ハリーも兄様と同じで奇特な感覚な持ち主でいらっしやるんですね。僕から言わせればあのようなものとお付き合いなさるのは一度考えられたほうがよろしいかと。友人というものは子

供が考える以上に価値があり、意味があるのです。あのようなものと一緒にになると、ご自身の価値が下がります。付き合う友人はよく考えられたほうがいい。」

どっかで聞いたことがあるような内容のサジューの言葉に僕は胸を痛めつけられる。ハリーが何を考えているのか分かる気がする。やめる。黒歴史をリアルタイムでみせつけるのはやめてくれサジッタ！

ハリーがなにかを言う前に、と自分が先に返事をする。

「サジュー。それは遠まわしにこの兄のことも非難し、貶しているのか。」

「……」

「サジッタ。僕は何度も言ってる。ロンは僕の友人だ。「友人によって価値が下がる」というのなら、おまえがロンのことを馬鹿にするたび、それは僕のことを馬鹿にしているのと同義だ。」

一瞬目をそらし暗い顔をするが、すぐに顔をあげて笑顔になる。

「いいえ。兄様。そのように勘違いをさせてしまったこと、深くお詫びいたします。あのようなものご友人をされるなんていう「慈善活動」は必要ではないかと思っただけです。どんな人にも手を差し伸べられる兄様は素敵ですが、そのようなことをなされなくても十分に兄様は価値のある人物です。」

「慈善?」

「ええ。」

そうでしょう。とサジッタは首をかしげる。

こわい。僕はこうではなかった。前の僕は正直、父が絶対でヒーローで純血主義で、差別や偏見にまみれた考えをもっていた。いいわけだが、そういう環境だったのだ。あの戦いが終わったあと、色々と考えさせられたし、アストリアとも何度もそういった話をした。自分が間違っていたとは正直いいたくないが「偏っていた」ことにはきづき、スコープピウスはそうならないように「柔軟」に二人でそだてたのだ。サジツタも考えが固まらないよう、以前の僕のようにならないよう何度も考えが固まらないよう「声かけ」や「話」をしてきたのだ。それでもこうなのか。それは彼の性質なのかそれとも……。

「もういい。僕はこのままハリーとお話をしてかえる。お前は、買ったものをもって父上たちのところへ戻れ。今すぐにだ。」
「……わかりました」

「サイコパスかな……!!!?!」
「!!!?!」

二人でカフェにはいり、コーヒーとカフェラテを注文する。ちなみにここはダイアゴン横丁から出て目の前にあるマグルの店だ。漏れ鍋までロンやハーマイオニーたちと一緒に戻ったのだが、僕とハリーはそのまま裏からでてマグルの街にでたのだ。道中ハーマイオニーが「あなたの弟っておもしろいのねえ」と言っていて耳を疑った。たぶんそれ僕の弟じゃない。ハリーと僕は一言も会話を交わさなかった。

席に着き、お互いに無言で検知不可呪文と防音呪文をかける。最後に万が一の場合の耳塞ぎの呪文。そうして準備が終わった瞬間のハ

リーの叫びだった。

「君の弟サイコパスかな!？」

「否定はしない」

「性格、前の君のまんまだって? 安心していいよ君! 気にすることはない! ましたったよきみは! 可愛げがあった!」

「それは、喜んでいいのか疑問だな。そしてサジツタ可愛いだろう」

「見た目はね! みためは、スネイク先生の幼い頃みたいな可愛さだったね! 君に似た顔でね! 君のその美しいブロンドときれいなアイスグレーの瞳とはまた違ったね! 漆黒の美しさがそこにあった。あつたさ。けどなんだあの子!」

「正直僕にもなぜあんなったのか検討つかないんだ」

「そう……ちよつとドラコじつとしてて!」

そう叫ばれて、つい身をこわばらせる。目の前のハリーは「はああああ」と眉間に皺をよせながら僕の顔を見つめていた。

「よし、落ち着いた」

「なぜだ!？」

君の弟のことはもういい。「君よりは賢そうでサイコパスで扱いにくそうなのはよくわかった」「またも失礼だな?」「ああごめん以前の当時の君よりって意味だ。きみは扱いやすかった。今思えば」「もう、何も言うまい。」

それからは、この会わない期間にお互いにあつたことを近況報告していた。ハリーの家にきたしもべ妖精は「ビビ」と名乗ったらしい。ああやはりそれはエイブリー家のしもべ妖精である。そうとなれば、

やはりあの日記はエイブリー家にあり、それを耳にしたビビがハリーに危険が及ばぬようにと警告をしにきた。ということだろうか。

そうだとすると、そうだとしても。先ほどの書店にはあれから父上もエイブリー家と当主。アルフィ・エイブリーも現れなかった。つまり「リドルの日記」イベントは発生しなかったとうことである。

「うーん。まあエイブリー家からどこか誰かの手にはわたっているには違いないだろうね」

「そうだな。今回はジニーではない誰かが入手してしまったっていうことか」

めんどくさい。ハリーため息を盛大にため息をつく。

「ぶっちゃけリドルの日記って優先度低くない？」

「いやいや低くないだろう。分霊箱で破壊は必須だ。バジリスクの毒も採取できれば色々と便利だろうし。というよりバジリスクの被害は避けるべきだ」

「ちっ」

「舌打ちをするな舌打ちを」

あんなに可愛かったハリーはどこに行つたのやら。ホグワーツに行けばひと目もあるし、素直でかわいいハリーに戻るのかなと淡い期待を持つ。いや、素直でかわいいハリーも正直あのハリーだと思うと気持ち悪いのだから！しかし！そういうときは「これはアルバス」と心の中で唱えるだけでなんか全てが解決する気がする！

ガッツポーズを机の下で構えると、ハリーがジト目でこちらを見ていた。

「ねえドラコ。僕といるときにナチュラルに閉心術使うのやめない？」

「ああ、すまん。もうこれは癖だ。って勝手に閉心術使うな」

「ああ、ごめん。もうこれは癖」

「閉心術以上にやつかいな癖だな！」

じつと二人で顔を見合わせたかとおもうとお互いに吹き出す。一年間知らなかったせいでできなかった会話がこんなにも楽しい。充実している。だから、僕は人生をやり直しに来たんだ。うだうだ悩まずにこの関係性を楽しんでいればいいのだ。

「そういえば、ハリー。僕の父上が君にあいたがっている。」

「僕に？」

「ああ。母上も楽しみにしててな、クリスマス休暇には僕の家に来るといい」

「何も起きなければね」

「何を隠している」

「何も。何があつたかなあと記憶を掘り起こしている。」

そういいながら、彼はカフェラテに大量の砂糖を追加している。だから、そういうのやめろ。

「そういえば、父上がハリーに対して寛容な気がする。」

「スリザリンだから？」

「それはあるかもしれないが、君は僕たちにとっては半純血だし、ヴォルデモートを表向き倒した子で死喰人の敵みたいなものだろう」

「ああ。だからだろう」

「そりゃ、父上は服従の呪文をかけられたとかいって、どっちつかずの

態度だったが」

「僕がグリフィンドールに組み分けられるまで、死喰人たちの間でな
んて言われていたか、君が知らない訳無いだろう」

ああ、合点がいった。そういえばそうだった。「闇の魔法使い」「第
二のヴォルデモート」と噂されていたんだった。それが、グリフィン
ドールに組み分けられて、ウィーズリーとマグルと仲良くなり、ダン
ブルドア陣営に入っていたから、「ヴォルデモート」の敵になったん
だ。「死ぬべきときに死ぬことができるように」

「まあつまり僕がスリザリンになったってことはそういうこと！あ
いづらにとってはね！」

「そして、父上は以前ヴォルデモートにしたように、今度は君に取り
入って世界を別の角度から手に入れようとしているのか」
「言い切れないけど」

うーん。まあなんにせよ。僕がドラコのご家族と仲良くすること
に問題はないから、今度遊びに行かせてよ。と、「屋敷によばないほう
がいいかもしれない」という僕の考えを汲み取ったかのような発言に
「かなわないな」と思う反面「悔しさ」を感じる。

「あ、あと僕の誕生日のお願いの話！『マンドレイク回復薬』の制作を
お願いいたします！」

「ふむ」

「あのとき、マンドレイクが手に入らなくてずっと石化してたからさ。
作っとけばいいじゃんって、できるだろう？」

「誰にもを言っているんだ。余裕だ。」

「さっすがドラコー！」

「というより、もう作ってある」

ニヤリと、つい笑みがこぼれる。「どうだ」

ハリーは一瞬目をぱちくりさせたあと、「最高だよ！」とハイタッチを求めてきた。

やられてばっかの自分じゃ、悔しいばかりだからな。せめて得意分野では優位にたたせてくれ。

第三話

それから、夏休みはすぐに終わった。何度か遊びに行ったが、その度に彼らの宿題を見ていただけだった。ハリーは教科書類を保護者殿たちに没収されていたから仕方がないと言い張っていたが、あんなの中身はいい大人であるハリーならすぐに終わる内容である。つまり、彼らは「僕がいないとき」に「全力で遊び」、「僕が顔をだしたとき」に「全力で僕を頼った」というだけの話である。ていどのいい家庭教師扱いだった。

なんだか腹が立ったので、あの二人には内緒でハーマイオニーと勉強会をしておいた。家には呼べないので、まあそれなりの裏ワザを使つて。なかなかずるいことをしている自覚はあったが、そつちがその気ならこつちは。という思いである。それについてはなかなか有意義な時間だった。(ギロルデイトークを除けば)(彼女がこんなにもあいつのことが好きなどいうことは、前の世では知らなかった。あの魔法大臣に上り詰めたハーマイオニーもそうだったのだろうか)

それ以外の日は、薬を作ったり勉強(マグルの本をハーマイオニーに頼んでおいた)を進めたりしてすごした。先日ハリーには「マンドレイク回復薬」を作っているといったが、実は大量には作れていない。なにせマンドレイクを手に入れるのが困難なのだ。伝手はないわけではないし、個人で動かせるお金もないわけではない。しかし、限界がある。そしてつい、せつかく手に入れたマンドレイク。別の薬を作るために使ってしまったのだ。「被害は最小限に抑えたほうがいい」といった自分が言えることではないが、まちさえすれば、どうせスプラウト先生が育てて、スネイプ教授が作るのである。僕が作っておくのはあくまでも「保険」だ。僕らの大切な「誰か」が石になってしまつたときのために。

さて、と僕はちらりと時計を見る。

予定調和はそう簡単に崩れてくれないか。

先ほどロンから、「遅刻ギリギリ。やばい」という焦った様子もない能天気な連絡がきていた。これはハリーから聞いていたとおりの情報だった。このままいくと、本当ギリギリについて“なぜか”開いていない“ただの柱”に激突して学校に来れなくなるだろう。

僕は目の前にすわる弟に「サジーのところのしもべ妖精。ビビをここによんでくれ」と頼んだ。

「何故でしょうか。私が呼んだところでこんなところまでこないと思いますけど」

「質問には答えない。ビビはくる。とりあえずよんでみてくれ」

サジーは首をかしげながら「ビビ。出てこれるか。」と呟いた。その瞬間、目の前によく知ったしもべ妖精のビビが現れ、こちらを訝しげに見つめていた。ビビはいつもこうだ。なぜか僕に少しの悪意をもっている。

サジーの方をむき「なんでしょうかサジツタ様」と恭しく頭をさげた。

「君、こんなところまで来れるんだね。兄様がビビに用があるんだって」

「ドラコ様が…」

「急に呼びたててすまない。そして説明も割愛するが、君が今“独断でしている行為”を全てやめてくれ」

「質問の意図がわかりかねます。そしてビビがドラコ様のご指示を聞くいわれはないのではと思います。」

「エイブリーのハウスエルフだからか」

「そうでございます。ドラコ様は、ドラコ様の家のしもべ妖精にお願いされれば良いのではないかと」

無駄に自分の意見を持つしもべ妖精だな。と、内心イライラする。しかし、こんなことでイライラしては、ハーマイオニー魔法大臣に叱られてしまう。そんな難しい注文してないだろう。だれも「カバの汗は本当にピンクなのか確かめてこい」とかそういう話はしていない。まあ、「嫌だ」という意思表示なのだろうな。まあ、アプローチの方法を帰るまでだ。

「サジー。そのしもべ妖精に『ドラコが言っている通りにしろ』と命令しろ」

「えっなぜです」

「なぜでもだ。お前が被害を被ることはない。兄様の言うとおりにしておけ」

サジーは、「えっでも」と悩んでみせたが、二度目の説得で「そういうことでしたら」とビビに命令をしてくれる。サジー。そういうことだぞお前。

ビビが「わかりましたサジツタ様」と返事すると同時に携帯が震える。みると「ホームには入れない!」という内容だった。

今、解除したから大丈夫だ。と送るよりも（なによりも誤解を招きそうだ）行ったほうが早いと判断し、二人に「ありがとう」と述べていそいで向かう。まだ時間はある。

「ドラコおおおおお!! 入れないんだ! 数回チャレンジしたけど!」

「おちつけロン。僕はこっちにこれたんだ。入れるはずだ」

「ハリーなんて一回ぶつかったら『ああ、あきらめようロン』とかわけ

わかんない悟り開いちゃって挑戦してくれないし、僕は何度も挑戦するから奇異の目で見られるし。」

あ、なんかその時のハリー想像できる。と思ってちらりと見る。あいつの顔は「だってそうでしょ」という顔をしていた。

「行きはよいよい帰りはこわい。だよ。ドラコ。たぶん向こう側にはいけないんじゃない?」

「あのくそ妖精が、僕のいうことを聞いてなかったらな。」

そう言いながら、ロンに再挑戦させる、

が、それは空振りに終わった。

勢いよく壁にぶち当たり中身はばらばら、カゴの名から飛び出してしまっていた。

隣でハリーが「君って意外と正直ものだよね」とつぶやいているのが聞こえた。かくして、僕たち三人は、9と4分の3番線から出発するホグワーツいき汽車に乗りそびれたのである。糞が…!あのくそ妖精めが……!」

駅のホームでは目立つ、ということ、ウィーズリー家の車の前。ちなみに先程まで「空飛ぶ車でいけばいいんじゃない!?」という口ののどんでも論を「馬鹿か」と一蹴し説き伏せたところである。

「とりあえず、ハリー。君の素敵なフクロウでホグワーツまで手紙を頼めるかい?」

「オーケイ？誰宛にする？」

「お好きにどうぞ」

ダブルドア一択だろう馬鹿者。という返事はグツと飲み込み大人の対応をする。こいつこの状況楽しんでるな。ひとまず、ここで待っておけば、この車を取りにロンのご両親が戻られるだろう。そのとき事情を説明して、そのあとは大人の対応に任せればいい。

「ドラコ。僕はお腹がすきました」

ウインクすなウインクを

「僕もお腹すいた…安心したらダメだね」

いやいや。さつき朝ごはん食べてきたんじゃないのか！

仕方ない。そういつて駅の構内にあるカフェに三人で向かう。ベーグルを二つとコーヒを三つ。ロンが「苦いのは無理！」と叫ぶからひとつだけホットミルクに変更。「君って本当甘やかし体質だよね。ごちになります！ウインク！」

くそう。かわいい腹が立つ。わかっててやってるハリーに腹が立つ。それに気づいたロンも寄ってきて二人で「ウインク！ウインク！」とパチリパチリとアピールしてきた。ああ、もうわかった！それは全部僕の奢りだ！覚えとけよ！

ベーグルと飲み物を携えて、車のあった場所に戻ると、すでにそこには車がありませんでしたとき。わかってたけどな!!!過去の僕のバカ野郎！

「ということなんです先生」

「何一つ吾輩には伝わってこなかったぞマルフォイ」

目の前にはセルブススネイプ教授。両隣にはロンとハリー。

あのあと結局僕たちは駅の外にある大きな木の下のベンチで時間を潰すことにした。ここで、どれぐらいまたなければならぬのか想像するだけでもため息しかでてこなかったがこればかりは仕方がない。

三人でベンチに腰掛け、飲み物を口にするふたりにベーグルを渡す。こぼすなよと焼きたくもない世話をやいていたら目の前に影ができた。顔をあげるとそこには全身を黒に包んだスリザリン寮の寮監であるセブルス・スネイプ教授が立っていた。

「先生！はやい！さすが！ありがとうございます！」

ハリーがスネイプ先生にかけよる。ベーグルを左手に、右手にコーヒーを持ったまま。スネイプ先生は鬱陶しそうにハリーから逃げていた。まじかよハリー。スネイプ先生にふくろう飛ばしたのか!? ロンがそこで固まっているぞ。

「指定された汽車にのらず、ブランチとはいいご身分ですな。」

誤解だ！誤解なんだ！「コーヒー飲みます？」「じゃないハリー！空気を読め！」

「ここが学校で、なおかつ新学期が始まっていたなら。吾輩は涙を浮かべながら自察からも減点をしてしまったいたのでしょうか。全く。不幸中の幸いである。」

興奮するハリーの首根っこを掴み（ロンは固まっているのでここには無害だ）僕の隣にたたせる。ハリーがどんな文面で彼に「ヘルプ」を求めたのかしらないが、一応説明をさせて欲しい。口を開きかけると大きなため息が聞こえて「詳しくは私の研究室で聞く」と言われた。目は「姿表しができる森までいくからはやく掴まれ」と訴えていた。

とまあそんなこんなでスネイプ先生の部屋in Hogwartsなのである。ちなみに、汽車の旅とくらべたら一瞬で移動してしまった僕たちは、誰もまだいないHogwartsにいる。フライングだ。誰もいないHogwartsの静けさに不安を抱えながらまた、地下室のその奥の教授の部屋：不安感しかない。そのなかで、この状況をハリーは説明する気なし。ロンは相変わらず触らぬ神に祟りなし固まっているだけだ。もうここは自分が説明するしかない。とやんわりと、曖昧に、適当に、事実だけ伝えたら「何一つ伝わってこない」である。

そりやそうだ。僕でもそう思う。

どうしたものか、と隣をみるとギョツとした。

ハリーがポロポロと涙をこぼしていたのだ。

「先生。僕たちはHogwartsにいてもいいんですよね？ホームに入れなくて、Hogwartsに拒否されたのかと不安になって…。焦って。退学とかじゃないですよ。なぜ入れなかったのでしょうか。僕はここにもいいのでしょうか。本当はダメなんじゃないんですか。僕たち荷物をまとめたほうがいいんでしょうか」

ぎゅつとローブを握り締め涙声でハリーはつぶやいていた。おいおいまてまて別に僕たち何も悪いことしていないだろう！と先生のほうをみると、狼狽えていた。それはもうわかりやすく顔に「どうしよう」とかかかっていた。わたわたとソファから立ち上がり隣の部屋に消えていく。

ハリーが僕の方に顔を向けてウインクをした。
この役者め。

隣の部屋から出てきたスネイプ先生は高級そうな茶菓子を籠に入れて「食べなさい。ルシウス先輩からいただいたものだが」と僕たちに差し出した。甘いな？ウィーズリーにも食べなさいと促している。そうとうテンパっているな？

「そんなことにはならない」「大丈夫だ」「事情は吾輩からダンブルドアに伝えておく」「お前たちが汽車に載っていないことは話題になっているかもしれないから、色んなことがおわるまでここにいなさい」など、饒舌に慰めてくれた。

しばらくたったあと。ドアのむこうからハーマイオニーとマクゴナガル先生がロンを迎えに来た。「心配したのよ」と言いながらもハーマイオニーは「男の子って仕方がない生き物なんだわ」と呆れたため息をついているのが聞こえた。

「結局僕たちはお咎めなしってことなのかな。」

「特に何も言われなかったということとはそういうことだろう。」

「僕たち前回罰則があつたのに！ということとはやはりマグルに見られてしまったことと暴れ柳につつこんだことが問題だったんだな。」

ハリーは顎に手をあてて、ふんふんと頷く。

「なんの話をしているんだ。」

「ん？だって重要だろ？どこからどこまで許されるのか把握しておくのは」

「なるほど。それもそうだ。」

深くは考えず、首肯しておく。まあ知っておくにこしたことはないな。

それにしても、今日は疲れた。明日から授業が始まる。勉強は好きだが、新学期初日からこんな問題に巻き込まれてしまうとなんだか先が思いやられてしまう。しっかり寝て明日に備えなければ。家で作ってきたラベンダーの香りのアトマイザーをベッドにひとふりする。少し、気持ちを落ち着かせてくれる薬だ。ハリーからもらったクリスマスプレゼントを参考にパフュームとは違うそれをつくってみたのだが…

「で、なぜそこにいる。」

「ん？」

「ここは僕のベッドで、君のベッドはあっちだが」

「え？」

「心底不思議そうな顔をするな！」

そこにハリーがいることはわかっていた。寝支度をしたあと、人のベッドに入り込んで本を読んでいたことにも気づいていた。気づい

ていて存在を無視し、そこにいると知っていて吹き付けたのだが……。その男は一向に自分のベッドに戻る気配を出さなかったのだ。

この男のせいで、自分が遠慮するのも癪なので、ため息だけついてそのままベッドに入る。「今日は疲れたから、ひとりで寝たくないだよね。」と呟いたあと「ノックス」と部屋を消灯する。「お休み」という声にお休みという声を返した。

部屋を出る前にスネイプ先生から渡された時間割。

変身学や薬草学、そしてDADAの授業も明日だった。

僕は隣で眠るハリーの体温を感じながら当初の目標を思い出す。

今年も変わらない。相手が僕の知っていたハリーならなおさらだ。後悔しない。

「なあ。ハリー」

「なに」と、すでに眠たそうな声が隣から聞こえて来る。

「ジニーは、君の、未来の奥方は相変わらず可愛らしいな

「まあ、『相変わらず』という表現はおかしいが

『かわいい』と思ったことは、前回はないからな

「今回は近くで、見ていてその魅力が、というか君が彼女を選んだ気持ちがあわかった気がする

「彼女が被害にあわないように、辛い目にあわないようにしよう

この休みのあだずつと考えていたことだった。ジニーとは幼い頃から顔見知りだ。前回は、彼女が入学したとき、つまりはこの年に「リ

ドルの日記」に翻弄し、被害者にも加害者にもなったらしい。

ハリーの愛する奥方。もしこれがアステリアだとおもうと、自分は耐えられない。未来を知っているのならなんついででも先回りして、被害が及ばないようにしたい。だから、お前が傷つかなくてもいいように、僕も惜しみなく協力してやる。

そんな決意を、ハリーに伝えてみたのだが、反応はなかった。

寝てしまったのか、と恥ずかしいような。でも、聞かれてなくてよかったのかもしれないなど、まぶたを閉じ僕は、眠ろうとする。

「未来の奥さんじゃなくて、前の僕の奥さんだし、彼女を守るのは、君にとっても当然のことだろう」

ハリーのその返事に「なるほど、それもそうだ」と思いながら、そのまま眠りについた。

その日は、午後の授業をおもうと気が重かった。

それでも、その日一日の授業は変わらない。スプラウト先生のマンドレイクの植え替えの授業ではマンドレイクを掠め取れないか少し考えたが、まあ数も決まっているし、マンドレイクがなくなったら大騒ぎになりかねないとグツと我慢をした。コガネムシをボタンに変える授業では、いつものごとくハリーと大量のボタンを作ってマクゴナガル先生に加点を頂いた。ハリーが一度だけコガネムシをゴキブリに変えようとしていたから、頭をひっぱたいておいた。本人は「このあとロックハートの顔に投げつけるとかナイスアイデアじゃない？」とか言っていたがよく考えろ。触らぬ悪魔にたたりなしだ。変に関わると面倒に巻き込まれるだけだ。

とまあ、それで聞くハリーじゃないよな。わかってたさ。クソみたいなミニテスト（ただの自己顕示欲のかたまりプリントだ。解く必要もない）をしている最中。彼が巡視のために通路を歩くたびにロックハートの体に花が咲いていった。最初は頭だったのだが、肩、そして背中へと。隣のハリーをみるとたいへん嬉しそうに彼を見ていたから、おおかた彼が犯人だろう。僕は、真っ白の答案用紙に答えを書き込む。「私の抱いている大きなのぞみは何か。————体中を花でいっぱいにして世界の女性を喜ばすこと」

「ねえ。あなたたち！ロックハート先生の授業がすでにあつたので

しよう!どうだった?やっぱり素晴らしかったのかしら?」

ハーマイオニーが嬉しそうに、声をかけてきたのは昼食のあとの中庭に出た時だった。隣でハリーが隣で「うわ。思い出した」と呟いたのが聞こえる。

「彼は、そうだね。うん。体からたくさん花を出していたよ。ねえドラコ」

「そうだったな。彼の抱いている密かなのぞみはきつと全身を花まみれにすることに違いないな」

あら、とハーマイオニーは僕たちを咎めるような声をだす。「いいこと、ロックハート先生

の」と、説明しようとしたとき、うしろから小さな少年に声をかけられた。

「あの、ぼく、コリン・クリービーといいます。」

あ、思い出した。ここでのひと騒動。たらりと汗が流れた気がする。ハリーはいい笑顔で「そう。コリン。素敵なカメラだね。」と自分からこえをかけていた。

「せっかくだから記念写真撮ろうよ。ここにるのはみんな僕の友達だよ。ドラコにロンにハーマイオニー。ささ集まって。ハイチーズ」

有無を言わさぬテンポで話を進めていく。一枚写真を撮ったかと思うと、彼にカメラを返し「さあ次の授業に遅れないように、いつてらしゃい!」と背中を押していた。後ろではロンが「あいつ、昨日談話室でずっとハリーの話をしてたんだぜ。ドラコ2号かと思ったも

ん。頑張つて声かけたのにかわいそうになあ。」とハーマイオニーと話していた。僕2号とはなんだ。失礼な。僕はストーカーではないぞ。君たちもいずれコリン・クリービーのしつこさにきづくさ。

「さて、僕たちは確認をしておかなければならないことがあると思うのだが」

「奇遇だね。僕もだ」

僕たちは寮の談話室に貼られた、今年度の「クイディッツ選手の選考会の連絡」をみながらつぶやいていた。普通は空きの枠がなければ、新たな選手として選ばれることはないのだろうが、スリザリンは違う。能力ある人間がそのふさわしいポジションを得ることが出来る。強きものが欲しいものを得る。それだけである。ここでいう「強い」というのは色んな意味を込めて、だが。

だから申請紙に書くだけで、あとはフリントとその他のよくわからない皆さんが独断と偏見で決める。正直それでいいのか。という感じだが、それでいいのだ。

「僕はシーカーはしない。ドラコ。君がシーカーをしなよ。」

「は？何を言っているんだ。君がシーカーをすべきだ。僕はチェイサーをする」

「チェイサー？」

ハリーは「なんでまた」と眉をひそめる。

「前は君がシーカーだったから同じシーカーを選んだんだ。今回はその必要がないし、ビーターも興味あるが、棍棒振り回すのは僕にあわない。クアツフル使ってスピード勝負で点数をいれてみたいね。」

楽しそうだろう。」

シーカーは切り札すぎる。荷が重い。楽しいが一試合で一度だけである。それならチエイサーで何度も繰り返し点数を稼ぐという楽しみ方をしてみたい。

「そっか。わかった！」

「じゃ、それでいこう。」

「うん！」

「で、君はなんでシーカーじゃないんだい？」

「え？」

「君がシーカーで僕がチエイサーだという話でまとまったと思っ
たんだが」

数日後、寮内に張り出された紙には以下のかかれていた。

『新任選手

ドラコ・マルフォイ……チエイサー

ハリー・ポッター……チエイサー

本日九時から練習をする。支度をして遅れずに来ること

』

「そうだったけ？一緒にチエイサーできたら楽しそうだなって思っ
て、チエイサー希望でだしちゃった」にこりと嫌な笑顔で僕をみる。
スリザリンが板に付いたようだな。はいはい。「九時ってそんなに時
間ないな。ハリー、急ごう。こういう自分勝手な上司は嫌われるな。」
「は？君に上司なんていたことないだろう」

練習場にでるとそこにはすでにフリントがグリフィンドールの皆
様と一触即発の展開を繰り広げていた。ロンとハーマイオニーとコ
リンクリービー御一行様もそこにはご丁寧に集合していた。

「どうしました先輩。ブッキングですか。」

「いや。僕たちはスネイプ先生から『許可』をいただいているんだ」

「もともと予定していたのはどちらですか？」

「こつちだ！」

グリフィンドールのキャプテンであるオリバーが吠える。

まあ、そうだろうな。聞かなくてもわかる。

「僕たちは、後日練習しましょう。『今』である必要はないと思いま
す。」

僕は、フリントに物申す。ハリーは僕の隣で頷いている。

「は？練習が必要だろう。優勝を目指しているんだ」

「ええ、勿論ですとも先輩。僕たちも同じ思いです。しかし、ここで争
うほうが時間の無駄ではないかと思えますが。それに、僕たちは『勝
ち』ます。そこまで練習せずとも、先輩たちの期待ぐらいなら答えら
す。」

れると思います。が。なあハリー」

わざとハリーに声をかける。空気に徹していたのに。と少し睨まれたが知るもんか。

「勿論だよドラコ！僕たちは誰よりも素晴らしい連携プレイで点を取ってみせますよ！」

僕を睨んでくせに、自分でも大胆なことを宣言してくれる。まあ、やってみせますよ。やってやろうではないか。

フロントは、初めは少し僕たちの偉そげな態度に怒っていたものの、すぐにいつものするぞうな表情になり「そうしよう。けれども、もしお前らが使えないとわかったら一度で、切る。」と宣言した。

まあリスクがでかいが仕方がないか。寮に戻って土曜日を満喫しよう、ハリーの手を引き帰ろうとした瞬間。後ろから声変わりまえの少年の声か聞こえた。

「兄様。いかがなされたのですか。」

サジッタ……。

「兄様がクイディッチの練習をなさると聞いて、見学にきたのですが帰られるのですか？スネイプ先生が許可されているのであれば、利用すればいいじゃないですか。正当な理由もありますし。このサインは立派な例外では？」と私は思いますけど。」

こてん。と首をかしげながらサジーは言葉を紡ぐ。フロントが「だよなあ」とサジーの肩を抱く。まぜつかえすな。

余計なことをするな。と口を開こうとしたらハーマイオニーのほ

うが早かった。

「話がまとまったところに、まぜつかえすのはどうかと思うわ。それに、あなたの考えより、ドラコの考えの方が、平和的だし万人に受け入れられると思うの。」

「うるさいなあ。あなたが兄様のことを知った顔で発言しないでくれます? 『穢れた血』のお姉さま。」

その瞬間、甲高いいい音が、パアンと響いた。つまり、誰かが誰かの頬をぶった音だった。

「あ、ごめんどドラコ君の弟ひっぱたいちやった。」

そう、それはハリーがサジーの頬をひっぱいた音だった。ロンをはじめとするグリフィンドールの皆さんは杖を片手に臨戦態勢にはいつていたし、かくいう僕も右手を振りかぶっていたし同様のことをしようと思っていたところだった。むしろ実際に誰かの呪文が発動しなくてよかったし、前回のように乱闘騒ぎに発展しなくてよかったのだろう。

「いや、気にするな。むしろ僕じゃなくて君にさせてしまったことが申し訳ない。サジー言うべきことがあるだろう」

サジーは頬に手をあてる動作もせずただ呆然と僕を見ていた。その目は揺れていて何かを訴えているようだった。読めない。開心術が得意であつたらサジーの抱えているものを理解してあげることができたのだろうか。

サジ―は、肩にのつていたフrintの手を払い、何も言わずに去っていく。

僕は、不承不承の弟に変わり、ハーマイオニー。そしてほかのみなさんに頭を下げた。

第四話

あのあと、ハーマイオニーは「気にしていない」と言ってくれた。けれどもハリーもロンのハグリッドも「気にすべきことだ」と憤慨していた。

「だって私、その言葉が『私』を侮蔑する言葉だなんて思わなかったんだもの、言われた本人が傷ついていないんだもの。いいのよ。それに、みんなが私の代わりに怒ってくれて傷ついた顔してるから、もう私は怒れないわ」

にこりと。本当に何も気にしてません。というような顔でハーマイオニーは笑った。

僕は、すこしそれに救われた気がした。自分が言ってしまったあの言葉を、サジーを通してだけれども謝罪できた気がした。相手はあのグレンジャーではないが。それでも、ほんとすこしだけ、後悔している過ちが軽くなった気がした。

「そんなことより、彼はそういう周りの言葉におどらされていないか私不安だわ。」

そのハーマイオニーの言葉が、彼女の鋭さが僕の心を痛めた。隣のハリーもぼくを見ていた。言葉の意味もわからずに、周りが言っているから、信頼している大人が言っているからと、使用したことで相手

を傷つける言葉たち。その言葉の本来持つ意味もたいして理解せず、その行為にどんな意味があるのかを理解せず、彼らがやっているから「正しい」ことなんだと疑わなかった浅はかな青年時代。それが「もしかしたら違うのかもしれない」と気づけたのは、目の前の彼らのおかげだった。そして違っていたのだと自分が信じてきた現実を認めただのはアステリアとすこーピウスの存在だった。

サジツタは僕と同じなのだろう。以前の僕と。いや、賢く、自分の考えをもっているあたり彼のほうが強いかも知れない。その考え方は大人に示された、用意された範囲内であるとも気づかず。中途半端に自分の考えがあるから、またそれに気づきにくい。

サジツタにも、それに気づかせてくれる仲間がいてくれたらと思うのだが。僕が学生中に手に入れることのできなかつた仲間を。そういう仲間を作らなければならない。そうして新しい生活を築いていかなければならないのだ。

僕のように失敗してはほしくない。

今回は、失敗しない。

「はあい。ドラコ。楽しくない話と楽しくない話どっちが聞きたい？」

「つまりは一択だな？」

「一択じゃないよ！楽しくない話と楽しくない話は内容が違うんだから！」

心外だ！とばかりにハリーがぷりぷりと怒る。さっきまでむこうでパンジーたちにいいように遊ばれていたはずだが、もう終わったのだろうか。読んでいた本を机におき、ハリーがいる後ろを振り返る。

談話室にいる生徒の数もまばらになり、もうそんな時間か。と時計をみた。寝室に向かおうとハリーに声をかける。

「今日の僕の髪はストレートです！パンジーたちが髪乾かしてくれたらこんなにサラストになるのに、朝にはまた元に戻ってるんだもんなあ。癖強すぎない？僕の髪」

「淑女たちの技術はすごいよな。まあ時間があつたら直毛薬ぐらい作ってやる」

「そんなのちよちよいのちよいでしょ。」

「優先度が低くてな」

「はい？」

「優先度が低くてな」

なにそれひどーい！と聞こえるが無視が一番だ。

「面白くない話。重い方から聞こうか」

部屋に戻り、寝支度をすませて二人は向き合った。ちなみにハリーの要望により、二人のベッドはよせて、間を狭くしてある。ベッドに腰掛けると二人の足は触れ合う距離にあつた。「じゃあ。」とハリーはキョロキョロして、部屋での話が漏れないように術を施していく。もうこの作業も手馴れたものだな、とたったの一年間を懐かしんでしまった。

「では、重い方の面白くない話です。」

「先日、ふらふらと学校を散策していたのですが、

「やはり、聞こえちやったよねー」

「バジリスクの声

「やっばこの学校にあるわ。

「リドルの日記。

ここにこと笑顔で言う話ではないだろう。話では！

「それで、日記の在り処は…わかってないよな。思ったより早かったな。」

「それなんだよね。」

「ハリー、お前秘密の部屋の開け方知ってるならさっさと行って殺してくるとかできないのか。被害は抑えたいし、必要なのはバジリスクの毒とリドルの日記だが、同時に入手しなきゃいけないわけじゃない。バジリスク殺して毒を手に入れて、そのあとゆっくりリドルの日記回収すればよくないか」

「それな」

両の手の人差し指をあげて僕を指差す。その顔やめろ。

「って、僕がバジリスクのみみちやって死んだらどうすんのさ！簡単にいいすぎでしょー！」

「それくらい対処しろよ。できるだろう闇祓い様」

「それな」

だからやめろ。イラっとしてハリーの右手をギュツと握る。それではご唱和ください。セーのってくそう。逃げられた。

「いや。実はね。一年生の時秘密の部屋一回開けてるんだよねー。け

どバジリスクに無視されて。気配はするし、いるのはわかるんだけど、何度声かけても無視するの。会話してくれないの、現れてすらくれないわけ。」

聞いていない。そんなことしていたなんて聞いていない。「言っていないもん」じゃない。危ないだろう！さっき僕が「殺してこいよ」とか言ったけど、僕が言うのと、知らないところで勝手に危険な目にあっているのはわけが違うだろう。無事でよかつたな!?無事でよかつた。

「まあ、僕継承者じゃないってことなんだろうな。ってことで納得したわけですよそのときは。まあ、純血じゃないし」で、今回声が聞こえたから『秘密の部屋』が開いたんだなって思って行ってきたわけです」

「どっへ」

「秘密の部屋」

ダメだこいつ。危険すぎる。早死するぞ。いやさせないけどな！
だがしかし、ほうれんそう！報告・連絡・相談は怠るな！これは絶対だ！

「まあ行ってみただけど、また無視されたんだよね。」

そういう子嫌われるって言われなかったのかな。言われなかったんだらうな。だって今までの主人がサラザールとリドルだもんな。ハリーは手をあげにあてて「うんうん」と一人頷く。

「もう何様なの!?!って感じなわけです。だから今選択できるのはやはり『リドル』を利用してあの部屋でお互いに対峙をすることか、秘密の部屋をエクスパルソかコンフリンゴ…悪霊の火あたりであの部屋の存在を抹消…?しちやうかなんだよね。」

「抹消…?しちやうかなんだよね。じやないだろう!どんな二択だ!前者のほうがマシだと思えてしまうのがなんだか腹立たしいな!」

「いやいや、僕真面目に言ったんですけどっていうその顔やめろ。」

頭に血が上る。興奮で、軽くお茶でも入れてくるんだった、今からでも遅くないか。幸い茶器はこの部屋にもあるし…。額に手をあて、「はあ」とおおげさに息を吐いた。

「で、最初の被害っていつだったか。」

「ああ、そうその話なんだよ。もうひとつの面白くない話って「うむ」

「絶命日パーティに興味ある?ちなみに僕は二度と行きたくないんだけど」

それは、聞けば聞くほど最悪なパーティだった。ハーマイオニーとロン、そしてネビルと一緒にいた時に声をかけられたらしく自分以外の人は「行く」と返事をしていたらしい。「僕はドラコと相談して決めるよ」と、その場での回答からは逃れてきたからできればこのままボイコットしようと思っていると。「ドラコが学校のパーティに参加するっていうからそっちいくね」って返事できるだろう?って、人を理由にするな人を

「まあそれはそれでいいんだけど、その日なんだよ。覚えてるだろう君。ミセスノリスが石になってぶらさがってたあの日だよ」

「ああ」

「継承者の敵よ、気を付けよ!次はおまえたちの番だぞ、『穢れた血』

め！』

「二字一句覚えてるのか。一周回って怖いぞ。執念深いな」

「記憶力がいいと行ってくれ。君が僕に言った言葉は何度も繰り返した、全部覚えてる」

「…喜んでいいのか？」

「君、怖いな。僕が言うのもなんだけどここは気持ち悪がるどころだよ」

今回そのセリフをいいそうな人物思い当たるよねー。一字一句一緒だったら、君たち兄弟に「同一人物なんじゃない賞」をプレゼントしよう。嬉しそうに言うハリーが腹立たしくなり足を一発蹴り上げる。

「まあ、正直なところロンたちがその現場にでくわすのはさげたいな。」

「そうなんだよね。えー、行く？さっさと行ってなかったことにする？マンドレイク回復薬つかって元通りにして第二の被害が起きる前にリドルの日記見つける？」

「いやいや気持ちはわかるがおちつけ。マンドレイク回復薬はひとつしかないんだ。これは彼女のためにとっておこう。」

「へえ。ハーマイオニーが被害にあったことは覚えてるんだ。」

なにが良かった何が。

とりあえずこの日は、そこでお開きになった。

ハロウインの日は学校のパーティに行ってから、ロンたちが三階に向かう前に自分たちがいこうということになった。僕たちが第一発見者だ。それでいい。僕たちは僕たちがリドルの日記をもっている

犯人ではないことをしっている。そして継承者が誰なのかもしっている。後ろ指を指されようと何ら問題はないのだ。

その夜。ドアが閉まる音が聞こえた。

寝返りをうつ振りをして隣をみるとそこにハリーの姿は見えなかった。

僕と話すとき、ふざけたり、おどけたりして軽い調子で今回の話をしているが、やはり心惑わせているのはハリーだ。前回、ジニーとハーマイオニーが被害者の中にいた。そして彼自身もよくわからないうちに巻き込まれていたのだ。それを思い出すのだろう。

仕方がない。彼が、早くに解決したいと思うことは仕方ないだろう。今度は僕も連れて行ってくれ。そう言えればいいのだ。その前に暗視ゴーグルを取り寄せておこう。あすの予定を決め、そしてハリーの安心を願いながら次の日を迎えた。

予定通り、ハロウィンパーティーに参加した。ロンたちには昨晚確認したら「絶命日パーティーに行く」といつていたから「またどんなだったか教えるよ」と返しておいた。

みんなと軽く談笑してから抜け出す。ハリーが「聞こえる」といつてすぐに出たから、ロンたちよりも早く着けるだろう。というよりもそもそも、彼等のなかにヘビ語がわかるやつはいないのだから、三階にたどりつくこともないだろうと気づいたのはあの話をした次の日だった。

予定通りに進んでいるはずだった。

のだが、そこにはなぜか先着がいた。

ロンでもハーマイオニーでも、ネビルでもない。

「スネイプ先生…?」

「ポッター、マルフォイ。」

僕たちはスネイプ先生のもとに駆け寄る。そこには石になったミセスノリスと、壁にはあの時とおなじ「秘密の部屋は開かれたり 継承者の敵よ、気を付けよ」と書かれていた。ハリーは、少し呆然としていたが、はっと我に返りスネイプ先生に詰め寄った。

「先生！なんでここにいますか?!ここに来た記憶がないとか言いませんよね?!いつのまにかここにいたとか言いませんよね?」

「な、何を言っておるのだ。ポッター。吾輩が誰かに操られていると？」

ハリーの肩に手をおき、「おちつけ」と制す。

「スネイプ先生。なぜこちらに？」

「それは、吾輩のセリフでは？ マルフォイ？」

そういいながらぎゅつと腕を握るスネイプ先生を見て、全てに得心がいく。あの印はそこまで力があるのか。ヴォルデモートの過去だぞ？ 記憶だぞ？

「僕たちは、パーティが終わって帰るところだったのですが、せつかくなので大広間に生徒が集まっている今、ホグワーツを散策してみようかと思いませんか？」

「ほう」

「もしたらこれですよ。秘密の部屋。みんなが知らない特別な部屋があったらなあと思っただけなのですが、むこうからヒントが来た。先生、秘密の部屋って何かご存知ですか？」

スネイプ先生は口をつむぎその威圧感のまま僕たちを見下ろす。無駄です先生。僕、先生と一緒に閉心術得意なんです。心を覗き込むうとしても、見えないですよ。ハリーにだってよませないんですから。そしてとうのハリーは、開心術でスネイプ先生を見つめている。が、くびをふったところを見ると無理だったか。そりやそうだよな。ヴォルデモートにも心悟らせなかったスネイプ先生だもんな。そうは簡単にいかないか。

「ごめんなさい。嘘つきました。秘密の部屋が何か知っています。サザールスリザリンが作ったと言われている部屋ですよね。」

「確か、マルフォイは魔法史が得意だったか。」

「先生。僕は『魔法史』が得意なんではありません。『どれも』できるんですよ。」

につこにと笑顔を返す。どれだってできる。グレンジャーと首席あらしをしてしているレベルだ。ただDADAとかすこしハリーに負けるから得意不得意があるように見えるだけである。まあ魔法史に關しては息子が得意だったことと、ハリーができないから教えられるように自習がはかどってはいるが。まあ秘密の部屋を知っていることとは話が別だろう。

被害が大きくならないうちに、どうかしなければいけないのでは、と声を掛けようとして、背後に誰かがいることに気づいた。後ろを振り返るとそこには4人。ロンとハーマイオニーとネビル、そしてサジツタが一緒にいた。

三人は、顔を青くして僕たちを見つめていたが、サジツタだけは静かにこちらを見ていた。

「わ、私たち絶命日パーティに行っていて。それで、えっと、サジツタとはそこであつて。先日のことを謝りたいと言ってくれたの。ええと、私何言ってるんだろう…パニックになってよくわからないわごめんなさい。」

パーティは終わったのだろうか、ガヤガヤと人の話し声がする。

「継承者の敵って…どういふことだよ、なんでミセスノリスがそんなことになっているんだ。」

生徒がこちらにきづいた。人が増えるのも時間の問題か。
今なら身内で話がつけれられる。すると、ハリーが僕の手を引き抱
き寄せる。

「秘密の部屋、継承者、継承者の敵とは、マグルですか、兄様。いや、
半純血のことか、純潔の裏切りの結果生まれた半純血。いや、しかし
それだとハリーとスネイプ先生は」

「ドラコ逃げよう」

ぼそぼそと僕の耳元でハリーが言う。

「えっなんで」

「なんでもだ!」

キヤアアアアアアアア。女生徒の悲鳴があがる。なんだなんだ
と、人がどんどん増えていく。「秘密の部屋」「継承者の敵」「継承者」
という言葉に混じって「ドラコマルフォイ」「ハリーポッター」「純血」
「半純血」という言葉が混じって聞こえてきた。

ああ、そういうことか。と、ハリーが逃げようといった意味に納得
していると、ハリーが僕を全面から抱き寄せる。いやいや、どうした。
こんなこときにしたりしないぞと、顔をあげると悔しそうな表情のハ
リーがいた。

嬉しいとか思っちゃダメだ。

その場はスネイプ先生が沈静化させた。ほかの先生たちも集まり
状況を整理していく、フィルチも荒れたが、最初に見つけたのがスネ

イプ教授であったことを知り、怒るのをやめ、ひたすらに涙を流していた。

スネイプ先生は、落ち着くまで研究室を利用してもいいといつてくれたが、ハリーがそれを断っていた。「できるだけ、早く戻ってベッドで横になりたいです。」

寮では、みんな心配してくれた、ほんの少しの人々はひそひそと話していたが、ほとんどの人は「大丈夫か」「心配すんなよ」「いくらスリザリンといえど、あんな真似するやる今時いない」と慰めてくれた。バンジーとダフネはあったかい紅茶を入れて待ってくれていた。「早く部屋に戻りたいかなって思って、ティーカップじゃなくて深いマグに入れたの。」そういう気遣いがとても嬉しくて「ありがとう」と微笑んだ。上手に笑えすぎてたかもしれない、もつとツライ風に笑うべきだっただろうか。

部屋に戻ってすぐに寝る支度をする。一緒にねようと言ってくると思っていたがハリーは何も言わずに自分のベッドに入っていた。

「なあ、ハリー。そっちにいったいいか。一緒に、寝て欲しいんだが」
「…珍しいねドラコ。意外とショックを受けてる?」

ショックを受けているのはお前だろう。
それは言わないでおいた。

「お得意の開心術で僕の気持ちわかるだろう」
「お生憎様。君のは読めない。スネイプのも読めなかった」

断られてはいないと、枕だけもって彼のシーツをめくり入る。

「けど、サジツタのは読めた」

ああ、そこからののか。だから彼等が、サジツタが現れたとき、僕を引き寄せたのか。

「スネイプ先生を読もうとしたんだ。もしかしたら、先生がリドルの日記を持つているかもしれないと思つて。よく考えたら生徒に限定する必要はないんだ。前の時は君のお父さんヴォルデモートからもらったものだったろう。だったらエイブリーではなくスネイプ先生が貰つてもおかしくないだよ。」

「ああ、僕もあの場面に遭遇してその可能性にきづいた。」
「うん。時間稼ぎしてくれてありがとう。結局分からずじまいだったけど。それで、そのレジリメンズで集中してて、強く意識持つてたからあのとき現れた四人の気持ちの流れがきちやっただよな。」

なるほど。そういうことか。「別に、君の弟を疑ってみようとおおったわけではないんだ」ハリーはこちらを向いて、僕を抱き抱える。

「それで、僕の弟はなんて？」

『まさか、兄様が。そんなはずはない』つて言つてた。ほかの三人のも流れてきたから、細かくは不鮮明なんだけど、その部分、その瞬間思つていただろう言葉だけは強く残つてる。」

ハリーの力が強くなる。

「まさか。こんな展開になるとは思つていなかった。前回は決闘クラ

ブでパーセルマウスの流れがあつてからだつたし、僕がパーセルマウスだつてことが分かつてから一気に「ハリーポッターが継承者では」が広がったんだ。だから、今回も、継承者扱いされるのはどうせ僕だと思ひ込んでいた。まさか、君がその扱いを受けるだなんて露ほども考えてなかつた」

優しい。やさしいなこの男は、前の時、継承者扱いをされたときのことを考えているのだろうか。それと同じことを僕がうけると想像しているのだろうか。あの時から、僕たちスリザリン生はお前が継承者だなんて少しも思つていなかったさ。半純血が継承者のわけがない。マグル以上に罪深い半純血。そして、純血が多い僕らがサラザールの作った秘密の部屋に怯えることもなかつた。

今回も同じだ。見ただろう。僕たちの寮生を。

むしろ継承者であつたなら、それは本望だよ。

けれどもあんな雑な、下劣な方法は望まない。

ただ、それだけだ。まああんな方法をとつたからこそ、この寮内に、僕たちがやつたと考えている人はいるまいさ。

「大丈夫さ。僕が継承者だなんてこの寮内だれも思つちやいない。お前が思っているほど、僕は傷ついていないし、傷つかないさ」
「でも」

「僕はスリザリンだ。別の寮の人間の評価なんてどうでもいい。」

それに、それでいいんだ。

お前が継承者扱いされるくらいなら。僕が噂されるのなんて。だから、そんな顔をしないでくれハリー。

僕たちにとっても問題は、誰が日記をもっているか。だったが、校内は誰が継承者か。秘密の部屋とは何かで話がもちきりだった。あの日以降、一番の候補に上がっていたのは常に僕だった。けれど、僕に向かつてひそひそ話をする人間も馬鹿にする猛者もいなかった。どうせ友達は少ないしスリザリンのみんなは何も変わらないし、で僕の日常は日常のままだった。

けれども、それに納得していないメンバーがグリフィンボールにいた。呼び出されたのはマートルが居を構えている（怒られそう）女子トイレだった。なんでもコミュニケーションだと人の目もあるし、色々和不都合だから。だそうだ。

秘密の部屋の入口ここだぞ。とは突っ込まず、携帯でロンに呼び出された僕は、ハリーと二人して向かった。

「あのときは気が動転してしまっでごめんなさい。あのあと、色々冷静になってあなたが継承者なわけがないって思って考えたり調べたりしてみたの。」

「僕じゃないって?」

「ドラコじゃない! あんな卑劣なことするもんか! ドラコはハーマイオニーとも仲良くしてる。そういう差別をするスリザリンとは違う!」

必死にありがとうロン。

あの日の翌日。ロンから長文のメールが届いていたことを思い出した。内容はとつちらかったが、彼が僕のことを心配してくれて

いるのは十分に伝わるものだった。

「けれど、調べれば調べるほど、あなただったら条件が合いそう、ええわかってるわロンちよつと静かにしてちようだい。それで、無理矢理別の人、当てはまる人いかなって…そしたら…」

ハーマイオニーは、申し訳なさそうに目を伏せる。静かにしてちようだいといわれたロンはそれに素直に従っていた。まあ、誰が当てはまったかなんて、想像がつくけど。

「サジツタだよね。ドラコの弟の」

「え、ええ」ちらり、とハーマイオニーが僕の様子を伺う。僕は困ったように笑みを返した。

「けれどもあいつは、この間の失言を君に謝ったんでしょ？別に、そんなマグルのことを何とかしてやりたいって思ってるわけでもないんじゃないの？しかも、絶命日パーティーに参加していたというアリバイもあるわけだし」

「え？彼も参加してたの？」

「…君が言ったんじゃないか。パーティーであつたって。」

そうじゃないわ、であつたっていうのは階段のところで出会ったっていったの。ハーマイオニーはそう弁明した。彼は謝ってくれたけど、本音はどうとでも隠せる。純血の子供だし、周りにどう言われて成長してきているかわからない。それに、今年入学してきたから、今年この事件「継承者が現れた」のではないか。そういうことを考えたそう

「でも、違うの。私とロンは『ドラコじゃないわ』って言いただけなの。そして、サジッタ・エイブリーでもないって思いたいだけなの」

なんだか、くすぐったい。

こんなシリアスな場面のはずなのに、心がくすぐったくて暖かくなる。どれだけ学生時代の友人関係に飢えてるのだ僕は。

「それで、どうするつもりなの?」

というハリーの質問への答えは驚くものだった。

ポリジューズ薬についておい! 難易度高いぞ。は? え? これを、前の時間も作ったのか? 思わずハリーの顔を見る。ハリーはゆっくりと頷いた。正直素直に感心する。この年齢であの複雑なポリジューズ薬を作ったというのか。そして、それを使用したと…。

「それは、その、薬を作ることは魅力的だし、取り組んでみたいが」(ハリーに肘でつつかれる)「だったら僕がサジッタに直接聞けばいいんじゃないか」

どう考えてもそのほうが早いだろう。まあ、あいつも僕のことを継承者では、と疑っているふしがあるので、ハリーに頼むか一緒に行つて、尋ねてもらおうかなど作戦をたてる必要はあるが。そういうと彼らからは「あの子ドラコの前ではいい子しいだから」とハモリで返ってきた。いや、ロンはわかるけど、ハーマイオニーまでなぜそんな。

ちなみにネビルも協力者なの。

グリフィンドールですでにパーティが組まれていた。

何とかして、無理はするな。調査も難しければそもそも材料が集まらない。ミスをしたときのリスクも大きいぞ。などなどと自分の知っている知識をつかって彼女たちを説得する。この、説得するというのも今後何度かありそうだな、と同時に一年生のときの説得を思い出していた。

なんとか、なんとかほかの方法を探そうと話の決着がついたところで、僕はまだ言えていなかった感謝をふたりに告げだ。

「僕じゃないって信じてくれてありがとう。僕の勇気になる」

「どういたしまして？なのかしら」

「お前じゃない。僕が断言してやる。」

ハリーは良かったねえという風に僕のことを見つめていた。

「でも、ハーマイオニー。君の考えでいくと、僕だって本心を隠しているかもしれない。心の中では、君も含めマグルなんて汚らわしいって思っているかも」

「あら、まさか。それはこの一年間の自分自信を振り返ってから言っ
てちょうだい。ええ、まあそれで納得ができないのであれば、納得で
きる理由をいって差し上げます。」

「聞こうか」

「だってあなただっただらもつと秘密裏にしそうなもの。あんな自己顕
示欲の塊みたいな馬鹿な真似。しないでしょ？」

スリザリンの皆々様と同じ見解の彼女に僕は失笑した。
さすがだ。

第五話

さて、と

とうとうこの日が来たか。と、いつもどおり朝寝坊をしそうな勢いのハリーをたたき起こす。僕たちのクイディッチの初戦。つまりは先輩方に「僕たちは勝ちます」と啖呵を切り、「連携プレーを見せてやる」といった舞台だった。

顔を洗い、ユニフォームへと着替える。真紅ではない深緑のユニフォーム姿のハリーをみて、なんだか優越感でいっぱいになっていた。二人して朝食に移動する。その途中ハリーが「前は本気でスリザリンを負かしてやりたかったのに、いまはスリザリンとして負けたくないって思ってるよ。」とつぶやいていた。何に対するフォローだ、と内心思ったが、どつちにしろ君はクイディッチからは逃げられないよ。と声をかけておいた。それにたいしてハリーがため息をついたのか、笑ったのが僕は知らない。

広間では、ロンたちが朝食をとっていた。「おはよう」と視線だけを合わせてこの日の会話は終了だ。試合前に戦う寮の生徒同士が必要以上に馴れ合うべきではない。ましてはグリフィンドールとスリザリンなのだ。ちなみに昨晚ロンからは、またまた長いメールがきていた。要約すると「勝つのはグリフィンドールだけど、ドラコとハリーの活躍も期待してる」というものだった。その優しいロンの気遣いに昨晚はハリーと心温まらせた。なんだかそれだけでも百人力の力を手に入れた気分になる。

本来ならば、このあと更衣室に行つて着替えるのだが、すでに着替えを済ませていた僕たちは、着替えだけを置き、すでにフィールドに出ていた。絶好のクイディッチ日和だ。

「ハリー、当たり前だが勝つ気でいくぞ」
「ドラコ、寝ぼけてるの？勿論だ」

僕たちは競技場を見据えてお互いの決意を言う。ちなみに、このあと言葉を続けたのは僕だ。

「ハリー、君はヒッグスが試合でスニッチをとれると思うか？」
「さあ、どうだろう。グリフィンドールのシーカーはハリー・ポッターではないようだし。その可能性は五分五分では？」
「はっ確かに。噂によるとグリフィンドールのシーカーはハリーポッターではないようだな。」

クスクスと二人で笑い合う。

クイディッチに関してこんな冗談を二人で言い合うとは、シーカー姿のハリーをまたみることができるとはと歓喜していた気持ちも嘘ではないが、ともにチェイサーとして連携できるなんて夢のような話である。

「まあ、きつと来年はジニーがシーカーだな。」
「まじで。それはやばい。未来はプロ入りの本物だ」
「おやおや、未来の話ですでに負けごしか」
「まさか。ヒッグスの心配だ。まあなんにしても問題ないさドラコ。僕たちが最低でも150点。相手チームより150点多く入れればいい話だ。」

そうだな。と返すとハリーはウインクをして歩き進める。フリントたちが更衣室から出てきたのだ。試合前の作戦会議である。そうそう、ちなみにハリーと僕の箒は最新型である。別に最新型でなくても良かったのだが、父上がせっかくなら、と行って送ってくださった。ちなみに二本も。ハリーに渡したら「そういうとこだよ！ありがとや！」と叫ばれた。そういうとこだよとかいいつつ貰う気マンマンじゃ

ないか。そう笑うと「やるからにはコテンパンにしたいからね」という大人げない言葉が返ってくる。この場合の相手が誰かは聞かないでおいた。

ちなみに、この時点では、僕はこの試合で起きることを聞かされていない。

だから！報告・連絡・相談はしろといっていたらだろうか！

マダム・フーチの笛の合図で試合はスタートする。

まずはハリー、誰も寄せ付けず誰にも追いつかれず、スピードにものを言わせて1ゴール。この調子でもう一本とでもいうかのように、フィールドを旋回しながら振り切っていく。あいつの急降下・急上昇はえぐいんだよな。

さてと、このままでは僕の出番がなくなってしまう。ある程度、彼一人だけで点数を入れたところで僕はフィールドの真ん中あたりに移動する。ああもうお前の実力はわかったから、そんな箒パフォーマンスしなくていいからさっさとこっちにこい！暇過ぎて腕組をしていた僕に気づいたのか彼はこちらに向かってくる。ぶつかるかというところで二人で息を合わせて上昇する。そして二手に別れる。僕は右に。あいつは左に。さきほどまでハリーを追っていたグリフィンドールの選手は、そのままハリーを追っかけた。だからそういうところだぞつと。やつと僕も1ゴール。

ある程度点数を稼いだか。とハリーをみるとあいつは絡まれている。そう、ブラッジャーに。おうおう。かわいそうにと思っただけでじっと見ていると、割と本気で絡まれている。執拗に。ああ、もう！と悪態をついているのが聴こえてくるようだ。というより、ピーター仕事し

ろよ。ハリーはスピードにものを言わせて、残りの時間逃げることに決めたようだった。ものすごいスピードでこつちに来るのでこちらも、彼のスピードと並走できるくらいに箒を泳がす。並んだ彼ば僕に「残りの点数一人で稼いで！」と叫んで急降下していった。

心配だったが、変に手を貸しても邪魔になるだけだろうと判断し、僕は頼まれた通りに（決して指示ではない）点数を入れていった。まあ、もうひとりチェイサーはいるわけだしな。

スニッチを捕まえたのは、グリフィンドールだった。けれども点差は160点。グリフィンドールがスニッチを手に入れたところで勝利は、スリザリンのものだった。

試合終了の合図とともに、みんなセンターラインに集まる。スニッチを取ったシーカーもうちのシーカーもこの世の終わりのような顔をしていた。まあ、気持ちにはわかるよ。スニッチをとったにも関わらず、チェイサーが取った点数で負けてしまったんだものな。屈辱に近いものがあるのだろう。

ハリーは左腕をだらんと力なく垂らしながら降りてきた。

「ハリー！腕！」

「あの、くそブラッジャー……！」

みんながハリーに駆け寄らんとする。のをハリーが止めた。

「大丈夫、骨が折れたただけだ。ついでに足も。マダム・ポンフリーの所に行つても？」と許可をとり、医務室に向かう。僕は彼の腕をささえ、つきそう。フィールドを出たところで、待ち構えていたのはロックハートだった。まさに待ち構えていたというのが正しいだろう。「私が君の腕を直してやろう」とかなんとか言っているのが聞こえたが何も聞こえないふりしてその場を通り過ぎる。カシャというシャツ

ター音も聞こえ正直「イラッ」としたが、それに関してはハリーに制止された。

「コリン。僕とドラコのツーショット。スリザリンの名チエイサー160点決めるっていうメモ付きでしっかり保存しておいてね」

そういつてウィンクしながら、後にした。なるほど、コリンに関しては受け止めて緩衝させる作戦でいくわけか。了解。

医務室に運ぶのは途中僕が疲れたのでハリーに許可をもらって浮遊呪文では込ませてもらった。一応誰かに見られたらいけないから、担いでいるふりをして。

「さて、ブラッジャーにオモテになられていましたが気分は？」

「はっ最高だね。さすが僕。無機物にもオモテオモテになるんだから。嫉妬するなよ?」

「いやあ。ポッター様はレベルが違う。僕にはとてもとても」

「ってそんなことより!スリザリンのシーカーなにあれ!あんな無能さっさとやめさせろ!」

おお、ハリーが火を噴いた。「僕がブラッジャーを振り切ろうと逃げている間に何回スニッチを見かけたと思う!?!4回だよ、4回!しかも最後は自分の近くにいたスニッチを見つけれずおめおめとグリフィンボールにとらせて!」

と、愚痴・冗談をいつているうちに医務室についてしまった。今回の出来事について心当たりをききだそうと思っていたのに。マダム・

ポンフリーはハリーの怪我をみて、「まあ、これなら大丈夫でしょう」と応急処理と薬だけだして仕事に戻っていった。

「あ。ロンからメールきてる。『ハリー大丈夫？お見舞いいつでも良さそう？スリザリンの人たちいる？』だった」

「スリザリンの人はいないけど、ひどく疲れたから遠慮するっていつておいて」

『『ありがとう。ハリーは大丈夫だ。薬のおかげか、すこし眠たいみたいだからまた時間をあけてきてくれ』』と」

ハリーはすでに目をつむり寝る体勢にはいつていた。僕も疲れた。後半はなんだかんだでひとり点数を稼いでいた気がする。「カタン」と誰かがベッドに近づく音がして、そちらに目をやるとパンジーたちが立っていた。「お疲れのようね。他の選手は、勝利に盛り上がっているわ」そういいながら、着替えを手渡してくれる。「ありがとう。僕たちはここで一休みしてからもどるよ」「そうね。また暖かいティーを入れて待ってるわ」

目が覚めたらすでにハリーは起きてその身を起こしていた。「起きたのか」と声をかけるとハリーは軽く微笑んだあとに真剣な表情で僕に質問をした。

「起きてすぐでごめん。ビビはサジツタのどこのハウスエルフで間違いない？」

「あ、ああ。むしろハウスというよりサジツタ専属のエルフみたいなものだ。」

「サジツタの？ハウスエルフなの？」

どういうことだ。とハリーは頭を唸らす。

「ちなみに、ドビーはマルフォイのハウスエルフなんだよね」

「ああ。…それがどうしたんだ」

「ううん。別に」

ううん別に。じゃない。僕は報告しろと相談しろと連絡しろとあと何回言えば気が済んだ！と叫びかけたところでバタバタと人が医務室に入ってくるのを感じた。ハリーが「このタイミングだと。コリンクリービーだ」と僕に耳打ちする。

そしてそのとおり被害は前回同様コリンクリービーだった。

またしても秘密の部屋は開けられたのだった。

コリンクリービーが襲われ、いまは死んだように横たわっていると、いうニュースは瞬く間に広がった。それとともに、僕たち二人が医務室にいたということ、とそれを証明するものはないということも。運命はどうやっても僕たちを（有力なのは僕だそうだが）を後継者扱いにしたいようだった。

みんながそう噂をしている時に、クリスマス休暇の確認が行われた。特に学校に残る予定もなかったの、ハリーを誘って僕の家遊びにおいでと誘おうと思ったのだが、そういうわけにもいなくなつた。クリスマスに学校に残るメンバーになんとハーマイオニーとロン。そしてサジッタの名前が連なっていたのだ。サジッタ…？それはクリスマスに行われる一種の挨拶回りを断ってまでのことなのか？

それを見て、僕とハリーは残るか残らないかを一旦保留にすることにした。

そういえば、あの医務室でのハリーでのわけのわからない質問についてはその夜きちんと問いただした。待っていてはダメだということに今更ながら気づいたからだ。「ハウスエルフが、君が寝ている時に現れたんだ。僕にその時いった内容は前回と変わらなかったんだけど。その…それを言ったハウスエルフも前と同じだった。」

「は？ドビーか」

「そう。」

「君の、おばさまの家に来たハウスエルフはビビだつて名乗ったんだろう？」

「うん。」

つまり、なんだ。

この騒動を巻き起こしているハウスエルフは二匹（二人？）ということなのか？

彼らは僕たちと常識をともにしてなければ、魔法のルールもともにしていない。彼らの動きを予測するのは困難だ。「どうしようもない」とついつぶやいてしまった。ハリーは苦笑しながらも「まあ、彼等が求めていることは前回と同じだし、そんな懸念するほどのこともないでしょ」と僕をなだめていた。逆だろう。僕が君をなだめる役のはずなのに。

そんなこんなで、各寮の皆様から後ろ指をさされながらもどうどうと、「なにもやましいことはありません」と魔法薬学の授業に出ていた時のひと騒動。

ゴイルの薬が爆発した。

咄嗟に杖をだして傘をつくる。隣のハリーも表情を変えず傘差しをしていた。もうすこしはつきりこの出来事があつたことを覚えていたら、もう何人が回避させることができたのかもしれないが、とつさきことでできなかつた。

なぜ今回もこれが起きる。不必要な一コマだろうと思うが、まあ学校生活には必要な一コマなのかもしれないなと思ひ、かなり怒っているスネイプ先生を心からいたわつた。学校の先生って大変ですね。

「手がまだうまく使えな―い」とかなんといつて腕をつつているハリーの口元にお昼ごはんを突つ込む。お肉と野菜が偏らないように考えて運ぶ。スリザリンのみんながくすくすと笑いながら「まるで彼女ね」と言っていた。「こんな恋人手がかかりすぎて……甘やかしてしまいます」と冗談でがえしたら「冗談に聞こえないのよ」と後ろでダフネにつぶやかれた。「大好きだよドラコ！糖蜜パイが食べたい！」と調子に乗るハリーに「はいはい」と与えていたら。「恋人をダメにする系の彼氏ね。」「いや、あれはお母さんでは」と囁かれていた。隣にすわつたパンジーは「私もはもう知らないわよ」とハリーに言っていた。「これでいいんだ」とハリーが返しているのを僕は「なんのことだ」と思ひながら聞いていた。

「さてドラコ。さきで面白いお話です。」

ほう。さきほどの茶番よりもおもしろい話か？と聞くと「あれは、僕を甘やかす君がわるいんでしょ」と返つてきた。自覚はある、自覚はあるからやめてくれ。

「さきほどの魔法薬学でのひと騒動なのですが、あれはハーマイオ

ニー達がスネイプ教授の薬草を盗むためにおこした出来事なのでしたー」

「…は!?」

聞くと、前回は自分たちがポリジューズを作るためにあの騒動を起こしたのだそうだ。まじか。まじか。かわいそうなゴイル。そして僕。つまり、また起きたということは同様のことが起きたというわけで、ハリーはその時のハーマイオニーの動きを見逃さなかったそうだ。「ま、いっかなーって思ってた」

「あいつら作る気か。危険だぞ?」

「もうさー、良くない? ハーマイオニー前回は成功させてるし大丈夫だって。獣の毛と髪を間違えなければ」

「そんな簡単に…」

「だって僕たち、というより君が真剣にとめたのにやっちゃってるんだもん。もうあの子たちの経験ってことで僕たちが見守ればよくない? 勝手にやらせるほうが危なくない気がしてきたんだよね僕」

なるほど。それも一理あるかも知れない。

「…むしろ僕がポリジューズ薬つくるのに加担した方が良くないかなんかそのほうが確かなものができる気がする」

「そゆこと。さすがドラコちゃん。今日の夕飯と夜のしたく手伝う権利を君に与える」

「いらん。」

その足で、彼等が調合しているであろうマートルのいるトイレに向かう。そこには作成途中のポリジューズ薬があり、バレたとばかりに顔面蒼白のグリフィンドール三人衆をみつけた。後ろで「ほんとか、ネビルのパーティーに加わってる」という能天気なハリーは無視して、

やはり一応、一応中身年長者として彼等を叱りつけておいた。

そのあとは、「やりたいのならやらせてやる。ただし僕が居る前でやること」と約束させ「何様？」と笑っているハリーを引き続き無視して、薬の作成に取り掛かった。これにより、僕たちのクリスマス休暇はホグワーツで過ごすことが決定した。

「きたね。『決闘クラブ』」

ドキドキだなー。ワクワクだなー。ハリーは、嬉しそうにつぶやく「僕は誰と組むかなー。寮隔てるならロンかなー。」ほんと、楽しそうだなによりだ。僕といえば気が気ではない。決闘クラブでは、以前へびをだしてしまって大騒動になった。そこでハリーがパーセルマウスだということが知れていつき以後継者Ⅱハリーの図式ができあがったのだ。僕も鮮明に覚えているし、あの夜ハリーも「この日」のことをよく覚えているように言っていた。あれだけは、回避しなければならぬ。

「とまあ、冗談はここまでにしておいて。今回も僕と組んでね。ドラコ」

「決めるのは先生方だろう」
「なんとかする。そんなでもって前回と同じようにへびを出して欲しいんだ。」

正気か？とついハリーを見つめてしまう。すると「正気だよ」と笑顔で返ってきた。

「へびを出して。ドラコ。そして僕はその蛇にパーセルマウスで話しかける」

「そんなことをしたら…！」

「そう、そんなことをしたら、僕が継承者だって噂で学校中もちきりに

なる。そして君が継承者だっという噂が薄れる。」

ハリーは静かに、僕に言う。

「僕は、僕が継承者だという噂のまま構わない。別にそれで心を痛めるようなことはない」

「知ってる。」

「だったら」

「でも、ドラコが継承者扱いされて僕が傷ついてる！確かに、サラザールの継承者だっっていわれてスリザリン生としてはある意味誇らしいかも知れない。でも、今回は前回と同じでわけが違う。同級生をおそったという悪評がついてまわる継承者だ。僕はそれが君についてまわっている現状が耐えられない。君にそういう噂がついて回っているなんて考えるだけでも泣き出したくなる。」

「ハリー……」

本当に今でも泣き出しそうな表情に、僕は困ってしまふ。気持ちがかかるからだ。自分に置き換えれば、すぐにわかる。そこまで僕のことを思ってくれているのにも驚きを隠せないし、正直そっちにたいして「なぜ」と痛い気分だった。何も言わない僕に「ふふ」とだけ微笑んで立ち上がった。僕は、僕はどうすればいいんだろうか。

前回同様に、助手はスネイプ先生だった。ロックハートに対してきれいな「エクスペリアームス」をかけ、どよめきをわかせる。

後ろのほうにサジツタがいるのが見えた。

ジニーと一緒にいるのをみて「ちやつかりさんめ」と思ったことはこのまま心に秘めておこうと思った。

二人ずつのペアを組ませ、練習をした後に順番に披露していく流れらしい。僕たちは案の定スネイプ先生によって、ハリーがロンと。僕がネビルと分けようとした。が、ハリーが騒いだ。

「やだ。ドラコとやります。」

「ポッター」

「ドラコじゃないと嫌です。」

そばにいたネビルとハーマイオニーから「えっ」と聞こえてくるかのように見つめられた。ロンは「ハリー…すでにドラコの毒牙にかかって…」とつぶやき、パンジー達が「不本意だけど、同意だわ」とロンの意見に賛同していた。

「スネイプ先生。僕は練習といえどもエクスペリアームスを他人とするのは嫌です。練習だからこそ、これは信頼のおける人とするべきじゃないですか。万が一が僕は怖い。だからドラコとやります。」

杖の忠誠。僕はそういうことか、と思い当たる。スネイプ先生もハリーが何をいわんとしているのかがわかったのだろう。「なるほど、ポッター。では、ペアを組み替えよう」といって、他のところも、親しいところで組み直していった。

「なるほどなハリー。僕のサンザシはそんなに気に入ったか」

「まあね。最後をともにした杖だからね」

「はん。」

何人かが、武装解除の呪文を成功させたあと、誰かモデルになってくれる人は？とロックハートの声掛けに、さすがの僕でも引くぐらい楽しそうに「はいはい！僕たちがやりまーす！」とビシッと手を上げるハリーがいた。ロックハートは機嫌をよくし、嬉しそうに僕たちを

指名する。「よろしくね」とだけ呟いて颯爽と壇上であがるハリーに、頭を抱えた。

とはいえ、楽しみだったのも事実だ。

ロックハートがカウントをとる。

カウントが終わらないうちに僕は「デイフィンド」を唱えた。

「っはああああ？最初っからそれ繰り返す？？しかも数数えられてないんですけどー！」

「はん。貴様がそれを言うか『コンフリント』を『2』カウントで放った貴様が」

「戦場では誰も待つてくれませんー。『デプリモ』」

うわあつと、足場が崩れる。バランスを崩してとつさに『レヴィコーパス』を自分にかける。割れたがれきに『アヴィフォース』をかけ鳥にし『オパグノ』でハリーに攻撃をする。

目のはしに、おろおろと止めに入ろうとするロックハートが見えたが、スネイプ先生がそれを制しているようだった。

「うっわー。いちいち鳥にかえるあたりがまじで『貴族』って感じ『ボンバータ』からの基本呪文『ステューピファイ』」

「いちいちうるさいな。『プロテゴ』」

少々やりすぎたか、と二人は杖をお互いに指し呪文を繰り返すのを一度ストップする。ハリーは僕に「やれよ」と目で訴えていた。「サーペンソーティア」にするか「エクスペリアームス」にするか、僕が悩んでいると、目の前に蛇が現れた。そして、大広間をぐるりとみ

まわした。

生徒は悲鳴をあげて、蛇から逃げようとする。が、ロックハートが攻撃をしかける。「余計なことをー」とハリーに視線をやると、彼も盛大にため息と舌打ちをしていた。蛇はジャステイン・フィンチフレッチェリーに向かって威嚇をする。そしてハリーがやつと前に出てきたのだ。「対処が遅くないか!」と後にいったら「遅かろうが早かろうが結果はかわらないもん」という英雄にそぐわない答えが返ってきた。

ハリーは蛇語を使いこなし蛇を落ち着かせる。

堂々とした使いっぷりで、これは普段から使ってるな。あんなに秘密の部屋に向かっていたらそうもなるか。と変に感心していた。

すると急に広間の後ろのほうから、悲鳴が上がった。

そちらをむくと、ジニーとサジツタが蛇に襲われていた。さきほどのロックハートの呪文で蛇は二匹に分裂していたのだ。サジツタは、ジニーを自分の後ろに守り、蛇と見つめ合っていた。けれども小さな彼らにはなす術もない。スネイプ先生がいそいで向かおうとするが、距離も遠く人も、移動の邪魔になっていた。

とっさだった。鎌首が完全に攻撃の体勢に入ったのだ。必死に「やめろ。手をだすな」と僕は叫んでいた。一瞬蛇が動きをとめる。その隙に、おいついたスネイプ先生がその蛇を処理していた。

恐怖は去った。と思った。その静けさだと周りを見渡すと皆の顔は怖いものを見る目で壇上を見上げていた。ああ、そういえばハリーがパーセルマウスを使ったから。と彼の方をみると、ハリーは怒った表情で僕に「来て」と僕の腕をつかみ、僕たちの部屋に向かっていった。

「さて、ドラコ言い訳があるならどうぞぞ」
「はい？」

わけもわからず、僕は頓狂な声をだす。言い訳となんだ。そんなことをする理由は僕にはない。あれか、結局蛇を出さなかったことへの怒りか。それは僕の気持ちも汲み取って欲しい。

「蛇を出さなかったことか」

「やっぱりあれは君が出したんじゃないんだね。ってそんなことはどうでもいい。リドルの日記。君、持ってるの。」

「は？持っているわけがないだろう。持っていたら君にすぐに報告をしている。ハリーと違って報連相は身についている。」

「じゃあ、じゃあなんで君、蛇語使ったの！使えてしまったの!？」

僕がわけもわからないという表情で彼を見つめ返すと、盛大にため息をついて彼はベッドに腰掛けた。「意味わからない。まじで。結局じゃん」

ハリー……。何が起こったのか理解できていない脳みそでハリーの隣に、ベッドに腰掛ける。「僕は、さつきサジツタを襲おうとした蛇にパーセルマウスをつかって話しかけてしまったのか。」さらに、とハリーの髪をすくと「そうだよ」と返ってきた。「そうか」とだけ返事をする。一体何が起きてしまったのか。僕はいままで蛇語を話せたこともなければ話したこともない。

ハリーはガバリと起き上がり。僕の両腕を掴んだ。

「ドラコ。確認だけどもいままで蛇語を使えた試しはないんだよね。今から僕蛇語使うから聞いてみて。意味わかった。」僕はフルフルと首

を振る。「そう…つまりあの時だけ、君は使えたってことか。蛇をだしたのは君じゃないんだよね…。」ハリーは何やら思案をしている。まあ、つまりはそういうことだろう。

「誰かが、僕を後継者に仕立て上げたがっつるということだな」

隣でハリーが絶叫した。「うわああああもうううううううやめて！その答えだけにはたどり着くたくなかった！」隣で子供のようにごろんごろん唸っている。「なんで!?僕でいいじゃん!あいつ倒したの僕だよ!スリザリンだよ!こんちくしょう混血じゃダメなのか!?!」とか、わけのわからんことを叫んぶ。「やだあああドラコおとお」いい加減うるさいので、たたいて黙らせた。

「仕方ないことだな。」

「仕方ないっていつても、もうこれでドラコが継承者だってみんなの中で確定しちゃうじゃん」

「いいじゃないか」

「よくない。」

「けれどよく考えてみる。サジッタもジニーも純血なんだ。なぜ僕が彼等を襲えと蛇に命令するんだ」

「わかんないよー。みんなはそんなとこまで頭回ってないってー。僕にとっつてはそこ問題じゃないもん!?!は!つまりフレツチエリーが石になれば、僕が後継者扱いになる!?!」

「名案だとばかりに正気にもどるな。」

ジャステインと首なしニツクが襲われたというのか僕たちの耳に入ったのはそれからすぐのことだった。

「もう、あなたたち二人でだけで行動するのやめなさい」

パンジーは家から送られてきたチョコレートと暖かい紅茶を入れてくれた。「別に誰が後継者でもいいんだけどね。日々憔悴していくハリーを見るのが耐えられないわ」そういったのはダフネだった。

そう、別に僕自身は本当に辛くもなんともないのだ。後ろ指さされるのなんて慣れになれている。が、隣にいるハリーはそうでもないらしく、僕をみて逃げる下級生をみては、怒りを顕にしていた。「おや、グリーングラス。ハリーのそれは憔悴ではなく『憤怒』だ。そうだろうドラコ」通りがかったスリザリン生が話に入ってくる。「そうだな。」とだけ返す。「なににしても、ハリーはドラコに執着しすぎ」「執着!？」僕はパンジーのいった言葉がおかしすぎて、つい聞き返してしまふ。

「ええ、そうよ。ハリーはドラコに執着してる。まあそうさせた原因はわからないでもないけど」

「どうせ、僕のせいだと言いたいんだろう。この間決闘クラブでも口ンと話していただろう」

「あら、聞こえていたの。でもダメね。あの赤毛は気づいてないわ。」

「何に?」

「あなたと同じことに」

僕と同じ?その「こと」は何にかかった?僕が頭をひねらせている

とハリーが「パンジー」と諫めていた。「あら、失礼」と、反省をしていない様子で口を閉じた。なんだ、僕の知らない共通のひみつでもあるのか。面白くなくてすこし不機嫌になると（わざとだ）目の前のダフネとミリセントもくすくす笑っていた。

ポケットの中で携帯がふるえる。彼等からすこし距離をとって内容を確認するとロンからの呼び出しだった。ハリーに声をかけ出かけようとするが、さきほど言われた「二人だけで行動する」がいかに危険かにも納得していたので、部屋に連れ戻して透明マントを使って移動をすることにした。

「そういうえばハリー。今回のことで、多くの生徒がクリスマスは実家に帰るらしい」

「ああ、らしいね。前回と同じだ。」

「それで、今回僕たちにも、父上から帰ってこいというお達しがきた。秘密の部屋のこともあるし、サジッタのこともあるしで『今年は帰りません』といったら、厳しめな内容の手紙と脅しが書いてあった。」

「脅し?。」

「帰ってこなければ、婚約者を勝手に決める。と卒業するまでは待つてくれると約束したのに！僕に選ばせて下さるとおっしゃったのだ！」

ロンたちのもとに向かっていた足が止まる。「ハリー」と声をかけると彼は、はっとして僕の顔を見つめた。「さすが貴族さまだね。」「嫌味か」「いいえ、嫌なら帰ったほうがいい。何もおこらないさ。君が、婚約者がほしいというのなら別だけど」「だがポリジューズやあいつらはどうするんだ。」

「ドラコ。きつとそういう話にはならない。なったとしても大丈夫だ」

「わかった。じゃあクリスマスは帰る。その方向で彼等に話そう。ちなみにハリー、君も僕の家に戻るからな。そこまで入れての脅しだ」
「…そのほうがいい。ルシウスさんたちが僕を歓迎してくれるというのであれば、お邪魔させてもらうよ。何より、僕の知らないところで君に何かあったら、僕は死ぬ」
「ほんと度がすぎるな」

ちなみに、ハリーも一緒に連れて帰れといわれたのも本当だし、ひとりで帰ってきたら帰ってこなかったとき同様婚約者をあてがうといわれたのも本当だ。父上は、わりとハリーの動向を伺っている節がある。といつても見張るとかではなく、「仲良くしているか」程度ではあるが。手紙にはできればサジツタにもこつちに帰ってくることに。そして不本意なのだろうが、ウィーズリーにもご実家に帰るように伝えておけ。というものだった。父の優先度が明らかなのにしため息が出る。

「ごきげんいかが。後継者候補筆頭のドラコ、次席のハリー」

「笑える冗談だね。さすがだよハーマイオニー」

「ドラコ大丈夫か。なにかあったらいえよ」

「何もできないと思うけど、話ぐらいなら聞けるよ」

「ありがとう。ロン・ネビル」

僕たちはマートルに挨拶をして、簡単な椅子を出してそこにすわる。さすがに地べたには座れない。さて、どこから話したものかと思っていると一番に気に出したのはハリーだった。

「聞くけど。ハーマイオニー。ポリジューズ薬をつくる必要性あるの？」

「あら、ドラコの潔白を知りたいという意味では作る必要はあるし、サジツタの状況を知りたいという意味では意味をなさなくなつたわね」
「僕もそう思う。このあいだの決闘クラブで蛇はサジツタを攻撃しようとした。」

「そう。あれがかれの自作自演だというのであれば、話は変わってくるでしょうけど」

そうなんだよねえ。と二人は頷き合う。

ロンとネビルはその話を先にハーマイオニーから聞いていたのだろう。二人の会話の成り行きを見守っている。

「それに、もしサジツタが後継者であつたとしても、彼は離さないと思うよ。あの子は、なんとかある意味完璧だ。漏れがない。君がドラコが後継者じゃないといった理由のひとつにあんなやり方はしないといったけど、それはサジツタもだ。ねえドラコ」

「あ、ああ。そうだな。僕より倍は賢いだろうな。立ち回るという意味で、なんとか常に抜け目がない。兄である僕にも幼い頃から本音を話さない子だ」

「僕はここ最近透明マントをつかつてサジツタの回りに張り付いてたんだ。無理だ。びっくりするくらい当たり障りのない会話しかしないんだよ」

ハリーはハーマイオニーに告げるように集まったメンバーにいった。当のハーマイオニーは表情を変えずに鍋の中をかき混ぜていた。だれも何も言わず沈黙が続く。ハリーは立ち上がってハーマイオニーのそばにすわった。

「これは、必要ないことだよハーマイオニー」

「それを決めるのはあなたじゃないわ。私たちよ」

いや、今のハリー結構おそろしかったぞ。ほらみろ、僕の隣のネビルとロンがおびえているじゃないか。

「ええ、確かにあなたの言うとおりでわ。私もそれにきづいていました。サジツタは漏らさないでしょうね。あの子は可愛らしいし、賢いわ。けれども、それは憶測なの。私たちはね、必死なのよ。ハリー。あなた顔色が悪いわね。ドラコが後継者扱いされてそんなに心配？ 私たちもよ。同じだわ。ロンなんて、いつも『大丈夫かな』ってウロウロしてるの。それで文章にもなっていない文章をいつもドラコにおくっているのよ。あなたには私たちには見えていないものが見えているのでしょけど、それは私たちには教えてもらえないし見せても貰えない。だったら私たちは私たちのできることで、友の潔白を探すわ。それとも、あなたは私たちに、あなたのひみつを教えてくれるのかしら？」

ハーマイオニーのハリーを見つめる目は厳しかった。友を断罪するような。ひどく冷酷だった。このレイスリザリン向きではと一瞬頭をかすめる。ありがたい、ありがたいけど、君たちがそう思っているだけで僕は助かっている。そう言おうと思った。

「わかった。」

ハリーが、ハーマイオニーの目から視線を離さずに言う。

「君を侮っていた。わかった。君たちに協力を願うよ」

ハーマイオニーの手がとまる。嬉しそうに体ごとハリーに向き直った。

「探して欲しいものがある。」

「ハリー!」「ドラコは黙ってて」

「探して欲しいもの、それは日記なんだ。みためは黒くて古い。表紙を一枚めくると『T・M・リドル』という署名がある。情報はそれだけ。」

「それは、なんなの」

「後継者の証」

「ハリー!そんな危険なものを、ロンたちに探させる気か!」

「ドラコ。手を杖からはなして、オブリーブエイトでもするき?」

ネビルとロンは僕たちの話をキョロキョロしながら聞いていた。

「ドラコが思わず、忘却呪文をかけようとするぐらい危険なものだ。正直君たちを巻き込みたくないと思っっている。だけでも手伝ってくれるならたすかる。けれど、何度も繰り返すが、本当に危険なんだ。みつけたらすぐ僕たちの所にもつてきてほしい」

「わかったわ。じゃ、このポリジューズは色んな寮に侵入するためにつかいましょう。」

はなしが、どんどん進んでいく。何が起こっているのかわからず、ただわかるのは彼らが危険に一步足を踏み入れたと

いうことだった。「ドラコ。大丈夫か」隣でロンが僕に声をかけた。いつのまに流れていた涙を拭き取り、抱き寄せ背中をとんとんとされる。「懐かしいなこの感じ。寮が別れてからお前を慰める役もなくなっていた。大丈夫だから」

大丈夫だなんて、そんな保証はないじゃないか。

僕は立ち上がり、寮に戻ろうとする。

後ろで「お前ら一年に一回は大喧嘩するっていうタスクつくろうとしてんの？」とロンがいつていたのがきこえてきた。

行きは透明マントを利用して出て行ったことも忘れ、そして涙を流した顔だったことも忘れ、寮に戻る。談話室にいたのは、いつもの2年女子メンバーだった。「あら。ハリーと喧嘩でもした？」とパンジーが聞いてくるので「僕の心配なんて、あの男は必要ないんだ」とつぶやいておいた。「男の子って大人げないのよね」って聞こえてくるぞミリセント！

といっても、冷静にはなっていた。だけれども、あれはいささか巻き込み過ぎでは？危険だとわかっていて、させるのは大人のやり方ではないだろう。ふと脳裏に「過保護」と前のグレンジャーの声が響いた。心配のしすぎ、なのだろうか。でも、僕は誰にももう傷ついてほしくないんだ。

ガチャリとハリーが戻ってくる音が聞こえてきて「おかえり」と声をかけた。「ただいま」とすこし無理した声が返ってくる。

「自分が心配性で過保護だっただけでわかっている。泣いてしまっただけで申し訳ない」

「いいや。何も相談せずに話をすすめちゃったから。びっくりさせたよね。」

「僕にとっては、あいつら。特にロンだが、子供のように可愛がってる。それに危険が及ぶと思ったら、不安で、びっくりした」

「それでロンになぐさめてもらってたら意味ないけど」

「父上にハリーはクリスマスプレゼントはいらないといっていたと伝

えておく」

「わーっごめんさい！」ハリーはわーわー叫びながら僕に抱きつく。除けようとするが、がっちり掴まれていて抜け出すことができなかった。正直ハリーの考えに納得は言っていないし理解もできていなかった。けれども、僕は他の世界線（があるのかどうかは知らないけど）と違って賢いのは「学問」のなかだけだ。頼られたらなんでもできる自信はあるが、先回りして準備をしておくとか、貴族特権フル活用とかそんなことはできない。確かに、ことヴォルデモートに関してはハリーとハーマイオニーに任せておくほうが適任なのだろう。僕はこうやってハリーが帰ってくる場所であれたらいい、そして頼まれたらなんでもしてやろう。邪魔だけはすまい。

そう決めてクリスマス休暇を迎えた。

第六話

ちなみに（もう「さて」と「ちなみに」は使い飽きた）サジツタには父上が「マルフォイ」に帰ってこいと言っていたことを伝えたが丁重にお断りされた。「ありがとうございます。クリスマスパーティーを欠席するのは、非常に心苦しいのですが義父もおりませんし、今期はホグワーツで過ごします」だそうだ。「僕は経験したことがないけれども、ホグワーツのクリスマスもなかなからしい」と付け加えてサジツタとの会話は終わりにした。

ロンにも一応伝えた。「すると、あー。ありがとうございますって伝えといてくれる。」と、アーサーさんと父上は未だに不仲だが、父上は僕がロンと仲良くしていることに、そんな目くじらは立てていない。「ちなみに、クリスマスプレゼントは何がいいか聞いておけ、だそうだが」と聞くと「いつも申し訳ない！本当はお古のものが新しくなるとうれしいけど、父さんが拗ねるんだよね。」「本音は」「杖」「正直だな」

こんな感じで、一応父上からの伝言を伝えた上で、ハリーとともにクリスマス休暇のために僕の家へむかった。

「前回もおもったけど、ありえないくらいいきみの家がかいいし領地広いよね。無理こんなん。生まれも育ちも違いすぎる！君がアステリアと住んでた小高い丘のあの家のほうがめっちゃ品がいいよ！」「それはどうも、あれは全部アステリアの趣味だ。きつと天国で喜んでる」

「こっちのアステリアはまだ生きてるけどね!？」

興奮しているのか。普段のハリーと比べたらすこしうるさかった。そういえば、この家に招待したのは初めてだ。以前は招待というより：心が苦しくなったので、割愛させてもらおう。ちなみに、姿くらしをすれば、一発で玄関だが父は未成年の僕たちが付き添い姿あらわしをすることを嫌がった。「自分たちがするのはいいのだが、適当なやつにまかせて方が一バラ消させてみる。正気ではいられない」というのが父の主張だ。

ということ、最寄りから家までは車での移動であった。

玄関につくと母が嬉しそうに立っていた。

「おかえり。ドラコ。まあ、あなたがハリーね。ドラコからたくさんはなしを聞いているわ」と二人をだき抱え「楽しんでいてね」と微笑んだ。余裕があるときの母上本当にうつくしいな。「ナルシツサさん、この時点では本当うつくしいな」同じことを思っていたようである。

「お世話になります。ハリー・ポッターです。ナルシツサさん。よろしくお願いします。」

「まあ他人行儀に呼ばないで、シシーと呼んでくれると嬉しいわ。」

「シシーさんよろしくお願いします」

ハリーの緊張が、ひしひしと伝わる。前回のハリーにとっての母上は「こう」ではなかったことは息子の僕がよく知っている。母上は本来愛に溢れた優しい人なのだ。環境と状況は本当に人を変えてしまう。この幸せを、家族を最後まで守り抜きたい。

「何が好き？ドラコから甘いものが好きときいてたくさん用意したのよ。」

見れば、世界各国から取り寄せたのではないかと思うレベルのお菓子がそこにはならんでいた。さすが母上、やりすぎるレベルにやりすぎしてくれる。チョコレートやキャンディはもちろんケーキもタルトスポンジパイ。カヌレもあれば、点心まで！ハリーがおろおろしながらこちらを見るので、椅子を引いてやってその隣に僕がすわった。

母上は嬉しそうに紅茶を入れる。大抵はハウスエルフがやるが、大切な客人がきたときは母上自らがいつも紅茶を入れていた。僕は、珍しくゴマ団子をみつけ、さらに移す。母上はあんこが好きではないらしくこういうときしかラインナップに入れてくれないのだ。

美味しそうに食べるハリーをみて、母上は嬉しそうに微笑んだ。

「本当にきれいな緑色の瞳なのね。お母様にそっくり」

「シシーさん、母のことを知っているんですか？」

「あら、リリーは有名人だったわ。」

食べていたケーキを落としそうになるハリーに、皿をナイスアシストした僕を褒めてくれ。

「あのっ、母のことを知りたいです」

母上は、学生時代のことを思い出していたのだろうか。すこし意識を飛ばしていたようだがすぐに返ってきた。

「あら、私に聞いても楽しくないわよ」

「それでもいいです」

そう?と母上は杖をひとふりして、僕たちのカップに紅茶を注ぎ足す。

「うーん。やっぱリリーそっくり。そうね。リリーは優秀な生徒だったわ。真面目で正義感が強くて、いつもポッターたちを注意しては、幼馴染のことを守ってた。けれどもそうね、包み隠さず言うならば、当時のスリザリンとグリフィンドルでいくまさにグリフィンドル」って感じの子だったのよね。すこし偏見が強かった。その彼女の概ね正しい正義に救われた人もいれば、傷ついた人もいる。そんな感じかしらねー」

「シシーさんは、僕の母と、その、仲が良かった?」

「まあまあそれを聞いてちょうのね。かわいい。そうね。ある程度の関係はあった。とっておきでしょうか。私とルシウスにとって、学校でおこる些細なことや諍いはどうでもいいことだった。グリフィンドルがスリザリンになにかしようと。スリザリンがグリフィンドルになにかしようと。まあだからわからないけどリリーにはなつかれてはいたわね」

「それで、」

ハリーはまだなにか聞きたそうだったが母上が「もうおしまいにしましょ。またいつでも答えてあげるし機会もあるわ。あなたがドラコの友人でいてくれるならね。」そういつて杖ひとふりで目の前のお菓子たちは姿を消した。

「すこし休んだらお買い物にいきましたよ!クリスマスプレゼント。子どもたちの分はルシウスに一人されちゃったの」

そういつて、母上は着替えるために部屋をあとにする。隣で固まっているハリーを連れて僕の部屋に向かう。途中で意識をとりもどり

「もつと早くシシーさんに会いたかった！」と叫んでいた。

「一応客間も用意しているが、どうする？僕の部屋でも構わない」「きつとベッドもキングサイズで大きいんだろうなあ。僕まだ12歳だからこんな大きいお屋敷の客間とか寂しくて泣きそう。是非ともドラコの部屋で」

「急にキャラ設定するな。了解」

そういつて僕の部屋に通す。といつても、何も特別なものはおいていない簡素な部屋だ。「何もなさすぎて一周回って君らしすぎる！」と叫びながらクロゼットを開けて回っていた。「ああ、そっちの壁のそのカーテンあけてもいいぞ」「なにになに！つてただの本棚かよ！びつしりだな！この部屋！壁一面!?ハーマイオニー連れてきたら喜ぶんじゃないの！」ハリーは色々僕の部屋を楽しそうに物色していた。

そのあとは、母上に連れられてクリスマスの買い物に出かけた。あの程度のものを買ったあとに「おもしろみがないわねえ」と呟いて連れ出されたのはロンドンだった。

母上は僕とハリーにお揃いの万年筆を買ってくださった。そして、ハリーにはクリスマスパーティー用の服を一着誂え、僕には僕たつての希望でマグルの本を数冊かってもらう。「ロンウィーズリーの彼は何がいいと？」と聞かれたので「本当は杖が欲しいみたいなんですけど、両親に申し訳ないからといっています。僕はペットなんてどうかと思うのですが」と進言するが「ペットはあちらのご両親抜きにプレゼントできるものではないわ。でもそうね。私は箱入りの娘でそんな常識知らなかったことにしましょ。価格もみないみない」そういつてダイアゴン横丁に戻ってくる。

相変わらずお茶目だ。ハリーと一緒にえらんだロンのペットはふ

くろうにした。スピックスコノハズク。小型で手乗りサイズだ。ロンのとおなじ赤毛のふくろう。手紙を届けるのはまだできないかもしれないが、スキヤバーズの今後のことを思うと、今かわいいペットを手にしてもバチは当たらないだろう。

そうして、サジツタへの大量のプレゼント（これはさきほどのロンドンでのプレゼントと合わせてホグワーツ直送にした。無理があるこの量は）を買って、帰宅かと思われたが母上が急に「忘れてた！」と叫ぶ。

「知ってるのよ！マグルの女の子！仲がいいでしょう！プレゼント買いましょー！」

女の子といえば服よね！と嬉しそうにしている。隣ではハリーが母上のテンションと今の状況についてこれずにまた放心仕掛けていた。さすがに、これ以上は、と思い「母上、グレンジャーのことですよね。また後日にしましょう。ゆっくり見たほうが素敵なものに出会えますよ」と声をかけた。「それもそうね」と納得し、やっと屋敷に戻ることができた。

父上も帰ってきて、その日は家族団らん。ゆっくりと過ごし、就寝時間になる。用意されていた寝巻きに身を包みハリーはベッドにダイブする「もう、僕ここの子になる。」とかわけのわからないことをつぶやいていた。

「なに、君に両親。めっちゃくちゃいい人だったんだけど！シシーさんは、みため美しいのに中身すごい乙女でかわいいし。ルシウスさんなんか、ドラコに似てただの紳士だった。知識も有って博学で。いなー！」

「君に僕の両親のことを褒めてもらえるのは非常に嬉しいよ。あれが本来の両親なんだ」

「うん。そうだね。そうなんだよね！結局状況と環境はその人自身も変えちゃうってことだ。ダメだよあんない人たちが、どっかの蛇頭のせいで、悲しい末路をたどるのは」

「ああ。絶対にそうしない」

それからは母上のハーマイオニーのクリスマスプレゼント探しをしたり、クリスマスパーティーに参加したり、と楽しい日々をすごした。最終日に父上が可愛らしいバレッタをハーマイオニーあてにと、渡してきたのはびっくりした。さすがにこれは息子の僕もびっくりした。思わず「フィニートインカンターテム」とハリーと、確認をしてしまった。今回ばかりは僕もハリーと一緒に「女の子ってずるい！」と叫んでいた。

ちなみに、屋敷にはドビーがいたのだが、僕たちはすっかりそのことを忘れてクリスマス休暇を楽しんでいた。まあそういうときもあるよな。僕のこの人生の目標、ハリーと友達になって謳歌するだし。と自分を慰めた。ハリーもまったく同じように自分を慰めていた。帰りのホグワーツ特急の中での話だった。

ホグワーツに戻ると、ハーマイオニーとロンに泣きながら怒られた。久しぶりの再会にそれはないんじゃないのかと思つたら「こんなうかなクリスマスプレゼント貰えない！返せない！」ということだった。後ろでハリーは、「僕はこの展開予想できてた」とかつぶやいていた。いや、僕もそれなりに予想してたけど、泣くレベルか？

ハリーがふたりに寄り添って、「うんうん。怖かったね」となだめていた。なんだよこんちくしょう。

久しぶりの再開のあとは、懐かしのコミュニケーションルームですごした。まだ、戻ってきたせいとも斑で、コミュニケーションルームに人がいなかったからだ。

「ロン。おじ様にありがとうと伝えといて。また「ピロー」が手紙届けられるようになったら直接お礼いますって」

「わ、私もお願いできるかしら。色んな色のワンピースとか服もあつてびっくりしてるのだけど、ええ、本当」

そんな、気にすることでもない。それはあの人たちの趣味みたいなものだ。「ネビル。父上に君のことも伝えておいたから今後、君にもなにか届くかも知れない。ただの趣味だから感謝して受け取っておいてくれるとたすかる」「ひえ」

「ひえ」とはなんだ「ひえ」とは。

近況報告をある程度済ませてから、探し物の話にうつる。結論から言うと成果はゼロだった。どの寮にも侵入したが、見当たらなかつた。そもそも帰宅している生徒が多すぎて、もってかえっていたらその所在がつかめないし、完全ではない調査だという。空き教室とかもくまなく調べたけれどそれらしいものはなかったようだ。

「ふうむ。」とハリーは考えるようにしてつぶやく。

するとハーマイオニーが、「あ、でも一応連絡しておきたいことがあるの」と手を打った。なんでも直接サジツタに聴きに行ったそうだ。「あなたはドラコが継承者だと思う」と

「するとね、兄が継承者であればそれはそれで誇らしいですが、今は悪評もついてまわっていますからね。でも、『継承者』であることと『石化事件』を一緒に考えるのがそもそも間違いなのかもしれません。そう思うと、やはり兄が継承者で、ただの愉快犯は別にいると考えたのが僕の希望です。とまあだいたいそんな感じ。で言ったの。」

「おまえの弟ほんとゆるがねえな」みたいな視線こつちに飛ばすのやめろ。

「なるほど、二つの事件を別々に捉えるというのはなかなか新しい見方だ」

「そう。継承者は継承者として別において、それに乗じてこんな事件を起こしている人がいるって考えたら、それはそれでなるほどって思っちゃったわ。」

それにしても、よくサジツタがそういう考えを教えてくれたな。と聞けば「図書室でときどき一緒になるのよ。」だそうだ。外では一切関わってこないが図書室では「マグルのおねえさま」と慕っているらしい。慕うならマグルじゃなくて名前を呼べなまえを。

学校が始まり、いつもどおりの日程がスタートしたとき、ハリーがおもむろに「嘆きのマートル」のところに行こう。と言い出した。どうしたんだと聞くと「多分今日だった気がする。マートルのところにリドルの日記が投げ捨てられる」と返ってきた。

急いで向かうとマートルは号泣していた。彼女を僕がなだめているあいだにハリーはその日記を見つけ出していた。どうにも僕たちが一生懸命頑張ったところで、決まっている道筋というのはあるらしい。一段と重くなった体を引きずって僕たちの部屋に戻った。

「さて、これをどうするかだが」

「秘密の部屋にいつてくる」

「いやいやまてまて」

僕は性急にことを進めようとするハリーを必死になってとめる。

「行ったところでどうなるんだ」

「バジリスクと会話してくる。どうせあいつがやってるんだ。」

「あんなに秘密の部屋に言っておいて未だに現れないんだ。日記を持っていてのからといって会話してくれるとは限らないだろう。それ

よりもリドルと仲良くなつてバジリスクに会つてみたいってお願いしたほうがはやくないか」

「無意味だ」

「確認だけど、バジリスクに人を襲わせていたのは、結局はリドルが日記の持ち主をそのかしていたからだよね。だったら、僕たちがそれを持つていけば、問題はないのではないか」

「…なるほどそれもそうだ。」

二人は、とりあえず、この問題を棚上げにすることにする。とりあえず、放置だ。これでバジリスクの被害が収まれば、必要の部屋かどうかで悪霊の火のなかにぶち込めばいい。といえばハリーは目からウロコのように「そっか。悪霊の火使えるじゃん。この体で制御できるかわからないから、弱火から確認してみる。」弱火っていい方。まあ弱火でも十分燃えてしまいそうな古さの日記だ。

「ついでにレイブンクローの髪飾りも回収してくる。」といつて回収し、一緒に保管されている。

それからは、とくにバジリスクの被害は起きなかった。(ああバレンタインで被害にあつた人間は少なからずいたようだが)いったい誰が日記を所持していたのか。という問題は残るが。被害がでなければいい。ハリーも悪霊の火がコントロールできるようになったと言つてきたので、そろそろどこかで燃やしてしまおう。という話になつていた。

「前はクイディッチの試合の時にハーマイオニーが石化したんだ。」
「だったらまだ先だな。と、さっさと燃やそうと日程を決めた。」

そうしたときに、寮監たちに呼び出しを受けた。

連れて行かれた先は、医務室で、隣にはロンとネビルも呼び出されたようだった。そこには石になった、ハーマイオニーが横たわっていた。僕は前回の彼女が、石になっていたのは知っていたが、彼女を見舞った記憶もないので(当然)少なからず衝撃を受けた。ハリーが「なんで、どうして」と呟いてから、医務室を飛び出す。みんながハリーの背中を追うので「僕が、失礼します」といって退出をした。

おそらく、リドルの日記の確認に戻ったのだろう。いままでは全てがおなじタイミングで起きていた。だから、僕たちに変な安心感があった。焦らなくてもいいと。なのに、なぜここにきてタイミングがずれるんだ。しかも、被害は前回同様ハーマイオニーだ…。

僕たちの共有のチェストの前でハリーはその中を見つめていた。「どうだ」と声をかけると「ある」とだけ返ってくる。まあそうだろう。そのチェストは僕たちがしっかりと呪文をかけ、開けられても、正しい方法で開けないと、ホークラックス等危険なものが収められている棚は現れないことになっている。誰が開けたかもわかる追跡機能付きだ。

「むしろ、なんであるんだよ！」

ハリーはぐしゃぐしゃと髪を掻き毟る。それもそうだ。なければまた誰かの仕業だといえるが、そこに在ってしまえば、そのせいにならない。というより、僕たちの仮定がひとつ崩れたことになる「リドルが誰かを操ってバジリスクをけしかけている」と。つまりは、今回のハーマイオニーの石化はバジリスクの独断なのか。

そう話をしながら僕は僕のチェストに手をかける。その瞬間奇妙な感覚がはしる。かけていた呪文が解かれている。そうして、チェストを見下ろしそつと中を開ける。そこに書かれていた文字は、僕が覚

えていた数字よりカウントがひとつへつていた。誰かが一度このチェストをあけたのか。

念の為にハリーを確認すると「まさか」と小さな声でかえってきた。明らかな侵入者。

「ちなみに聞くが、そちらは『痕跡』はあるのか」

「ない。痕跡すらもない。なのに、なぜドラコの方だけ？」

はた、と思いつくことがあった。僕は急いできていたローブを脱ぎ、ポケットのものを出すべく逆さにふる。このポケットは検知拡大呪文をかけていて色々なものを無尽蔵に入れていた。言い訳をしておく、僕のチェストの二段目にもかけていてそちらは、綺麗に整理整頓している。

ゴトゴトと落ちていくもののなかに、昨日入れたはずの薬がないことにきづく。

「まさかと思うけど」

「そのまさかだ」

「なんで！」

「僕が聞きたい。マンドレイク薬の在り処は毎日変えてた。僕の持ち物には全て魔法をかけてあるんだ。ローブに薬を入れ替えたのは昨晚だ。」

「つまり、昨日の夜誰かが僕たちの部屋にやってきて、そのブラツクホールみたいなポケットからマンドレイク薬を盗み出したってこと？僕たちこの部屋にいつも侵入者避けかけてるのに!?さすがに不可能でしょ！」

二人で、盛大に声にならない唸りをあげる。

あれは、ハーマイオニーが石になったときのためにつくっておいたようなものだったのに、肝心なときに使えない。いや、使えないのは

僕か。と情けなさに涙が出そうになる。無能がすぎるぞドラコマルフオイ。シヨックでうなだれていたが、先に復活したのはハリーだった。

「やつぱりバジリスクの独断ではないよ。君の持ち物からマンドレイク菓を盗んだところからも歴然だ。明らかな誰かによる行為だ。誰か、とはトムリドルだけでも、あいつのとなり足となりうごいている奴が居る。僕たちの部屋に入るのは不可能だけど、そうとも言えない。怪しいのは申し訳ないが」

「同寮のスリザリン。ああ。可及的速やかに見つけ出そう。」

「おやお怒りモード」

「くっそ腹立てている。僕に恥をかかせたこと後悔させてやる」

今回のことで、ホグワーツには再び不穏な空気が流れ始めた。授業に行く時は必ず教員が引率し、放課後の活動もできなくなった。ロンたちとは携帯でのやりとりのみだ。

そして僕たちは、リドルの日記を保管するのをやめた。無造作に机の上に置いたり、持ち出したりして、餌として動かしていた。けれども、その日記が盗まれることはなかった。ハリーのイライラは募るばかりだった。

その日見たのは、ハグリッドがファッジたちに連れられている場面だった。隣で「そういうこともあったねえ」と、そんなことにかまけている余裕はないとでもいうかのようにぶつきらぼうにハリーはつぶやいていた。が、その後ろにいる人物をみて急に目を輝かす。いや、まてあれは僕の父上だぞ。

「ルシウスさん。ご無沙汰してますお元気でしたか」
くるり、と父上が振り向く。

「やあハリー元気そうだなによりだ。ドラコも。ハリーのように可愛らしく私のところにかよってきなさい」

「ルシウスさんは今日のお仕事終わりですか？終わったならすこしお話しませんか？」

二人をみて、「自由だな」と心の底から思った。そして、このハリーを前のハリーに見せてやりたいとも。彼の提案に「用件は終わった。私も君たちに会えればと思ってチョコレートを持ってきたのだ」といつて僕たちに手渡してきた。ひとつだけ「ネビルロングボトム」というタグがついていて僕たちのよりワンサイズ大きかったことに、さすが父上抜かりがない。と感心した。

「ダンブルドアには一時退陣をお願いさせてもらった。あの森番については詳しくは知らないが、危険生物に関して前科があるらしく、魔法省はこれを彼に結びつけて考えているらしい。校長の退陣は一时的なものだ。総動が終われば戻ってくる。理事がとかではなく保護者からは今回のことで相当に不満と不安が溜まっていてな。とりあえず象徴を変えることで、溜飲をさげてもらおうという魂胆だ。まあ、危険生物であれば、誰が校長をしようと、何も変わらないとおもうがな」

「それは最もですね。ちなみに、危険生物の種類は特定しているのですか？」

「そこまでは聞いていないが、あの調子では特定していないだろうな」
「そうですか」

父上はハリーと僕に近くによれと招く。すると頭を撫でられた。何事かと思つて見上げると「ナルシッサからだ。グレンジャーが被害

にあつたと聞いてな。あいつが一番ショックを受けている。『友人が被害に遭うだなんてショックが大きすぎる』といって私に『これ』を託けた」

なるほど母らしい。と僕は笑う。ほんとう心優しい人だ。「ちなみにあの赤毛の分も預かっているのだが、チョコレートと合わせてお前に託ける。」といって父上は帰っていった。残念ながら、僕たちも口ンに会えていないんです。最近。

ハリーが秘密の部屋にいったってまたバジリスクに相對してくる。といたので「本当に気をつけろよ」と念をおして見送った。こんなにもバジリスクのところに足繁く通っているのに、なんでハリーに答えないんだ。と少し不満に思う。すると後ろから「彼の殺気が原因じゃないかな」と聞こえてきて、なるほどそうか。と納得した。

アステリアが死んだ日。覚悟はしていたけれど、とてつもない孤独感に襲われた。ずっと保存してあったウイスキーを出し、ストレートで飲む。溢れてくる涙を止める気にもならなかった。「先に、新しい人生を楽しんでまいりますわ」といったアステリア。底抜けにポジティブで明るくていつも私の陰鬱な心を慰めてくれた。「心残りなんてないですけど、しいていうならスコープピウスの将来の伴侶となるかたに会えなかったことですかね」といつてコロコロと笑っていた。愛しいアステリア。「ハリー様と今からでもお友達になつてくださいな。トリアの最後のお願いです」と私の身を最後まで案じた愛しいアステリア。彼女がいなくなった世界に、馴染めなくなるのではないかと意味がわからない不安感に襲われていた。

ギイとドアのあく音がする。「お父さん。」とスコープピウスが僕の隣にすわった。「僕が、まだお酒が飲めないのが悔しくて仕方ありません。ココアですが、お父さんの隣にいてもいいですか」と天使のように寄り添ってくれた。

この子が、悲しみに負けていないのに私が負けていてはと、新たな決意を日でもあった。

あの子が強い理由は直ぐにわかった。私がいて、アステリアとの思い出があつて、親友のアルバスがいたからだ。なるほど。自分にはアステリアしかいなかった。彼女がいなくなった穴を埋めてくれる存在が、あの子より自分の方にかけているからだ。

それから以前以上に、私は友人になれなかったハリーとの過去を思つては悔やんだ。あのとときああしていれば、こうしていれば。無駄

なたれば話をきいてくすくすと笑ってくれる愛しい妻はもういない。

あるときから、ハリーが僕の家を訪ねてくるようになる。それは、魔法界からだったり、ロンドンからだったり、姿表しだったり、交通機関をつかってだったり。様々な方法で私のところを訪ねては息子たちを眺めて、ともに酒を飲んでたわいのない話をするようになった。きつと、スコープピウスの配慮だったのだろう。日頃から、アステリアに「お父様はハリー・ポッター愛をこじらせているの。あの愛は特殊だから、気にすることはしないのよ」と言われていたのを知っている、最初の頃は否定をしていたが、その話をしている二人がなんだか楽しそうだったので後半はもう、放置をしていた。

もう二度と手放したくないと思ったんだ。

私は、私が間違っていて、正確に難ありだったと自覚をしても、じゃあどうすればよかったのかなんて知らない。友達の作り方はあの二人を参考にしたけど、どう親密になっていったかなんて知らないんだ。ロンとハリーは違う。本当に、私はハリーポッター愛をこじらせていたのだなあと今になって感じる。何が友達かわからない。どうすれば彼が僕のそばにいてくれるのかわからない。

ト だから、そんなに笑ってくれるなよ。パンジー、ダフネ、ミリセン

ゆっくりとうつつすと、目が覚める。いつもならパチリと目が覚めるのだが、疲れがたまっていたのかなと思って体を伸ばそうとするが、四肢が自由に動かない。椅子のようなソファのようなものに座らされていた。

「おはよう。ドラコ・マルフォイクン」

目の前には見覚えのない美少年が微笑んでいました。

「君本当にあのハリーポッターが好きなんだねえ。アステリアというのは誰？浮気？」

ゆつくりと覚醒する。目の前の美少年を見たことがある。この少年は誰だったか……。

「トム・マールヴオロ・リドル!？」

そうだ。この美少年は未来のヴォルデモートトム・リドルだ。つまり、ここは。と周りを見回す。石で囲まれたじめじめとした空間は、いつも彼が言っていた「秘密の部屋」そのものに違いなかった。初めて来たのに、ここがどこかわかる。それくらい奇妙な、それでいて不愉快な場所だった。

「まさか。フルーネームでその名を叫ばれるとはな。それにしても本当にアブラクサスにそっくりだな。君の父親も彼に似ていると聞いたが、本当か？それにしても動くとも本当に似ている。きれいなブロンドだ。羨ましいね。うん」

僕は彼の言葉に耳を傾ける。何をしようとしている。何が目的なんだ。

おや。というように彼は、こちらを振り向く、そして目の前まで歩いてきて「目的を、聞くのか。君が？マルフォイの嫡子の君が？」とせせら笑うように聞いてきた。

「君は、穢れた血は必要だと思っかい？」

僕は黙って彼を睨みつける。

「お前が操った人間は、誰だ。」

「操った？」

「日記の犠牲者だ」

ああ、と彼は僕の質問におおげさに相槌をうつ。

「そうだなあ。犠牲者という定義が多少不安定であるが、強いて言うなら、ジニー・ウィーズリーとロン・ウィーズリー、ハリーポッターと君。かな」

予想外の面々に僕は息を飲む。ジニーはなんとなく予感はしてたが、ロン？そしてハリー？

「ハリー!?ハリーに貴様なにかしたのか。」

「まだ、してないよ。まだ。ね」

「してないけど、君たちの魔力と魂を、ほんの少しもらったかな」

まあまあ、紅茶でもいっぱいのむ？と空気にそぐわない彼の行動と発言に「何がしたいんだ」という感情でいっぱいになる。

「最初はジニーだった。僕はね9月からずっと彼女の不安や悩みを聞

いてきた。勿論恋の悩みもだ。ジニーが僕に相談するたび、僕は彼女の魔力を頂き魂をもらった。もともともっていた魔力と足したらすぐに僕は自由になったよ。そうして、彼女より強くなったとき、僕の魂を彼女に少し注いだんだ。そうしてバジリスクを使って穢れた血を襲った。こういう場合は僕が襲ったことになるのかな。ジニーになるのかな。」

リドルはうーんと悩むふりをする。

まあそんなこんなで正直暇だなあと思っていた時に持ち主が変わるんだ。

「ここで、ロン・ウィーズリーだよ。彼は、自分の妹から日記を見つけ出す。クリスマスぐらいだったかな。そうして僕はしばらくかれのトランクのなかにいた。いつ使ってくれるかなとわくわくしていたんだけど、彼は結局使ってくれなかった。きづいたら、僕はジニーの手の中にあつて、トイレの中に『ぽい』だ。」

ただの記憶といってもかわいそうな僕。まさかトイレに捨てられるなんて。

「そうしていたら、すぐに君たちが現れた。気配ですぐにわかったよ。嬉しかったなあ。特に君たち二人のことはずっと見ていたからね。それから、君たちから魔力と魂をいただくことにした。ああそうそうあのチェスト。本当に居心地が悪かったよ。せつかく貯めた魔力が持つていかれるのがよくわかった。そうそう、君たちの会話も盗み聞きさせてもらったよ。本当に驚くことばかりで有意義だったよ。」

僕は、彼の話をききながら彼の自由度に驚く。

「ハーマイオニーは、どうやって…」

「ああ、それは僕さ。本当にありがとう。チェストの中に日記がある状態でもぼくは外で実体化ができるほどだったよ。ちよつと寮のそとにでて、バジリスクにお願いしたんだ。彼女は邪魔だったからね。ほほ、僕たちの真実にたどり着いていた。そうして、部屋に戻って、君の持ち物から『マンドレイク薬』だけを抜かせてもらった。ただそれだけだよ」

記憶に、ただの記憶に本当にそこまでのことができるのか不思議だった。そんなの無双じゃないか。彼は一番初めに作った分霊箱だろう。それで、ここまでのことができるのか。ふと見上げると、彼の手には二本の杖があることに気づいた。一本は僕のサンザシの杖でもう一本は……。

僕の視線に気付いたようで、彼は嬉しそうに説明をする。

「だって、僕は魔法使いなのに杖がないのは不便じゃないか。杖がないと魔法がままならない。バジリスクにお願いして石化させることはできても、それ以上はできないもの。これ？これはね。僕の友人、いわば協力者にもらったんだ」

■
そうして彼は、杖をひとふりして、僕が座っている椅子と同じ椅子を出し、ゆつくりとすわった。友人？協力者？それは、ジニーに会う以前か？「その質問については、答えない。僕は身内にはとても優しいんだ。」さて、本題について話をしよう。

「君が気になっていることは、こんな世間話のことじゃあないんだろう。ハリーポッターとも話していて気づいている。なぜ僕が、君を『スリザリンの後継者』としての足跡をなぞらせたか、だ。ああ足跡というより、条件に当てはめさせたか。のほうか状況にあっているか。」

「それは至極簡単だ。話す必要もないくらいにね。」

「君を『スリザリンの後継者』にしたかっただけだ。」

「申し分ないだろう。マルフォイ家の嫡子。どうせ、ゴントは僕の代で終わっている。ブラツク家も噂に聞くともう跡取りがないそうじゃないか。そうだったら『後継者』としてふさわしいのは『君』だろう。」

「さて、平和的解決と比較的平和的解決。君はどちらがいい？」

「とりあえず、平和的解決から聞こうか。」

いい顔で、にっこりとリドルが微笑む。

「僕が全力で君を手助けするよ。スリザリンの継承者殿。僕と一緒にサラザール・スリザリンの崇高な仕事を成し遂げようじゃないか」

「断る」

僕は間髪入れずにそう答えた。

サラザールの崇高な仕事がいっただいなんなのか考えたくもない。いや、きつと崇高な考えだったのだろう。でも、こいつらは、それを曲解し、自分の都合のいいように捉えている。そんな仕事に手を貸すつもりもなければ、この身をかしてやるつもりもない。

そうしなければ僕が死んでしまうとしても。僕は自分の身ではなく愛する者たちの安全を守りたい。前回選べなかったことを、こんないは選び続けてやるんだ。

「それは、非常に残念だよ」

リドルが、杖をひとふりするのが見えた。

前回目が覚めたときは医務室の中だった。

ああ、今回も不甲斐ない働きしかできなかつた。
目が覚めたら、また医務室かも知れない。いや、死後の世界でもありうるのか。

ぼやっとして脳みそがうまく働かない。混濁した意識の中で、誰かが会話をしている声が聞こえる。何とかして、目を薄く開くと目の前にはハリーが立っていた。周りは薄い光で包まれていて、彼の守りの呪文であることにきづく。ああ、また僕は彼に守られている。とつさに「ハリー」と叫ぼうとするが、うまく声をだすことができない。四肢も微動だにしなかつた。

「よく考えろ。バジリスク。お前の真の主は誰であるのかを。ここでお前が守るべきは誰で、誰がそれを害なす存在なのか。」

ハリーの、怒りを孕んだ冷静な声が聞こえてくる。

「こいつは、純血だ。お前が主人だというその男は、混血だ。ゴーントの。サラザールの血が流れているといえども、お前たちが言うところの『マグル』の血が流れている。どちらの意味がと尊いのか、お前の真の主はどちらの願いを尊ぶんだ。」

彼の声が、君は聴こえてくるだろう。

ハリーの姿は後ろ向きで表情はわからない。しかし、ニヤリと不敵な笑みを浮かべただろうなと思った。

「何を言うんだ。蛇語もあやつれないただの純血が、スリザリンの後継者たる僕よりも尊敬される存在だと？」

リドルの声が響く。

ハリーは、そのリドルの声が聞こえていないかのように、淡々とバ

ジリスクに言葉を紡いだ。

「バジリスク

「僕は君に、何を守るべきなのかと問うてる。」

その瞬間。周りが真っ赤な炎でいっぱいになる。その炎はバジリスクと同じぐらい大きな蛇の形を模していて、ハリーとバジリスクを囲うように、ぐるりと円を描いた。僕とリドルは、彼らから分断される。

そして、リドルとバジリスクが怯んだすきに、美しい所作で、それは無駄のない動きでバジリスクに縮みの呪文をかけ、所持していた小瓶に収めていた。

「バジリスク。君には時間をあげる。

サラザールの意思とは何か。君の役割とは何か。

この中でゆつくりと考えるといい。

まあ、ドラコに害をなそうとした大罪については、君がどんな結論を導こうと絶対に許さない。」

悪霊の火が、ぐるぐると回転し、円を作り続ける。それに、近づくこともできないリドルに向かって、まっすぐにハリーは杖を掲げた。「お前の犯したついでについて、言い訳ぐらいは聞いてやるよ。」

そういうとともに悪霊の火が消える。すかさずリドルがハリーに向かって杖をふるが、そこはハリーのほうが早かった。「エクスペリアームス」で武装解除をし、リドルの杖を奪う。からの繰り出される「ペトリフィカス・トルタス」に、リドルはもう一本の杖を手から落とされていた。

その落ちた杖をハリーは拾い、ローブの中に収める。

「あらいいざらい、吐いてもらおうか」

そういつてハリーは、自分自身のもりドルでもない、また違う杖を取り出した。そしてリドルに喉杖のピタリと抑える。

「ああ、これ？ DADAの素敵な先生から、あずかったんだ。まああれだよ。念には念をいれておこうかなって」そう思ってたね。さあて、話し合いの時間だ。

そこまで聞いたところでまた、意識が遠のく。

耳の奥でハリーが許されざる呪文「磔の呪文」を唱える声が聞こえた。

自分で言うのもなんだけど、僕は本当に姫属性なのかもしれない。肝心なときは囚われの身ってどういうことだ。しかも前回同様最後は意識飛ばして、目覚めるのは医務室って。穴があったら入りたい。邪魔だけはしないでおこうと思ったクリスマス前、いや僕邪魔にしかかってないな？ 足でまといだな？ 帰ってくる場所であろうって、いや自分がとらわれていたら意味ないな。本当、本気で自信をなくしてしまおう。

「ドラコ…？ 目覚めた？ からだ大丈夫？」

僕の枕元の椅子に座り、仮眠をとっていたらしいハリーが僕に声をかける。「ぼちぼちだが、体が自由に動かない」「結構複雑な呪文かけられていたから」そういつて僕の体をささえ、クッションを背にもたれかかる形に、起き上がらせてくれた。

「終わったのか。」

「まあ、一応ね」と、

何かを聞こうと口を開くが、ハリーのほうが早かった。

「君と秘密の部屋から戻ってきたとき、すぐにルシウスさんが来たよ。しばらくはいたんだけど、君は一向に目を覚まさなくて。意識はあるし、無駄に屋敷に動かさないほうがいいだろうってことで、僕がここに残った。『目が覚めたら、すぐに連絡してくれ』って」

「そうか…僕はどれくらい？」

「うーん…2・3週間ぐらい？」

「むしろ僕、よく目が覚めたな!？」

衝撃の長さにびっくりする。僕が目覚めない間。色々なことが濟んでいた。例えばギロルデイのこと、石化されてしまった人々が、スネイプ先生が作ったマンドレイク薬で無事日常生活に復帰したこと。

「ハリー。」

「なに。」

「解決編。僕に解説を頼む」

ハリーは盛大にため息をつく。心底「嫌だなあ」という気持ちがちらに伝わって来る。が、僕もここはひけない、じつと彼の目をみて訴えかけた。「仕方ないよね。」と彼は僕に話す気になったようだった。

さて、解決編スタートということで、しばらく彼の言葉に身を委ねよう。

「といっても、特別なことはないんだ。あの日、君に起こされずに自分で目が覚めたから、君がいけないことにはすぐにきづいた。『談話室でまっているのかな』と思いつながらちエストの中を確認したら日記がないから。僕はひどく焦ってすぐに、談話室にいったんだ。」

「そしたら、みんながとてもぎわめいていて。パンジーなんか泣きそうだった。『何があつたのか』と聞いたら、君が、『秘密の部屋に連れ去られた』と

「僕は僕の耳を疑ったね。やられたと思った。君ならあのチェストの開け方を知っている。そこにつけこまれた。」と

「そうして、急いで秘密の部屋に降りたら、君たちがいた。君と、トム・リドルがね。そうして、彼等とまあなんやかんやあって、決着をつけたんだ。バジリスクはこの瓶の中にいる。なんやかんやと誤魔化すな？ いちいち説明するの面倒じゃないか。結構平和に会話したんだよ。君は知ってたとおもうけれど、僕はどうしてもバジリスクを生け

捕りにしたかったし、まあ上手くいばリドルもこっち側に引き込まれたかったからね。リドルの呼びかけでバジリスクが出てきたところで回収し、そのあとは、リドルと話し合いの結果、ほら

「リドルの日記。彼はまだこの中にいるよ。分霊箱だからいづれ壊さないといけないんだけど、壊したらせつかくのリドルが消えちゃうからね。リドルの存在の拠り所を今、僕の魔力に移しているところさ」「大丈夫だじょうぶ危なくないから、そんな目しないで

曖昧に、本当に曖昧にあの部屋での出来事を伝えてくる。平和的とは、僕の耳に残っているあれは、気のせいなのだろうか。あれは僕の悪い夢か？「それでハウスエルフのことだけど」

「ちよつとまで、秘密の部屋でのことはそれで終わりか？」

「え？うん」

「日記の所持については聞いたか。」

「ああ。一応」

「あれは、結局、ジニーがもっていてその後ロンがもっていたらしい。が、そこにどうしても僕は引つ掛かりを覚えるんだ。あいつはロンの手元に渡ったのはクリスマスあたりといったが、そうなると、『決闘クラブ』の時の所持者はジニーということになる。蛇を出し、僕に蛇語を使わせたのはジニーか？それが、あの子はできるのか？」

ハリーは一度空中に目を泳がし思索する。「うーん」と唸ってから僕に向きなおした。

「リドルが僕と君に言っていることには多少のズレがあるみたいだね。そう、ズレ。君は『協力者』という言葉を彼から聞いたかい」「ああ」

「ロンの手にはおそらく渡ってないよ。ジニーのあとはその『協力者』の手に渡っている。だから決闘クラブのときは、その協力者によってアレらが引き起こされてるんだ。けれども、その『協力者』について、

リドルは口を割らなかつた。だからそれが誰なのかは、わからない。時間が経てば彼は教えてくれるかもしれないけどね」

そうか。と、僕は頷く。

彼は、僕に全てを話す気はないんだな。まあ、いい。先に「話を止めたビビとドビーについての話を聞こう。」そういつて彼に、続きを促す。

「あれがねー。本当にふざけた話なんだよ。本当に。本当になんとうか、どうでもいいというか、関係ないことはないんだけど。えっと。ルシウスさんが来た時に、一応今後の為にもドビーイベントはこなしとおこうと思つてね。ほら、彼らは僕らとかかかつてる制限違うしき。そしたらさー、もー。なんて言うんだらう。ドビーはマルフォイ家のハウスエルフじゃなかつたんだよね。

「いや、わかるよその気持ち。ちよつとそんなおもしろい顔しないで「なんていうのかな。マルフォイ家に雇われてるハウスエルフ？みたいな？いやあ。靴を履いているドビーが当たり前すぎて、今回のドビーも靴履いてることに違和感なかつたんだよね！仕事中はほかのエルフと同じようにしてるらしいから君が知らないのも無理ないんだけどね！」

「ルシウスさんが当主になった時に、ハウスエルフのくせに人間のような要求をするから面白がつて衣服をあたえたらしいよ。賃金もはらつて雇つてるんだつてさ。」

君の父親まじでイレギュラーなんだけど。つて、良いことではないか！うん、まあ確かにイレギュラーではあるのか。そうか、気付かなかつた。まつたく。「ちなみにビビも同様だつてさ。だからあれもドラコが言つたとおりで正解。エイブリー家が雇い主ではなく、ルシウスさん雇い主の主人はサジツタだそうだよ」とまあ次々と知らなかつた真実が明るみになっていく。

「とまあそんな感じで自由の身のドビーは自由に色々やらかしちやつてくれたわけです」

そこでひとつの嫌な仮定が脳裏に浮かぶ。

「つまり、ドビーだったということは、だ。前回のことを踏まえて考えるならば、彼はその秘密の部屋の話や君が罨にかけられるというのを聞いて、あれやこれや頑張ろうとしていたんだよな。今回も彼は、「僕の屋敷」でそれを「聞いた」のか？」

「ううん。」とハリーはくびをふる。

「ドビーが言うにはね、その話はビビから聞いたんだそうさ。ビビがぼろっと漏らしてしまった。というほうが正しいかも知れない。ビビはどこでどうそれを聞いたか教えてくれなかったそうだから。けど、まあその場にルシウスさんもいたし、雇い主がルシウスさんだといふのなら、家に帰ってからなんらかの方法でビビに聞いているかもしれないね」

それを聞いて少し安心する。父上が、やはり絡んでいるのか。と思うとうとうしても気持ちいが辛くなる。父上が今どのようなお立場にいるのか定かではないが、「そうでなければいい」と望んでいる。当然だ。今回のことについては、そこが発端ではないことに安堵した。

「まあこんな感じかな！元気になったらまた、リドルに会わせるよ！君には「額を床に3センチ以上沈めた上で、謝罪しろ」って言ってるから！とほがらかにいう。ハリーのなかでは全て解決して、その表情のとおり、本当に誇らしいんだらうなあと思う。

そしてその反面。やるせない気持ちを押し寄せてくる。あんなに「報連相」をしろと行ってきたが、こいつは僕に「報連相」をするつも

りが全くないということに、気づいたからだ。僕に全てを話していない。うすうす気づいていたが、今回のことでそれが決定的になった。

「ハリー。できれば正直に答えて欲しいことがある」

「えつなになに？君のことが好きかって？勿論！」

「この2年生になってからでいい。僕に対する嘘・もしくは秘密はいくつある。」

彼が無駄に作ろうと・変えようとしていた空気を、彼が望まない形に変える。彼は、上げていたテンションをおろし静かに「いいたくないんだけどなあ」という前置きを置いた上ではつきりと

「二つ」

と答えた。

僕に嘘をついていると。なぜ認められる。まだ「そんなものないよ」とあの嘘くさい笑顔で言われた方がましだったと思うのは、僕のがままなのだろうか。

「それは、僕に言いたくないことなのか。言えないことなのか」

返ってくるのは沈黙だ。

「僕は、嘘をつかれたくない。嘘をつかれるのはツライ。何を、信用しているかわからなくなる。僕は何のためにここにいるんだ？」

泣きそうな声で、僕はいう。

長い沈黙があった。

僕は言葉を重ねることはしなかった。ハリーの、この男の考えを、思いをなんとしても聞きたかった。

「僕を信用して」

「どの口が」

「ドラコは、僕だけを信用して。」

「だったら」

「他の誰でも、まず疑って。ロンもハーマイオニーもサジツタもルシウスさんもナルシツサさんも。何がどうなるかわからない。だけど、その中でどんな時でも僕だけを信用して」

「それは、わがまますぎないか？君は僕に嘘や隠し事があるのに、信用してだど？」

「そうだよ。」

「貴様……！」

「ドラコも僕に嘘や隠し事をしてもいい。僕は君が僕に『発言』したことを信用する。君が嘘をつくのも隠し事をするのも『必要』だからやっていることで、それを僕は疑わない。それも含めて僕は君のことを一番に信用するし、君のことだけを信用する。だから」

「だから、ドラコ。君も僕だけを、僕の『発言』だけを信用してくれ」

すごい。殺し文句だ。

僕の発言だけを信用すると。僕が言えないことや隠したこと、そして嘘も含めて「信用」すると言っているのか。そして、だから、自分のことも『信用』してほしいと。それは、何を保証に信用にたると証明するのか。

「それは、ドラコ。愛だよ。」

「愛？」

「あのダンブルドアが無駄に振りかざした。この世で一番信じられないもの。それに振り回されたスネイプ先生だったけど、けれどもスネイプ先生の「愛」は本物だった。この世で一番信じられるものも愛だ。」

「それは、」

「僕は君への愛を保証に、僕は君を信用していると、証明する。」

僕の愛を保証に僕を信用してくれなんて傲慢なことは言わない。君は、君の僕に対する愛で、僕のことを信用してくれ。

と。

この男は、それも十分に傲慢で、贅沢な要求であると、気づいているのだろうか。

「その二つは、生涯僕に言えないのか」

「一つは、きつと時期に君に分かる。もう一つは、言いたくないな」

「はん。言いたくないのか、それはなんとも子供っぽいなあ」

「だって君に嫌われたくないもん」

「嘘をつく男は、嫌われるぞ」

「だって」

「まあそれは一般的な女性たちの意見だな。僕は一般的な女性ではないから」

「ないから」

「君のことを、信用してやる。勿論、貴様にあるなけなし程度の愛で、だが」

そういえば、と帰りの汽車の中で思う。

愛について語るには、僕たちは思春期を通り越してしまっている。けれども若者にかたるほど年を重ねてもいない。恥ずかしいようなむず痒いようなことを、目の前の男は語るから、完全に流されてしまった。まあ、このたびの「流された選択」については、僕自身を許してやろうと思う。

何が正しいかなんてわからないけど、けれども、「ハリーポッター愛」の強い僕にはふさわしいだろう。軽く微笑むと、アステリアとスコーピウスの声が聞こえた気がする。「あの人はハリーポッター愛をこじらせてるから」「本当だねお母さん」あの頃と変わらない瑞々しい、優しい声だった。

そういえば、次は3年生。

ハリーの名付け親とルーピン先生か。

そう思ったところで、穏やかな気持ち冷めていくのを感じた。僕は彼らのことを書籍の中でしか知らない。知らないけど、彼らもポッター愛をこじらせていた気がする。

気のせいということにしておこう。そして、今回の休みはみんなを僕の家で招待して楽しくすごそう。次の学年への不安を振り払って、僕は楽しい計画に現実逃避をしたのだった。

somebody's regret Harry
side 2-1

こんにちはハリーです。今日も今日とて僕には手紙が一枚も来ません。ハーマイオニーやロンはいい。どうせドビーが手紙を差し押さえてるんだろう。けれども、ドラコ。お前は許さん。僕は、プリペット通りの住所を教えたのだ。なのに、なぜ、一枚も僕のところ到手紙が届かないのだ？僕の、この、状況を、誰よりも、理解しているはずなのに！僕泣いちゃうよ!?

ドラコは僕の知っているドラコだったとわかったのは、一年生が終わることだった。遠回りをしていたのでは？という会話はとうにしましたが、本当「それな」案件すぎて、笑い通り越して真顔だ。

はあ、ドラコとの一年生もつと楽しみたかったな……。いや、楽しかったけどそうじゃなくて、僕のドラコだったわかってたらもつともつと楽しんだのに……。なんか損した気分。だけれども過ぎた一年間を嘆いても仕方ない。これから、これから！ってことで、僕は毎日ポストに手紙を確認しにきている。おかしくない？ありえなくない？

まあ、それでもせめて誕生日には来るだろうと思っていた僕が、その考えが甘かったことを先に述べておこう。

ビビというハウスエルフがきたことは、ドビーがビビに変わったただけで僕としては些細な問題なので割愛しておく。念の為にいつておくと、僕の人生にとって重要なことはドラコであり、そして僕の前回手に入らなかった学生時代の謳歌である。ヴォルデモートとかほん

と、僕の人生の本筋ではない。

部屋がめちゃくちゃになろうが、バーノンおじさんが怒ろうが、「魔法不適正使用取締局」から連絡がこようが、なんてことはない。そうなったらひとりでダイアゴン横丁までいくし。姿表しでもなんでもしてドラコの家にいけばいいと思っていた。(この体になってからまだやってないけど)けれども、本当に大筋は変わらないんだよね…。と目の前の赤毛の友人のロンとその兄フレッドとジョージをみて僕はつぶやいていた。

そうして、僕は無事にあのかわいそうな家から脱出することができたのだった。ちなみに、やはりこの瞬間までドラコから手紙はこないし、この救出作戦にもドラコは参加していなかった。何かを察したロンが「僕はフレッドとジョージにまきこむなって言ったんだよ」と言っていたが。「ありがとう」とだけ微笑んで返しておいた。それはそれ、これはこれ。優しい友人をもったなドラコ。

「ハリー、誕生日おめでとう。これプレゼント」

ロンは、兄二人が運転する車の中でハリーにプレゼントを手渡す。ハリーは「そういえば。前回は誕生日の日じゃなかったな」と過去のことを思い出しながら、やはり、プレゼントというのはいくつになっても何回もらっても嬉しいな。と改めて感じた。

「うれしい！初めて誕生日プレゼントもらった！大切にするね！」

「よかった…って初めてなの!?!」

「そうだよ！どうせ僕のこときにかけてくれるのはロンだけだしね！」

ハリーのめちゃくちゃ美しい笑顔にロンは全てを察する。ドラコの再教育のおかげで、ときどきは空気が読めるいい男に成長している

ロンである。これは、ドラコから何もなかったことに怒っていることぐらいは、さすがに察しがついた。ドラコがハリー愛が重いのは知っているが、ハリーも大概だな。というのがロンの意見である。もちろんロンはハリーに「前の世」があったなんて知る由もないので「ハリーがドラコの毒牙にそまってしまった」というのも彼のもっている認識である。

「ドラコは直接渡すって言っていたよ」

「ふうん。」

「だから、君のことを忘れていてもないがしろにしているわけでもないよー。」

ウィーズリー家につく。前回同様にペナルティをモリーから言い渡されるロンとフレッドジョージを横目に、ハリーは丁寧にあ挨拶をする。今回は前回と違ってスリザリン生だけでも、快く受け入れてくれた。「疲れたでしょう」と椅子に促される。モリーの後ろに幼いジニーがいるのが見えた。

「昼ごろまでドラコもいたのよ。ロンの宿題をみてくれていたの」

「そうなんです。もうすこし早くお邪魔できていたら…」

につこりと、丁寧に戻す。彼女の前では「いい自分」でいようと思うのはもう義理の母にたいする癖だ。うん。仕方ない仕方ない！そうして、目の前の懐かしさに、浸っているとうしろからロンに声をかけられた。

「ハリーー！あいつ妹のジニーなんだ。」

「ジニー。可愛いね」

「はは。いつもならおしゃべりしてるのに、かわいいって言われてシヤイになってる！あいつ、ドラコと一緒にになってハリーオタクしてるから。君にあえて舞い上がってるのかも！」

そう、ジニー。僕にあえて舞い上がってくれるんだ。しかもそれをドラコと。ありえないような現実が目の前に広がっていることを実感する。ジニー。いつだってきみは勇敢だった。きつと、君もあの彼女のようにたくましく勇敢に、導くアテナのように。

「ハリー。僕の部屋で遊ぼう！ドラコに何か伝えたいことある？」

「ん？だいじょうぶ！ヘドウィグに頼んで、手紙もっていってもらったから！」

「そう？だったらいいか！なにして遊ぶ？」

またまた、こちらの光景も懐かしいな。察が違ってロンと一緒に過ごす時間は前回と比べて全然なかった。だから、こんなふうに、遊べるとは思っていなかったのに……。うん。とりあえずは、いっか。薄情者のことはおいておいて、遊ぼうっと。

ロンの携帯がふるえる。その画面をみてロンは「うげえ」とわかりやすい反応をしていた。「どうしたの？」と聞くと「ドラコの弟。知ってる？サジツタっていうんだけど、あいつが来るって。そういえば、ジニーと同じ年だった」と心底いやそうな顔で返ってきた。「ドラコ

に全然似てないんだ。」

「どんな弟なの？」

「似てないというか体面を取り繕おうとするいい子なところは同じなんだけど、すごい嫌味つたらしいやつ。多分頭がいいんだけど、それに自分で気づいてるタイプ。」

なるほど。それはロンと合わなさそうだね。といって笑ったら「それはそれでどういう意味だよ」と言われた。確かに、それもそうだ。ごめんロン。前回には存在しなかった人物に期待を抱きつつ、ロンの反応にいささか不安がよぎる。うーん。前回のドラコみたいな子だと思っていたのだけど、一筋縄では行かない感じなのかな。

そう警戒してであったドラコの弟サジツタ・エイブリーはなんともいえない、思考がぶつとんだ、狂気を孕んだ少年だった。つい、ドラコが僕にした仕打ち（誕生日を祝ってくれないとか、手紙を送ってくれないとか）全てを忘れてしまうほどだった。なるほど、これは曲者まさか大好きなドラコの弟にたいして「サイコパスかな!？」と叫ぶとは思っていなかった。

書店での初対面を果たし、ボクとドラコはカフェにきていた。

席に座るやいなや僕はサジツタのことをドラコにぶつける。似てない似てない！ドラコには全く似てない！見た目も全然似てない！安心して、全く違うから！そう思いながら「ドラコじつとして」といって彼を見つめる。美しいブロンドときれいなアイズグレーの瞳が僕を見つめる。どうしたと困惑した表情も本当にたまらなかった。この顔が好きだ。でもこの時代にこの表情が僕に向けられることはなかった。だから、今しつかりと堪能したいと持っても別にばちは当

たらないだろう。

それからは近況報告を行った。主にはハウスエルフのことと、リドルの日記のことだ。書店でリドルの日記イベントは起こらなかった。しかし、「ビビ」というエイブリー家のハウスエルフが僕のところに残れた以上、前回とおなじリドルの日記騒動は動き出しているに違いない。どういうことだとうんうんなるが、途中あきて、つい「リドルの日記って優先度低くない？」といったら当然のように「低くないだろう」と言われた。真面目か！

クリスマスに機会があれば、ウィルトシャーのお屋敷に遊びに行く話をして、僕は例の話に話題を移す。それは「僕の誕生日」についてだった。我はマンドレイク薬を所望するなり。

「作ってあるんだが、一人分だ」

「えー。そうなの？なんで」

「ほかの薬を作るのに使ってしまった。せつかくのマンドレイクだからなー！こう、自分の中の欲望を収めきれなかった！」

「まあいいよ！あつじやあさついでにお願いしたい薬もあるんだけど…」

「ほう、聞こうか。」

と、こんな感じで僕たちの二年生は幕を開ける。

はい。予定通り目の前の柱は塞がれておりホームに入れない現象発生。いやあごめんロン。知ってて、君に先に行かせるような真似し

てごめんよ。謝罪の代わりにぶちまけた荷物整理しておくからドラコに連絡してくれるかな！

「わかったー！」といってドラコに連絡をする。「あきらめようロン」と言っているのに何度も挑戦しようとするロンに僕は涙がでそうになった。「ああなんて健気な少年なんだ…。」

申し訳ないけど、絶対無理。運命って変わらないようにできてるんだもん。去年一年間で僕はそれを感じたし、ドラコも記憶を持っていて好きに動いていたっていうのに、物語の本筋は変わらなかったんだよ？無理無理ああああ、だからロン…。

そうしていたら颯爽とドラコが現れた。

が、それはホグワーツへの登校難民が一人増えただけだった。

前回と同じ提案（空飛ぶ車案）をするロンをなだめて、僕はドラコの指示でホグワーツにフクロウを飛ばす。誰宛にするかときいたら「お好きにどうぞ」と言われたのでお好きにした。きっとあいつは「ダンブルドア以外の誰がいるんだ」って思っているんだろうけど、僕はダンブルドアとは極力関わりたくないんだ。そして、できるだけスネイプ先生と仲良くしたい！ということで「スネイプ先生」宛にフクロウを飛ばした。学校以外で見るスネイプ先生って僕なにげ初じゃない?!楽しみ度が増してきたぞ！

コーヒーとベーグルをドラコから受け取って、ホグワーツの迎えはいったいどれくらいかかるのだろうか。と考える。キングクロス駅を出発して、ホグワーツにつくのは約5時間だ。そう考えると、それくらいの時間は僕たちも覚悟しておかなければならないのか、と気分が下がっていたところに、救世主。黒づくめのスネイプ先生が目の前に現れる。え！早くない!?さっすが先生！

「先生！はやい！さすが！ありがとう！」

と先生に飛びつこうとするも、するりとよけられてしまう。くそう。両手がふさがっていなければもつと俊敏にハグを狙いにいったのに！は！このコーヒーのスネイプ先生に渡せばスキもできてハグもできるので!?という僕の名案は、ドラコに止められた。うううう。スネイプ先生、外でもその服なのです。目立ちます。けど揺るがない先生がスキ。

そのまま付き添い姿現しで、ホグワーツに向かう。とりあえず、スネイプ先生の研究室までついていくことのだが、会話がない。ロンはあれから一言も口をきかないし、ドラコにいたっては何か考えてる様子だった。これは、どう説明したものかと考えているんだろうなあ。真面目ない子だ。こういうところがドラコの良さだと本当に思う。うん。説明面倒だから君に投げるね！

しかし、さすがのドラコも彼を納得させる説明はできていなかった。ロン視点で説明したとしても、原因も何もわからない。だからといって僕たちが知っていることを話すことも危険だ。中途半端に事実を知っている僕たちが、スネイプ先生が納得できるように説明するのは至難の技だった。ここはもう、この方法しかないだろう。

そうおもって僕は目頭ににギユつと力を込める。ローブも握り締め、うるうると先生に訴えかける。すると、先生はわかりやすく狼狽えて隣の私室へと消えていった。

「落ち着いたか」

「はい。すみません先生。パニックになってしまっ」

「いや、いいのだ。確かに『わからない』ことほど不安になることはない。君たちにもわからない原因について、君たちを責めるように聞い

「私がいけなかったのだ」

スネイプ先生が出してくれたお菓子を三人で食べる。最初は警戒していたロンも「ありがとうございます」といって手をつけていた。なかなか来ることもない、この地下室の研究室に彼は、キヨロキヨロと視線を動かしていた。

「そういえば、ポッター。君がクリスマスに作った水薬のハンドクリームがあっただろう。」

「ああ！ドラコの為に作ったやつですね！」

「あれの作成をウィーズリーの双子にあげてもいいだろうか。レシピを彼らに見られてしまつてな。事情を伝えたら「これは商売になる！」と言って制作したいといつてきたのだ。制作するのは吾輩は構わないのだが、売り物にしようと考えているようだな。」

ロンは、頭にはてなを浮かべている。それもそうだ。双子の兄とスネイプが関わっているようなことを聞いたのだ。ロンは知らないが、実はあの双子とスネイプ先生は繋がっている。優秀な双子のもてあましている実力を悪戯ではなく、有用な方法で発揮しろ！といつて研究室にひきずつてきたのが始まりだそうだ。（ちなみにこのこと自体は一年生の頃双子と研究室で遭遇したときに聞いていた。）

「ああ、大丈夫ですよ。僕はドラコの為にあれを作つて、もうすでに彼にプレゼントしているのです。それに、先生には申し訳ないですけど、調合が苦手な僕がアイデアもっているより、彼等のほうがより活用してくれそうですしね」

「では、そのように彼に伝えておく。」

「あ、ただし僕自身が無限に手作りすることは認めてくださいね。」
「もちろんだ。」

「でも、先生。生徒に校内でのそういう行為をお許しになるのですか？」

「校内？」

素晴らしいながら先生はニヤリと笑う。あつ何も知らなかったことにします。はい。

マクゴナガル先生とハーマイオニーがロンを迎えに来たため、僕たちもそのまま寮に戻る。スリザリンのみんなは僕たちが汽車に乗っていないかったことについて特段聞いてくることもなく、この長期休暇の話題をしてそれぞれの自室に分かれた。

ああ、疲れた。予測をしていたことでもあるし、特別事件が起こったわけでもない（実際、罰則も何もない。研究室で優雅に時間を潰しただけだ。）けれども、やはり、疲れた。こんな言ひは一人で寝たくない。ドラコに甘やかしてもらおうと、彼のベッドに入る。ぶつぶつ言っていたが、ただの振りだ。彼は僕を追い出すこともなく一緒の布団へいることを許してくれた。

が、それはこの話題のための前フリだったのだろうか。まさか、ジニーのことをこのタイミングで言われるとは思っていなかった。僕は！もう疲れてるんだ！その話よくない!?!と思うが、それは出さずに彼の話に耳を傾ける。

ああ、ジニーはかわいいし、以前と変わらない勇敢さを兼ね備えていると僕もわかった。けれどもドラコ。よく聞いてくれ。僕は、今回、ジニーは選ばないよ。僕はジニーを幸せにはできないから。僕は彼女を愛さないから。僕は彼女を傷つける。そして彼女も僕を傷つける。僕が幸せにしたいのはドラコだし、僕を幸せにしてくれるのも誰でもない。ドラコだよ。これは、約束したことなんだ。僕の人生で

決まっていることなんだ。ドラコマルフォイを幸せにする。それが僕の存在意義で、ここに理由なんだ。

そんな思いを込めて、いや、隠してかな。僕がドラコに返した言葉は、どうぞ勘違いしてください。とでも言うかのような言いようだった。

「未来の奥さんじゃなくて、前の僕の奥さんだし、彼女を守るのは、君にとっても当然のことだろう」

さて、明日は二年生一日目、たのしい学校生活を過ごしましょうかね！

一日目の授業は、それなりに楽しく終えた。ドラコがマンドレイクの鉢を掠め取ろうとしていたから、悪魔の囁きをしてあげたのに、彼はしっかりと我慢していた。変身学の授業ではコガネムシをボタンに変えるのにドラコとどっちがかつこいいのが作れるか競い合った。後半飽きてきてゴキブリに変えて、次のロックハートの授業に仕込もうかと考えたならドラコに頭をひっぱたかれた。

「不潔な方法がだめなのかな？」と、違うと分かりながらも勝手な解釈をした僕は、彼をお花でみたすことにした。あんまり多くの種類の花がわからなくて、生やしてあげることができなかったのが悔やまれるくらい、ロックハート先生は素敵な花壇になっていた。そのままじつとして花壇になっちまえばいいのに！

昼食ではコリンクリービーと遭遇した。遭遇という言い方はこの場合正しいのだと声を大にして訴えておこう。変に絡まれてもいやなので、「はいはい写真でしょおーけーおーけー」と、一枚とっておいた。

そんな、平凡な日々を過ごしながら。(勿論リドルの日記のことは忘れてはいない。けれども、あれを僕の学校生活のメインには置きたくないのだ) 待ちに待っていたイベントが始まった。それは、クイデイツチ選考会のお知らせである。

「僕はシーカーはしない。ドラコ。君がシーカーをしなよ。」

「は？何を言っているんだ。君がシーカーをすべきだ。僕はチェイサーをする」

「チェイサー？」

聞くと、ちゃんとした理由があつて、チェイサーを希望しているよ

うだった。なるほどなるほど。

「そっか。わかった!」

「じゃ、それでいこう。」

「うん!」

きっと彼は僕が「シーカー」と書くと思っている。が、今のドラコの話聞いてシーカーを選ぶハリーポッターがどこにいるか? 答えは、どこにもいない! なにそれめっちゃ楽しそう。ドラコとクアツフルを匠にあつかう連携プレー! フレッドとジョージが、ビーターで似たようなことをしていたが、それをチェイサーで、やばいやりたい! となっただけである。だから僕は「チェイサー」と希望用紙に書いた。

二人でチェイサーになる予感しかなかったから、それからの僕はそのことで頭がいっぱいでずっとニヤニヤが止まらなかった。ドラコどんな反応をするんだろう。

とまあそんなこんなで、前回何が起こったかなんて復習することもしなかったよねー。グリフィンドールとスリザリンのブツキングからの、争い勃発。けれども、まあ前回と違ってドラコがなだめてくれた。それはもう先輩にたいして挑発しまくる形で。もう、君そういう方法しかとれないの? と思いつつも、僕も一緒になって言ってしまったから同罪である。

二人で、スネイプ先生のところにでも行って土曜日優雅にすごすか。と振り向いたところで、おそらく今回のキーパーソンが現れる。うっわー。こつちのことも完全に忘れていたよ。

サジッタは、予想通り、偏った立場による正義で論をぶつけてきた。一周回っておもしろいぞ。そして、ハーマイオニーが口を出したところで今後の展開が手に取るようにわかる。サジッタの『穢れた血』発言で僕は彼の頬はひっぱたいていた。

やつちまった。と思って振り返ると。ドラコは右手を振りかぶっているわ、グリフィンボールの皆さんは杖を手に持っているわで「むしろ僕がたたいて正解だったのでは」と思う。

兄のサジツタを責める言葉に、彼は何も返さずに帰っていった。その瞳が、どこかでみたことあるような気がして、あれは、いつかのドラコだったか。と思い出してみるけれど、思い当たらない。なににしても、あの頃のドラコは「悔しい」が多かった気がする。うん。さすがにドラコも11歳であの目はしていなかった。あんな「全てをあきらめたような目」は

ドラコは、サジツタが前の自分と同じであると考えているらしい。「周りの大人の意見」が正しく、疑っていなかったあのころ。本来の意味を考えることなく使用していた当時と。本当にそうだろうか。僕は彼と出会ってまだ数週間だけれども、サジツタ11前のドラコとしてみるのは浅薄すぎるのではないかと思う。あれは、「わかっている」やっている。「理解して」発言をしている。先ほど言い返してこなかったのは「言い返せなかった」のではなく「言い返さない方がいい」と判断したからだろう。

そのことをドラコに伝えようかなと思ったが、やめておくことにした。サジツタは彼の弟である。身内のことをそんな風に言われて、いい思いはしないだろうという判断だった。

さて！新学期にもなれたし、いっちょ秘密の部屋開いてきますか！
一年生のときもなにか赴いたがついぞバジリスクが僕の目の前

に現れることはなかった。けれども、さきほど厨房からいただいたお菓子を両手いっぱい抱えていると聞こえてきた「バジリスクの声」自察に戻ろうとしていた僕の足は、そのまま秘密の部屋を開けるためにマートルのところに向かっていた。

「ねえ。バジリスクー。ボクと会話しようよ。攻撃しないからさー。無視？無視なの？さきまで起きてたじゃん。証拠は上がってるんだからね！ねー。なんであいつは良くて僕はダメなの？僕の方が実体だし、君のことを満足させてあげられるよ。望むならおはようからおやすみを言っただけあげるし、キスもしてあげるからさー。絶対僕のほうがいい男だって」

と、まあ、好きな子に振り向いてもらえない男という設定で話しかけてみても無理だった。

この事実をドラコに伝えると「報連相を徹底しろ」と怒られる。怒られるが、大きなため息で彼は少し落ち着いたようだった。今後の展開を二人で決める。第一発見者は僕たちだ。今回はサジツタが煽りに来るんだろうな、と二人して苦笑した。

まあ、予想しておくことは悪いことではない。そう、石橋を叩いて渡ると同じことだ。

その日僕はこっそり、ベッドを抜け出す。ドラコが起きてしまったことには気づいていたけど、僕は彼に何も言わなかったし、彼も何も言わなかった。ごめんね。ドラコ。念には念を。僕は自分の推測について確認したいだけだ。

僕が向かっているのは「サジツタの寝室」だった。彼がリドルの日記を所持していないかを確認したい。彼が義父からもらって、そのまま所持をしている可能性を考える。違ったら違ったでいいのだ。そ

してそれは杞憂に終わる。彼の所持品を調べたが、そこには日記らしきものはなかった。一安心をする。部屋に戻ろうと、ドアに向かおうとするが目の前の、寝息をたてて寝ているサジツタをみて僕は、少しの魔が差した。今日の彼を、彼の思いを少し垣間見たい。これは「必要」なことだろう。

そして、僕はそれを後悔する。

彼の記憶は、彼自身によってか、誰かによってか、何かによって、しっかりと守られていた。

疑ってくれと、言っているようなものだ。これは真実か。ミスリードか？

けれども、日記が彼の手元がない以上、彼ではない誰かが日記の所持者である。それを突き止めないことには何にもならない。そしてハロウィンパーティーの日、予定通りといえばミスノリスとフィルチには悪いが、ミセスのリスは石化をってしまった。

第一発見者のスネイプ先生が日記の所持者ではないと、思いつつもドラコが話を引き伸ばしている隙に彼にレジリメンスをかける。がそれはただの徒労に終わってしまった。ドラコに、ふるふると首をふり、合図をする。そこに、タイミングを見計らったようにグリフィンドール御一行様と、そして、サジツタがやってきた。

チャンスだと思った。サジツタの心を見させてもらおうと、昨日見れなかったものが見れるかも知れない。

そう思つて流れて来た彼の「まさか、兄様が。そんなはずはない」
なあサジツタ。「そんなはずはない」はいつたい何にかかつている
んだい？「兄が後継者であるはずがない？」それとも「兄が発見者に
なつてしまふ予定はなかつた？」

僕はドラコに一切は打ち明けない。「報連相」をしろと、きつと怒ら
れるのだろうけれども、無駄にきみは傷つく必要はないんだ。ね。だ
からさ、サジツタなのか誰なのかわからないけれども、ドラコを勝手に
「継承者」に祭り上げて、害なそうとしている奴、本気で僕、ゆる
さないからね？

なぜドラコなんだ。前回と同様僕でいいじゃないか。彼は十分自
分の立場における役割を前の世で果たした。今回ぐらいいはそういう
「スリザリン」だとか「純血」だとかそういうもので彼を振り回さない
でくれ。

友人というのは、あつたかいなあ。と目の前の光景をみて微笑まし
くおもう。ロンもハーマイオニーもネビルも、ドラコが「継承者」で、
あんなひどいことをしたなんて露ほども思っていない。うんうん。
それは君の努力で得たものだよ。暖かい友情を一心にあびな。

外からその光景を眺めていると、二人から思いがけない言葉を聞
く。それは「サジツタを疑っている」というものだ。まあ確かに怪し
いけれども、友人の弟を疑うなんて、それはそれで勇気のことだ
ろうに。ああ、なるほどこれがポリジューズ薬の話になつていくの

か。本筋と変わらずストーリーが流れているとは感じていたけれど、ポリジューズ薬のくだり、端折ってもよかつたことない？ 神様

さてと、クイドイツの試合については、存分にやらせてもらった。一人でかせげるトコまで稼いで、僕に相手の選手の注目を集めたところでドラコにバトンタッチするという作戦になっていた。ぼくたちで16ゴールすればいい。僕たちがマークされていない初戦、デビュー戦だからこそそれができると思ったし、無茶ができると思った。のにだ。くそ、ハウスエルフめ、ボクとドラコの初陣に水を差しやがって。本気で恨む。迫ってくるブラツジャーを避けながら僕はイライラが隠せなかった。あー、もう。明らかにおかしいじゃん。審判なんとかしてよ、これタイムアウトものでしょ！どこに目が付いてんのさ！

そして僕を苛立たせたのはもう一つ。シーカーの存在だった。ドラコとチェイサーするの楽しそうだったからやったし、本気で楽しかったけど、その分シーカーにたいするストレスがハンパなかった。うん。目が節穴なのかな!?

まあ、試合についてはそんな感じ。

あとは、医務室で疲れて眠っていたら、前回同様ハウスエルフがやってきた。内容も訴えも前と全く同じで面白みはなかった。ただ、まあそこに現れたのがビビではなくてドビーだったということだけは、付け加えておこうとおもう。

マルフォイの屋敷のハウスエルフであるドビー。やはり、ルシウスさんも一枚かんでいるのか？ サジツタが養子にいったエイブリー家

とマルフォイ家。どちらも死喰人である。あー。どこからどこまで信用すればいいのか、わからなくなってくるな…。

コリンクリービーが犠牲者になり、ちやくちやくと前回と同様に秘密の部屋の物語は進んでいった。クリスマス休暇にサジツタが帰らないことを知り、ドラコが「ほんと、疑わしい動きをなぜするんだ」と頭を抱えていた。まあ、ほんと、疑わしいよね。君の弟。そして、ドラコ。きみは忘れている。サジツタに秘密の部屋について何か知っているかと聞くのを。ほらほら、君が早く聞かないと、痺れを切らしてハーマイオニーたちがよからぬことをやり始めちゃうよー！

あ、ゴイルの薬が爆発した。

「つてことで先生！今日の魔法薬学の授業はごめんなさい！僕が彼女たちの代わりに謝罪します！」

スネイプ先生の研究室。机に並べられたお菓子に手をのぼしながら僕は謝罪した。「マルフォイは？」と、来たとき聞かれたけど、常にふたり一緒ってわけじゃないです。というより、今回は例の謝罪のために来たので、彼は連れてこれません！

「なんの謝罪だ？そしてそれは、謝罪する態度には見えないのだがね」

「やだなー。先生。気づいていて見逃したでしょ。ハーマイオニーのこと。無表情頑張っても無駄です。先生がチラリと教室を抜け出すハーマイオニーに目をやったのきづいてるんですから」

「ふん。それなら話が早い。あれが、大きな事故に繋がらなかったことだけを感謝して今後を過ごすべきだな。あいつらは。そして、何を

しようとしている。」

「あれ、見逃しちゃんですか。甘くないですか？」

スネイプ先生は、面倒事に関わる方が面倒だと言わんばかりに、顔をしかめて、僕の目の前に座った。

「あれはですねー。ポリジューズ薬を作ろうとしてるんですよ。秘密の部屋のこと、後継者がドラコあつかいされているのが、不服だそう。僕もそれに関しては誠に遺憾なので、協力をしている次第です。」

スネイプ先生は、頭が痛いといわんばかりにこめかみを抑える。「レシピは」という問いにドヤ顔で「ロックハートのサインです」とサムズアップしておいた。「あの糞が」というつぶやきを僕は聞き逃さなかった。ですよねー。

「それで、吾輩に何を求めている。」

「え？それはですね。ただの『黙認』です。」

「吾輩が、はいそうですかというつもりか。ポッター」

「はい。」

スネイプ先生。彼らはこれを悪戯につかおうとしているわけではないんですよ。ただ単純に本当に「ドラコが後継者ではない」と証明したいだけなんです。ポリジューズ薬は使いようによっては危険です。それはわかっています。けれども僕たちがそういう使い道を閃くと思いますか？ただ、聞き取りをしたいただけなんです。子どもの可愛い、まあちよつと過ぎているとは思いますが、優しい心ではないですか。

それとも、先生方がこの事件を解決に導いてくれると？このしばらくのあいだ、ドラコと僕がどんな目で周りを見られているかご存じで

すよね？助けてくれない打開策も打ち立ててくれない、学校に安心感もなければ信頼もありません。

それならば、子どもの無茶を見守って、危険が起きた時に助けられるだけで十分です。見えない敵を探すより、「あいつら」と見守る方が、とても簡単でしょう。

喧嘩をうっている自覚はある。

けれども、スネイプ先生が見逃してくれる自信も同じくらいあった。

「たしかに、ポッターたちをまとめて見張っている方が楽であろうな。」

「そういうことです」

「そして、お前が、今の学校に腹を立てていることもよくわかった。そしてそれについては同意する」

「ありがとうございます」

「二つ約束だ。ポリジューズ薬の調査はマルフォイ監修でやれ、あいつの魔法薬学の成績は上級生を入れてもトップレベルだ。そして、自分たちに危険が迫ったら、すぐに吾輩に知らせること。いいな」

「ええ、約束しましょう」

「その二つの約束が守れるならば、吾輩は今回の動きについては多少目を瞑ることと、お前がなぜそこまで達観しているのかについては触れないでおく。まあ、エイブリーほど危険な目もしてないし、大丈夫であろうと『信頼』してのことだぞ」

あー、やっぱり気づいてました？

一通り、スネイプ先生とおしゃべりをして、談話室が部屋で勉強しているドラコのところに戻ろうと歩いていると、目の前をパンジーた

ちが通りかかる。一緒にいるのはミリセントとダフネだ。「きてきて」と手招きをされ僕は、ほいほいとそれについていく。「おいしい紅茶が入ったのよ。一緒にいかが？」

「いいね。でもなんで談話室じゃないの？」

素晴らしいながら僕はコミュニケーションルームで彼女たちのいれてくれる紅茶をまつ。例の石化のことがあり、今年のコミュニティームはひどく閑散としていた。

「あら、だって談話室だったら、ドラコがいるかもしれないじゃないの！」

うっわ。なんか嫌な予感がする。

「これから恋バナをするのに、ドラコ本人がいたら、ねえ」

「聞いてない！恋バナ！僕もどる！」

「はい、すわるー。」

にこにこする三人の威圧感がやばい。僕はこれを知っている。女子だけが醸し出すことのできる、恋バナにおいてのみ発動される例のアレだ。

「単刀直入に聞くけど、ハリーはドラコのこと好きなの」

「ドラコ、はいはいドラコね。好きですけど」

「そういう適当なごまかしは聞いてないの！」

ミリセントが怒る。もう女子怖い。あれだよ。あれだよ。あれからパンジーもドラコのこと好きなんだからあきらめてよね。あんななんかドラコのとにふさわしいとでもおもってんのああん？」ってやつだよ。

「好きなんでしょ。ドラコのこと。友情じゃなくて、人としてとかそういう曖昧なのじゃなくて」

ううう。怖いよう。三人ともすごい気迫だよう。僕たちあんなに仲良く過ごしてたじゃない。パンジーたちに髪をといてもらったり、アレンジしてもらったりするの好きだったんだよ。あの時間はウソだったというの…。僕たちの友情はその程度だったというの…？よよよよ。僕は決意をし、俯いて自白した。

「あ、うん。好きです。キスしたいなって思う好きです。」

女子の気迫に負けましたごめんさい。でも、なんだろう。すつきりとした気持ちがある。誰かに言うってこんな…？って黙るのやめて、まじでやめて、これから僕はフルボッコですか？え女の子に、杖あげる僕じゃないよ。「言い訳をさせて…！」と顔を上げた僕が目にしたのは、超絶ニヤニヤ顔の三人でした。

「ほらあーだと思ったのよ！あれは振りにしてはガチだったわ」

「やだー。それについてはみんな異論なしだったでしょ！」

「いいなあやっぱ恋するって素敵ねえ。こっちまでドキドキしちゃう」

「えと、パンジーさん…？ミリセントさん…ダフネさん…？」

がぼつと聞こえてきそうな勢いで身を乗り出して、三人は矢継ぎ早に僕に聞く。「いつから好きなの」「キスしたいってキスしたいってことよね!」「どういふところ？どこが好きなの!？」

「いやいやいや待って反対しないの!？」

「え？なんで？」

三人はキョトンとこつちをみる。え、だって僕純血じゃないし、男だし、なんというか、ドラコってモテるし…？そういったことをしどろもどろに聞くと「やあねえ」ときやいきやいと意見を返される。

「関係ないわよそんなの。それって今きにすることじゃない？好きなら好きでいいじゃないの。そういうのは直面したときに考えればいいのよ」「うんうん。モテるっていつでも、スリザリンの生徒はもうすでにドラコに一回一目惚れをして終わってるからねー。一目ぼれしてキュンってなって、彼のレベルの高さに自分の小ささ感じて勝手に失恋するっていう。」「それぞれ！っていうかハリー」ずいとパンジーが身を乗り出す。

「ドラコ、バカみたいに鈍感よ。今のままでは「一番の友達枠」にあてはまって終わるわ。ドラコは甘やかし体質なのよ。正直私たちからみても、ドラコはあなたのことを「特別」に思っているわ。けれどもその友情と恋愛の線引きが曖昧なの。」「

「ええ。だからそれを恋愛の特別にするか、友情の特別にするかは、あなたが引導を渡してあげないと！」

協力してあげるね！と、僕はまさかの強力な仲間を手に入れてしまったのである。

「ありがとう。三人とも。だけれども、とりあえずは友情の特別を手に入れることにするよ。そこを盤石にしてからにする。」「

そうして、僕がいないとダメなドラコにしてから、ラストスパートをかけるんだ。最後の一言は、三人の耳に入らないように、心の中でそつと呟いた。

まあそんなこんなで変な同盟ができあがったあと、まあそれでももうすこしアピールしておこうかな。と思っただのも真実である。

さしあたってあのあと、僕はさして努力をすることなく、ドラコをポリジューズ薬づくりに参加させることに成功する。本当にドラコに関しては話がとんとん拍子に進みすぎて怖い。うん。まあいいことかな？ちなみに僕はサジツタのことを未だに疑っているので、暇さえあれば、透明マントで探偵ごっこをしている。ドラコにはスネイプ先生のところに遊びに行ってくると伝えたり、誤魔化したりだ。まあ未だなんの収穫も得られないわけですけども。

と、変わらない日常に安心していたのがいけなかった。
よくもまあ次から次へと入ってくるよね厄介なことって。

いや、楽しみにしてたのに！「決闘クラブ」イケメンなスネイプ先生やドラコが見れるとおもって楽しみにしていたのに、こういう結末ってないでしょう。なんでドラコが蛇語話しちやってるの!?わけわからない。

後継者の噂話が僕に向くように、わざわざ蛇語を使ったのに、そういうことしちやうわけ？

「さて、ドラコ言い訳があるならどうぞぞ」

と詰め寄ってみたが、ドラコのほうこそ何が起こったのか分かっていないようだった。まあそうだよね。もうなんでなの、そんなにドラ

コを後継者にしたいの！僕じゃじゃダメなの!?もおおおおそうやってドラコを危険な立ち位置にさらすうううもうやだああああああ。まじで、許さん。ドラコは「自分が継承者あつかいのまま困っていないし別にいい」というけれども僕は、それが許せない。ダメだって、そうやって自分に降りかかる災難になれちゃうのダメだよ。自己犠牲はドラコの悪いとこだよ。それってだれも幸せにならないんだってば。

「もう、あなたたちふたりだけで行動するのやめなさい」とパンジーに言われたのは、あのあとジャステインと首なしニックが襲われたという話を聞いたあとだった。そんなもって

「婚約者」という僕にとってショッキングなワードを聞いたのもそのときだった。

そのあとの、グリフィンズ組を交えてのポリジューズ薬の話は、それに関するイライラでいっぱいだった。ドラコに婚約者がというのは、まあお貴族様ならありうる話だとは思っていたけど（実際にいたわけではないし）。それでも僕をイラつかせるのには十分な話題だったのだ。

だからそのあとの彼らとのやり取りが多少性急であったことは認めるし、ドラコのことを慮らなかつたのも事実だ。だから、彼がとつさに杖を握った時にフォローも入れなかつた。さすがにまずかつた。やってしまったと後悔したのは、ロンがドラコの涙を拭いているのを目撃したときだった。

言い訳を先にさせてもらおうと、すぐに追いかけた。すぐに追いかけたのだが。談話室でパンジーたちに捕まったんだ。さつきまで楽しそうに会話していた三人が、僕が帰ってきて一瞬で般若になったのがわかった。察するじゃん。いろいろとさ！

「その顔でドラコ追いかける気なの？」

「とうより思い人泣かせる時点で、失格よね。」

「ほんとそれ、まあお好きになさいませって感じですけど」

こわいこわい

「まあ、どうでもいいけど深呼吸してから向かったほうがいいと思いますけど」

「傷ついている人に追い打ちをかける馬鹿じゃないもんね。ハリーは」

「はいーじゃあ、どんな言葉をかけるべきかわかってるよね」

そういつて、僕は見送られた。

おかげで、変に言い合いが起こることもなく、今回の衝突は免れたのである。

ウィルトシャーで過ごすクリスマス休暇は、率直に言うところ「最高」だった。最終的には「僕もうこの子になる」と駄々をこねたぐらいだ。

まず、ドラコのご両親が自分の父親ならまだしも、母親のことを認識していたことに驚いた。僕だって二回目の人生だし、両親であるジェームズとリリーの学生時代だなんてそこまで興味はなかったけど、けれどもやはり、聞いてしまうと気になってしまうものである。

そして、シシーさん。すごいかわいらしくて美しい人だった。友人の母親にこんなことを言うのも怒られそうな話だが、そうとしか言えない。ああ、いいところのお嬢様なんだな、そして結婚してから子育てまで何不自由なく丁寧に周りに支えられながらやってきたんだな。と感じた。自分も「旦那」で「父親」だったことがあるからわかるけ

れども、それはほかならない旦那さんであるルシウスさんが、シシーさんを大切に思っていることの表れとも見えた。

クリスマスプレゼントに関しては何も言うまい。この家にとっては「値段」なんてあつてないものなんだな。というのを痛感したくらいだ。ドラコとお揃いで買ってもらった万年筆はとある有名なブランドだったのだが、「一番、一番安価なのでいいです！」と叫ぶのに必死だった。パーティ用の服を一式揃えるときに「オートクチュールでも良かったのだけど、さすがにね。今度オーダーメイドで一つ仕立てましょ」と、いって、なるほどシシーさんn線引きはそこか…と安心したのは束の間。ドラコとシシーさんのロンへのクリスマスプレゼントには、固まるほかなかった。うん。確かに生き物をプレゼントするのは、ご両親の…って知らなかったふりするんかい！ずるいな可愛い！

ハーマイオニーへの服選びに参加している時にはもう、僕も感覚が狂っていた。シシーさんが楽しければそれで良くない？楽しそうに選んでるのを見るともうそれで世界が平和って感じるじゃん？最終日には、ルシウスさんからハーマイオニー宛にプレゼントも預かった。意外だった。プレゼントに関してルシウスさんが関わってくるのがなかった。彼にとっては息子がお世話になっている義理と、プレゼント選びを楽しそうにするシシーさんのために、とりあえずやっているのかなと思っていたからだ。それは僕の勝手な解釈だったな？ドラコに確認をすると「父上も与えたりなんだ。あと、ある種マイペース。ロンに関してはアーサーさんと未だに不仲だから、自分自身からは彼に関わることはしないけどな。ロン本人については、多分何もおもちやいないさ。」ということでした。なるほど理解。

こんなにいい人たちなのに、ルシウスさんが死喰人とかまじで信じ

られない。けれども闇の印があることには間違いがない。今回は、ヴォルデモートに服従の呪文をかけられていたというのは狂言ではなくて、そちらが真実なのだろうか。

これに関しては、ドラコも「それは、僕にとっても謎だし。わかっているじゃない」とため息をついただけだった。

ホグワーツに戻り、大号泣する友人たちをなだめる。ネビルも昨日帰ってきたようで、五人でコミュニケーションにて情報交換会を行った。彼らは、各寮に侵入し、リドルの日記を探してくれたらしいが（なにか、この字面だと、質の悪い物取りかストーカーみたいだな。ごめんね）それらしきものは、なかったし、耳にも入ってこなかったらしい。これでは、なんの収穫もないと思ったハーマイオニーがサジツタに突撃をかましていたと聞いて。これはこれで「さすが」としかいようがなかった。

これに関していけば、サジツタは継承者とこの出来事は別に考えるのだろうか。という目からウロコの考え方だった。まあ、裏を返せば、ドラコが継承者であるのを望んだ結果としての見方でもあるが。「誰かがドラコを継承者にしたてあげようとしている」クリスマス休暇前にドラコと話した内容だ。サジツタなら、ドラコを継承者であるという筋書きを作ることには可能なのだろうか。でも、それは何のためか。それをするぐらいなら自分自身を継承者にするほうが、存在の確立になるのではないだろうか。そして、サジツタがハーマイオニーに「マグルのおねえさま」といって取り入っていることも、僕からすれば怪しさいっぱいで下がなかった。

休暇が終わっても日記について、まったくその所持者が誰なのか全くわからなかった。

ロンに見せてもらったグリフィンドールの時間割をみて、思い出す。スリザリンとグリフィンドールで時間割が違うからピンと来ていなかったが、そういえば、僕たちはあの日記をマートルのいるあのトイレで拾ったのだ。詳細な日にちは、覚えていないが、思い出したのが今日なら、今日がその日な気がする。僕はドラコを連れてそこへむかった。

日記を前にして、「秘密の部屋」に向かうと宣言するとドラコに止められた。ここに、バジリスクが認める継承者のリドルがいて、僕はその開け方をしている。これはもう、さつきと処理するほかないだろう。しかし、「段階を踏め」という話だった。なるほど、リドルと仲良くなる。自分の考えにはなかった提案をされて「それはいいな」と思う。

確かに、もしそれができれば、被害を抑えることもでき、かつヴォルデモートの過去であるトム・リドルとバジリスク（毒付き）が手に入れられる。それができれば、もともと片手間でやろうと思っていた、ヴォルデモート戦がいつきに楽になるんじゃないだろうか。

「そっか悪霊の火使えるじゃん」そう思い、ドラコに必要なの部屋に行く。といて日記をもって向かう。ドラコは、過去を思い出したのか一瞬顔が険しくなったけれどすぐに「くれぐれもコントロールには気をつけるよ」とありがたい言葉を頂いたので。

僕を向かい入れた必要の部屋には、ひとつの机と椅子。ごく丁寧に羽ペンまで用意されており、本当にこの部屋はいつも僕の必要なものを用意してくれる。と呆れにもにた思いがこみ上げてきた。

さてと、と椅子に座り、羽ペンにインクをつける。そして僕はリドルの日記に自己紹介をした。

「僕はハリーポッターです。」すぐにそのインクは溶けるように消え、新しく文字が浮かび上がってきた。

「こんにちは、ハリー・ポッター。僕はトム・リドルです。君はこの日記をどんなふうに見つけたのですか」一言一句かわらないその返しに、僕は自分でも嫌になるような笑みを浮かべて、その続きを綴っていた。

僕は自分で自分が嫌になる。

何が大切なのか、本気で分からなくなる。

僕自身が大切なのか。

ヴォルデモートを倒すことなのか。

ドラコなのか。

そういうとき、「ドラコを幸せにする」というフレーズが決まって頭の中に浮かんでくる。ああこれがあるうちは自分は自分を保つていられる。愛してるよドラコ君を幸せにするために僕はここにいます。

だから、今この仕打ちも。許して欲しい。

きつと僕が君を幸せにするから。君を傷つけてしまったぶんは、誠

心誠意込めて取り戻すから。

リドルとの交換日記は楽しかった。

ジニーが、僕とのことを毎日書いていたということを書いて、僕も毎日「僕のドラコがね」日記をしていた。「今日もドラコがかっこよかった」「クイディッチの練習のときのドラコは、本当頭脳戦ってかんに惚れ直しちゃうんだよ!」「魔法薬学は常にトップでね」ドラコがドラコがドラコが、勿論その中にときどき「継承者扱いをされていて、そんなことないのにね」というのも織り交ぜた。

さて、リドルの興味はいつたどこにむかうだろうか。

ドラコと話の流れで、「悪霊の火」で燃やしてしまうという日が決まる。リドルが尻尾を出したり、元の所有者が何かを仕掛けたりするのを待っていたが、先にこちらのほうが進んでしまったのだ。ドラコの前で見栄を張りたくて「悪霊の火、コントロールできるようになったよ」といった僕のバカ。というのと、ハーマイオニーが石化したのが同じタイミングだった。

「なんで、どうして」と用意していた言葉を呟いて。自室へもどる。ようやく尻尾をだした。さてはて、真の所有者は誰なのか。それとも、リドル、君の単独行動かな。僕の魔力さうとう食べたでしょ? そう思いながら柵をあけると、果たしてそこにはいつもどおりの様子で日記が「ちよん」と置かれていた。ここに日記がある。ということは、リドルの単独行動か。僕は、前回とは違い彼の日記の協力者がいると考えていた。だから、ドラコには悪いが、誰でもここに侵入し、この日記を奪えるようにしていた。(追跡機能だけのこして)が、そんな様子もなかった。

少し、成り行きに任せすぎたか。とあたまをぐしゃぐしゃと掻き巻く。仕方がない。作戦変更といこう。とりあえず。ハーマイオニーだけは、ドラコのマンドレイク薬で元に戻して…、そう声をかけようとする。ドラコが必死に荷物の確認を行っていた。

結論からすると、薬はなくなっていた。

これで確定した。やはり、協力者がいる。

日記ではなく、ドラコの所持している薬のほうに手を出さだつて？ あきらまじやないか。

「やっぱりバジリスクの独断ではないよ。君の持ち物からマンドレイク薬を盗んだところからも歴然だ。明らかかな誰かによる行為だ。誰か、とはトムリドルだけれども、あいつのとなり足となりうごいている奴が居る。僕たちの部屋に入るのは不可能だけど、そうとも言えない。怪しいのは申し訳ないが」

「同僚のスリザリン。ああ。可及的速やかに見つけ出そう。」

「おやお怒りモード」

「くっそ腹立てている。僕に恥をかかせたこと後悔させてやる」

さて、これほどにレベルの高いことをやってのける人間。まあ、リドルの手助けあつてかも知れないけれども、いったいどれくらいの生徒が該当するんだろうか。

そういえば、一度ルシウスさんにあった。ダンブルドアのことで、ホグワーツに来たらしかつた。前は、ダンブルドア退陣について、無理強いをしたことで理事職を追われてたなあと懐かしむが、今回は

そういう無理やりな動きではないようだった。まあ、一旦退かせることで落ちつくこともあるよね。臭いものには蓋。みたいな。まあ僕としては、退陣してもらっても何も困らないのだけど。うん。ダンブルドアがね。

情報収集として、今の状況についてなんとなく聞いてみるが、そちらの動きについては前回となんら変わっていないようだった。

「チョコレート。持っていく?」

「そうだなあ久しぶりに会いたいが、変にうろつくのみな。」

「だよねえ。ヘドウィグに持って行ってもらうか。」

さて、何もことは起きないし。

やはり、ここは強行手段にできるかな。と僕は決めた。

リドルの日記をもって秘密の部屋に向かう。ドラコはいつもどおり心配そうに「本当に気をつけろよ」と言ってくれた。ありがとうドラコ。大丈夫だよ。

秘密の部屋に入ると、いつものとおり、バジリスクの気配が肌で感じ取れた。日記を開きリドルに問いかける。が、何も起こらなかった。

文字はいつもと同じように、溶けて消えていったが。

前回もこういう時はときどきあったな。と思い出直そうと自室にもどる。

ドラコが寝ているので、そっと静かに。また、明日行こう。もうそろそろこの事件について考えるの飽きてきたよ。

朝、ひとりでに目が覚めた

いつもだったら、完璧に支度をととのえたドラコが起こしてくれるのだが、不思議に思っただラコのベッドを見まわすとドラコの姿はなかった。

チェストを確認するが、そこにはリドルの日記がなくドラコが連れ去られたことを如実に物語っていた。やはり、ドラコが連れて行かれたか。わかつてはいたけど、腹が立つ。本気で許さないからな。

談話室に降りると、スネイプ先生が何かを説明しているところだった。「ポッター、吾輩は確認に来たのだが……」と彼の所在について聞いてくる。僕は「やっぱり、そうなんですね」と談話室に聞こえる声でスネイプ先生に答えていた。とにかく談話室からでないように、と申し付けられる。

さて、僕の麗しの騎士をたすけに行きますか。

と、そのままに。解決編のための情報収集。

「と、ごきげんよう。サジッタエイブリー」

僕は奥のソファで、本をよんでいる。サジッタに声をかける。防音魔法を耳塞ぎをかけた上で、だ。サジッタは僕に声をかけられて徐に顔を上げた。そして、にっこりと笑う。

「おはようございます。ハリー。いかがしましたか」

「ドラコのこと、心配じゃないの？」

「兄様ですか。そうですね。秘密の部屋とは一体どこなのでしょうか。」

彼はこてりと首をかしげる。

帰ってきた言葉は、聞いたこととはまったく別のことだ。

「それに、ハリーも特別焦っていないように思います。スネイプ先生の話をきいて、飛び出していくかと思いましたが。けれども、僕に声を掛ける余裕があるということは、やはり、そんな緊急性は低いのでしょうか。と僕は感じました。あと、兄様が被害者になるとは思いません。ブラックがいればですけど、今あそこには後継がない。ほかもいろいろと黒い噂ばかりですし、兄様の損失は純血の損失ですよ。ああ、そういう意味では心配ですね。」

やはり会話の本質がずれる。

「僕は単純に、君のお兄さんであるドラコが危険な立場になって心配じゃないのかと聞いているんだけど」

「勿論。心配です。」

「わかった。単刀直入にきくけど、『リドルの日記』って聞き覚えある？」

「いいえ、初めて伺いましたが」

そう、サジツタからは、やはり何も聞き出せない。この子の心は真つ黒すぎて、いやいうなれば真つ白すぎて、どこを探ればいいのか検討がつかない。やはり時間の無駄だったと思い、ドラコを助けに行くために、透明マントを取りにサジツタに別れを告げるが、呼び止められた。

「ハリー。あなたは、何のために生きているのですか。」

「僕はドラコのために生きている。」

僕は即答する。

その答えにサジツタは、満面の笑みをしたためた。

「ええ、そうでしょうとも。僕と同じです。気をつけてくださいね。」

ハリー。」

僕は、透明マントを羽織って秘密の部屋に向かう。そういえばスネイプ先生と約束していたな。と思い、守護霊を彼に飛ばしておいた。ドラコが被害にあつて、僕がじつとしていたわけもないし、きつと先生もわかっている。そして、気づいている。だから、スネイプ先生に出し惜しみはもうしないがいい。僕はそう判断を下している。あついでにロックハートのところにいつてこよつと、一人逃げ出させてたまるものか。

何度も訪れた、秘密の部屋。が、そこがただならぬ雰囲気醸し出していることにきづく。なんでー。本当になんで僕じゃダメだったのバジリスク。と不満を述べるが、約一年間通つて、ダメだったのだからダメだったのだらう。ボクとリドルにそんな差があるか？

彼らがいる部屋に、ついて僕は許しがたい光景を目にする。

リドルが、ドラコの額に口づけをしていたのだ。は？そういうことですか？リドルさん。え？だから彼を後継者にしたかったのですか？そして、なにその椅子と机え。しかもお菓子とか紅茶とか。何してたんですか。まてまておいおい。

つい抑えていた魔力を放出してしまい、リドルに勘付かれる。

「やれやれ、やっと騎士様のお出ましだ。いや、察するに君がナイトをお守りする戦えるお姫様つてどこかな？」

リドルにむけて杖を構える。「そこから離れろ」と言うと、彼は抵抗するでもなくドラコから離れた。

僕は杖を構えたまま、ドラコのそばによる。リドルが、紅茶を入れ直し、それを嗜んでいるのが見えた。

「なあハリー。この子を僕に頂戴。けっして悪いようにしないから」「ふぎけるな。誰がお前にやるか。」

「しかし、この子はこちら側――闇――の人間だろう。」

リドルは口の端を、にやりとあげる。

「どこをどう見て、どう判断したらそうなる。お前僕の話聞いてたか？彼は自分の人生の中で一生懸命にもがき、あがいてるんだ。そういう闇とか、正義だとか明確じゃない曖昧な基準しかないもので判断をするな。そんな彼の努力を否定するような言葉。聞くのもイライラする。」

「ふうん。」といって彼は、「君にも悪い話ではないと思うのだけれど」と言葉が続ける。

「話し合いは？。」というリドルに間髪入れずに返事をした。

「余地もない」

お前主導の話し合いをするつもりは、もともとない。

愛するドラコを餌にしてまでやったんだ。僕は僕の予定通りにこをすすめさせてもらう。

「のようだね」と彼がつぶやいたかと思うと、ずるりと大蛇がそこに現れた。

さて、やつとあえたね。バジリスク。僕は君に会いたかったんだ。

「なあ。ハリー。彼に、僕との関係を言わなかったのはなぜだい？」
「いかがわしいいいかたするな」

ニヤリと笑うリドルに、僕はピシヤリと言いのける。
彼はくすくすと楽しそうだった。

僕はもともとバジリスクに用があつたのだ。リドルなんてどうとでも出来た。日記を見つけたとき、悪霊の火のコントロールとかいったけど、そんなの最初からできていた。とつとと処理でもなんでもできたんだ。わざと泳がせた。

どうしても、僕の間の前に現れないこのバジリスクのために。リドルの声でないとでてこないみたいだったから。だから、この日を心待ちにしていた。こんな大舞台じゃないと姿を出さないなんて、なんて贅沢な蛇なんだ。

「僕と、会話をしていますと、彼に言わなかったのは何故？」
「お前にいう必要はない」
「なるほど」

コツコツとわざと音をたてて歩き回る。「うーん。」とわざとらしく天を仰ぐ

「僕はむしろ、君に感謝をしてほしいんだよねえ。君と僕のこととはそこに眠る騎士様には少し間語っていないというのに。君の秘密、伏せてあげたんだよ」

「ドラコと会話を？何を」
「おお、怖い。ジニーのことを少々。」「ってそんなに睨むなよ英雄様。」

この状況は君自身が作り出したくせに。あの君たちの友人だという穢れた血も、お前の愛しいドラコがこうなったのも、全てお前自身が僕を制御しきれなかったせいだろうか？」

それは、凶星だった。

けれども、最悪の場合。だれかの死を想定しなかったわけではない。勿論ドラコが死ぬなんて、ありえない未来で結末だけれども。まあいうなれば、今回の結果は、ドラコを僕自身が傷つけるという手段をえらんだ点で、ある意味最悪の場合ではあったが。

誤算だったのだ。リドルが、杖を持っているとは思っていなかった。バジリスクの使役でしか、こいつは動けないと思っていたのが、僕にとっての誤算だ。ここに来るまでに、結局協力者が誰かわからなかった。サジツタであるという確固たる証拠もない。けれども、こいつが杖を所持していたとなれば、話は簡単に終わる。リドルだけではできないことができていた理由になる。

「僕は優しいからね。その彼には曖昧にしか伝えていないよ。ハリー、僕は君のことも気に入っている。僕にとってはね、未来の僕？ ヴォルデモート？とかどうでもいいのさ。だって、僕は僕だろう。君に一度負けたあいつとは違うことを、成し遂げたいことがあるのだ。なあ。ここは穏便に話し合いでもしようじゃないか。」

だから、話し合いを僕は望んでいない。

「セクタムセンプラ！」
「プロテゴ」

不意な僕の呪文を一瞬で退けられる。

「はあ。ハリー、君は、わりと独裁的？」

「僕の人生、そうじゃないとやってられないところあってね」

「そう。交渉決裂。ということだね」

「やっと理解してくれたみたいで嬉しいよ。リドル」

リドルがバジリスクに「やれ」というのが聞こえる。その瞬間守りの呪文をドラコにかけた。

はろー。ハリーです。

あの秘密の部屋でリドルと僕主導による「健全に話し合い」を行ったあと。バジリスクの入った小瓶と、リドルの日記。そしてドラコを抱えて嘆きのマートルのところに戻ったところで、スネイプ先生に激怒されて医務室送りになりました。

といつても、僕は特別負傷したとかではないので、一夜だけ大事をとるというあつかい。ドラコのところは家庭に連絡が入ったようで、明日の早朝に Hogwartz に来るということでした。で、じつとしておく僕じゃない。というより、眠れない。スネイプ先生のところ遊びに行ったら「馬鹿者」と再び、こっぴどく怒られました。

「寝れないんですもん。ドラコと一緒に寝れると思いますけど、さすがに…」

「ほう、それぐらいのことを考える余裕はあるのか」
「さすがに……！」

まあ、座れ。と促されてソファにすわる。いれたてのホットミルクが差し出された。

僕ありがとうございます。といつてその器をうけとり、今回の出来事についてとつとつと、スネイプ先生に伝えた。「リドルの日記」のこと。「バジリスク」のこと。行ったらドラコが捕まっていたこと。

「前回といい、今回といい、無闇矢鱈と色んなことに首をつっこむのは、関心せんぞ」

「うーん。わかってるんですけど」

「貴様は、人を信用してない。まあわからないでもないが」

「はは。僕が信用しているのは二人だけです。」

そう言っつて、僕はもっていたマグを机の上に置く。

スネイプ先生の瞳をまっすぐに見つめた。

「僕が信用しているのは、ドラコ・マルフォイとあなた、セルブス・スネイプ先生だけです。」

ああ、シリウスもどっちかかっていうと信頼してるけど、ちよつと穿った見方するところあるからなあ。というのは心の中に秘めておく。

なぜ、と言いたそうなスネイプ先生の目に僕は「理由はないんです。けれども、誰かを『信用』しないと、気持ちやしんどくて、」と返す。「だから、スネイプ先生。僕があなたを信用したいというわがままを受け取ってもらえますか？」そして、全てを伝えない僕を許してください。

多少の沈黙があつたあと、目の前のスネイプ先生は立ち上がり、僕の隣に座つた。そのまま僕の肩をだき、僕は先生の胸にあたまを預ける形になる。先生は何も言わなかつた。ただ僕の肩にのせた手をグツと力を入れただけだつた。僕はその腕に安心感を覚え、知らぬ間に涙を流していた。拭おうとも隠そうともせず、ただひたすらに涙は落ちていった。

次の日、ドラコに会いに来たルシウスさんに対面した。

ドラコは目を覚ます気配はなかった。長いあいだ強い魔力によって固定されていた、四肢もしびれと麻痺をともなっているようだった。

自分の行った行いについて罪悪感がこみ上げ、とっさに「ごめんなさい」とつぶやいていた。ルシウスさんは、僕の行いなんて知ることもないから、息子を助けてくれてありがとうといって僕のことを抱きしめてくれた。ごめんなさい。ルシウスさん。今回のような方法は今後一切使いません。ごめんなさい。

「ダンブルドア校長がお戻りになられる。あの森番とともにな」

「そうですか。なんとまあ事件が起こる時に不在な校長ですねえ」

「不可抗力だろう。」

その後いろいろの話になったが、僕は思い出して、ドビーつまりはマルフォイ家のハウスエルフについて聞いてみた。

「ああ、ドビーか、あれは面白いな。ドビーともうひとり、ああビビといったか。あのハウスエルフは自分の意志で働いている。」

「どういうことですか?と聞くと、細かく説明してくれた。」

簡単にいうと、ドビーとビビは、自由を求めるハウスエルフだったらしい。自由といっても働きたくないという意味ではなく、自分の意思をもって働き、ヒトと同じように自分の生活を送ってみたいというものだった。だからルシウスさんは面白がって、契約書を交わした後、ふたりを自由にしたそう。契約書というのは雇用契約書のことであり一年ごとに更新される。そして、サジッタが養子にでるときに、ビビの方から、雇用形態を変えて欲しいと申し入れがあったそう。言い方としては「サジッタ坊ちゃんについていくことは、ビビには許されないでしょうか」というものだったそうだが。

僕は、今すぐにここにドビーを呼んでくれませんか。と懇願し、このあと彼を追求することになる。「秘密の部屋」「日記」などのフレーズにルシウスさんは興味をもって話を聞いていた。最後に彼が言ったのは「ドビー、お前がお前の休日は何をするでもいいが、私は雇用主として相談にのるぐらいの気構えはあるつもりだ。ほかの下劣なやつのように、お前たちを虐げているつもりもない。相談相手として役不足か」だった。

ドビーは「滅相もない！そのようなことを相談など、まさか考えられないのでございます！」と言っていたが、最後には納得して「ルシウス様はお優しい！」と叫んでどこかに消えていった。

そのあと、しばらくは学校にいたが、ダンブルドア校長が戻ったと聞くやいなや「ドラコが目覚めたらまた、連絡をくれ」といって帰っていった。

「リドル。ドラコが一週間も目覚めないんですけど、やっぱり今ここで燃やしてやろうか」

『ハリー、それについてはキミが言うところの健全な話し合いののち何度も話し合ってきただろう』

「てゆか、こつちサイドにつく気なら最初からそう言ってよね」

『聞かなかったのはそっちだろう！僕は再三話し合いを求めたぞ！結局許されざる呪文を使って、全てを吐かせるなんて、僕は君に第二のヴォルデモートを見たね』

「ドラコを傷つけた時点で有罪は決まっていたし、あんな演出するからだろう？誰だって、あんな敵対の図だって思うよ」

ヴォルデモートにあつたことなくせに、あの蛇頭みたらきつと卒倒するぞ。そのお美しい顔が、あんなになるんだもんなあ。よく見れば、僕の好みだな。まあドラコにはかなわないけど。と、目の前で実体化するリドルを見上げる。

「つて、僕がクルーシオ使ったことも使えたことも絶対バラさないでよね。僕が一番嫌いな呪文なんだから。」

『一番嫌いな呪文なのに、迷いなく使うってそうとうじゃない？』

「背に腹は変えられないし、ドラコ関連になると、そういう建前はいら
ない」

『日記のときから思っていたけど、ほんと気持ちわるいな。』

「まあ、言えないだろうし、ばらさないだろうけどね」

『まさか、忠誠の呪文をあんなふうを活用するとは。第三者の結び手もなしにあんな一方的な…』

「一方的…？」

『どう考えてもあれは一方的だろう』

まあ一方的であつたけど、さすがにそこまであの呪文は自由度が高くない。結び手もないから、効力もそんなに強くなく最後に待ち受けるのは死ではない。相手が合意しないと使えないという点では、変わらないが。まあ、やっぱり一方的な術ではあるな。どつちかという
と使役するものと、されるものが確定するような代物だ。

僕が求めたのは「僕が求めた時の情報と知識の開示」「僕が不利になる言動・行動はしないこと」の二つだけだ。ちなみに優しいので無効にも要求があるかときいたら「その条件のもとでいいから『自由』が欲しい。勿論「今日はどこに行っていたの」と聞かれたら、嘘偽りなくハリーに伝えるからさ」というものであつた。もともと、そこまで縛るつもりもないし、どつちかというとフラフラしてもらつて、情報

収集をして欲しかったので、それは特に問題のない要求だった。

とまあそんな感じで、ふたりで色々なことを摺合わしたり話をしたりしてドラコが目覚めない日が続いた。

ドラコが目覚めたのは、それから一週間後のことだった。

彼は僕に解決編という名の解説を求めてきたので、今回の出来事を打ち明ける。

話を聞いていたドラコが意を決して僕に聞いたことは、厳しい言葉だった。

「ハリー。できれば正直に答えて欲しいことがある」

「えっなに？君のことが好きかって？勿論！」

「この2年生になってからでいい。僕に対する嘘・もしくは秘密はいくつある。」

「だよ。と僕は納得する。」

変に取り繕うこともせず、どうしようと曖昧に物事を伝えた。

きっと彼は気づいているだろうとは思っていたけれども、ここまで単刀直入にきかれるとは思っていなかった。思っていなかったけれども、これ以上嘘は並べたくなかった。

「二つ」と答える。

実際本当に二つかどうかなんて、正直わからないレベルだけでも、彼にたいする裏切り行為というレベルでなら、二つだろう。

そうして彼は「誰を信用していいかわからなくなる」というのだつた。それを聞いて、ドラコは本当に清らかだな。と思つた。僕なんて、信用したいという前提のもとではもう動けない。セブルスとドラコを信用してそれ以外は、全て疑心だ。信用すると辛くなる。

だから、ドラコは僕だけを信用していればいい。

そうしていれば、安心だろう。

「僕は君への愛を保証に、僕は君を信用していると、証明する」

僕は君のことが好きだ。これは何者にも変えられない。

この思いがあるだけで、信用の保証になる。

僕は君を疑うなんてこと、絶対にしない。

だから、君の僕への愛で、僕を信用してはくれないか。

「君のことを、信用してやる。勿論、貴様にあるなけなし程度の愛で、だが」

うん。愛してるよドラコ。

僕は君を幸せにするためにここにいる。

この一年間は、君を犠牲にするという最悪の方法をとってしまった。

もうこんな失態はやらかさない。

ドラコはもう少し療養が必要だといって医務室に残り、僕は今や一

人部屋となつてしまつてゐる部屋に戻つた。ベッドに腰掛けると、リドルが目の前に現れる。この出現についても、なにかしらお互いに誓約があるな。

『いいのかい。ハリー。また彼に嘘を重ねてしまつて』

「うるさいなあ」

『僕の協力者が誰か知つてゐるんだから、彼に伝えたらいいのに』

僕はにやにや顔の彼を睨む。

「僕はその協力者について信用をしていない。その協力者が、僕たちと君を結びつける算段だつたと聞いてもだ。君のやり方はやはり腹が立つし、ドラコが犠牲になつていくのを平気で見ていたその協力者にも腸が煮えくり返る思いだ」

『そういうな。ハリー。まあ方法は方法だからな。結果論を求めるところはスリザリンらしいだろう。この結果はあいつの求めていた結果になつてゐる。』

「はいはい。分かりましたよ。リドルは彼のことを信用してるんだもんね。僕は君のことも彼のことも信用していない。それだけだ」

『そう、それだけだな』

そう、彼が求めた約束についても一つ。それは『僕の協力者、サジッタ・エイブリーに手を出すな』というものだった。それを聞いた瞬間、あの子のもとにカチコミに行かなかつた僕を本気で褒めて欲しい。

帰りの電車の中で、リドルとドラコは改めて挨拶をすることになる。

『改めまして、トム・リドルです。今はハリーの忠実な下僕です。どうぞよろしく』

「…ドラコマルフォイだ。簡単には聞いたけど、僕は君を信用していないか、よくわかっていない」

不信任を隠そうとしないドラコに「そりやそうだよね」と僕は思う。

「まあ、信用は、僕もしてない。けど使えるものは使つときたいなつて話。こつちが警戒してれば大丈夫でしょう。まあ、結構面白いやつだから話し相手にするには申し分ないよ！というかりドル。土下座」
『ハリー。まじでジャパニーズ土下座は勘弁してくれ。ほかの事で、なんでも要求を聞くから！』

という「なんでも」という言葉をドラコは聞き逃さなかった。さすがだ。

「実はな、二年生になったときに、ハリーに『脱狼葉』の研究を頼まれたのだが、実際学校でできることには限界があつて、この長期休暇を使って理論立てたことを実践してみようと思つているんだ。それに、知恵と力を貸してもらえるとたすかる。」

『君さあ。僕に不信任抱いている割には厚かましいね？別にいいけど。どうせやることもないし。』

なるほど。それとこれとは別つていう考え方ができるところが本当にドラコらしいな。そして僕が頼んでいたことが順調に行つていくようによかつた。来年は三年生。ルーピン先生だ。それまでにな

んとか、なれば…さすがに臨床実験とかできないだろうし、難しいか。

「ハリーー！」「はいー！」

ドラコに急に呼ばれてつい背筋を伸ばす。

「今年の誕生日あけとけよ。12歳を祝えなかった分、盛大に祝ってやる」

母上と父上巻き込んでな。

と、彼の素敵なしたり顔つきで、僕の夏の楽しみは決定したのである。

s o m e b o d y , s r e g r e t s a g i t
t a s i d e

ホグワーツからの入学許可証がくる。

来ないという不安を一度も感じたことはなかったが、やはりこうして実際の手紙を手にするると、新しい環境に期待と胸は膨らむな。とサジッタは感じた。

義父に報告してから、自室にもどる。

机にひとつだけ鍵が掛かっている棚がある。その棚を肌身離さずもっている鍵で開けた。そこにはサジッタの宝物が詰まっている。今手前においているものは、ボロボロの日記と杖だった。

日記を取り出して開く。サジッタは羽ペンをとり、その日記に言葉を書いた。

「ホグワーツから入学の手紙が来ました。いよいよ、僕もあの学校に行きます。」

すると、じわりと文字は溶け出し、新たな文字が浮かび上がってきた。

『時が経つのは早いね。おめでとうサジッタ。』

「長かったですね。正直くたびれました。」

『おや、それは僕の相手にかい?』

「まさか」

サジッタは書きながらもつぶやく。

「むしろ、トムと一緒にいらなくなるのは寂しいです。」

『それは、嬉しいことをいってくれるね。』

サジツタにとってトムは、何にも変え難い相談相手であり、友人であった。が、自分の立場はよくわかっている。自分はこれを上手に使わなければならないということも理解していた。幼い頭をうんうんと唸らせ、思考をもっていかれそうになるのを制御し、トムと一応は対等に会話できるようになった。

サジツタの考え方が、一般のソレではないのは、こういう生き方も関係しているのかもしれない。

といっても、トムとの関係が、変わったのは自分が何かができたり、力で押さえつけたりしたわけではない。恥ずかしいことに自分を乗っ取るうとしたトムが、サジツタのまだ二ケタにも言っていない人生を知り、この子供を哀れに思ったからだ。

まだ、学生時代のトムには、誰かに憐憫を垂れるぐらいの心があったのである。自分の過去も言いたくはないが「かわいそう」だが、サジツタのそれは、違う意味で「かわいそう」なものだった。

「あ、トム。頼まれていた杖。週末に手に入れますね。義父が入学祝いに買ってしてくれるそうなので」

『君の杖はいいのかい？』

「心配はいりません。僕にあう僕の杖はマルフォイの実父に買っただけです。そのことを義父には伝えていなかったので、買ってくださいますよ」

やれやれ、とトムは思う。わかっているこの子はやっているなど。もともと賢い彼に更なる知恵をつけさせたのは自分であるという自覚はある。けれども、やはり、素質というものもあるだろう。素質と環境。これが、この物語のもうひとつのテーマであることをトムはし

らない。(もう一つは愛だ。ハリーとドラコの)

『やれやれ、サジツタのあの兄のために生きる人生が始まるわけだ。』

浮かび上がる文字にサジツタはにこにこする。

リドルの日記はいい。書いたことが消えてくれるから。

それだけでも最高なのに、こうしてそれを聞いてくれる相手がいる。

「トム。それは違いますよ。僕が僕であるための人生がはじまるだけです」

『なるほど、そういう言い方もできるな』

「協力をしましょう」

『お互いにね』

「そういう友もありでしょう」

これから始まる学校生活に、トムがいないのは正直いうと不安でいっぱいだった。長年一緒にいた彼が、いなくなるのである。そして、自分から「これ」を手放すのである。まだ、幼いサジツタが、寂しさを覚えるのは当然だった。

「トム、僕の魔力あげますから。今日は添い寝してくれませんか？」

『以前それで寝込んだだろう。やめておけ』

「そんなの、寝ればなおるじゃないですか。週末に間に合えば問題ないです。ダメですか」

断れるトムじゃない。もう、トムにとっては、サジツタは可愛い弟なのだ。もし、学生中、こういう弟がいたら、僕は、僕のように違う人生を送っていたかもしれない。と考えてしまうほど、未来の凶悪犯はほだされていた。

実際、学生中にサジツタのような弟がいてもきつと、彼はほだされて
いないし、むしろ、死喰人メンバーに入れていただけだろうが。

『わかった』

そういつて、実体化し、サジツタを寝かしつける。

さて、どうせ僕は記憶だ。

マグルのいない世界を願ってもそれはすでにもう僕の処理する範
囲じゃない。

だったら、出来る範囲で最大限楽しんでやろう。

そう思いながら、トムはサジツタが眠れるのように、色々な話をし
て聞かせた。

そうして、夜は今日も更けていくのである。

アズカバンの囚人

1—1

やり直したいと何度も後悔した人生。

その後悔の理由なんて、僕の前の人生を知れば、誰でもいくつか思い浮かべられるほどの黒歴史。でもその一番の理由だけは、誰もわからない。きつとわかるのはアストリアだけ。

きつとあいっだけは

「はいはい。ハリーポッターと友人になりたかったことでしょう。きつとあなたなら次の人生でできますよ」

といって慰めているのか呆れているのかわからない様子で。だけれど優しい音で笑うのだろう。

さて、僕の二度目の人生は、晴れてあのハリーと友人になっているのだけれども。自分の家に招待したり、プレゼントを送りあったり、学校生活も一緒にいることが多い。前の世で彼ら三人が経験した、「アレラ」についても僕も仲間に入れてもらっている。そう、僕らの関係はとてつもなく良好だとは、思っているのだけれども。

けれどもそれって、結局のところ、僕が記憶持ちだからってだけじゃないか？と思いついてしまったのは、二年生が終わり三年生になる夏休みの最中だった。彼にとって僕が記憶持ちだったから、ほかの人たちよりはスタートの時点でいくらかポイントがあっただけじゃないか。と考えては、いや一年生のお互いそのこと知らなかったし、あれはあれで真の友情だ。いやまてよ。そうはいつでも

……の繰り返し。

「僕は君への愛を保証に、僕は君を信用していると、保証する。」

彼は、僕に真実を言わない。

嘘をつくというより、隠し事をしているという感じだ。

それは、僕を巻き込みたくないからなのか。

それとも、僕を友人として信用していないからなのか。

そもそも、あいつ僕に愛などないだろう。

つまりそれは、信用してないと同義なのではないだろうか。

いや、しかし、

『言葉によつて、左右され、いろいろなことに思考を巡らすというのは、それはそれで人間らしいとは思いますが、今ここでもし君に危険なことが起きれば、僕がハリーに消されてしまうので、ひとまず辞めにしておかないか。』

僕は、声が出した方に顔をあげる。

ここは、マルフォイのお屋敷にある、僕が父上に頼んで作つてもらつた、実験室だつた。

勿論いろいろ加工済み、最新鋭の完璧な部屋である。

この部屋に、目の前のリドルを連れてきたとき、「恵まれた人間、腹立つ」と呟かれたのは聞こえなかったことにした。無理怖い。

キングクロス駅で別れた時、この日記はハリーの持ち物だつた。

それが、このあいだ僕の家にくくろう便で送られてきたのだ。「一応、無闇矢鱈に魔力すわなくても、実体化できるぐらいになつたから、

ドラコに渡すね。危険なことしろって意味じゃないよ！汽車の中で話してた例の薬のことで役立ててねって意味だよ！」

最初送られてきたとき、本当どうしてやろうかと思った。無用心すぎないか？手紙の二枚目にメモのように添えられていた言葉も紹介しておこう。

「P. S. もう僕は君なしでは生きていけません。早く迎えに来て」

どんな顔をして書いたのだろうと、心の底から心配になった。

ということ、僕は今、彼の監修のもと人狼症の薬について研究を進めているところだ。大釜をぐるぐると煮立たせながら、考え事をしていたから、見かねたリドルが僕に声をかけたという状況らしい。

『あんまり、あいつのことで悩むのは僕はおすすめしないね』
「心を読んだか？」

『まさか、読まなくてもわかるレベルだということだ。君はハリーの足でまといにはなりそうにはないが、弱点にはなりそうだね』
「よく意味がわからないが」

それで結構。とでもいうかのように彼は肩をすくめて、椅子に座り直した。

『あと一応言っておくけど、時計の短針が何周回ったか確認しておく

としい』

くそつたれが……!!!

あのあとハリーには誕生日の朝に迎えに行くご連絡をした。すると、すぐに「その日は10時にバーノンおじさんがマージおばさんを迎えに行く」と帰ってきたので、いろいろと予定を変更することにする。

ちなみに盛大に祝ってやるといった誕生日だが、まさかのロンやハーマイオニー達の日程が合わなかった。ロンはエジプトでハーマイオニーはフランスだそうだ。(ちなみにロンは新品の杖を買ってもらったらしい。例のふくろうについては、さすがにひと騒動あったことは明記しておこう)母上がそれを聞いて、どこかジャパンの方にも旅行にいきましようか。と提案してくれたけれども、またの機会にした。いや、まあハリーが行きたいのならそれでもいいけど、僕としては色々と頼まれていることを、せつかくの長期期間に勧めておきたいのだ。

「そう?。」といった母上は、その後「じゃあ誕生日パーティを盛大にしましょうね」とにつこりと微笑んだから、とりあえず一任した。文句は受け付けない。あの母上の楽しみは誰も奪えないぞ。

母上と父上のいるフロアに上がると、そこには、サジツタがいた。母上のいれたお茶とお気に入りの茶菓子で、何やら団らんをしているようだったが、サジツタは僕を見つけて、席をたつ。「兄様」と駆け寄

られたら、もう可愛いことこの上ない。かわいい。

「兄様。今から、ハリーをお迎えに行くのですよね！父上から伺いました！」

「ああ。サジーもついてくるのか？」

「いいえ！私は母上とパーティの準備をしていようかと。お気をつけてくださいね！」

父は、すでに支度を済ませていたようで「行くぞ」と声をかける。ロンドンまでポルトキーで移動しそれから、車での移動だ。どうハリーを迎えに行こうかと父上がこぼしていたから「あの一家は権力に弱いですよ」とだけ言っておいた。

マグルであることに必死のあの家にどうスムーズに話をして迎えるに行こうかと思っていたが、考えようとしたところで父上に丸投げしておいた。ちなみに誕生日パーティも母上に丸投げしている。使えるものは親でも使えとは、よく言ったものだ。

おかげでハリーの回収は、一瞬で終了した。

どんな表情がみられるだろうか。と楽しみにしていたのだが、まあダーズリー一家は予想していたもの以上のものはなかったし、当のハリーは普通だった。むしろ荷物を車に入れたあと、僕のとこに寄ってきて、ワントーン高めの声で「ずっと待ってた」と呟いて腕を絡ませたのは、向こうへの挑発にもなっていたし、僕への嫌がらせとしては100点だっただろう。ほらみる、紳士の父上が隣で笑いをこらえるのに必死である。そのあとの、僕のダーリンというあいつのつぶやきは恥ずかしすぎて顔が真っ赤になってしまった。

とまあ、そんな感じで我が家に帰ると、とりあえず熱烈な歓迎をハリーは母上たちに受ける事になる。「明日はパーティの予定よ。夏用

にまた、一つ仕立てているから、それを着てね。私からのプレゼント」と言われていた。

「はー！相変わらずの歓迎に僕は戸惑いしか覚ええないよ！」

「明日のパーティーはもつとすごいぞ。」

「ホームパーティー？」

「まさか」

ホームパーティーじゃないの!?!とハリーが叫ぶ。いやホームパーティーだけだ。けれど、ハリーが想像している身内だけで…のレベルは超えているだろうな。招待状リスト見たけど、結構スリザリン生とか、普段仲良くしているメンバーが入っていた。

「パンジーとか、ミリセントとか？」

「そうそう、クイディッチ関係もよんでいたかな。マーカスとか」

「ダフネとか、アストリアとか？」

「たしかそこの姉妹も名前に入っていたような」

「君の奥方の初対面が、僕の誕生日パーティーとか…。」

はあ？奥方ではないし、君の言葉をかりるなら「元」がつく。

可愛いのとひたすら聞かれるからうっとおしくなって「かわいいにきまつているだろう！」と叫んだら静かになった。さて、積もる話もあるんだ。さっさとそれについて話し合っておこう。

「はいはいはいはい。え？なんだっけジニーの話？かわいいよね。かわい。どこにだしても恥ずかしくないよね」

「誰がそんな話をしていた。シリウス・ブラックの話なんだが」

「はいはいはいはい。」

「予定通りという言葉が正しいのか知らないが、無事脱獄を果たしているようだな」

「はいはいはいはい。」

ええい。もう鬱陶しい。

話を聞く気がないなら僕だって話す気はない。僕の実験室もとい研究室に、先ほどの実験を放置してきている。どうせならあの続きをしてみよう。僕は、椅子から立ち上がりそのまま部屋を出ようとする。

すると、扉に手をかけたところでハリーの「ごめんってばああああ」という声が聞こえてきた。

「いじけモードは終わったか」

「僕がなんでいじけたか、知らないくせに」

「そうか、じゃ」

くるりとドアに手をかける「うそうそ嘘！で、シリウスがなんだった！脱獄したって!？」

「……まあ。そうだな」と、椅子に座り、ハリーに向き直った。

話し合いをする前に、とハリーは前置きをして、リドルの日記に呼びかけて彼を実体化させる。「二度手間は避けたいから」といいながら、部屋にしつかりと防音呪文などをかけていった。

「僕としてはね。三年次については、君がハグリッドのことで裁判を

起こしたり、なんだりしたことは、捨てておこうと思うんだ、正直知ったこつちやない」

ハグリッドが死んでしまふとかになれば、勿論話は別だけどそういうわけじゃないし、彼とは仲良くさせてもらっているけど、前回ほどではないしね。そういうながら、ナチュラルに僕の傷をえぐる。

「今回の目的はただ一つだ。シリウスの保護、そしてできることなら無実の証明」

だから、スキヤバーズをとつ捕まえて、魔法省につきだす。ただ、13歳の子供の僕がそれをしたところで、ではあるからそれなりの準備はするけどね。

「ロンから送られてきた手紙に写真がついていた。スキヤバーズをちゃんと連れて行って、ご丁寧の写真をとってそれが新聞記事に載っていた」

「そう。その写真をみたシリウスが彼の生存を確信するんだから、物語はやはり予定通りにすすんでいるね。」

「でも、準備するにしても、やはりとつと捕まえて、姿元に戻して送りつければ解決するんだからそうすればいいのに。と僕は思う。」

「ドラコのことごもごもともなんだけどね。僕はね。みんなと楽しく学校生活を過ごしたいんだよねえ。ぶつちやけね？世界平和とかヴォル戦は僕にとって二の次なの。ドラコと、ホグズミードいったり、ダンスパーティーに参加したり、アニメーガスってやっぱ難しいねー、きやつきやうふふってしたいだけなんだよね。だから、できる限り、僕が知っている通りになぞってイレギュラー回避で！」

ハリーとホグズミード行ったり。

ホグワーツのダンスパーティーに参加したり。

ともに、学校の勉強について切磋琢磨する……！良い！

「なるほどな！」

「だろう。僕たちそれでなくても前回悲惨だったんだからさ。そのぶん余裕ぶっこいて楽しもうよ」

目の前に、すでにトム・リドルがいることがイレギュラーであるという問題にはあえて触れない。というより、僕たちが友情関係育んでる時点でもう、最大のイレギュラーだな！6年次7年次の展開が変わっていることまったなしだ！

『君たちが、気持ち悪い関係をどこまで引きずっていくのかという問題はこの際置いといて、『前回』だとか、その予知的な物の見方について、僕は説明願えるのかな』

ああ、そこらへんの事情はまだハリーは話していないのか。「そうだったね！」と行ってハリーは簡単に、ごくごく簡単にリドルに僕たちの状況について説明をした。

『それについては、深く考えない方がいいのか。それとも、
「深く考えなくていい。」

「考えなくていいよ。リドル。そんなことよりも重要なのは、僕とドラコがハッピーに暮らすこと、そのためには腹が立つことにヴォル戦を終わらせなきゃいけないんだよね」

そう、僕たちがいかに幸せな未来を望もうとも、ヴォルデモートについてはなんとかしなければならぬ。そうして、ハリーは、驚きの事実をリドルに告げる。リドルがヴォルデモートとつながっていない

いという保証はない。もし外部に漏れたらどうするんだ。

「まあヴォルを倒すにしても色々問題はあるんだよね。リドル、君。分霊箱のことは覚えている？君自身もあいつの分霊箱だけどき、あれからあいついくつか分霊箱を作ってるんだよね。」

『なるほど、その破壊が必要だということか。』

「さっすが、リドル。そういうこと、何が分霊箱かについては、君に伝えちゃうとドラコが泣きそうだから言わないけど、いくつかは見当つくでしょう。」

「このことは、僕とドラコと君しか知らない。壊す時期も僕が決める。意味、わかるよね」

『僕は忠実なる君の下僕という役回りだからね。とりあえず理解したと伝えておこう』

それを聞いてハリーは目を伏せたあと、僕を見つめる。

「まあ、三年のときは、ヴォル戦とは関係ないし、特別警戒することもありません！次話ですでに、シリウスとリーマスとペティグリューとin暴れ柳のシーンでもいいくらいにね！」

メタ発言やめろ！

「そういうえげドラコ、頼んでいたあれできそう？」

「ああ、そっちは双子に投げた。ものづくりする暇があれば人狼症の薬やっておきたかったしな」

「ああ」

誕生日パーティーは一応つつがなく進んでいた。

家のパーティーではなくハリーのためのパーティーだから、招待客はみんな学生である。夏休みに入ってから、初めて会うためか、色々話で盛り上がった。ネビルも招待されており、「君の祖母さんは大丈夫なのか？」と聞いたら「場所はいつてないんだ。ハリーの誕生日会とだけ伝えた！」と言っていた。なるほど。強くなったな。

それでも、スリザリン生の中にいるのはいたたまれず（ロンとハーマイオニーが来てないからなあ）僕たちとずっと三人でいた。ハリーは途中にパンジー達三人衆に連れられて、奥のスペースに連れられて行かっていた。一体今度は何をしたんだ。

「こんにちは。ドラコお兄様。」

ネビルと、この夏休みの話をしていると、可愛らしいワンピースに身を包んだ、アストリアに声をかけられる。紅茶の入ったグラスを小さな両手で抱えて。

「おや、君のお姉さんは、僕の友人を連れて向こうに行ってしまったよ」

「ええ、存じております。えっと、ミスタ、私も一緒にしてもよろしいですか？」

アストリアはネビルに確認をとる。ネビルは、かくかくと首を縦に振り、僕とのあいだのスペースを開けた。

「僕はネビル・ロングボトム。グリフィンボールなんだ。君は、グリーングラスの妹？」

「ええ、姉をご存知ですか。アストリア・グリーングラスといいます。」

トリアと気軽に呼んでください。姉についてきたのはいいのですが、姉は、ご学友との会話に夢中で取り残されてしまつて」

「そうなんだ。僕もハリーの誕生日パーティーだからと思つてきたんだけど、スリザリン生ばかりで萎縮していたところなんだ。あつスリザリン生がどうかじゃなくて、友達がいなくて意味で」

ネビルはブンブンと首をふる。

正直みていて面白い。トリア可愛いだろう。君の戸惑いはよくわかるよ。グリフィンドールにはこんなしつかりしたお嬢様はいない。まあスリザリンにも、トリアほど柔らかな女性もないがな。イメージで会話すると、彼女の女性らしい可愛らしさにイチコロになるぞ。

「ネビルは薬草学が得意なんだ。緊張しなければわりとなんでもできると思うんだが、緊張するからわりとなんでもできない」

「この性格は一生治らない気がするから、僕は一生なんでもできない子なんだよ…」

「焦るからいけないんだ、あと自己肯定感が低いと成長できないぞ。まあスリザリンの僕たちと仲良くして後ろ指をさされているくせに、未だ友達でいてくれる貴重な友人のひとりだな。」

アストリアは、なるほど、そうなのですな。と愛らしく相槌をうつ。それから、新学期から彼女も hogwarts の一年生だとうことで、話がそちらに流れていく。「トリアはスリザリンじゃなくてレイブンクローとかグリフィンドールも合うかも知れないなあ」「あ、もしグリフィンドールだったら、ハーマイオニーっていう女の子がね。あ、マグルなんだけど」

「うっわー!!!ドラコの浮気者！ありえない！僕というものがありません！」

数メートル先から、叫び声が聞こえた。

アストリアがびっくりして目を開いているじゃないか。おちつけ
ハリー

「ネビル！僕頼んだよね！たのんだよね！」

ええい、やかましい。

「静かにしてくれないか、うるさくてかなわない。」

「っはああああ??」

「浮気者とか、よくわからないし」

あ、静かになった。

何が浮気者かわからないが、そういうならそつちだつてそうじゃないか。パンジーに泣きついて、そこ男女だぞ。いいのかパンジー、ハリーに肩を許して。

「アストリア。気にしないで。これはハリーの発作なの」

「そうそう、いやでも来年から目にはいるから、ある意味、今日遭遇してもよかつたかもね」

「巻き込まれないようにね。あ、トリアあつちに行きましょう。彼ら」といって馬鹿がうつるから」

そういうながら三人は、彼女を連れてその場を離れる。

アストリアは立ち上がって僕たちに向き直った。

「ドラコお兄様、ネビルお兄様、ハリー様ここで失礼いたします。色々楽しかったです。スリザリンで待っていてください。ネビルお兄

様。寮が違っても仲良くしてくださいませね。」

「かわいいね。」

「かわいいだろう」

「ネビルお兄様だつて、初めて言われた」

「いい子だから、よろしくな」

「僕はお兄様つていわれなかった！」

ハリーがぎやいぎやい叫ぶ。昨日から情緒不安がすぎやしないか。大丈夫かハリー。

そんな話をしていると、目の前に小さな紙がふわりと飛んできた。鳥の形を模したそれは、僕目の前でとまり、はらりと開く。そこには、父上の字で、ハリー宛の文が書かれていた。

魔法大臣であるファッジが、どうしてもハリーに会いたいのだという。今はパーティの途中だから、お帰り願えないかといったところ、確固として譲らなかつたらしい。主賓が抜けるのは申し訳ないから、このままパーティはお開きにさせてもらって、奥の応接室まで降りてきて欲しいというものであった。

シリウス関係だ。そう確信して、僕とハリーはこの会をお開きにした。

ファッジには父上とハリーで対応した、ファッジはハリーと二人で

話したいといったらしいが、そこは父上が譲らなかつた。「まだ未成年の子供が、保護者となりうる大人と同伴なしで魔法大臣とはなすことなどない」だそうだ。

そうして、出てきたハリーは神妙な顔をして、僕と僕の自室へ戻つたのだった。

「で、ファッジはなんと?」

「んー、前回とほとんど同じ。ロンドンにはマグルがいるところには出かけるな。と、そしてできるなら、漏れ鍋に部屋を用意するからそつちで残りの夏休みを過ごさなにかだつてさ。前は僕がシリウスに殺されるのを避けるために提案してたはず。」

「はあ?なんだそれは、それじゃまるで、君がこの屋敷に留まることをよしとしてないみたいじゃないか」

「うん。ルシウスさんも同じことを言っていた。二人でシリウスがどうのこうのとも言っていたよ。前は、僕にシリウスのことを隠したがつていたのに、随分様子は違うよね。で、結局ルシウスさんが、『ハリーの安全は保証する。ただまあ、これではあなたの方が懸念させることの解決にならないとおっしゃるのであれば、ハリーの保護を名目にして、この屋敷を見張るでもなんでもすればいいだろう』って」

やはりそういう展開できたか。と、ドラコは思った。できれば、できれば今回のこの展開については、話さなくていいなら話さないでくださいと思っていたのに。今、目の前のリドルとシリウス・ブラックが何者か、オライオン様について話をしている間にこの話題が流れてくれればいいと願うも、それは無駄におわる。

「で、ドラコ、この屋敷を見張るって何?」

「ああ、心を冷静にして聞いて欲しいんだが。」

「うん。」

そうして、今回のハリーの立ち位置について僕は語った。前は、ファッジ率いる魔法省はハリーのご両親やダブルドアを裏切ったシリウスが、我が主ヴォルデモートのために、ハリーを殺すことによつて、例のあの方の権力がもどると考えていた。けれども、今回は違う。ハリーはスリザリンで、まさかのマルフォイの嫡男であるドラコ・マルフォイと親しくしている。この状況だけで、魔法省の見方はまるつきり違った。それは「シリウスとハリー・ポッターが協同し、ヴォルデモートの復活を遂行するのではないか。というものだった。ましてや、真実がどうであれシリウス・マルフォイは元死喰人なのだ。彼らにとつて疑いやすい、最高の条件がそろつたのである。」

『馬鹿だねえ。相変わらず。知らないってことは恐怖だ。人は知らないからこそ恐れの中で想像を、妄想を肥大させる。事実と異なるかどうかなんて、どうでもいい。そうなれば真実なんてあつてないようなものだろう。』

「そうして、恐れて、無駄なことに神経すり減らしてるとつてわけだ。あの魔法大臣は……つてそれ本気？そうくる？まじ？ちよつと笑いが止まらないんですけど」

ケラケラとハリーが笑う。

わらいとばせるなら、ましなのかもしれない。

ヴォルデモートの仲間扱いされて、ショックを受けるかと思つていたが、いや、これはショックを受けているのか。

「はあ、笑つたわらつた。そう、目が節穴の魔法大臣。今すぐにもハイマイオニーと変わったほうがいいんじゃないの？ドラコ。また、君が傷ついた顔をしている。僕のこと傷つかないですよ。」

ねっ。とあたまを撫でられる。
そんなに僕はわかりやすいのだろうか。

「あつそういえば、違うとわかってて聞くんだけど、この家黒い犬かつてる？」

「黒犬？飼っていないが…え？まさか」

「シリウスってちよおつとストーカーなどこあるよねえ」

夏休みの最終日。ハーマイオニーやロンと合流して、最後の買い物を済ます。

僕もハリーもロンも、ファイアボルトの前で資産が釘付けになる。

ハーマイオニーはご両親からのお小遣いで、利発そうな猫を買っていた。

僕の両親とは、ここについた時に、すでに分かれていて、明日のキングクロス駅で再会する予定だった。ハーマイオニーやロンたちとともに漏れ鍋で一泊する。

ハリーがアーサーさんとおそらくシリウスの話をしている間に僕はフレッドとジョージのところへ、例の道具について話を聴きに行っていた。「ああ。完璧だよ。」君からの支援金もあったし、すぐだったね」

「僕のもののができたら、それを使ってそのまま商品化しても

らってもいいから」

「オーケイドラコ。君の依頼のものはできてるんだが、これをグッズとしてどう活用するかはまだ、考え中だ」

「商品開発の大変なところであり、楽しいところですよ」

そうして、必要なイベントを一つ一つ回収しながら、いや、回収させられながら、新学期初日を僕たちは迎えた。

「さて、そろそろ時間かな。」

「ああ吸魂鬼が現れるんだったな。」

一瞬だけのマフリアートで僕たちは会話する。

今日この汽車の時間をどう過ごすかについては事前に二人で決めていた。ハリーのできればルーピン先生に汽車であつておきたいな。に基づいて、ロンとハーマイオニーと一緒にコンパートメントを最初からとつていた。

コンパートメントを覗くと、そこには先客が。ひとり、ルーピン先生だった。目ざとくハーマイオニーがカバンにかいてある名前をみつけ、身元が判明する。そしてあれよあれよと、次の闇の魔術の防衛術の先生だろうということまで、突き止められていた。ハリーをみると、泣きそうな、それでいてひどく安心したような表情をしていた。

昨日一晩だけでは尽きない夏休みの話をしていたところで、ネビルがひよっこりと顔をだす。タイミングを見計らったかのように、汽車が速度を落とし始めた。

最初に異変に気づいたのはハーマイオニーだ。外の雨音がコンパートメント内の不穏な空気を助長していた。すると、電気が一斉にきれ、汽車の中が生徒の混乱でいっぱいになる。ハリーに「自分の杖握つててよ」と耳打ちをされ、僕は僕の杖をギュツと握り直した。

「静かに！動かないで！」

ようやく目をさました先生は手の平いっぱい炎を灯し、コンパートメント内を照らす。そうしてドアがゆっくりとあき、明かりで照らされる。そこには、吸魂鬼が立っていた。寒い、もう二度と味わいた

くないと思わされる冷気だ。ぐらり、と視界が歪むような感覚を覚える。椅子から倒れそうになる自分を横にいたハリーが腰から支える。バランスを崩し、からだ全体をハリーに預ける形になった。

「先生。どけてください。僕のドラコが怖がっているのです」

そういいながら、ハリーは杖を掲げ、『エクスペクトパトローナム』と静かに唱える。その杖先からは、銀色の光がとびだし、吸魂鬼に向かっていった。吸魂鬼は、スーつとどこかへ消えていった。

「おどろいた。君は、その年で守護霊の呪文が使えるのかい」

「スネイプ先生が、教えてくれたんです。何かあった時のためにと」

そういつてハリーは、僕をギュツと抱きしめてから「大丈夫？」と椅子に座らせる。ロンたちも怖かったくせに、僕の心配をしてくれる。

「君は、本当に、マルフォイの子息と友人で、そして、スリザリンなんだね。」

その発言に、コンパートメント内の人間全員がルーピン先生を見つめた。最初に先生に向けて発言したのはハーマイオニーだった。「先生は、ハリーがスリザリンなのがいけないと、私たちグリフィンドルが仲良くしているのはいけない、とおっしゃるのですか」

その彼女の言葉の意味にきづけたのは、それでもルーピン先生だったからだろう。すぐに「すまない、誤解を招くような発言をしまった。違うんだよ。つい、ジェームズを思い出してしまっただけ

だ。彼が、それこそ君の言うスネイプ先生と一緒に過ごすなんてことありえなかったからね。」と、自分の発言の弁明をした。そうして、僕たち全員にチョコレートを配り、「運転手と話をしてこなければ」といって部屋を後にした。

その後、少しだけ、あの先生はハリーのお父さんのことを知っているのだろうか、という話題になったが、あの吸魂鬼のせいで、すぐに話は途切れてしまった。

学校についてから、ハーマイオニーはマクゴナガル先生によびされた。そのタイミングで僕たちもロンとネビルと離れてからスリザリンの集団へと混じっていく。

「ドラコ、本当にもう大丈夫?」

「正直大丈夫じゃない。この学校にあいつらがいると思うだけで気持ち重い」

「守護霊使えないんだっけ」

「こつちに來てから一応練習はしているが、まだ成功はしてない。銀色のもやもやはでるんだけどな」

「使えるようになったら、気持ちだけでもすこし楽になるのにね」

そーいいながら背中をさすってくれるのを甘んじて受けた。

「吸魂鬼ってほんと。見直すべきだと思う。情状酌量の余地なしって感じで納得いかないし、ドラコをこんなふうにして、僕は本当に許せないんだけど」

今回の校長の話は、当時と変わらず吸魂鬼のことと、新任の先生の話だった。ちらりとスネイプ先生の方を伺うと、不機嫌そうな顔で座っていた。不機嫌そうというか、あれは不機嫌だな。まあ毎月脱狼

約薬を作るとなると、億劫にもなる気持ちはわからないでもない。しかもあそこには、因縁があると聞くし。

「ハグリットが先生になるのはいいんだけど、もう少しちゃんとした規約があればいいのって思うよ」

「この事実をリドルが知ったら、怒りで建物崩壊するんじゃないのか？」

「確かに、自分は先生になるの拒否されているからねえ」

翌朝、朝食の時間はそれぞれの時間割を見せ合っていた。

「あら、占い学はドラコだけがとったのね。二人が同じ教室にいないなんて大丈夫なの？」

「それどういう意味。パンジー。僕は占い学だけは取らないって決めているから。生まれた時から。選択授業はほどほどでいいんだ。」

「まあ、ドラコは取れる限りの最大をとったのね。ハリーが寂しく泣いちゃうんじゃない？」

「大丈夫だ。僕が授業でいない間、君たちがハリーを可愛がってくれ。」

「必要ない！スネイプ先生のところに入り浸ってやる！」

とまあこんな感じで、騒々しい朝を終えた。

占い学は北棟だったなあ。と思いつながら向かっていると、キョロキョロしているグリフィンズ三人組を見つけて声をかける。シビルトレローニ先生の教室で、四人で一緒になって座った。そこではまさかの僕が「グリム」の話を受けることになった。ただ、前回と違

うのは「あなた、もしくははあなたの身近なひとが死神犬にとりつかれています」といったことだった。その瞬間、クラスで「ハリー・ポッター」という眩きが広がっていった。

変身学のクラスの前で、ハリーが僕たちを待っている。

待っていたハリーに挨拶よりまず先にロンが「君最近黒い犬にあつてないよね!？」と詰めよる。「え？ドラコの家で見たけど？」と無遠慮な返事にロンは顔を真っ青にしていた。ハリーが「まさか」という顔をして僕をみたので、たっぷり頷いておいた。

「ロン。ここで待っている時に色々噂を聞いたけど、トレローニー先生は毎年だれかの死の宣告をするんだって。彼女なりのジョークなんだよ。それに、ドラコは僕が死なせやしないし、きつと僕のこととはドラコ含む君たちが殺させやしないだろう。大丈夫だって」そういつて、ロンの背中をドンと叩き教室に連れて行った。

授業が終わったあとも、おびえているロンをみてハーマイオニーがなだめる。「大丈夫よ」というが、彼の耳には入っていないようだ。「あんな不正確なものも魔術なのね。理解できないわ。」その後、また魔法生物飼育学でと、彼らと別れた。

「で、あのくそ教員は生徒を怖がらせてなにが正しいんだろうねえ」

「トレローニー先生だ。」

「しかも、今回はドラコだって？僕だって？ふざけるのも大概にして欲しいよね！」

「まあ、彼女の予言は本物だからなあ。ただ、トランス状態でないときの予言については心理テストレベルでしか、受け取らないけど」

そういいながら、僕たちは、目の前のお菓子をそもそもそと食べる。勉強したあとは、やはりおいしいお菓子に限るよな。

「マルフォイ、ポッター。それで、なぜ吾輩の研究室でくつろいでいる

のかね？理由を十文字以内で答ええもらおうか」

『先生がスキだから』はい10文字ぴった！いいい」

「すみません。ハリーが先生に会いたいつて聞かなくて」

そういうしながら、母上からあずかった手作りのケーキを先生の前に差し出す。このタイミングで渡すのただの賄賂だな。

「はあ。次の魔法生物飼育学いきたくなさすぎる。このままサボりたいな」

「諦めろハリー」

そうしていま目の前にはハグリッドご自慢のヒップグリフが繋がれていた。

なんと、拍手をしよう。今回の授業は、特別何も事件はおきなかったし、誰も怪我をしなかった。なんだ、つまり前回僕がちよっかいかけなければ、初回の授業は何とかなっていたということか？よし、考えるのはやめよう。

と、思っていたその日の僕を殴ってやりたい。

ヒップグリフのイベントはそうまでしてこなさなければならぬイベントか？神様。

夕方、コミュニケーションルームで話をしていると。僕たちのもとへ一人のグリフィンドール生がかけこんできた。「マ・マルフォイ先輩」と声をかけた彼は、僕にすこし怯えているようで、でも、しつかりとした口調で「早く医務室へ来てください。サジッタ・エイブリーが怪我をして、ジニーがマフォイ先輩をよんでこいって」

ジニー、もし僕が談話室にいたらどうするつもりだったんだ。この

子には荷が重すぎるぞ。

「ドラコ。あ、ロンたちも来たのね」

そういつて、ジニーは、医務室の前で僕たちを招いた。

「サジツタは何も悪くないのよ。スリザリン生の子達が新しい魔法生物の先生に会いに行こうって話をしていたらしくて。多分冷やかだね。そうしたら、ハッフルパフの先輩の何人かが、あの大きな鳥？みたいなのと遊んでたの。そこに、そのスリザリン生の子達が突入して、びっくりしてその鳥がびっくりして攻撃しようとしちゃって」

それで、そばで様子を見ていたサジツタが飛び出して、その馬鹿なスリザリン生の代わりに怪我を負ったということだった。

「サジツタは彼らを助けようとしただけだし、あの鳥もびっくりしただけなんだけど。」

そう話をしながら、僕たちはサジツタのベッドにむかった。

サジツタは包帯を巻いた手にローブを着て、もう寮へもどるところだった。

「具合はどうだ。」

「兄様！僕を見舞いに来てくださったのですか？大丈夫ですよ。マダムポンフリーの処置は完璧ですし、こんな些細なことなんの問題もありません。」

にこにこサジツタは僕を見上げていう。

「けれども、兄様のその『具合』というのが僕の気持ちのことであれば

『最悪』です。謝罪の一言もない馬鹿な先輩たち。悪意はもっと上手に扱うべきです。何をしようとしてあそこに行つたのかは知りませんがね。」

「父上には？」

「さあ。僕は連絡していませんけど。ええ、してはいませんが、もし僕があゝの先輩たちであれば、連絡をしていると思いますよ。あゝの森番のことをうんと悪くいつてね。」

まあ、そこまであゝの先輩が頭回っているかわかりませんが、ただ、僕の後ろはエイブリーではなくその奥にマルフォイが控えていることも忘れておるおバカな先輩たちですから、そこまでの考えには至つてはいないかもしれません。

久しぶり魔法薬学の授業では、スネイプ先生のグリフィンボールいびりが爆発していた。今度ネビルを呼んで、授業の復習を提案しようと誓った。ネビルのあれは、どう考えても、スネイプ先生にたいする恐れだ。それを聞いてハリーは「いい考えだね。彼はボガートでスネイプ先生の姿を現したくらいだからね」と笑っていた。

そうだ、次の授業は、ルーピン先生による「闇の魔術に対する防衛術」の授業だ。やっとか。

「ドラコ。ちゃんと『本物』には蓋しておいてね」

「わかってる。それもせずに行くと、僕はヴォルデモートになりそう
だ。」

「僕はどうだろう、深層心理はわからないけど、ガツチガチに固めてお
こうと思うよ」

そうして、ルーピン先生のまね妖怪の授業が始まった。さきほど、
グリフィンボールとレイブンクローの授業だったらしく、最初から僕
たちは「職員室」集合といわれていた。すれ違ったロンたちは「最高
だったぜ」と非常にいい顔をしていた。

そうして、僕たちもまね妖怪の説明を一通りうけてから「リディク
ラス」の呪文を練習する。

「順番に呼ぶから一人づつ前に来てね」と言われ、一人一人挑戦して
いった。テンポよく、ころころとみんなの怖いものとおもしろいもの
が入れ替わっていく。ハリーよりさきに僕の名前が呼ばれた。

目の前に、たつ。

怖いものなんてたくさんある。ヴォルデモートも怖ければ吸魂鬼
も怖い。さらにいうとトム・リドルだって恐ろしい。けれども、そん
なものを授業中のまね妖怪に変身させるわけにはいかない。

パチン！

そういつて目の前に現れたのは、愛しいアステリアの姿だった。そ
う、ベッドに横たわる。

ああ、君を失った日のことを今でも覚えているよ。あの時の孤独
感。たしかにあれは僕にとって恐ろしいものだろう。

「誰？」という声が聞こえるが、横たわり眠っている乙女の姿は、知ら
ないものからすれば、特定するのは難しい。あれはな、僕の愛した、奥

方だよ。

「リディークラス」

そうしてボガートは、きれいな花嫁姿に変えた。すると、僕の前にハリーが現れる。先生が「ハリー!？」と声をかけているから、勝手に出てきたのだろう。「前回は、先生の気遣いで、僕中途半端に終わったんだよね」といつていたから、そのためだろうか。

パチン!と姿を変えたボガートは、僕と同じくアストリアの姿をしていた。しかも、今の、11歳のアステリアの姿だ。「お前、なぜ…」

クラスのみんなも「え?ダフネ?」「いや、あれは妹のアストリアじゃない」「どういうこと?」

と呟いてハリーの顔を見ると、本人が一番焦った顔をしていた。「リディークラス」と、そうして、彼は、僕の時と同様にし、花嫁姿にして次の人にバトンタッチした。

勿論。そのあとダフネたちに、彼が取り囲まれたのはあえて言う事でもない。ほかの生徒たちも、気になるようで聞き耳をたてていた。

「いや、この間誕生日パーティーで会った時に、すごい可愛いなって思っちゃたんだよね」

「それでなんでアストリアになるのよ!」

「だから、可愛いから。」

「可愛いから?」

「ドラコがとられるかもって思っちゃったの……!!!」

シーンと静まり返る教室。こつそりと聞き耳をたてていただろうリーマス先生が最初に吹き出していた。みんなも「いつもの理由か」「ハリーはハリーでしかなかった。そうつぶやきながら解散していった。「みんな吹聴しないでよ！恥ずかしいから！」

「で、ハリー、本当のところどうなんだ？」

「本当って」

「アストリアになった理由」

「だからさつき言ったじゃん」

「あの理由を、僕が信じると思ったのか？」

「んべ。君には教えない。浮気者。ばーか」

そういつて、ベロをだし、あつかんべの仕草をする。

向こうにロンたちをみつけ、ハリーはいつの間にか走り出していた。

なんなんだ。あいつは。

僕は家から持ってきたお菓子を分ける。

ハリーがロイヤルミルクティーが飲みたいというから、先日母上に方法を聞いたら思った以上に面倒くさかった。そのレシピとともに茶菓子が添えられていたので、せっかくならみんなで食べようと思つて、ロンに連絡をした。結局来たのは彼一人だったが。

「ルーピン先生の授業、最高におもしろいよな」

「こつちでも、人気だよ。スリザリンにもグリフィンドールにも人気つてなかなかすごいね。彼」

と、新しい教授たちの話に盛り上がったリ、次のクイディッチの話で盛り上がったリと、彼らの話は尽きなかった。といつてもハグリッドの授業については、誰も触れなかったが。つまりはルーピン先生と、選択授業の先生についての話である。

「ハーマイオニーのあの猫が、僕のスキヤバーズをいじめるんだ。いや、あれはいじめどころじゃない。捕らえて食べようとしている！」

とまあ、フラグも見事回収していつてくれた。

「そういえば、ドラコたちは月末のホグズミードには行くんだろ。一生に回ろうよ。シエーマスたちもドラコとハリーと友人になりたいつて」

と、一瞬の沈黙が流れる。あー、そう。ロン。君は知らないんだつたな。

「嬉しいんだけど、ロン。僕、許可証にサインもらえてなくて、いけないだよね」

「えっそうなのか！ドラコは…ハリーが行かないなら…行くわけないよな」

「流石だな。もちろんだ」

サジッタや、アストリアにお土産をねだられたが、最初から行く気はない。別の先輩方に頼んでくれ、と先日いったばかりだ。

「はあ。ドラコが気持ちわるいのはいつものことだからどうでもいいんだけどさ。ハリーのところの保護者って、なんていうか、“保護者”じゃないじゃん。校長先生とか誰かに頼んだら？直談判ってやつ。」
「そう言ってもらえるのは嬉しいけど、たぶん。無理かな。ほら…」
「シリウス・ブラックか？」

ハリーが濁そうとしていたのを、ロンが突っ込む。そう、シリウス・ブラックだ。彼にしては、なかなか冴えてる。と関心していると、なかなか冴えているのは、グリフィンドールの才媛のほうだった。「ハーマイオニーが、ハリーとシリウスが接触するのを、大人は避けるの。本当失礼な話だわ。そんなことないのに。結局自分たちの考えのことしか考えられないの。彼は大人のわがままに巻き込まれているのよ」と談話室でぼやいていたらしい。

ロンは、ハリーにたくさんお土産を買って来ると約束していた。僕にはないのか。と尋ねると「ドラコは自分の意志で行かないんだからいらないだろ。おうちから最高級お菓子でも送ってもらえよ」とだけ言われた。なんだよ。「ロンからのお土産に価値があるんじゃないの

か」といったら、真っ赤になっていた。なぜかハリーに足を蹴られたのは納得いっていないが。

ハロウィーンの朝、玄関に集まる三年生以上の学生を僕たちは、階段の上から見つめていた。「当時は本当に行きたかったんだよね」と、隣でハリーは漏らす。「今は行きたいと思わないのか」と尋ねると「前ほどの必死さはないかな。」と帰ってきた。なんだ、僕と一緒にホグズミードに行きたいって言ってたくせに。

その気持ちが伝わったのかわからないが、ハリーはくすりと笑って僕の手をとる。「下級生しかない。ある意味やりたい放題の休日だよ」と。

「そういえばさ、ドラコ。昨日思い返してて気づいたんだけど、このままいくと『忍びの地図』イベントが発生しない。」

「『忍びの地図』…ああ、あの悪趣味極まりないストーリーカー地図のことか」

「ドラコ、いいかた！あれ、双子からもらうんだよね。ホグズミードにいけない僕を見かねて二人がくれるの。今回、このままだとそのイベント発生しないよ。」

なるほど、確かに今回のハリーは「みかねる」ほどホグズミードにいけないことに落胆しているわけではない。それに、そんな貴重なものをあの双子が手放すほど、ハリーとの友情が育まれていないのも事

実だった。いや、一応言っておくと仲はいい、ロンの家に泊まりに行っているし、双子が僕らにちよつかいかけたり、互いにWindowsの関係を築いてきたりしてはいる。ただ、『忍びの地図』を手放すほどかというところ、なるほど。発生しそうにないな。

なくともいいんじゃないか？というところ、ハリーはそれじゃダメなんだと唸った。

「あの忍びの地図がリーマスのところの手渡って、それによって、彼がスキヤバーズの名前を捉えるんだ。そうしてあの暴れ柳のイベントが全員集合の形になるんだよ」ということだった。

「ダメもとで言うけど、ドラコ『忍びの地図』作れちゃったりしないよね」

「僕の専門は、ものづくりではないということをあえて言った上で、だ。今、人狼薬のことで、忙しいということもあえて主張した上で、だ。その上でいうなれば。本物を参考にさせていただけたら作れる気がするが、何も無いところからは骨が折れるだろうな。正直やりたくない。というより、校内の精密な復元はできないぞ。」

「本物かあ。…うーん。ちよつと方法考える。」

というより、この男。自分でやってみようという意欲はないのか。意欲は。当時ならまだしも僕たちは一応知識は大人レベルだぞ。と冷ややかな視線で見れば「僕がこんな精密なことできると思う？」と逆ギレされた。はいはい。

「ということ、スネイプ先生遊びに来ましたー!!!」

「なにが『ということ』かわからん。帰れ！」

スネイプ先生の叫びを華麗にむしして、ハリーは勝手しつたる研究室。とばかりに中央のソファに腰掛けた。僕は、「すみません。先生」とあたまをさげながら。二人のマイコップをなぜか教授の棚から取り、紅茶を注いで運んだ。

ホグズミードには行かないのか。という先生の質問にハリーは明るく「はい！そんなとこにいくよりも、ドラコと先生とまったりおしゃべりしているほうが好きです！」と答える。先生は、大きなため息をついて、自分のコップを片手に、ソファに腰掛けた。

「まあ、変な噂が立つよりはましか」

「あー、シリウス・ブラックのことですか？」

ハリーは、なんてことないように彼の名を口に出した。スネイプ先生は一瞬ハリーの顔みるが、そのまま「そうだ」とだけ頷く。「僕のお父さんの親友ですよ。どんなひとだったんだろうなあ」と呟いて、ハリーがハツとした顔をする。その顔はわかるぞ「こんなことをスネイプ先生に聞くつもりはなかったのに。」の顔だ。まあ、出たものは仕方ないハリー、先生の苦い過去を思い出させてしまい不機嫌にさせてしまったらその時だ。

そう、覚悟して先生を見上げると「その質問については、吾輩ではなくルーピン先生とやらの聞くのがよからう」とだけ、答えていた。なんと、ハリー、先生がお優しい日だ！

ハリーは安心したように、一口紅茶を飲むと、別の質問を繰り出していった。

「その鍋に調合されているものは、人狼薬でしょうか」

「ほう、ポッター。それがわかるのかね？」

「いえ、当てずっぽうです。ドラコが入学してからずっと人狼症について調べていて、この夏もずっとお屋敷で色々調合していたので、わかっただけです。」

「そうなのか、マルフォイ。非常にややこしい薬だが……。」

不思議そうな表情で、僕を見つめる先生になんと答えたものか、と逡巡する。するが、ハリーが持ち出した話題ということは、意味が有ることなのだろうと思って、話すことにした。

「はい。ずっと気になっていたので、調べていたんです。けれど調べるうちに、脱狼薬のそのややこしさといいますが、得られるもののわりに複雑なことに、すこし、僕の研究心をそそられまして、自分のわがままが許される立場を存分に生かして、子供ながらに色々と実験・研究などをさせていただきました。」

「そうなのー。ドラコめっちゃすごいんだよ先生！でね、ドラコのその研究の成果？を先生に見てもらえないかなって思ったんです！」

ああ、そういうことか。と僕は納得する。確かに、成功させるにしろなんにしる誰かの後ろ盾は必要な案件であった。確かに彼の助言や立場をお借りできるのならば、心強いことはない。僕は、ローブのポケットに腕をつっこみ、その空間に無造作に入れておいた一冊のルーズリーフを取り出した。

先生は、マグル式の紙であったことに一瞬驚いたが「見ておこう」といって、その紙を受け取った。

「それでね、先生。もしそれ読んで『ドラコすごい！』ってなったら、

ドラコに実験する場所を提供して欲しいです！」

ハリー、君は気づいているのだろうか。先生のまえではひどく幼くなっていて、本当にすぎなんだなあ…先生のこと。と、目頭が若干熱くなるのを感じる。

先生は「見てみないとわからない。たかだか13歳の子どもの書いた研究を読むほど吾輩は暇ではない。ただ、ドラコの成績が優秀なこととは吾輩も認めているところだ。目を通すことは約束しよう」と言ってくださった。

前の世では脱狼薬は完成していた。研究論文も読んだし、なぜそうなったのかの理論も理解していた。が、自分が発案者ではない以上目の前に書物がないのに、脱狼薬(完成品)を作れというのは酷な話だった。ただ、自分自信が覚えていたのは、マグルの知恵や漢方などを使えばもっと簡単に様々なものが代用品になるのではないか。と思っただことだった。そのことを必死に思い出しながら、また、リドルに助けられながらいくつかの試作品をつくっていた。

先生。結構僕、マグルの材料使っているけど大丈夫だろうか…。

そんな話をしていると、教授の部屋をノックする音が聞こえてきた。「入れ」というスネイプ先生の声で、ドアはゆっくりとあく。入ってきたのはルーピン先生だった。ソファに僕たちがいることにきづく、はたと足をとめ。おどろいた表情をしていた。

「こんにちはルーピン先生。」

「やあ、ハリーにドラコ。こんなところで何をしているんだい。」

リーマスは、ゆっくりと僕たちに尋ねる。スネイプ先生は「ここで待っている。積もる話もあるだろう。」といって隣の部屋に消えて

いった。おそらくルーピン先生は、スネイプ先生に脱狼薬を貰いに来たのだろう。しかし、さすがgない目の前の鍋から直接すくって渡すよ
うなまねは先生はされなかった。

「どうしたんだろう。今日のスネイプ先生は機嫌がいいと思わないかい？。」

とひそひそと僕たちに話しかける。

ハリーはどうぞ。と目の前の椅子をルーピン先生に差し出しながら、「いつもあんな感じですよ。不器用なので勘違いされちゃいますけど、誰よりも僕のことを理解してくれようと受け入れてくださいます。」と微笑んだ。それを聞き、ルーピン先生は驚いた顔をさらに驚かせ、そのあとは大爆笑だった。

「そのセリフ。ジェームズたちが聞いたら気絶しそうだな。」

ハリーは、ちらりとスネイプ先生が出て行ったドアをみやりながら、リーマス先生に小さな声で聞く。「ジェームズたちって、僕のお父さん以外に誰ですか？」と。聞かなくてもわかっていることをわざわざ聞くハリーも、意地が悪いなど心の中で呆れる。案の定リーマス先生は濁すように笑っただけだった。

「スネイプ先生のが好きかい？」

「はい、勿論です。グリフィンドールに対する仕打ちはさすがに見遣るものがありますけど、まあ、完全に差別ですよ。あれは、ただ、そのことと本質は違いますから。そう言った理由があると思うんです。その理由を知らずに、僕はスネイプ先生のことを色々言いたくない。「そうか。ドラコ、君も？」

「そうですね。スネイプ先生は好かれようとしないので好きです。嫌われるところにとまどいがないのが、一周回って僕は尊敬します。きつと、そういうところにスネイプ先生人生の重きを置いていないのでしょうか。そういう煩わしきについてはなんとなくわかる気がします。好きなものが好き、嫌いなものが嫌い。それだけでしょう。」

そろそろ、スネイプ先生が戻ってきてはいけない、とその後はみんなして話題を変えた。ウィーズリーの双子のことや、この学校の秘密。禁じられた森にあるきまったルートで行けば、きれいな泉が現れるとか、学校の地下のどこかに、泉が湧いていてその水は体力回復などの効果があるのだとか……どこのRPGだ。

いつの間にか、部屋に戻ってきた先生に追い出されるルーピン先生を笑っていたら、「お前たちもだ」と追い出された。「ハロウィンパーティまではまだ時間があるのに」とぶつぶつハリーが言っていたので、じゃあ箒に乗ってクイディッチの練習でもするか。と提案しておいた。忘れていたけど、このままいけばグリフィンドール戦だった。

パーティは、相変わらず最高だった。帰ってきたロンたちが楽しそうに話すのも聞いていて幸せな気持ちになる。だから、このあとのこととを忘れていた。というより、当事者ではない僕が覚えているわけがないだろうとも思う。

それは、シリウス・ブラックが現れた。というものだった。

すでに集合していたグリフィンドル生とともに、他の寮の生徒も大広間に集められ一晩そこで眠るように指示をされる。僕たちは、そこそとロンたちに何があったのかを聴きに行つた。まあ事の流りは全く同じだった。太ったレディは消えさり、めつたぎりにされていたのだという。そしてピーブスがそれはシリウス・ブラックだったと言つたのだ。生徒たちのひそひそ声は、ひそひそごとと形容するのは難しいぐらいは大きくなつていた。

「そもそもどうやって侵入したんだ」

「姿表しはできないはずよ」

「本当に、あのブラックなの」

「怖いわ」

「一体全体何のために」

「そんなの、きまつているだろう」

そこで一瞬の沈黙が流れる。

「そもそもハリーはグリフィンドルじゃないわ」

「けれども、ポッター家は代々グリフィンドルだ。」

「あいつは、ずっとアズカバンにいたんだ。知っているはずもない」

好き勝手言いやがって、と僕は頭に血が上っていくのを感じた。ハリーが僕の手を握り、「あつちに戻ろう」と笑つたので「ああ」と返事をした。

ハリーがマフリアートをかけながら僕に話しかける。

「ドラコ。いちいち怒ってちや身が持たないよ。君がぼくのことを心配してくれているのはわかっているけど、今は世論の見方が『そう』だと教えてくれたのは君だろう。」

「わかっているはいるが、友人を悪人扱いされて、黙っていられるわけ無
いだろう。」

「優しいね。前の時からそうだったけ」
「うるさい」

「あはは、とにかく、シリウスは僕を狙っているのでもなければ、タツグを組みたいわけじゃない。今のシリウスは、スキヤバーズを狙っているだけだ。僕たちを脅かすつもりもない。もちろん生徒のみんなもね。彼らは周りに惑わされているだけだ。」

「ああ」

「だから、ドラコ。君も流されしないで、不安にならないで、そばにいる僕の暖かさだけを感じていて」

それから、シリウスブラックの話でもちきりだった。

久しぶりにあったハーマイオニーはDADAの授業がスネイプ先生で、横暴な授業展開に腹をたてていた。羊皮紙二巻分のレポートにまとめなきやいけないの！といって、すこし話したらそうそうに図書室へ出かけて行った。ロンは罰則を命じられたそうだ。「あの猫は相変わらずスキヤバーズを殺そうとするし、おまる掃除をマグル式でやれっていわれるし、色々といライラするよ！」

僕はネビルに声をかけ、魔法薬学の復習をする。ハリーは「じゃあ僕は学校散策して泉でもみつけてこよう」とって逃げていった。そこまで勉強がいやか。

寮の部屋で、週末のクイディッチの話になる。ハリーは「デイメンターが来る奴だ。」と呟いて「出場したくない」とぼやいていた。「ダンブルドアの守護霊待つべきだろ思う？自分でやっちゃってもいいと思う？」と本来悩むところではない部分であたまを悩ましていた。そうして、大雨の中行われたスリザリンとグリフィンドールの試合で、デイメンターは現れたのだ。当時は観客席でそれを見ていたが、フィールドでみるそれは、明らかに異常で異質だった。あきらかにハリーに彼らは集まっていた。

僕は杖をだし、守護霊の呪文を唱えようとするが、やはり上手くないかない。そうこうしているうちに、牡鹿が二匹と不死鳥の姿をした守護霊が、そのデイメンターを払うかのように優しく回った。その瞬間、グリフィンドールのシーカー、ジニーウィーズリーがスニッチを捕まえホイッスルが鳴った。

今回の結論からいうと、ハリーはシーカーでもなければ、箒から落下するということもなかった。デイメンターが競技場に現れた事實は確かにあり、それがハリーを狙ったという時点でフェアではないがその試合は有効試合と結論づけられた。

それは、ハリーが「気にしていない。結果は結果だと言い張ったからである。」ジニーがスニッチをとって負けはしたが、そもそも点差はそんなに開いていない。僕たちのマークスが無視した二人ぐみチエイサーのやりたいほうで、今回の試合もグリフィンドールにクアツフルを一度も譲っていないのだから。

一応大事をとって医務室に連れて行かれる。ダンブルドアが怒っているのを見てハリーが「今の状況でもあんな風に怒るんだ。なぜだと思う？僕を心配して？それとも」と自嘲気味に笑うので、「あまり考

えるな」と頭を小突いた。

ハリーはケロリとしたもので、その日の晩には、寮に戻ってきた。みんなが「ハリーのメンタルまじでドラゴン並」といってからかうと、ハリーは「いや、きつと今まね妖怪目の前にしたらデイメンターに違いないね」としたり顔で言っていて、みんなに「んなわけあるか」と総ツツコミをくらっていた。

スネイプ先生が、僕に脱狼薬を実際に作ってみたことがあるか、自分の考えに基づいた脱狼薬の試作品を作ったことがあるかと聞いてきたのはそのあとしばらくしてからだった。僕は実際に作ってみたものを手渡す。先生はそれをしげしげと眺めたあと、「きたまえ」といって教室に連れて行かれた。

時間割を渡され、授業が入っていないときは自由にこの教室を使っても良いという許可が下りる。いくつかあつた薬のうち、有効そうなものから準備並べられたそれを渡され「マグルの材料の効果について、もう少し、魔法界のものでもわかるように記述したまえ。もちろんその時に、資料の添えることを忘れるな。」と、助言をいただいた。それから、部屋でリドルと、理論についてあたまを突き合わせ悩み、実際にこつちに来て比較検討してみるという日々を繰り返していた。ちなみにリドルの日記は柵の中に入っている。僕たちといたくないきははどうしてるんだとハリーに聞くと「自由に動き回ってるよ」と返ってきた。僕は脱狼薬関係でしか関わろうと思わなかったので、何も考えまいと「そうか。」とだけ答えた。

それと同時に僕は、ルーピン先生のところを訪れる。

僕一人できたことに、彼は驚いていたが快く部屋に向かえ入れてくれた。ここを訪れたのには理由がある。それは守護霊の呪文をどうしてもマスターしたかったからだ。

「僕は、守護霊の呪文をマスターしたいんです。一応、銀色のがぼやあつとは出てくるのですが。形にはならなくて」

「ドラゴ、焦らなくてもいいんじゃないかな。この呪文はそもそもふくろうレベルを越えるレベルのものなんだ」

「存じています。ですが、この短い期間で二度も彼らに遭遇しました。その度に僕は何もできない。汽車のときのように、彼に守られるのも嫌だ。試合の時のように彼を守れないのもいやなんです。あいつを守ってくれる人はたくさんいるかもしれない。けれども僕もそのための手段が欲しい」

恥ずかしいことをいつていることは、わかっていた。けれども、方法を選ぶほど余裕もなかった。それでなくても僕は、前の世でパトローナスを出せるような立場でも状況でもなかったのだ。それが、僕にとつての足かせになっていることは十分に承知している。だからこそ荒療治にでも取得しなければならぬのだ。

ルーピン先生は僕の様子をみて「わかった。」と呟いた。

「ハリーはいい友人を持ったね。わかったよ。そだね。けれども、準備がある。来学期にはじめよう。それでなくても今君は、自分のことで忙しいと聞いているし」

「自分のこと…ですか」

「そうだよ。僕は君の魔法薬学の成績を聞いてびつくりしたんだ」

そんな忙しくも充実した日々を過ごしていると、ハリーが僕に一枚の羊皮紙を渡してきた。「忍びの地図。本物。あんがい簡単に手に入りました。」と目の前でニンマリ笑顔をする。

「といつても、借りただけ。双子がいたから『なにそれ、いいものもつてるね』」っていつたら貸してくれたんだ！」

疑わしすぎる。脅したとかじゃないだろうな。とジト目で見ていたら「なんだよその目は！」と怒られた。「あれだよ。水薬のハンドクリームの制作譲ったじゃん。あれのお礼だって。結構売れ行きいいよ。なんと香りが今は5種類に増えてるんだって」素晴らしいながら、ハリーはベッドに腰掛けた。

「二枚あるが、」

「ああ。そうそうーで、もうぶっちゃけた。これドラコに複製させたいんだけどって、そしたら、彼らが途中まで作って頓挫した奴があるから有効に使ってくれよって」

「ドラコに複製させたいんだってところに力関係を感じる」

「だって事実だろう。」

「はあ、なるほど。結構最後まで作ってあるじゃないか。これならすぐだぞ。あの双子流石だな。ただものじゃない」

「そりやそうだよーお兄ちゃん二人は首席で、一人はクイディツチの名選手。悪戯好きなだけで本当頭はいいんだよねー。ただ、飽きたらしいよ。目の前に本物があるのに、複製品

をつくりきる意欲が持続しなかったって。」「それもそれであのふたりらしい」

そういうことで、宿題が一つ増えた。

色々とうまいこと利用されている気がしたけど、そんな気持ちにはそつと蓋をしておいた。

よし、年内目標でこっちはさっさと終わらせるか。

その日の変身術の授業ハリーは姿を現さなかった。「ミスターマルフォイ何かご存知ですか」とマクゴナガル教授に聞かれてとつさに「今朝、デイメンターの不安が、急に押し寄せてきたと言っていたので、それで体調がすぐれないのだと思います。」と答えた。これは大嘘だ。朝元気に、ご飯を大盛り食べていた。三時間目には現れるだろうと待っていたが、そのあとの授業も現れず、心配になって部屋に戻るとそこにハリーはベッドの中で丸まっていた。

「どうしたんだ」と声をかけるが、返事がない。

ベッドのそばまでよつて、再び声をかけても返事がないのでそつとシーツをめくるとそこにはひどい顔をしたハリーがいた。びっくりして、「何があったんだ!？」と尋ねると、拗ねたように「何でもないとだけいうのだった。

「何でもない」なんていう様子じゃないだろう。と理由を問いたただそうとすると、目の前にリドルが現れる。『老婆心でお伝えすると、彼は一時間目が終わったあと駆け込んでからずっとこのままだ』と言う。ハリーは「うるさい、余計なことを!」と起き出しリドルに叫ぶ。『怖い怖い』と喋りながらリドルは消えていった。

「ハリー、どうしたんだ。なにがあったんだ」

すっかり落ち込んでいるハリーをゆっくりとなだめる。何十分なだめただろうか。ハリーが、僕に寄り添ってくる。そうして静かに

「ドラコは、どこにもいつちやダメだよ」と呟いた。

「どこにもいかない。」

「本当だね。」

「ずっと一緒にいるじゃないか。なにを心配している。」

「ずっとなんて、不確かだ」

「それは、君のお父上たちのことを言っているのか。ならば、僕は僕の知っているずっと一緒にいた仲良し三人組のことを君に話して聞かせてあげるまでだ。」

そういいながら、目の前の癖のある髪をといてやる。女子力の高い、彼女たちにケアしてもらっている髪は、とてもふわふわしていた。

「ドラコの一番は僕でないと、嫌だ。」

「僕が悲しい時に一番に駆けつけてくれるのは君じゃないと、嫌だ。」

「ドラコが悲しいときに一番に駆けつけるのは僕じゃないと、嫌だ。」

「そばにいてほしいときに、僕のそばにいて、僕を誰よりも大切にして

「君のことを一番に大切にしているのは、僕だよ。君のことを一番に思っているのは僕だよ。」

だんだんと泣きそうになるハリーを、思わず抱きしめる。不安と悲しみでいっぱいになっているハリーをどうにかしてやりたいと思つた。辛そうな、世の中の、世界の孤独を集めたようなその様子に、僕は何も言つてやることができなかつた。やはり、ディメンターの引き出す恐怖は、何かを思い出させてしまうのだろうか。ケロリとしていたのは、気丈に振舞おうとしていただけで、実はこんなにもダメーじを受けていたのだろうか。それに気付かなかつた自分に、腹が立つた。

「僕だけを信用してといったのは、ハリーだ。他の物は信用するなど。」

その中で、一体ハリー以外の誰が僕の一番になると言うんだ。安心しろ。一緒にいてやる。」

ふと、耳に『そういうところだよ』と呆れ返ったりドルの声かした気がした。

ハリーは僕に前以上にひつつくようになった。パンジーたちが「アステリアに取られたらこまるものね」と笑うものだから、その度にハリーは僕に対する態度をあらかじめさまにしていた。さすがに見かねた三人衆が、色々ハリーに言っていたが、彼の態度は変わることはなかった。「別に僕は気にしていないし、ハリーがこれで安心するならかまわないんだ」と僕が言ったことで、とりあえず、この状況については、見て見ぬふりをするようになった。

僕はといえば、相変わらず脱狼薬の研究は続けていた。今までは僕が行ったり来たりしてリドルとしていたが、ハリーが参加することになった。ただ彼は見つめていただけだったが。忍びの地図についてはハリーも協力してくれて、思ったより早く完成した。最後にすこし細工をしてあの双子に返しにいったら、その細工を気に入ってくれて、複製の方を彼らは持って帰った。ちなみに彼らには伝えてない細工も施してあるが、特別いうことでもないので話題としては流していると思う。

そうして学期の最後のホグズミードも、僕たちは行かなかった。

そこで、聞いてきたシリウス・ブラックとジェームズ・ポッターの

噂についてロンとハーマイオニーは僕たちに話して聞かせてくれた。ひどく興奮したようすで、それをなだめるのが大変だった。そこにルーピン先生の名前がでないことに、「うまいことできてるなあ」とつぶやかないではいられなかった。

彼らはこの休暇はホグワーツに残るといふ。お互い忙しくて一緒に過ごすこともなかったから、クリスマス休暇には、いろんなことをして遊ぼうとロンと計画していた。母上たちには寂しがられたが、「二度ぐらいホグワーツで過ごすのも経験ですね」と返ってきた。ちなみにサジツタが帰宅しているから、このクリスマスはあいつが、母上の餌食となることだろう。

クリスマス休暇に入って、最初にしたことはあの森番。つまりはハグリッドのところに遊びに行くことだった。そういえば、最近授業以外で会っていないという話になり、四人で行こうと、休暇前から話をしていた。ちなみに、この休暇にホグワーツに残った生徒はたったの六人である。

あれから、やたらと引っ付いていたハリーは少し落ち着いた。他の生徒が家に帰ったことで、色々と思うことや安心することがあったのかもしれない。やはり特定の「何か」原因があったのだろうと、僕は推察した。けれども、本人が僕に教える気もないので、その具体についてはわからないままだが。

ハグリッドの小屋を覗くと、ハグリッドが真っ赤な、泣きはらした目をして突っただっていた。ロンとハーマイニーが「どうしたの」と心配そうに駆け寄っていた。ハリーは、机の上にある公式の手紙に目をやり、「やはりりこうなっただか」とその手紙を手取る。

そこには、以前起きたヒツポグリフの傷害事件についての処遇について、が書かれていた。

「ハグリッドの管轄におけるヒツポグリフが生徒を攻撃した件については、授業外において生じた事件であること、また、聞き取りやダンブルドアの貴殿にはなんら責任はないと『保証』することを我々は受け入れることにしました。」

「よかったねー！ハグリッド！」

「しかしながら、ヒツポグリフはM・O・M分類XXXに指定されていることを鑑み、学校教育での学びに適しているか、それを貴殿が飼育し教育に活かすことができるのかということについて懸念を表明せざるを得ません。」

だから、この件は「危険生物処理委員会」に付託されること。事情聴取を行うこと、そしてヒツポグリフを隔離し、つないでおかなければならないことなどが、その手紙には書かれていた。

僕たちは顔を見合わせる。

「ハグリッド、しっかりした弁護を打ち出さないといけないわ。あなたが『安全』を証明しないと」とハーマイオニーがごもつともなことを述べた。しかし、悲しみでいっぱいになっているハグリッドは素直にハーマイオニーの言葉を聞くことができなかった。

「やつら、処理屋の悪魔め、連中はルシウス・マルフォイの手の内だ。やつを怖がっとする！もし俺が、「ハグリッド！」

ハグリッドが最後まで言い切らないうちにハリーが叫ぶ。「うっ」と言葉を詰まらせた後、声を一層大にしてハグリッドはおいおいと泣いた。

ロンが「お茶でも入れようか」と声をかけ、ハーマイオニーが「過去の事件について色々調べてあげる」と慰めていた。僕も調べるのを手伝うよ。と声をかけようと一歩前にでると、ハリーに腕をひかれる。「ホグワーツに戻ろう」と彼はいった。

「ロン、ハーマイオニー、ごめん僕たちは先に学校に戻るよ。このままドラコといってもハグリッドが動転するだけだろうし。」

「え、ええ。そうね」

「ちよ、つと。ハリー、待てつて、ハーマイオニー、ごめん。図書室行く時また連絡してくれ」

言いたいことをいって、先に外に出ていたハリーを急いで追いかけた。

「君の父上は、ルシウスさんは損な役回りだ。どこにも彼が筆頭になってヒップグリフの処遇について訴えているなんて書いていない。そう、思い込んでいるんだ。去年のバジリスクの時もそう。通達に来たのが、ルシウスさんであっただけで、僕たちもハグリッドも理事会でのやり取りをしているわけではない。そうして、自分たちが槍玉にあがらないようにして、安穩と理事の椅子に座り、立場が悪くなると、誰かにそれを集中させる。そうなってるんだ。本当に嫌なシステムだ」

「僕の父上のことをそう言っている君を見ることになるなんてな」

「あのルシウス・マルフォイとルシウスさんは違う。僕は心の中で、ブラックルシウスとホワイトルシウスさんと区別している。」

「それはそれでややくこしいな。でも、ハリー、僕は気にしていない。というより、なぜこんなことになってしまったのか。そればかりが不思議だ。サジーは、義父には学校から話はいっただろうが、自分は何も気にしていないといったんだ。」

そうして僕はハリーの隣に並ぶ。

「知っている。僕も話をきいた。『魔法生物は僕たちヒトと違い言語を持たない下等な生き物です。そんな生物に対して、僕たちヒトを理解しろという方が馬鹿な話ではないですか。彼らが理解できるは

ずもない。僕たちが彼らを上手く使役をする立場であるために、を考えたら、誰が何を間違えたのかは一目瞭然です』と、君の弟らしい、答えが返ってきたよ」

確かに、結果としては、こちら側が、魔法生物に寄り添う形だが、その理由がいかにもサジーらしいものだった。

「となると、そういった関係性を理解していない馬鹿が原因ということか」

「そう、それは理事メンバーも含めての話だ」

「ふうむ。ほかの理事メンバーに心当たりがあるな。サジーが問題に上げる気もなかったし、その時巻き込まれた生徒も理事会にパイプがあるわけではないから放置してしまっていた。」

無関係な生徒が、保護者に訴えるほどに、理事会が少しの噂を肥大させてしまうほどに、嫌がっているものは、嫌悪しているものは、ハグリッドなのか、ダンブルドアなのか。という話だな。

「まあ、僕も正直、なるようになれって思ってたからね。けれども、結果、ルシウスさんに被害がいつて、ドラコが非難されるのであれば、最初から手を打っておけばよかった」くそう。理事会システムめ、とハリーはひたすらに悪態をつく。

「非難？ハグリッドにか？」

思わず笑いがこみ上げる。あんなの些細なことだ、あんな小さなことで傷ついたり腹を立てたりしない。過保護がすぎるぞ、ハリーポッター。

「僕はそれが嫌なだけだよ。ドラコ。防げる痛みは防ぐにこしたことはない。しかも、ハグリッドは本気でそう思ってたそう。」

そのあとは、結局いつもと同じだった。

ひたすらに脱狼藉の研究に時間を費やす。

ハリーは、理事会メンバーと学籍簿を持ってきて(学籍簿って普通、鍵のかかった金庫とかに収められているものではないか?と聞いたらウインクされた)ぶつぶつと何かを整理していた。侵入者よけの呪文もかけ、リドルにもご参加いただいた。

そうこうしていたらロンから連絡がきて、図書室で事件について整理をすることになる。「ドラコに謝ったほうがいいっていったんだけど、マルフォイがっていつて、頑固だったんだごめん」と彼ら二人に、謝られてしまった。

そうして、クリスマスの朝を迎える。

部屋にはたくさんのクリスマスプレゼントの小包で山ができていた。それを眺めていると後ろからハリーに「ドラコ」と声をかけられ、プレゼントをキャッチする。あけるとそこには、ブレスレットがあった。自分が以前ハリーに上げたブレスレットと同じ「緑」と「灰色」のカラーリングの細いブレスレットだった。細いがよく見ると、しっかりと編みこまれていていて形が崩れないぐらいしっかりしたものである。

「それ、僕の手作りだから。一編みひと編み、守りの思いを込めて作ったから、一回ぐらい爆破に巻き込まれても大丈夫なはず!」

「爆破に巻き込まれる想定! まあつまりはお守りみたいなものなんだな。ありがとう。嬉しいよ!」

そういつて僕は、ハリーのプレゼントの山にいき、自分のプレゼントを選んで手渡した。ハリーはありがとうといつてそれを受け取つて中をあける。「わあ」と声を漏らしてもらえたということは、喜んでもらえていると判断しても良いのだろうか。

「これ、フェリックス・フェリシスじゃないか!?!きれいだな。いつの間にも!?!」

「実家で作っていたのを、完全に保存してこつちで作り続けていた。移動の時、どうにかなくなってしまふかなと不安だったが、無事に完成して良かった。」

「ありがとう。これこそ、お守りがわりにもつておくよ。」

思った以上に喜んでいる様子で僕はひと安心した。それから、ほかのプレゼントも二人であけて行く。父上からは大量の本をいくつかお願ひしていた、貴重な材料たちを、母上からは香水といくつかの紅茶やお菓子などだった。ウィーズリー家からは、毎年恒例のセーターを。ロンからは、やわらかいブランケット、そしてハーマイオニーからはマグルの本が何冊か届いていた。サジーからはネクタイピンだった。

「やっぱりないかー。」

とハリーが、つぶやく。

「何がないんだ」

「え、ファイアボルト。前回はシリウスから、匿名で送られてきたんだけどさすがにないなって、なぜだと思う?」

「じぶんで『やっぱり』って言ったんだから予想ぐらいいついてるだろ」

「僕がスリザリンだから。」

「どんまいハリー」

「少し心が憂鬱になった」

学期が始まる少し前にサジーが帰ってきた。「父上は、ヒツポグリフについて何か言っていたか」と問うと、「ええ、『保守派の人間はいつみてもイライラする。とはいって革新派になるつもりもないが』とおっしゃっていました。エイブリーの父親は『極めて当然の処遇だ』とおっしゃっていましたけどね。」と、なかなか、難しい問題のように感じた。

新学期がはじまり、それと同時にルーピン先生との守護霊の呪文の授業が始まった。学校がはじまったら、またハリーがひつついて回るかと思ったがそんなこともなかった。「魔法史の教室だよね。ルーピン先生ともお話ししたいいつか行く」といつていたが、いまだに一度もきていない。

はじめの時、先生に今どれくらいできるのか見せてくれるかと聞かれ、パトローナスの呪文を唱える、ぼわあと銀色の光が杖から出ただけですぐにその光は消えてしまった。

「理論上は理解してるって感じだね。本当、あとは実践だ。」

そういつて、実践を積み重ねる。が一向に何かしらの形になる気配はなかった。

守護霊の練習、魔法薬の開発、自分の勉強、クイディッチとある意味充実した生活を送っていた最中に、ロンから叫びの連絡がくる。そ

それは「クルックシャンクスが、スキヤバーズを食べた」という嘆きだった。その日は、ロンが落ち着くまでひたすら慰めた。次の日グリフィンドールのテーブルの方をみると、ハーマイオニーとロンが遠く離れたところに座っていたのがわかり、ハリーと二人で肩をすくめる。ハリーは「いやでも真実にたどりつく。そうしたら仲直りするよ」と、のんきなことをいつていた。

もうすでに二月だった。魔法薬のほうはうまくいくのに、この守護霊の呪文だけは思うように行かなかった。その日は一旦落ち着こう。といって、僕を椅子に座らせて用意していた紅茶を差し出してくださった。

「ドラコは、悲しいことがいっぱいあるんだね。それが、君が幸せを考えることを阻害してしまっている気がする。」

「そう、かもしれない。幸せな思い出をもうどうと思うと、それに付随する出来事がいっぱいくっついてきます。」

「ハリーは、君のことを心配していた。『ドラコは周りが思う以上に悲しみの引き出しが多いんです。しかも綺麗に整理されているから、その引き出しも開けやすい。彼のこと、よろしくお願いします』って。なにがそんなに悲しいんだい。もしよかったら聞かせてくれるかい。」

悲しいことは、数え切れないほどある。そもそも僕は後悔しつづける人生だったのだ。 Hogワーツで過ごした学生時代は、幸せとはほど遠かったと大人になって改めて感じた。自分の意志とは違うところで、僕の人生は回っていた。「そうするしかなかった」と嘆く人生ほど悲しくつまらないものはない。

アストリアとの日々は幸福だったが、しかし、常に後ろ指に刺され

ながらの生活だった。妻に申し訳なかったし、スコープウスにも申し訳なかった。アストリアとスコープウスと過ごした日々を思い出すことは幸福な反面で、自分の後悔ばかりの灰色の人生を思い出すことも同義だった。

ふと、自分が涙を流していることにきづく。

ここままで、13年間新しい人生をと望んできたけれども、僕の人生は何も新しくはなっていないのだ。ただ、積み重ね続けているだけなのだ。当たり前だが、どんな風に生きようと、どんな風に変化しよう、「過去」は変えられないし、許されるわけではない。

目の前にいる先生がびっくりして、ハンカチを探しているのがわかった。けれども、僕はその涙を止めることもせず、ただぼとぼと涙を流していた。

「あああああ！ルーピン先生が僕のドラコ泣かした！」

びっくりして顔を上げると、たったいま教室に入ってきたであろうハリーが、少し怒った顔でこちらに向かってきていた。

「先生！僕ドラコのことお願いしましたよね！なんで泣いてるんですか！傷つけるようなこと言ったんですか!?!」

「えっハリー！違うんだよ。誤解だ！」

「じゃあ！」

「違うんだ。先生は、悪くない。ただ、守護霊の呪文ができない自分が悲しくて、やればやるほど、悲しいことばかり思い出されてしまった。はずかしい」

ハリーは僕の隣の椅子にこしかける。「大丈夫だよ」といって僕の

背中をさすってくれた。

「ドラコは幸せな思い出何を思い浮かぶ？」

「えっ。」

それは、アストリアとかスコルピウスとか。

そう言おうとするとハリーが笑って「僕はね」と続けた。

「僕はね、朝起きでドラコがそこにいることですよ。そして一緒に大広間においていくこと。朝ごはんを食べながら、野菜も食べるって怒られるのも幸せな思い出。ロンとドラコが楽しそうに話しているのを見るのも好きだし、談話室でパンジーたちと、どうでもいいことでおしゃべりするの楽しい。ちゃんと髪乾かしなさいよってお母さんみたいだなーって思うのもいいよね。そして奥で君が、またやっているって笑うんだ。そんな時幸せだなんて思う。夜、君とおやすみっていうときは少しさみしいけど、ときどきベッドに侵入するのに、君が気づかないで寝ているのみるのも幸せ。そうやって、あり得なかった今、ひとつひとつを僕は幸せだなんて思って守護霊の呪文を出すんだ。君は」

ハリーから、繰り出される、平凡な日常に僕は驚く。でも、僕も同じだと思った。朝起きて、ハリーがそこにいる。一緒にご飯を食べて授業にでる。ロンやハーマイオニー、ネビルとおしゃべりをして、談話室にもどると、また楽しく会話をする。ぜんぶありえなかったことだ。確かに、それは、「幸せ」というほかに何も無いぐらいの「幸福」だった。

「ハリー、守護霊を見せてくれるかい。」

「もちろん。いいよ」

そういつて、ハリーは立ち上がった。一步前にでる。ルーピン先生の横に立ち、僕と向かい合わせになった。ルーピン先生は、何も言わずに僕たちの会話を聞いているだけだった。

エクスペクトパトローナムと、ハリーが呟くと、きれいな銀色の光が杖から吹き出した。それは牡鹿の形になって、僕の側に寄る。そして、包むようにして消えていった。

「ハリー、そこで見ててくれるかい」

「もちろんだ。」

「僕の幸福も、君と同じだ。今この瞬間が、幸せに溢れている。エクスペクトパトローナム」

すると、杖から、するすると白銀色の光がでる。それは一つの塊になって、ぐるぐると円を描いていた。

「ドラコ！やったね！」

「ああ……！けど、これはなんだ？」

背中をドンと叩いてくるハリーに、その嬉しさを悟られないように、冷静に返す。

まじまじと目の前の僕の守護霊を見つめるが、それが何かわからなかった。

「オカミーじゃないか？」

「オカミー？」

「ああ、でも、オカミーには角はない。それは、角がある。ドラゴンのような見た目に羽が生えている。東洋のドラゴンのようにも見えるが、手足もないし、やはりオカミーのような気がする」

僕は、守護霊が出せた喜びと、何なのか特定できないその守護霊への不安感でどう言っているのかわからなかった。けれども、守護霊が

出せたことが嬉しかった。目の前のオカミー角アリは、くるりとすべるように僕の周りを一周して消えていった。

あのあと色々調べたが、結局何か分からずじまいだった。先生が言ったとおり、オカミーには角はない。確かに東洋のドラゴンに似ていたけど、それにしても手足がなかった。その時、調べてわかったことだが、東洋の蛟と呼ばれるものに似ているそれは「時運に巡り会わずに実力を発揮できないでいる英雄」の例えとして使われることもあるそうだ。十分な皮肉だな。と失笑しながらも、それにしても手足がないのだから、なんとも言えないなどその時の調べ学習は終えたのだった。

グリフィンボールの寮内にまたもやブラックが現れたと聞いたのはその日の夜だった。ロンから連絡をもらったのだ。着々と物語が進んでいることを実感させられる。なぜ、僕なんだ！とロンは嘆き、なぜグリフィンボールにこだわるんだ！と生徒は考えていた。

「シリウスは、ハリーを探しているんじゃないのか」

「なぜ、ハリーを探す」

「そりゃあジェームズポッターの息子で例のあの人の敵だからだよ」

「それがどうして理由になる。」

「…わからない。けど、みんないうんだ。ブラックはハリーを仲間にしようとしているって、グリフィンボールだと思って殺そうと思ったけど、スリザリンだと知って、一緒に闇の魔法使いになって…」

「ロン。思ってもいないことをいうな。周りの意見は周りの意見であって、君の意見じゃない」

「でも…。ときどき僕はハリーがわからなくなる。全てを見透かしたような。僕たちの行動なんかすべてわかってます。みたいなの。そういうとき、言いたくないけど、僕は怖くなるんだ。信じたいけど、そういう気持ちがかときどきある。ごめんドラコはハリーの友人で一番なのに」

「何をいってるんだ。むしろ言ってくれて嬉しいよ。ロン。友情に一番なんてないんだ。そうやって不安なこといつでも言ってくれ」

「友情に一番なんてないんだ。」

「そう。それはハリーも知っているはずなのに。」

「なぜ一番にこだわるんだろう。」

「友情に一番はない。じゃあ、一番が存在するのは…？」

ロンから、ヒップグリフの裁判の日付の連絡がくる。ハグリッドに

聞いたらしい。そしてそこでハーマイオニーと仲直りしろと説教をされたらしい。「あいつの猫が、僕のスキヤバーズを食ったんだ！なんで僕が謝らなければならぬ!？」と、そのハグリッドの言葉には納得していないようだった。

ヒップグリフの裁判の日は、ちょうどホグズミードへ外出日だった。シリウスブラックに丁寧にも合言葉を渡してしまったせいで、ネビルは外出を禁止されたようだ。ハーマイオニーも残るらしい。ハリーが「明日は、ちよつと行動しかけるよ」と言っていたので、彼らには会うことはないかもしれない。と思いつながら、談話室でお茶をのんでいた。

「ねえ。ドラコ。ハリーはどこにいるの?」

「さあ、彼の動向をいちいち確認しているわけじゃないかな。」

ひそひそと、目の前の三人が話をする。

「別にね、私たちだってハリーがなにしようが別にいいのだけど、最近ほら、あのグリフィンボールのマグルと一緒にいるところをよく見るから。」

「ハーマイオニー?」

「名前まで知らないわ。グレンジャーよ。」

「ああ」

「いいの!？」

「いいもよくないも、好きにすればいいんじゃないのか。」

そう言うと、三人は泣きそうな顔になる。なんだ、どうしたんだ。僕たちがセットでないことがそんなに不安か？

「わかったわ。」とミリセントが言う。

「じゃあ質問を変えるわ、今のこの状況はハリーは知っているの?」

「この状況?」

「あなたが、トリアに勉強を教えていることよ!」

最後のダフネの叫びは、びっくりした。つい耳をふさいでしまった。

知っているか知らないかでいえば、「知らない」だろうなあ。さつきトリアに声をかけられて教え始めたわけだし。

「知らないと思うが、トリアも特別言っていないよな」

「もちろんですわ。ドラコ兄様に話しかけるときに許可を取らなければならぬとはきいておりませんもの」

ふわりと、トリアが笑う。そうして目の前に魔法薬学の教科書とノートを閉じた。「けれども、まあ、察しましたわ。私も命は惜しいですから。ありがとうございましたお兄さま」そう言って、僕にはなくその奥に向かって会釈をしてその場を後にする。

パンジーとダフネとミリセントも、「知らない。」「ドラコが悪いわけじゃないのよ。悪いわけじゃないんだけど、申し訳ないけど、ドラコが悪い。」「ハリーはわかりやすいんだけどね。そういう意味では私もハリーの肩をもちたい。」そういつて後ずさりしながら女子寮に向かって去っていった。

「ドラコ。楽しそうだね!」

「ああ、おかえり。なんとかなりそうなのか。」

「まあ、まずもって難しいだろうね。」

「そうか、手伝えなくてすまん。」

「いいよ……ここでドラコもこっち手伝ったらロンが拗ねちゃうだろうし、君は君で忙しいんだからさ。」

そう話しながら部屋に向かう。若干距離が近いような気がしたが、それは気のせいではなかった。明日の打ち合わせをしたあと、当然のようにべくのベッドで横になり、嬉しそうに「ドラコはやくはやくー！と呼びつけたのだから。」

「なぜ、君がこれを持っているのか、本当に知りたいのだが、教えてくれる気はあるかね」

そうハリーに尋ねるのはルーピン先生だった。

ハリーは、わざと、本当にわざと地図をもつて、校舎内をうろついた。地図があるから、ルーピン先生がどこにいらつしやるのかも手に取るようにわかる。それを偶然と言っていいのかわからないが、偶然を装って地図の使用についてルーピンにバレるようにしたのだ。

「拾ったんです。」

「拾った？これは、何年も前にフィルチさんが没収したものだ。それを僕は知っている。」

「それは、そこにあらわれるムーニーさんとプロングスさんとパッドフットさんと……ワームテールさんのものだったんですか？」

ハリーは酷なことを聞く。

「……そうだ。その四人が使い、それをフィルチさんが没収したんだ。なんだってこんな危険なものを……。もしも、これが、侵入者の手に渡ってしまったなら。」

「スネイプ先生に聞いたら、非常に嫌な顔をされました。きっとその四人のうち二人は、シリウスと僕の父ですね。スネイプ先生はあの方りの話題のとき、嫌な顔を隠しませんから」

「ハリー!!」

「大丈夫です。その地図のことはいいけません。言っただけじゃないような気がして。実はそれも、先生に渡そうと思ってきたんです。」

「僕に?なぜ、」

さあ、とハリーは肩をすくめる。

「普通ならスネイプ先生でしょうけど、父が絡んでいるなら、それはスネイプ先生にふさわしくないと思っただけです。心労で倒れちゃったら僕、嫌ですもん。」

よく言うよ。と、思うが、まあスネイプ先生大好きハリーが、ルーピン先生を頼る理由をつけるためなら、まあ仕方がないのだろう。というほかない。ルーピン先生はしばし悩んだあと「ともかくこれは、没収だ。」と行ってハリーから取り上げた。

「さて、まだ夕刻までには時間があるのだけど、僕の部屋まできてチョコレートでも食べるかい? あったかい紅茶もいれよう」と誘ってくれたのでそれに乗じることにした。その帰り道、泣きそうな顔のハーマイオニーとロンに遭遇することになる。「ハリー…、ドラコ…」とかけてよってきた彼女がもっていた手紙にはハグリッドが敗訴したという旨が書かれていた。

彼らは仲直りした。控訴をするのだといってロンは張り切っている。状況を知ったネビルも、「手伝うよ」と言ってくれたらしい。いまグリフィンボール側では、ヒップोगリフのために色々動いているという。しかし、前回を知っているものからすれば、今回のこの騒動に悪役はいない。いるとなれば、誰かが裁判に圧力をかけていればだが、父上は、母上に誓って理事にそのようなことはないとおっしゃった。つまりは、ハグリッドに問題があるのだ。「信頼」という名の。そして「自信」という名の。ハーマイオニーは日に日に、疲れが出てきていた。「大丈夫なんだろうか」とハリーに聞いたら、「全教科とつてるからねえ。」と帰ってくる。

「全教科?とれるだけということだろう。僕も取れるだけとつているが」

「真正銘全教科だよ。ああ、今日占い学は辞めたんだっけ」

「そうだ、不吉なことばかりだし、トレローニー先生は彼女を目の敵にしているところがあつたしな…って真正銘全部!?どうやって!?!」

ハリーは、リドルとチェスをしていた。

ハリーの連敗記録を更新中のチェスだ。

「君も思いつくものがあるだろう。人生をも変えうる中途半端な魔法道具。僕たちが今ここにいる運命ほどに完成されていない、中途半端なあの魔法道具が」

「まさか…タイムターナーか!?!」

「せいーあつずるいぞリドル!いやいやいや」

タイムターナー…タイムターナー!?!

あれを使つて授業に全部…なる…ほど。だから、急にいなくなつたり、現れたりしてロンがこんがらがっていたのか。そうか、もう二度とお目にあいたくない代物だな…。

『そんなことより、僕の新しい媒体は思いついたのか？』

「そう、それなんだけど、君が二つの媒体を行き来できるような道具にしようと思つて。そうしたら僕とドラコで分けて所持できるし。」

「なるほど、それはいい考えだが、その道具はどうやって作るんだ？」
「…それを考えて頓挫しています。単純に記憶ごと分割することは簡単にできそうなんだけどさああああ」

『道のりはながそうだねえ。トムリドルによる謀反が起きないようにね』

と、話がずれたが、タイムターナーか。それで全教科の授業をハイマイオニーはとることが可能になつていたのか…。つまり試験も…。そこまで考えてぞつとした。自分は、限られたもので高得点高評価をえるほうが向いているような気がした。がむしやはあまり向いていない。

「ハリー、リドルと遊ぶのは結構だが、試験勉強は大丈夫なのか。」

「魔法史以外は問題ありません。赤点は取らないよ。」

「そうか、つまりまだ伸び代があるということだな。さて、なんの教科からいくか」

「やだよ！やだやだやだ、僕の平和な学校生活なのに、勉強は予定にないんだ！」

「何をバカなことをいつているんだ。学生の本分は勉強だ。杖を降るだけが立派なまほうつかいじゃない」

「いーやーだー」

叫ぶハリーをおいかけ回し、机に座らせたのはその一時間後だった。そりゃあ三年生の授業なのだから、勉強せずつとも出来て当たり前だろう。だからこそ、上をめざせるのだから、その努力を怠ろうとするのは、阿呆のすることなのではないのだろうか。

そうやって、談話室や部屋で勉強をしたり、ロンやネビルとコミュニケーションルームで待ち合わせをして勉強をしたりして試験日を迎える。その途中、ヒツポグリフの控訴日が六日であると連絡がくる。奇しくもそれは試験最終日だった。

朝からテストテストとすと三昧だったが、昼には終わりが見えてくる。ハリーと大広間に移動をしていると、父上がファッジというのが目に見えた。ハリーが隣で「げっ」というのが聞こえたが、気にせず二人で魔法大臣に挨拶をする。大臣たちと少し離れたところで父上と軽く会話を交わした。

「まあ、残念なことになるだろうな」

「どうにもならないのですか。ここまでかんばってきたあの子達の努力が霧散してしまうのは、辛いです。」

「どうにもならないこともあるのだ。何が正しいとか、何が間違っているとか、それは、ひとつの視点からでは判断できない。だから、裁判や会議をして多面的に見る。」

「では、ルシウスさんは、これが多面的に、様々な考えが考慮された結果であると思いますか。」

「組織というのは、同じ色に染まっている。学校は、様々なカラーがある。日々学び、精進し、悩み成長するのだ。期待しているぞ。」

それから、少しの会話をして、父上とは離れた。

午後のテストについて話すふりをしながら今日このあとの動きを確認する。

「とりあえず、これでやれることはやったってかんじかな。」

「そうだな。あとはヒツポグリフの処刑のあと、あの叫びの屋敷で同窓会だ。」

「はは、同窓会。いいね。ロン、行くかなハグリッドのところ。」

「行くだろう。あの三人はあのあと頑張って調べていた。思い入れがあるはずだ。」

「うん。そして、スキヤバーズは以前とおなじハグリッドのところに
るのも確認済みだ」

そういつてハリーは杖をひとふりした。

試験の全てが終わり、僕たちは叫びの屋敷の中にいた。

もちろん暴れ柳の根元に透明マントを置いておいた。それをロン
たちが使うか、ルーピン先生がつかうか、スネイプ先生が使うかわか
らない。けれども、物語が変わっていないのであれば、それを使うの
はスネイプ先生になるだろう。

屋敷を見渡しハリーは

「ここは、綺麗とはいれないよねえ」といつて杖をひとふりする。

ホコリやゴミは綺麗さっぱり片付られ、壊れていたものは綺麗に直

されていく。

「せっかくの同窓会だし、きれいなところで話に花をさせたいよね」

「はいはい」

「あつ飲み物とごはんもいるかな!？」

勝手にさせておくことにする。

「そのカバンはなんだ」

「これ？これはね、四次元ポケット〜!」

「ぼくのローブのポケットみたいなものか」

「イエス!」

なんだか、今日のハリーは楽しそうだ。

鼻歌まで歌いながら、部屋を飾り立てていく。

僕はというと、少し緊張をしていた。よく考えたら、一年生のときも二年生のときも最終局面のときは、なんだかんだで気を失っていたのだ。そういう意味では、初の物語の最終場面だった。

『あの生物が、処刑されたぞ』

「ありがとう、リドル」

『それにしても、ハグリッドは何も変わらないな』

伝達係のリドルは鼻で笑って、消えた。

シリウス・ブラックとの再会。これは、今後の展開としては、非常に重要なものになってくる。それは、シリウスが、ハリーに対してどのような関係を望むかがわかるからである。前の世では、ジェームズ・ポッターによく似たハリーを、彼は名付け親として、後見人としてよく可愛がっていたという。僕自身はお会いしたことも話をしたこともないので、その様子はわからないが、「不死鳥の騎士団」の活動再会においても彼の力は必要だったと後に何度も聞いた。

「まあ、今思えば、シリウスはちよつと過剰が過ぎていた気がするし、不死鳥の騎士団の活動が止まるわけじゃないだろうし、別にいいんだけどね。」

「聞いていたよりも淡泊は反応だな。いいのか?」

「うーん。当時は、僕『一人』だったじゃん。友達はいても大切だっと思える家族がない。そんなときに出会ったシリウスだったから、僕も本当に彼が大切でね。でも、今の僕は当時の僕じゃないから」

そういつて、僕にウィンクしながらノックスで家中の明かりを消した。

彼の記憶が正しければ、この部屋にロンは連れ込まれるらしい。僕たちは隣の部屋に移動をする。彼らが隣の部屋に入った後にその部屋に突入するという話になっていた。一階からガタガタという音が聞こえ、ふたりの会話が止む。ドンドンという荒々しく階段を上がってくる。ロンの呻くような声が聞こえた。

隣の部屋に入ったかと思うと、ロンの「離せ!」「やめろ!」という声が聞こえてきて争っていることがわかった。僕はハリーと目配せをして、隣の部屋に突入する。

入った瞬間のハリーの武装解除に「マジかよ」と呟いてしまった。シリウスの手にあった杖は綺麗に弧を描いてハリーの手元に収まる。その杖はロンの杖だった。「チツ」というシリウスの舌打ちが聞こえる。彼の姿は、聞いていたよりも身綺麗にしており、脱獄してそのまま放浪していたという様子は微塵も感じなかった。これは、彼への協力者がいるな。と思った。ダンブルドアかはたまたま…。

「初めまして。シリウスブラックさん。といっても禁じられた森付近で何度かあなたをお見かけしましたが。」ハリーはシリウスに笑いかける。

「ああ、初めましてだな。俺も何度かお前を見かけたさ。」

そう。とハリーは静かに返事をした。

「何が目的なんだ」とシリウスが問う。

「あなたと同じ」とハリーが微笑んだ。

「同じ？お前は、なぜそうも平然としていられる。俺が怖くないのか？憎くないのか」

「それは、なぜ？僕たちは真実を知らないだけだ。噂や醜聞で人を判断するほど僕は愚かではないよ。」

ハリーとシリウスが話を続ける。

僕はロンの無事を確認し、その右足が折れていることにきづいた。

「ロン。大丈夫か」

その部屋の奥、天蓋付きのベッドにこしかける彼に駆け寄る。

「どういうことなんだ！」とロンは僕の手を怯えるように振り払った。

「ロン…!?!」

丁度うしろから、バタバタと複数人の人が部屋に入ってくる音がして、振り向く。そこにはロンを心配しておつてきたハーマイオニーとネビルの姿があった。再び一瞬の沈黙が流れる。ハーマイオニーが「なんてことー!」と叫び、ネビルを守るように一歩前が出る。スキヤバースがひらり、とベッドの上に向かってきた。その目は、ロンのスキヤバースを捕らえて離さない。

「どういうことだよ!」

と再び、ロンが叫んだ。手の中のスキヤバースがキーキーと騒ぎ逃げようとするのを、彼は押さえ込みながらも瞳は鋭くハリーを睨んでいた。

「ハリー。嘘だろ。お前はブラックと手を組んでいたとか言わないよな!」

「禁じられた森で見かけたってどういうことだよ。そのブラックが校内のどこにいるか知ってて見逃してたのか!」

「もしかして、お前がそいつを校内に引き入れたとか言わないよな!」

ロンは、強い語勢でハリーに向かって叫ぶ。

「ロン。そんなわけないだろう。おちつけ」

「落ち着けるか!?! ブラックだぞ! 犯罪者だ! 殺人者だ! しかもそのブラックと平然と会話してるなんて、僕は信じられない! この状況でどう『そんなわけない』になるんだ」

これは、大変なことになった。まさか、こんなところでハリーが凶悪犯の仲間扱いされるとは想定をしていなかった。どう説得しようかと言いきよんでいると。ハリーの笑い声が聞こえた。

「えー、想定外のアクシデント? そうくる? 笑っちゃうよねえ。本当

に僕、彼とははじめましてなんだよ。ロン。ただ目的のものが同じだけなんだ。その君が大事に抱えているスキヤバーズに用があるだけなんだよね」

「ハリー…？」

僕とハーマイオニーとシリウスの声がハモる。三人のその呟きの意味は全く別物だろうが。というより、そういう紛らわしい言い方をするな！お前に、不信感を抱いている友人に対して「そのペットに用がある」と言われて「なるほど」と納得する馬鹿がいるなら会ってみたい。

案の定ロンは、スキヤバーズを抱える手を強め、距離を取ろうと体を後ろにのけ反らせる。

「ロン。落ち着いて話をしよう」

「ドラコはどっちの味方なんだ！」

ん？

「ハリー、ハリー、ハリーって、知ってたよ。ドラコがハリーが好きなことぐらい！けれど、この状況でもあいつの肩をもつのか。あいつは、犯罪者に通じていた、仲間かも知れないんだぞ！僕はブラックにここまで引きずられてきた。それであいつのことを信用なんてできるわけがない。スキヤバーズをブラックもハリーも狙ってる。何なんだよ一体。」

「だから…」

「ドラコは、僕が一番の友達だったんだ！五歳の時からだよ！ホグワーツに入ってハリーと出会って、君なら何が何でも友人になると思ってたさ。二人がスリザリンに入って、二人の仲が良くなっていくのだって、覚悟してたし予想してた。当時のぼくがだよ！けれども、ここまででは予想してない。」

「被害者の僕じゃなくて、加害者側に立つなんて。僕が見捨てられるとは思ってなかった。」

「ロン：。」と息を呑むハーマイオニーの声が耳に大きく入っていく。どうしてこんな展開になっているんだ。なぜ、ロンもハーマイオニーも涙を流しているんだ。一瞬パニックに陥りながらも、目の前の友が泣いている理由だけは痛いほどに理解する。怒られて、叫ばれて、泣かれるまで、ロンがどんな気持ちだったのか、そういえば考えたこともなかった。

「ふん。『噂や醜聞で人を判断するほど』とかいいながら、お前の友人はそれで人を判断しているじゃねえか。所詮人間はそんなもんだろ。」

「ちよつと、静かにしててくれない。」

ブラキアビンドと、ハリーはシリウスを拘束する。急なことでシリウスはバランスを崩してそこに倒れた。「チツどうでもいいから、そのねずみを捕らえて、殺せ」

「ああ、もうそういうとこだよシリウス！黙ってて！僕はいま猛烈にイライラしているんだ！」

「見捨てる」という言葉が僕の中でこだまする。そんなつもりなど、毛頭なかった。僕はロンを友人だと思っていたし、ハリーのことを友人だと思っていた。僕がハリーのことを好きて、尊敬しているというのが、ロンと出会った時からずっと話しをしていたことだった。その度に「あいかわらずだな」って笑うから、「そうだろう」と僕も笑い返し

ていたんだ。だから、今更だと思っていた。見捨てるわけでも、ないがしろにするつもりも本当になかったんだ。ただ、ロンにとっては、入学するまでのハリーは「英雄」で、僕の話聞いていただけだったんだ。そこに「友情」とう要素がついた。そこに僕は、変化はないと思っていたけど、ロンにとっては十二分の変化だったんだ。

けれどもどうすればいいかわからない。

「お前が一番だよ」って言ってやれない。

「ごめんドラコはハリーの友人で一番なのに」といったロンの言葉が思い出されて涙がでそうになる。ハリーだって一番じゃないはずだ。友情に一番なんてないんだ、みんな等しく、みんな一等大切にしたい。なのに、ハリーが辛い時は「一番だよ」ってするっと言ってあげられたのはなぜなんだろうか。

ぐすぐすと泣くロンのそばに寄り添い、ローブのポケットに手をつっこむ。「ファイファイフィズビー食べる？」とロンに手渡した。自分でも相当意味がわからないことをやっている自覚はあるけれども、どうすればいいかわからないのだ。無反応なロンに僕はお菓子の追加をする。「カエルチョコもあるし、百味ビーンズもあるぞ。あつチョコレートボンボンにヌガーもある。金平糖もあるし、どら焼きも……」僕はポケットからどんどんお菓子をだす。後ろで、みんなが呆れているのが肌でわかった。

「もういいよ。ドラコ」

「え。」

今度は僕が見捨てられたか、と思う。こんな友人もういらなくて、それは、嫌だ。

「ドラコが人間関係つくるの苦手だって、そういえば僕知っていた。唯一の君の欠点みたいなものだろう。『一番』だなんて、8歳の子供みたいなことをした。それを言われて君が困るって知っていたのにね。僕はそれを理解してあげられる優しさがないとダメだったことに気づいた。ごめンドラコ。僕が、君を友人と思っている。その真実だけでよかったんだ」

「ロン。」

「気が動転していたんだ。ごめん。気にすんなよ。」

僕は、ロンに助けられた。

僕のことを理解しようとしてくれる。

「僕も、ロンのこと友人だと思っているよ」この一言で、ロンに伝わるという。

「さて、ひと段落着いたところで、こっちの問題は少しも進んでいないんだよね」

ハリーとハーマイオニーとネビル。そして、床であぐらをかいているシリウスの視線にきづいた。

「ロン。スキヤバーズなんだけど。」

「はっ。」

「お前が持っているいい。だから、この籠に置いておけ、シリウスに取られないためにも、そいつがまた逃げ出したら困るだろう。」

そういつて、ローブから、丁度スキヤバーズが入るくらいの籠を取

り出す。四角い、虫かごみたいな形状のものだ。ロンは「それなら」といつて、僕から籠をうけとりその中にスキヤバースを入れた。キーキーと逃げようとするそのねずみが、間違っても彼の手から脱出しないうように見張りながら。

ハリーに「これでいいだろう」と目で合図をする。「まあ及第点だね。」と言いながら、ロンに彼の杖を投げて返した。

そうして、ギイギイとまた、誰かが階段を登ってくる音がする。その音にハーマイオニーが振り向き、「シリウス・ブラックがいるの!」と叫ぶ。叫んだあと、こちらをちらりとみる。僕たちのことをどう伝えたものか、悩んでいる様子だった。

「これで、あと一人。」と、ハリーがつぶやく。

だから、そういう紛らわしい物言いはわざとなのか、癖なのか! ハーマイオニーの顔にハリーに対する不信感が一瞬陰る。

ブラックが、腹筋を使って立ち上がり、ハリーに足蹴りをかまそうとする。それをひよいと避け、シリウスへ杖を向けるが、当のシリウスはこっちにむかってきていた。「そいつをよこせ!」とロンに叫ぶ。僕はロンの前にたち、彼に向けて攻撃をしていた。とつさのことで手加減をするのも忘れたその呪文はシリウスに直撃し、彼は床に倒れ込んだ。「うう」といいながら転がるが、彼の意識はまだはつきりしていた。

「大丈夫か!」といいながら、ルーピン先生がドアの前にあらわれる。その手には杖を構えていた。ひとりひとりの顔をみながら状況を整理しようとしているのがわかった。ルーピン先生の登場に、ネビルとハーマイオニーとロンがホツとしたのがわかった。が、そもいかないのだ。「エクスペリアームス」とルーピン先生が叫び、僕とロンと

ハーマイオニーとネビルの杖が手を離れてとび、ルーピン先生が全てをキャッチする。ハリーは、プロテゴを唱え、武装解除を防いでいた。

「シリウス、あいつはどこだ」

「そこだ」

数秒間の沈黙のあとシリウスはロンの手元をまっすぐに指さした。

「しかし、それなら……。もしかして、君とあいつは入れ替わっていたのか。」

ルーピン先生はシリウスを見つめる。シリウスは目をそらしながら。「そうだ。お前に言わなかったんじゃない。誰にもいわなかったんだ」

ルーピン先生は静かに杖を下ろす。そうして、ブラックのもとへより、彼にかかった拘束の呪文を解き、彼を助け起こした。そうして、兄弟のように二人は抱きしめあったのだ。

「なんてことなの!」

ハーマイオニーの悲痛な叫びが響く。

「わたし、わたし先生の秘密誰にもいわなかったのに!先生のために、内緒にしていたのに!」

「ハーマイオニー」

「みんな離れて、先生は!その人とグルだったんだわ!ブラックの手引きをしていたのは、先生よ!」

「ハーマイオニー、話を聞いてくれ」

「先生は狼人間なの!」

まさか、と空気が流れる。ハーマイオニーはずっと前からきづいていたという。スネイプ先生の課題。まねボガート。先生の体調。すべてが一致したとき、彼が狼人間だと気づいていたのだと。

わたし、信じていたのに。

先生のこと信じていたのに。

みんなにはなきなきやいけなかった。間違ってしまったわ！

ハーマイオニーは泣きそうに叫ぶ。先生は、困った顔をして、「話を聞いてくれ」と彼の手にある杖を一本つつ僕らに放り投げ、持ち主に返した。彼は自分の杖をベルトに挟み込み「君たちには武器がある。私たちには丸腰だ。だから、お願いだから話を聞いてくれないか」と頼んでいた。

「スネイプ先生。あなたの優秀な生徒が、ルーピン先生の真実にたどり着きましたよ。」

ハリーのその発言に、僕以外の全ての人間がスネイプ先生の所在を探す。ここには彼の姿は見当たらなかった。

「ほう。あそこまでのヒントをやり、誰も気づかなければ、魔法界の未来はないと思っておったところだ。ひと安心した。」

そういいながら、スネイプ先生が透明マントを脱ぐ。それを、ハリーに投げて返した。「ハリー、それを返そう。お前のものだろう。暴れ柳のところにあつたからすこし拝借した。」

ハリーはそれを受け取った。スネイプ先生の手には杖が握られ、それは、シリウス・ブラックにしつかりと向けられていた。

「なぜ、ここににいるのか。と言いたげな目だな。簡単だ。私はこの学校で魔法薬学の教授をしている。そして、ルーピンが今夜薬を取りに来ていないことに気づき、君の部屋までいったんだ。そしたら、このあとは言わなくてもわかるだろう。」

淡々というスネイプ先生の声色とは裏腹にそのめは今にでも殺してやりたいという怒りでいっぱいだった。

「ハリー、君にとってもこの男は憎いだろうが、吾輩がこいつをやつても?」

スネイプ先生の言葉にシリウスの苛立ちが増す。その空気に耐え

られない子供たちは、ネビルがハーマイオニーと、ロンは僕にしがみついていた。

「先生。約束したじゃないですか。先生のお怒りはわかりますが、『真実』を語らせてからです。勘違いや思い込みはその人の身を滅ぼします。さて、今回の解決編は、リーマス先生あなたにお願いしても？」

そういつて、不敵に笑った彼は、そばの椅子に腰かけた。

その後、ルーピン先生が語ったことは、だいたい僕が知っていることとの通りだった。「暴れ柳」「秘密の地図」「動物もどき」様々な単語がルーピン先生の口から放たれるたびに、スネイプ先生の手が震えるのがわかった。

「こいつはスキヤバーズだ。ペティグリューなんかじゃない。」

ロンがぶつぶつぶやくのが隣で聞こえてくる。

「ふん。それを吾輩に信じろと？ああ大部分は信じてやろう。そいつがペティグリューで、ブラックが殺人犯ではないという部分以外はな。そもそも、その話以外は吾輩がもともと知っていた内容だがね」

つまりは、信じていないってことじゃないか。

「でも、先生！それを確かめてみるのも」

ハーマイオニーが最後まで言わないうちに「ミス・グレンジャー、君は停学処分を受ける身ではないかと吾輩は察しますが、ウィーズリーもロングボトムもだ」「あつ…」

ハーマイオニーが俯く。ネビルとロンはわかりやすくおろおろし始めた。彼らの許容オーバーで完全に頭が回っていないが、安心しろ。ここにはハリーと僕がいるんだ。お前たちが停学処分になると同時に、僕たちもその扱いになる。スネイプ先生はそれは避けるだろう。たぶん。

「えっ！もしかして、僕もですか!? えっ!?!」

「あたりまえだポッター」

「やだ先生！さっき僕の名前ファーストネームで呼んでくれたのに。リピートアフターミー、ハリー！」

「シリウスを殺す前に、その口を縫い付けてやろうか?」

「ダメです。先生、間違っても人を殺さないでください。何が真実か今はまだわかりませんが、もしそうであったとしても、手を汚すような真似は絶対にダメです。」

そこか、ハリー?とも思うが、おどけた様子からガラリとかわる真剣な物言いに、スネイプ先生は一瞬動揺する。そうだな。ハリー。スネイプ先生に、そんな真似はさせられないな。先生はハリーから目をそらし再び、シリウスとルーピン先生に向き直った。

「で、吾輩にどう信じろと?」

ルーピン先生はまた、スキヤバーズがペティグリューである理由を、静かに、それでも言葉を慎重に選びながら紡いでいった。キーキーと、かごの中のねずみはうるさかった。せわしなくかごの中をぐるぐると回っている。

「セブルス。信じてくれ。シリウスじゃない。ピーターだ。リリーを

殺したのは、ハリーの両親を殺したのは。」

「何を！」

「秘密の森人は、ピーターだった。ピーターだったんだよセブルス！シリウスじゃない。君ならわかるだろう。この意味が……。」

「ごめんジェームズ。俺が悪いんだ。俺が。」

シリウスが涙目になりながら、懺悔の言葉を繰り返す。

「ウィーズリー！そのねずみをかせ！」

「いやだ！」

「貸すんだ」

スネイプ先生は強引に、ロンからかごを奪い取る。「ルーピン。お前が言っていることが真実なら、こいつはあのピーターになるんだな。もし、今の話がでっちあげであってみる。お前ら二人共まとめて、吸魂鬼にでも引き渡してくれる。」

その瞬間、青白い光がスネイプ先生の杖から迸る。かごと宙に浮き、そこに静止した。小さな黒い姿が激しくよじれ、また再び眩しい閃光がはしる。そして、そこに現れたのは、小柄な男の醜い姿だった。勿論、籠は引き伸ばされ、そのままペティグリューは縛り上げられた、奇妙な体制をした。

「初めまして、ピーターペティグリューさん？」

ハリーが、その男、ペティグリューに声をかける。ロンとハーマイオニーとネビル、そしてスネイプは息を飲んだ。

「やあ、ピーター」

朗らかにルーピン先生が声をかけた。シリウスが唸り、スネイプ先生が手に再び力をいれる。

「その拘束具いいでしょ。僕がドラコにわがままをいって作ってもらったんだ。逃げようとしても無駄だし、中からの魔法は聞かない。伸縮自在な道具なんだよ」

「ハリー、誤解がある。作ったのはフレッドとジョージだ。」

「ああ、そうだった。まあどちらにしても、それ、君のために誂えたんだからね。是非とも堪能してよ。で、言い分ぐらいは聞いてあげるけど。君とシリウス、どっちが僕の敵？両親の仇？」

知っているくせに。そういうより、その状態からしてハリーがどっちを疑っているかなんて明白だ。杖をもっていないにしても、特別拘束をされているいないシリウスブラックと、こんな、人間扱いをされているいないような拘束をされている。ピーターペティグリュー。

それなのに、いまだに許されると思っっているのか。ピーターはなぜの言い訳タイムを始めた。正直いって無残だった。やつてしまった行為に情状酌量の余地はない。言い訳をしたい気持ちもわかる。しかし、その言い訳は完全に「友」と呼んでいた「仲間」を売るような内容だった。

そうして、誰も自分の味方をしてくれないときづくど一人一人に命乞いを始めた。けれども、誰も彼を信じるものはその場にはいなかった。

「ハリー…セブルス。信じてくれるかい。」

スネイプ先生は、肯定も否定もしなかった。ただ、ずっとペティグリューを憎々しく見つめている。ハリーは、「もちろんです。こいつ

が僕の両親を殺したんだ。こいつを引き渡してアズカバンに連れて行けばいい。」

その意見は満場一致だった。

そうして、今回の話は幕を閉じるかと思っただが、まだ話は終わらなかった。ロンの骨折した足を固定し、ルーピン先生とスネイプ先生が、今後どう動くか相談しているとき。それはシリウスの一言がきつかけだった。

「ハリー」

「なんですか。」

「なぜシリザリンなんだ。」

と、僕はその言葉にドキツとする。

「そういわれても、組み分け帽子が決めたことですし」

ハリーは飄々とシリウスに回答した。

「お前は、そのマルフォイの子どもと仲がいいのか」

「一目瞭然でしょ。」

「やめとけ！マルフォイは、ルシウスの息子はやめておけ。ルシウスは、死喰人だぞ。お前にどんな被害があるかわからない。というよりシリザリンは誰がどこまでヴォルデモートに加担しているか、死喰人か、わかりやあしない。危険だ。」

「ルシウスさんは、操られていたと言っていますか。」

「誰が信じる！」

「僕が信じます。」

シリウスは信じられないという目でハリーを見、ルーピン先生をみ

た。そしてゆっくりと僕に視線をむける。彼の目が揺れているのがよくわかった。

「でも、あいつはスリザリンだ！」

「ハリーだってスリザリンだ」

思わず僕は叫んでいた。

「ドラコ…。シリウス。あなたが僕の身を案じているのはわかります。けれども友人はじぶんで選ぶ。」

「なんてことだ。ハリー、そうやってこいつらは。スリザリンの連中は考え方が偏っている。正義じゃない。闇の魔術に通じているものも多いんだ。自分の望むもののためなら手段を選ばない。そういう狡猾さがある。信じると痛い目を見るぞ」

「そんなことはない！」

次に叫んだのは。ネビルだった。

ここにきてずっとハーマイオニーの背中に隠れていたネビルが大きな声で、シリウスブラックに反論をしていた。

「僕は、ドラコが好きだ！優しいし、親切だ。僕が困っている時にいつも声をかけてくれる！最初の頃なんて、僕ができないことを笑わずにいつも助けてくれる！スリザリンだけど、僕のおあばちゃんや周りの人がいうようなやつじゃない！」

「ネビル…」

「夏に、ドラコの家に行った！怖かったよ！だけど、ドラコのおうちの人は、普通に僕を向かい入れてくれた。その場はスリザリン生ばかりだったけど、無視はされたけど、何かいやがらせとか受けてない！それは、僕が彼らと友達じゃないからだ」

ふーっふーっど興奮しているネビルがそこにいる。こんなに饒舌なネビル初めて見た。僕は嬉しくて、感動してしまっていた。

「そうだよ。僕はずっとドラコと友人なんだ。ナルシツサさんだってルシウスさんだっていつも僕に良くしてくれる。僕の両親とは仲が悪いけど、だからといって、僕に悪意を向けたりそんなことはしない。僕のルームメイト。グリフィンボールのシェーマスとデインもドラコと話してみたいなっっていつもいつてる！」

「ロン…あなた」

「ハリー…さつきはごめん。僕、君にどう謝っていいかわからないよ！君のことも友達だっと思って疑ってない。ごめん。」

ロンはまっすぐにハリーにあたまを下げた。

ハリーはロンにむかって歩き、彼を抱きしめた。

「ありがとう。僕だっ君のこと友人だっ君が思っている。あの状況は仕方が無かった。まして君はここに無理やり連れてこられて、しかも君の大事なペットをよこせといわれたんだ。疑心暗鬼になってもしかたない。」

「許してくれるの？」

「許すもなにも、最初から僕は君のことを怒ってないよ」

「ありがとう」そういつて再び、今度はロンからハリーを抱きしめ返した。

「君たちは、本当に不思議だ。シリウス。君は彼らのホグワーツでの生活をみると驚くかも知れない。彼らは本当に仲がいいんだよ。緑のネクタイと赤のネクタイの彼らが一緒に廊下を歩いているんだ。ドラコは、ネビルの勉強を見ているし、ハーマイオニーはドラコとハリーと難しい話をいつもしている。ロンはハリーと箒にのっつていつ

も遊んでいる。しかもね、これをいったら怒られそうだけど、セブルスのところにはウィーズリーの双子がいつも出入りしているよ。双子にいったら『スネイプ先生は、ああ見えて僕たちのよき理解者なんです』だそうだ。」

ロンは驚いた顔でスネイプ先生を見る。スネイプ先生は苦虫を噛んだような顔で目をそらしていた。

「シリウス……。グリフィンボールがなんだ。スリザリンがなんだという見方をしていると、真実を見落としてしてしまう。そういう枠組みや世間の意見に流されたら後悔するのは自分自身だ。そうして、外に向けて攻撃的になってしまう。人は裏切る時には裏切るよ。だって、心が弱いんだもん。スリザリンが裏切る？じゃあ、こいつはどうなの。ピーターだって僕の両親を裏切った。ずっと前からあっち側についていた。そうして自分が助かりたいばかりに僕の両親をうった。君の仲間が、ジームスを売ったんだ。だったら、僕は僕が信じたいものを信じる。そうして裏切られたときはその時だろう。そのときは、僕の考えが、思慮が、浅かったただけだ。」

その場にいた、全ての人間が口をつぐんだ。

そう、人は裏切る時に裏切る。思いは変化し、感情は揺らぐ。本当に「絶対」なんて存在しない。傾向なんてものを信じる暇があるのならば、だったら自分のなかの思いを信念をしんじるほうが、ずっと良いにきまっている。

わかっている、できない。人間の弱いところだ。

「さて、長いしすぎたね。さつきと、ピーターをあいつらに引き渡そう。どんな感じ？」

そういつてハリーが、僕にこえをかけるふりをしてリドルに声をか

ける。

『待ちくたびれているよ。思ったよりも長丁場になったね』

「ああ、そうだった。もう着いているんじゃないかな」

「お互いに守護霊使えたら楽なのに」

「それは父上への皮肉か？」

「ハリー？どういうことだい？」

ルーピン先生が、何が起きているのか尋ねる。

ハリーの代わりに僕が答えた。

「実はですね。今日、ヒツポグリフの件でファッジと僕の父上が来ているんですよ。それで、確実に魔法省に引き渡したいので、父上に頼んで、ファッジのお帰りを引き伸ばしていました。」

「そういうことです！ペティグリューが真犯人だってわかった時点で守護霊飛ばして、校長室にいます。校長と魔法大臣とルシウスさんに声をかけていたんです。だから、ここから出たら、即、こいつを大臣に引き渡せますよ。」

逃がしてなんかやるもんか。

というハリーのつぶやきが聞こえる。怖い。

そうして、一人一人が、ホグワーツにもどるためにトンネルに向かう。ルーピン先生がピーターを。そして、スネイプ先生がシリウスを逃げられない程度に拘束して、連れだっていた。

「はあ。結構時間が経ってしまった。もう外は夜だろうか。」

「ギリギリかな。僕たちがここに来たときはまだ夕方にもなっていないかったもんね」

「はは、父上は今頃ファッジと月夜のランデブーか…笑え…」

「月夜？」

「今日満月だった！」

僕は急いでトンネルに向かう先生たちに声をかける。ハリーは後ろを向き「アクシオ来い！」と叫んでいた。

「先生！今日満月ですよ！今が夜か夕方かわかりませんが、危険です！」

「ちっ」

スネイプ先生の舌打ちが聞こえる。そうして、彼は、ルーピン先生からピーターを奪い取った。

ハリーが、トランクをもってあらわれる。

スネイプ先生に提案する。

「ここを今一度。叫びの屋敷にしましょう。」

「つまり、？」

「ルーピン先生とシリウスをここに置いて行きます。」

「それに吾輩が了承するだけでも？それに、ピーターだけを引き渡したところで証言が不十分だと思うが」

「責任を持ってお二人は、ホグワーツに連れて帰ります。勿論。今回のことは、この二人にも証言台にたってもらわなければなりませんから。先生はロンたちをつれて城に戻ってください。僕は、ドラコとここに残ります。」

「そんな、危険なことは」

「大丈夫です。なんて言ったって僕ですから。」

「背に腹は変えられぬか。危険になったらすぐに逃げろ。お前とマルフォイの身が安全第一だ。こいつを引き渡したらすぐに戻ってくる。いいな」

そうして、僕たちは二手に別れることになった。

4—3 終了

「というわけで、じゃーん。ルーピン先生とシリウスは、この中に入ってください。」

そういつてハリーは持っていたトランクをパカッとあける。

「これは？」という二人にハリーは説明をしていた。

「中は広い草原になっています！できるだけ現実世界と連動するようにしました。ので、この中も今は夜だし満月です。」

本当は、月の満ち欠けとかなしにしようかなって思ったんですけど、草木や動物の生存を継続させるためには、月の満ち欠けや太陽など全ての要素が回らないとだめだったんですね。と言ってハリーは「えへえへ」と締まらない顔をしながら説明を続ける。

「この中で一日過ごしてください。さっきの話だとシリウスはアニメーガスで犬になれるんですね。一緒に過ごしてください。」

でも、で二人が顔を見合わず。

「悩んでいる暇はないと思いますが。今ここで変身して、僕たちを襲いますか？ですよねえ。じゃあ、この中に飛び込むしかないじゃないですか。そして申し訳ないですが、僕は明日の朝、これを校長とスネイク先生の前で開かせてもらいます。いいですか？」

シリウスはそれでも何か言いたそうだったが、「そうだね」というルーピンに引っ張られトランクの中に消えていく。ルーピン先生その後を追うように、トランクに足をかけた。

「先生！」

「ドラコ？」

「もう少し待ってください。トリカブト系の脱狼薬以上のものをいま作成しています。あなたが、安心して生活できるために、今色々と研究しているので！」

「ふふ、ありがとう。君たち二人はハーマイオニーよりもつと前から僕が狼男だつてきづいていたよね。そうだね。シリウスたちは、僕がこんなことを言ったって知ったら『正気か』っていいそうだけど、君は、君のご両親にそっくりだよ。ハリーも、僕の知っているスリザリオン生はね。愛に忠実な人たちだ。ただ、それ以外に興味ないだけだね」

そうウインクして、彼はトランクの中に消えていった。

静かな。時間がひと時ほど流れる。室内のはずなのに、草原の暖かい風が吹いた気がした。

「つあああああああ！くっそ長かった！もう僕もう無理。疲れた！今日一緒に寝よ！ドラコ」

「ああ、確かに長かったな。そして割と重かった…。色々」

ハリーはトランクに向かい、パチパチとロックをする。というより、そんなもの、そんなレベルが高いものつくれるなら、いちいち僕や双子に頼む必要くないか!?!と思ひ立ちハリーを責める。

「人に仕事を押し付けるな！」

「いやだなあドラコ僕がこんなレベル高いモノ作れるわけないじゃん。検知不可拡大呪文だけならまだしも、でかくて、あるいみ小惑星をひとつトランクの中に作るなんて。」

「じゃあ。」

「トランクは買った。スキヤマンダー氏の孫がこの学校にかよってい

るって知ってた？それで声をかけて、ちよつと譲ってもらった。メイ
ンのは無理だったけど、小さいのでいい習って。」

「ほう。」

「んで、リドルに頼んで中身改造してもらいましたー！やったね！あ
りがとうトムリドル！やはり能力値高いとほんと助かるよねー！」

「そんなことをさせていたのか!？」

『そんなことをさせられていました』

いきなり！いや、それにしても本当にハリーに従順だな!?不安にな
るぞ一周回って。「今度は新しいお仕事のリドルにあげるね」『いら
ん』『どうせ暇じゃん』と、二人は押し問答をする。いや、まあいいけ
ど。うん。ほら、僕は彼の考えてることすべて理解するのは一年前に
諦めたから。僕は見えている真実で判断する。今日も散々ハリーが
言っていたように。

ということの後日談。

あのあと、トランクごと無事に引渡し、彼らは真実を語ることに
なった。しかしシリウスがいきなり無罪になるわけではない、これか
ら何度かの裁判や尋問等が行われるのだろう。それらをすべて終わ
らせて彼は自由の身を手に入れることができる。彼の身柄はアンド
ロメダおばさまが引き取るようになったらしい。これはオフレコの
話だが、シリウスの裁判関係については僕の父上が動いているよう
だ。母上に泣き落しでたのまれたと聞いている。といつても父上は
表向きは堂々とシリウス無罪のためには動けないらしく、本当に
「こっそり」とやっているらしい。アンおばさまと母上はシリウスの
姿をみてホツとしたと後から聞いた。まあベラトリクスはこうも
いかないだろうな。とあのキチガイじみたおばさまを思い出して鳥

肌がたつ。

ヒツポグリフについては、なぜか、処刑の前に消えたらしい。これについてはハリーいわく、「ついでにスキヤマンダー氏に頼んでおい」そうだ。忍びの地図に現れてたはずだけど、みんな見逃したんだねえとカラカラと笑っていた。

それならそうといっておくと一瞬思ったが、それを言ってしまったら、ロンたちがハグリッドのところにはいかない未来があきらかになつて、あの同窓会が願わなかったかもしれないことにきづいた。

そうして、ハーマイオニーはタイムターナーを今回は不正使用をせずに一年間を終わらせた。来年もそうするのかと思つたが「マグル学」を選択するのを辞めるらしい。そうすれば無茶なく時間割が組めるのだそうだ。

ロンはペットがいなくなつて寂しがるかと思つたが、昨年プレゼントしたピローがいたからそこまで深い傷はおつていないようだった。去年の自分ナイスと自分で自分を褒めておいた。

そうして、肝心なハリーとシリウスの関係性についてだが。

これは、帰りの汽車のなかの僕とハリーの会話に代えさせてもらおうと思う。

「これで、物語が一気に変化したな」

「そうなるね。うーん。気長に待つか一気にストーリー回収するか。」

ハリーは目の前で、ノートを開きお揃いの万年筆をこめかみに当てながら悩んでいた。その隣には実体化したリドル。

「とりあえず。四年時が終わるまでにリドルの日記とレイブンクロー

の髪飾りは破壊しようとは思う。」

『つまりそれまでに僕の次の媒体を完成させろということだね』

リドルは、『やれやれ』と肩をすくめながら言う。あのえげつないトランクの仕事が終わった彼に与えられた次の仕事は、トムリドルの次の媒体の作成だった。細かくハリーから指定・オーダーが入っているらしく「トム使い」があらいい！と叫ばれていた。

「時間があつたら、ゴーントの指輪も回収しておこう。呪われたくないからこいつに回収させればいいし。」

『ああ、あれか。』

「だったら、ロケットとカップもいけるんじゃないか？」

と口をついたらハリーに首を振られた。

「ロケットはクリーチャーが肝だ。あの時はシリウスが僕に彼ごと譲ってくれたら無理やりありかを言わせたんだよね。まあマンタンガスとアンブリッジを確認するぐらいはしてもいいけど、クリーチャーと仲良くなってからがいい」

「なるほどな。カップは？」

「ベラトリックスは正直面倒くさい。ちゃんと計画立てたいんだよね。」

「ああ」

そうしてまた、あの人を思い出す。

正直アズカバンから出てきて欲しくない。集団脱獄前にたたけなののか…？

「はあ。そんなことより、僕は来年対抗試合にだされると思う？」

「思う。お前の血がいるんだろうしな。」

「はあ。別にヴォルデモート復活を妨げたいわけじゃないし、むしろ

ヴォルデモートを確実に仕留めるために復活してほしいから、僕の血小瓶につめてフォーユーするのにな」

物騒なことを、真剣に「悩んでいます」って顔で語るな。

『来学期に僕は復活するの？』

「そうだよ。楽しみだね！」

『また、色々、差し支えない程度でいいから聞かせてよ。最後にヴォルデモートに絶対漏らすな。って言えばいいんだし』

「そうして、死喰人にはもらすのか？」

『ハリー、君のかわいい恋人がいつまでたっても僕のことを信用してくれない。』

さめざめと泣きまねをする。誰が可愛い恋人だ。

「リドル。残念ながら、まだ、可愛い恋人じゃないから。本当残念な話なんだけどね」

お前もこの茶番に乗るな。話が面倒になるだろう。

「まあ対抗試合については死なない程度に頑張れ。どうせ最後リトルハングルトンに行けばミッションクリアなんだから」

「とかいって、僕を心配してリドルハングルトンまでついてくるドラコが鮮明に想像できるよ」

「否定はしない」

盛大にハリーがため息をつく。否定はしない。避けられる未来なら避けたいっていったらどうだろう。僕がハグリッドに否定的なことを言われた時に、同じだ。

「あ、そういえば。ファイヤボルトはどうしたんだ？」

「あああれ、シリウスに返したよ。」

「返した!？」

「だって、僕はシリウスから謝罪が欲しいわけじゃないもん」

あのあと、ハリーのもとへシリウスから手紙が来た。(ちなみにあの場所にいた全員に手紙があった)そこには、あの日の謝罪が並べられていたらしい。あのあと散々にルーピン先生や、アンおばさま。そして母上に怒られたらしい。「君たちの友情を否定して悪かった。ハリーはハリーで、私は私だ。つまりは、私は私が信じるものを信じるということだ。私の長年のスリザリンへの思いは消えるものではない。ただ私はいいい見本になる大人にならなければならぬ」と実感した。」と書かれてあった。ただ、追伸をみて僕たちは笑ってしまったが

「追伸 スリザリンへの偏見については謝罪しないが、君の友人への偏見については謝罪をする。しかし、スネイプはダメだ。あいつだけは天地がひっくり返っても好きになれないし受け入れられない。」

somebody's regret Harry
side 1—1つ

「僕は君への愛を保証に、僕は君を信用していると、保証する。」

発言した自分が言うのもなんだけれど、なかなかいきいセリフである。こんなジニーにも言ったことがない。そもそも言ってる自分が想像もできない。

僕にとってジニーは、隣にたつ勇敢な女性だった。ハーマイオニーとは違う頼れる勇敢さ。ジニーは僕の弱さを知っていたけれど、それを庇うでも守るでもなく一緒に悩み背負おうとしてくれた。そういう強い人だった。だから、終わりが来てしまったのだろう。この時が来るとうすうすにお互い理解していた。

「これで、いいのよ。私はあなたに守られたいわけじゃなかったし、今後もそうだよ。でも、そうね。私のハリーが誰かのことを『守りたい』だなんて、やっぱ嫉妬しちゃうわね。」

「ジニーごめん。君のことを愛してるよ。」

「私も愛してるわハリー。私は充分幸せだった。」

そうやって、物分りのいい君に僕はまた助けられる。「浮気者」となじられる方がまだマシだったかもしれない。「裏切り者」と叫ばれる方が、僕は安心したかもしれない。けれどもジニーはそのどちらもしなかった。ただ「もう少し可愛げのある女の子だったら、もう少しあなたを引き止められたのかしらね」と笑った君が痛々しくて、僕は一人の女性を傷つけてしまったことはよくわかった。

君が悪いわけじゃないんだ。

それだけはわかってくれ。

僕が悪いんだ。

君が傷つく必要はない。

「けど、今からでしよう？勝算はあるの？」

「え、いや。何も考えてなかった。」

ジニーはぼかんとした顔を一瞬したかと思ったら、お腹を抱えてひとしきり笑った。

「そう、そうなの。そういえばあなたは恋愛には奥手だったわね。そうね、彼が彼じゃなくて、ましてや女性だったら、あつて抱きしめて『愛してる』で良かったのだろうけど…んもう仕方ないわね。人肌脱いであげるわよ」

懐かしい出来事を思い出す。

ジニー…僕の可愛いじジニー。最後までよき理解者でいてくれようとしていた最愛の人。僕は、君が応援してくれていたのに、未だドラコを追っかけています。君との恋の始まりは一瞬だったから、こんなにも誰か一人のことを長年追っかけてるの、実はときどききついですよ。せつかくこんなとこまで追っかけているのに、全てを捨ててまで、僕はドラコを幸せにすると誓ったのに。

急に胸が寂しくなるのを感じて、僕はベッドから身を起こす。書きかけの手紙の続きを書き、追伸を書いた。「もう僕は君なしでは生きていけません。早く迎えに来て」きつと質の悪い冗談だっと思うんだろうな。

そうして、何度かドラコとの手紙のやり取りをして、誕生日の前日に迎えに来てくれることに決まった。それが決まったとき、必要最低限の物以外出していない、帰ってきたときそのままのトランクをみた。いつでもドラコの元に行けるように。もつと早く来てもいいんだぞ。とも思うが、彼らが来たのは約束通りの日付だった。

聞いていた通りにルシウスさんとドラコの二人で現れた。まだかまだかと心待ちにしていさんはバーノンおじさんたちと話をしていた。車の運転をしていた人が、荷物も入れてくれるというので、玄関でこちらの様子を見ているドラコのところに行く。「ずっと待ってた」と言ったのは心の底からの本心だったのだが、彼が「いやがらせ」と受け取ったらしい。いやがらせとして受け取りたいのだったら、こっちだって調子にのるぞダーリン。

ドラコの家についてから、シシーさんたちから熱烈な歓迎を受ける。明日の誕生日パーティーはシシーさん監修だと聞いて、その規模を想像し一瞬絶句するが、楽しいものになるのは間違いなしなので、問題ない。むしろ今までこんなに祝福された誕生日を過ごしたことがなかったので、嬉しい限りである。と、思っていたのに、爆弾発言がなされる。

「君の奥方の初対面が、僕の誕生日パーティーとか…」

可愛いのか？とひたすら聞くと「かわいいにきまっているだろう！」と怒鳴られた。泣きたい気持ちと怒りが絢交ぜになるが、悟られるのも癪である。今年がアストリアの入学だったことを思い出して、この夏休み中ときどき一人憂鬱になっていた僕の身にもなれよ。とも思うが、それは勝手な話だろう。少しでも嫉妬してくれたらと思っ

ジニーの話題を振るが、そんな素振りをいつそもみせることなく彼は話を続けた。

拗ねてみせると、ドラコは大きなため息をつきながら席をたつ。えっ。と思うとそのまま部屋を出ようとするとつきに「ごめんつてばああああ」と情けない声で謝っていた。「僕がなんでいじけたか、知らないくせに」それでも悔しくてつい呟くと、彼はまたも出ていこうとするから、結局僕が折れた。こいつに僕の気持ちはわからないんだ。一周回って腹が立つ。

そうして、今年のメインイベント「シリウス問題」の話になる。今回の目的はシリウスの身柄の保証と無実の証明のみだ。ハグリッドは知らない。今思い出せば、僕の可愛いドラコを怪我させたわけだし、当時はドラコのことといけすかないやつだと思っていたけど、この、この美しいドラコに怪我をさせたなんて本当大罪じゃない!?と今になれば思うのである。だから、ドラコに被害が及ばないならそれでいいし、触らぬ神にたたりなしで僕は行きたい。はい。合掌。

今後の僕の気持ちについて話しているとリドルが説明を求めてくる。話さないですむなら話さないでおきたかったけれども、さすがに誤魔化すのも面倒なのでかいつまんで話をする。すると『それについては、深く考えないほうがいいのか。それとも』と尋ねてきた。ほらもう。物分り良すぎるのも大問題だよ！
ドラコに余計なこと聞かせないで。

誕生日パーティーは、思った以上の人が招待されていた。これは

まあ、なんだ。誕生日パーティーにかこつけた、うん。考えるのはやめておこう。ロンとハーマイオニーがいないことはもともともわかっていたから別にいんだけれど、ネビルが招待され、来てくれていたことには驚いた。ネビルは僕が知っている、強く勇ましいネビルそのもので、彼の成長が以前と比べてめまぐるしく早いことに驚いている。

しばらくは三人で話をしていたが、途中パンジーたちいつものメンバ―に呼び出される。正直、行きたくない。今ここでドラコのそばを離れて、彼に色目をつかう女性が現れたらどうするんだ！アストリアとかアストリアとかアストリアとか！

という僕の叫びも虚しく、僕は彼女たちに引っ張られる。ネビルに「ドラコに悪い虫がひつつかないようにしっかり見張っておいてよね」と念を押しておいた。

「はあい。ハリー。誕生日おめでとう。」

「ありがとうパンジー。そのコサージユかわいいね。」

「おめでとう。ハリー。その顔『ありがとう』って顔じゃないわよ」

「ハッピーバースデーハリー。ドラコのほう睨んでないでこっちなさいよ」

三人に引かれるままついていったが、ドラコの顔が見える距離と角度だけは死守する。

「誕生日を迎えた瞬間を好きな人と好きな人の家で過ごすなんて大胆ね。」

「好きな人の部屋ね」

「ロマンチックだわー。」

「ミリセント。棒読みがすぎるよ。言い換えればただの男友達でしかないといえる」

「それね」

やっぱり恋バナが聞きたいだけじゃないか。そんなの今じゃなくてもいいじゃないか。別に、後でも、新学期でもいいじゃん!!! あああああああああああ、ちよ、あの女の子誰! ドラコに近づくな! ちよおおお

「ハリー、顔がうるさい。どうしたのよ」

「ああ、あのドラコに声かけた子? ダフネの妹よ。とても賢くてね。びっくりするくらい冷静で大人っぽいのよ」

「アストリアっていうのよ。ドラコが好きでいつも彼の話をしているわ」

ドラコが好きでいつも彼の話をしている? 怒りで持っていたグラスを割る。目の前の三人

が引くのがわかった。「アストリアでしょ。知ってる。昨日はなしになったよ。『かわいいにきまってるだろう』って怒られたよ」

「はっハリー! ほら、いったじゃないの。ドラコに恋をしない女の子はいいのよ!」

「そ、そうよ! そりゃアトリアも女の子ですもの! ドラコみたいに絵に書いた王子様が目の前に現れたら、そりゃあ憧れて当然でしょう。」

「ドラコが、かわいいに決まっているだろうって」

「きやあ、泣かないでみっともないわ!」

僕は、同級生の女の子(本来なら年下)に「みっともない」と言われながら慰められる。だって、だって、く。僕も女の子になるべきだった。そうしたら! と思ってまた考えるのをやめた。どうせ、女の子になったところで、くせつけばさばさ頭の僕だ。むしろ見向きもさ

れないだろう。だったら、まだ、このままでいいのだ。

「ほら、ハリー！あそこに黒い犬が居るわよ！」

「かわいいかわいい！かわいい？結構大きいわね。ドラコの家犬なんて飼っていたかしら」

そうして、話が変わる。

女の子はおもしろいなあと僕もつい笑ってしまった。「ほらあそこに犬が居る」で気分とテンションが変わってしまうなんて。僕もなかなかだなと思った。

さて、「泣いたことは、ドラコには内緒ね。さらにいうと、こんな弱い僕がいるのも内緒だからね」と三人に念押しをして僕はいつものコロツとした馬鹿っぽい顔を意識する。

「うっわー!!!ドラコの浮気者！ありえない！僕というものがありません！」

と叫んで、彼らのもとへ走り出した。

その後、ルシウスさんに呼ばれて魔法大臣と話をする。

ファッジは変わらずクソヘタれな男のままだった。

しかも、僕がこの家にとどまる事を、スリザリンであることを良しとしていないことも手に取るようになった。ドラコの解説で「なるほど」と世間の見方というものを理解した。

「何が真実で、何が虚偽であるか。疑うべきことが正当な心構えであ

ると信じきった暴君はどんな末路をたどるんだらうねえ。自分を守るための嘘を真実に。自分の恐怖に蓋をするための妄想を誠に。とんだ茶番だよ。」

まあ、なんだっていいのさ。僕は僕がヴォルデモートの手先ではないことを知っているし。もちろんドラコがそうでないことも知っている。繊細で心優しい僕のドラコ。そうやって心傷めないでおくれ。君は幸せに笑ってくれていればいいからね。

さてはて、いよいよだな。と僕は自分の杖を握り締める。以前と同じ展開ならば、吸魂鬼が現れてこの汽車に侵入していく。今回は守護霊の呪文もあるし、あれから何度も吸魂鬼にはあったから、今更恐怖も何もなかった。けれども、以前リーマスが言っていたことを思い出し万が一に備える。

なぜ、僕だけ吸魂鬼にあうとあんな状態になってしまうのだろうか。その間に彼は、僕は誰よりも恐ろしい体験をしているからだよと言った。今は、その恐ろしい体験を覆すような幸せな経験がたくさんある。けれども、ドラコはどうなのだろうか。ドラコは、あの戦いは恐怖のままおわり、トラウマでその後もひきづっているようなところがあった。アストリアのおかげだなんていいたくないけど、それで落ち着いていた彼が、彼女の死で一時荒れたのも真実だ。

そうして、停電のうち現れた吸魂鬼を前にして、ドラコはひどく青ざめていた。ぐらりとバランスをくずして、こちらに倒れてきそうになる。それを僕は抱き止め、その様子に、色々なことがフラッシュバックする。なにが自分には恐ろしい体験を覆すような経験があるだ。その幸せな記憶をさえもすべて塗りつぶすようなトラウマが僕にもあるくせに。

先生に任せて流れに身を任すという方法もあったが、僕はもうそれを待つ余裕すらなかった。「先生。どけてください。僕のドラコが怖がっているの」そういつて僕は容赦なく守護霊の呪文を唱える。幸せな記憶が守護霊の呪文を成功させる秘訣だつて？まったく、よくいったものだ。リーマスの問いかけには「スネイプ先生が教えてくれたんです」と答える。なにか困ったときはスネイプ先生のせい、もといおかげにしておこうとずっと考えていた。

「ドラコ大丈夫？」と椅子に座らせるとみんなも彼に口々「大丈夫か」とたずねていた。その様子に違和を感じたからだろうか。先生から「本当にスリザリンなんだね」という言葉と「マルフォイの息子と」という言葉が発せられる。その発言に物申したのは僕らの才女ハーマイオニーだった。ありがとうハーマイオニー。

けど、きつと先生は、僕の父さんたちを思い出してしまっただけなんだよ。

僕の父親と、シリウスと、母さんと、スネイプと、そしてペティグリュー。それらはきつと、リーマスの辛い過去なんだよ。

そのあともドラコは、ひどい顔をしていた。

背中をさすってやるけど、ほんとうにしんどそうで、できることなら変わってやりたいとすら思った。ほんとうに、吸魂鬼滅べばいいのに、そんなの雇う暇あれば、マグルみたいに見守りにすればいいのに。ああ、吸魂鬼に賃金は払われてないんだっけ。

三年生の時間割はいくつか選択授業になっていた。僕がドラコと同じ授業を選択していなことをパンジーたちは、明日槍がふるのかしら？と心配していたけれど、僕は占い学だけは生まれたときから取らないって決めてるから。そんなもって僕はドラコみたいに優秀ではない。魔力は高いから呪文学とかDADAとか杖を振るのは得意だけどそれ以外は、合格点をとれるかなってくらいなんだ。必要以上に勉強はしたくないんだよ！

そりゃあ、ドラコと一緒にいれないのは悲しいけど、それと引き換えに勉強しなきゃいけないとなれば話は別だ。いいもんスネイプ先生が僕にはいるもんね。

とまあこんな感じで僕は彼らが占い学の授業に向かうのを見送る。この時間僕はフリーだった。何をして遊ぼうかなーと思って、リドルを呼び出す。

「はあい。リドル。」

『なに？』

「サジツタは元気？」

『元気だよ。特にやることもないから、学生らしく勉強に勤しむと
いっていた』

「へえ、といっても君が一通りはどうせ教えているんだろう。ときどき必要の部屋が使われていたからね。今思えばあれは君たちが使っていたんだね」

『ふふふ、ご名答。といってもサジーが僕をこの学校で所持していたのは短期間だったからね。どっちかというところ、入学するまでの座学を教えられるだけ教え込んだというところかな。』

「ご苦労様だね。」

二時間目の変身学は扉のところまで彼らが現れるのをまつ。トレローニー先生の適当な占いでロンが怯えてしまっているのは、なんともおかしかつたしちよつと可哀想だった。魔法生物学の授業では、特に問題がなく一時間が終わった。なんだ。ドラコがなにもしなければ、何も怒らなかつたのか、と拍子抜けしていたら事件がおこった。サジッタがヒツポグリフによつて怪我をしたのだ。

見舞いに行く、彼はケロリとして様子で、スリザリンの先輩へ憤っていた。まあその憤りも「無駄な感情」だと切り捨てているようで、改めてこの子は怖いと思う。こういうのも、リドルの受け売りなんだろうか。この調子だと、ヒツポグリフの処刑は免れるかなと思っていたけど、サジーの言葉を聞いてそんな生ぬるい考え、この物語のまえでは無駄だと思ひ至る。なるほど、わかつた。サジーじゃあない、別の先輩がこの出来事を訴えてヒツポグリフについてはそれなりの処置が行われるかもしれないってことね。そんなもつてそれは自分のせいではないと。わかつたわかつた。ってわかりにくいわ。もつとわかりやすく単刀直入にメッセージにしろ。

ヒツポグリフについて、一応策は講じておこうと考える間もなく、リーマスによる初めての「闇の魔術に対する防衛術」の授業が行われた。

「ドラコ。ちゃんと『本物』には蓋しておいてね」

「わかってる。それもせずに行くと、僕はヴォルデモートになりそう
だ。」

「僕はどうかだろう、深層心理はわからないけど、ガッチガチに固めてお
こうと思うよ」

僕はわかっている。どうせドラコの姿だ。ドラコの、あの…

そこまで思い出したところで僕は心にシャッターをしめる。危な
い。本気でまね妖怪をドラコに変えてしまう。それだけはダメだ。
せつかくなら面白いものに変えられるものになろう。と0点のテス
トにしようかな。と考える。それをリディークラスでビリビリに破い
て、花ふぶきにしよう。そうしよう。

しかし、そこまで用意周到にしていた僕の心をひどく揺さぶる現象
が起こる。

それは、ドラコを前にしたまね妖怪が「病床のアストリア」を写し
たことだった。それだけでも僕はショックだった。やはり、ドラコは
アストリアのことを今でも深く思っているんだ。知っていた。しっ
ていたよ。君が奥方のことを愛してるって。

それでも、もう少し僕の方を見てくれたっていいじゃないか。

僕だって君のことが好きだったんだから。

ジニーが送り出してくれた、あの時から僕にとっては新しい人生が
始まる予定だったのに。

ノーと君に断られても、何度だってアタックする予定だったのに。
けれども、それすらもできなかった。

好きだと伝えることすら。

それすらも、できなかったのに。

「リディークラス」と君がいったその言葉に、目の前のアストリアは美しい花嫁姿に姿をかえた。それは、写真でしか見たことがない、純白の美しい姿だった。

そんなにも、

こんなにも時間が経って。

新しい人生を歩んでもなお、

君は彼女を選んだね。

そう思うと、悲しくなって、恐ろしくなって

あの11歳のアストリアが怖くなって、ドラコの目の前から消えてしまえばいいのにと

そう思ってしまったから、

まね妖怪は、あの可愛らしいアストリアに姿をかえた。

どこまでも、傷をえぐってくれるな。

「リディークラス」

みんなにはその後質問攻めにあつた。まあ、仕方ないよね。って思ったけどドラコも「理由」を聞いてくるから、ほとんど僕は泣きそうになって、あっかんべーだけしてロンをみつけて走り去った。絶対。ぜったいドラコにだけは涙をみせてやるもんか

「スネイプ先生。僕の心はもうダメです」

「毎回占いの授業のたびに吾輩に来るのはやめんか」

「きづいてました?」

僕はスネイプ先生のところでぐずぐずとお茶をのんでいた。

先生は優しいから、適当にひどく親身そうなのよすは見せないで僕の話聞いてくれる。そういうふりをしているだけで、先生は僕の話をちゃんと聞いてくれてるってこと知ってる。

「その、マルフォイに依存しすぎるのをよせ。」

「ダメです?」

「嫌な奴を思い出す」

父さんとシリウスかな?

まあシリウスが父さんに依存してるふうだったもんなあ。

「これは、僕が生きる意味なので無理です。依存は不可抗力ですけど。ドラコがそこについて笑ってくれるのが僕の幸せなので」

「だったら、ほかの女性のところで、幸せにしているのを祝福ぐらいしてやれ」

「それは先生のことですか!!!!」

「ええい。いちいち癩癩をおこすな!」

追い出された。

いいもんいいもん。

そうして空き時間を利用しながら、僕は僕の準備をしてみた。

とりあえず、スキヤマンダー氏のお孫さんがレイブンクローにいる

という噂を聞きつけ、遊びに行く。その道中でルーナとも友達になった。なかなかおもしろい子達で、色々なお願いをしてしまう。彼らは、それら全てに「生活が豊かになりそうだね」といって了承をしてくれた。

そうして、初のホグズミード行き連絡がくる。

これに関しては僕はスルー。どうせいけませんし？

ロンたちに、お土産をお願いしてから、その日を楽しみにまつ。当時は行きたくて、色々とすねちやっってたんだよね。

「忍びの地図イベントについては、ぼくがなんとかするとして、はいこれ」

『はいこれ。とはなんだ』

「スキヤマンダー氏からいただいた、検知不可拡大呪文のかかったトランク。出会って二ヶ月で、これをプレゼントしていただくにいたる僕ってすごいコミュ力高い！」

そういつて、僕はリドルにそれを渡す。

「これをね、もすこし、拡大して、大草原にして欲しいんだ。できれば、この中で生活できるぐらいの自然を作って欲しい」

『それは、僕に神になれということか？』

「おお、そうだね。天地を創造する神になつて」

できるでしょ。と僕は彼にトランクを渡す。

まさかできないわけないでしょ。というと彼は『口車に乗せられて

やろう』といってそのトランクを受け取ってくれた。よし、これで、ま
ずは一つ準備終了。

ホグズミードの日は、スネイプ先生の研究室で楽しくお茶会をして
いた。途中リーマスがきて、いつもと違ったおしゃべりを楽しんだ。
僕たちはスネイプ先生のこと大好きだからそれを伝えるとリーマ
スはとても驚いていたけど。

「ルーピン先生は、スネイプ先生のことをファーストネームで呼ぶの
だな」

「そういえばそうだね。シリウスはファミリーネームだった気がする
る」

「そういうところで距離感がわかるよな」

「ドラコのことをドラコと呼び始めたのはいつだったか今思いだして
る」

「やめろ。恥ずかしいだろ」

「確か、僕が先に呼び始めてー…あの時のお酒美味しかったね。日本
酒だったな」

「しっかり覚えてるんじゃないか」

「その反応はドラコもでしょ」

ふふふ、僕はすこし幸せな気分になる。

幸せな気分になると、またその分悲しいこともある。山あれば他に
有り。まあ僕としては、まったくもって悲しくはないワケだけど。

それは、シリウス・ブラックの侵入の知らせだった。

シリウスの侵入なんてどうでもいい。そんなことより、その噂話に
花を咲かせて誰かを傷つけてしまっていることに気づかない、生徒た

ちに腹が立つ。僕が気にしていないから、きにしないでいいんだ。この噂は全く関係ない。僕に関係ないところで、関係ない人たちがすきかっってはなしているだけなんだから。

しばらくは、シリウスの話でもちきりだった。そんな校舎内にいるのも煩わしくて、ドラコと同じではない授業のとき、ふらふらと禁じられた森を散歩するようになった。厨房から、お菓子をいくつかいだいで。

その日は、ドラコがネビルに魔法薬学の勉強を教えるというから逃げてきた。なぜ、テスト前でもないのに勉強をしなければいけない！ おもしろいものないかなー。とキョロキョロしていると。無用心すぎやしませんかねシリウスさん。であつていまいました黒い犬と。まあ無用心なのか。僕に会うためにわざわざ会いに来たのかについてはおきましよう。

持っていたお菓子を「ほら」とほおり投げるが、パッドフットはそれを無視した。僕を、ただいっぺんを見つめているようだった。「ああ」と僕は、彼の視線の先に手をあてる。

「似合うでしょう。緑色。僕の母さんの目よりは深いけど、けれどもきれいな緑だよ」

うううう。と犬が唸る。

それが面白くてつい、挑発してしまう。

「僕の大切な人。ドラコ・マルフォイっていうんだけどね。お揃いな

んだ」と

クイディッチは、まあ上々といっておこう。吸魂鬼たちがドラコをおそったら気が気ではないと思い、さっさと退散願おうと思つて守護霊の呪文を唱えたら、スネイプ先生と校長からお助けいただいた。

まさかのダンブルドア!?今回はそんなに関わっているつもりもないので（といつても、見舞いに来てくれたり、最低限のアドバイスはくれてはいたが）助けてくれるとは思はなかった。つい、穿った見方をしてしまう僕をドラコが「あまり考えるな」というから考えるのはやめておいた。

そうやって、色々と変化はあるが、僕としては、予定通りに物事は進んでいた。スネイプ先生とドラコをつなぎ脱狼薬の研究を進め、ドラコはルーピン先生と守護霊の呪文の約束をする。僕は、叫びの屋敷の方が一に備えて、トランクを入手して、改良をリドルに押し付ける。もちろん、ペティグリーをに逃がさないための道具もドラコを通して双子に発注中だ。そして、肝心の忍びの地図もその双子に借りて、しかも途中まで作った地図付きで、ドラコに渡して作成に取り掛かることができた。

何の問題もないように思った。

もともとの学年はヴォルデモートは関係ない。

何も起きなければ、ほんとうに何も起きないのだ。

あとは、平穩にドラコと楽しい学校生活を送るだけ。

楽しみだなあと思つた矢先に、「ハリー様」とこえをかけられた。

もう悪い予感しかしなかった。

後ろを振り向くとそこには、シワ一つ無いローブを身を包んだ。「可愛らしい」が誰より似合う女の子アストリア・グリーングラスがそこにたっていた。

なんでこんなことになった？と僕は一生懸命に今日この時までのことを振り返るが何も理由は思いつかない。思いつくとしたら、さきほど声をかけられて「お茶でもいかがですか」というアストリアに「うん」と答えた僕に理由があるとしたか思えなかった。

「お口に合うかわかりませんが」

と違って差し出されたお茶は、とてもいい香りがしていた。ピーチのにおりが甘くて、ピーチティかなと口をつけたら、渋くてびっくりした。「中国茶ですよ」とアストリアが笑うから、だったら、先に言っついてよ。とすこし不機嫌になる。

なんなの。ドラコに近づくなっていういい気に来たの。それは、僕のセリフだし。恋愛としてはそっちのほうに近いかもしれないけど、振られたらそこで終わりなんだからな。僕は友人という立場にいれば、「終わり」は来ないんだから。あ、言っついて泣きそうになってくる。

「そういうえば、まね妖怪。わたくしに変化したとか。なぜですか？」

「それは、あのときにも言ったけど、君にドラコを取られるかもって」

そういうと、彼女はそうですか。と可愛らしく笑った。その瞬間彼女の周りには花が咲いたようだった、朗らかに笑う。ほんとうに。その彼女が、ティーカップを音もさせずに、机におく。そうして僕の日を見てはつきにりこういった。

「単刀直入に聞きますけど、ハリー様はドラコ様が好きなのですか」

どう答えたものか、とおもい言葉を詰まらせる。

その様子を見てアストリアは言葉を紡いでいった。

「お姉さまたちが言うには、ハリー様は恋愛としての意味でドラコ兄様のことをお慕いしているというのですが、そうなのですか？もしお遊びなら、あまりあの方の心を悩まさないでいただきたいのです。」

「それは、何。どういうこと」

「言葉の通りですわ。ハリー様。本気でないなら、思わせぶりな態度はやめていただきたいと思うのです。」

僕は目の前の少女に悲しみを覚える。

ずるい。

「思わせぶりじゃない。思わせてるんだ。あいつが鈍感なだけだ。僕は好きだって何度だって伝えている」

「けれども、ドラコ兄様はそれを信じていないじゃありませんか。それは結局伝わっていないのと同じでしょう。本気でドラコ兄様のことを思っでいらしゃるんですか？」

「想ってるよー」

僕は声を荒げる。

誰に言われてもきつと僕は癩癩を起こしただろう。スネイプ先生にもいちいち癩癩を起こすなど言われた。だけれども、アストリアは

ダメだ。君が言ったら、我慢しようなんて思わない。我慢なんてできるはずもない。

「僕はドラコのが好きだ。好きだから今ここにいる。僕が今ここにいることが、ぼくのドラコに対する全てだ。周りになんて言われようと、周りが認めてくれなくたって、それが僕の真実で僕が、彼を愛してる証拠だ。」

言ってしまった。

たった11歳の女の子に。

パンジーたちにすら、僕はこんな姿を見せていないのに。

アストリアだからだ。

聞いてきたのがこのこだから仕方がない。

「そうですか。あなたがここにいることがドラコ様の愛なのですね。わかりました。それを信じます」

「何が言いたい」

何が言いたい。

この子は何を確認している。

「そういえば、スコープピウスはドラコに似て、なかなかイケメンに育っていましたね。あれでは周りの女性が頬っておかないでしょうに。でも、まああの子にはアルバスがいますものね」

そういつて、微笑んで静かにカップを口元に持っていく。

僕は、その場を逃げ出した。

きっと、みつともなかっただろう。

彼女が僕を追ってきているか、どうなのかそれすらもわからず、僕は全力で、脇目も振らず、寮の部屋に閉じこもった。

アストリアがアストリアだなんて信じない。

そんな、まさか、嘘だろう。

嘘だろう。

ドラコの奥方だとはやし立てた。

自分の気持ちを隠すために、バレないようにするために。

なのに、あの子が正真正銘のドラコの愛したアストリアだなんて、そんなの勝ち目がないじゃないか！

僕には何もない。

ドラコが好きだって気持ちしかない。

それも伝わっていない。伝えてきていないから。すべて冗談だっておもわれてる。

アストリアはどうだ。

ドラコは彼女のことを「かわいい」っていつていた。

アストリアだって、ドラコのことを好きだ。

だって、「彼女のドラコ」だ。

「僕のドラコ」じゃない。

友情でいいわけがない。

でも、恋愛で勝ち目がない。

ドラコが一番が僕でなくなる瞬間が、その時が、もうすぐそこにある気がして。

ぐるぐるぐるともう何もかんがえられなかった。

「僕だけを信用してといったのは、ハリーだ。他の物は信用するなど。その中で、一体ハリー以外の誰が僕の一番になると言うんだ。安心して。一緒にいてやる。」

どういう気持ちで、どういう思いでドラコがその言葉をいったのか、僕には想像もつかない。「一番」とか「一緒にいてやる」とかどこまで本心かわからない。今の僕にとっては「嘘つき」とただただ叫んでしまいそうになるだけだった。けれども僕は「信じる」ことしかできないし、その言葉を疑うことはより僕を「悲しみ」に突き落とすことになるだろうことが想像できたので、僕はとりあえず、ドラコの言葉をひらすらに受け取ることにした。

それでも、いつどこでアストリアがドラコに話しかけるかもわからなかったし、また、ドラコがはなしかけないとも言いきれない。自分が知らないところで、何かしらの会話が行われていると思うと、考えるだけでも辛くて、僕はずっとドラコにひつついていることにした。リドルが『重たい』と連呼していたし『恋人や家族にそれをされても僕は無理だ。愛想つかされるんじゃないか』と僕たちをみながら呟いていたけど、それで我慢して疑心暗鬼になって辛くなるほうが僕には耐え難かった。

ふらふらと出歩くのもやめにして、ドラコに押し付けていた忍びの地図の完成は手伝った。スムーズにできて、予定より早く完成したらしく「最初から手伝えよ」と言われたけど。リーマスの手に最終的に渡ることを考えれば、どうしても本物が欲しかったので、最後に色々と仕掛けをした。というより、双子が気に入りそうな仕掛けをほどこしておいた。かつ、僕たちの活動を制限されるのも嫌なので、僕たちに関してのみ都合よく現れるようにもしておいた。双子には申し訳

ないけど今後のことを考えると必要だった。

ホグズミードでロンたちはシリウスのことを聞いてきたらしい。けれどもそれは噂に過ぎないし、結局は関係ないことなのでふんふんと聞いておいた。それよりも早くクリスマス休暇がくればいいのにと願っていた。そうすれば、アストリアやほかの女性たちにビクビクする必要もないのに。

そう願って日々を過ごしていたら、やっとクリスマス休暇がやってきた。これで、僕も安心して物語が進められる。まずはハグリッドのところ遊びに行こうということになって、小屋に向かうと、そこには泣きはらしたハグリッドと一つの封筒があった。それは、ヒツポグリフの傷害事件の処遇についてもものだった。

そこに書かれていたことは、至極全うでそこには「不可思議」なこともなにか大きな力に左右されたと感じるような要素はすこしもなかったが、ハグリッドはそれをルシウス・マルフォイのせいにした。

「ハグリッドー！」

「そんなことは、どこにも書いていない。そうやって想像で誰かを悪者にするのは間違っていると思うよ」

しかし、僕のその言葉は、泣き、興奮しているハグリッドには届かなかった。このままいても、いいことにはならない。お互いのためにもだ。そう思い僕はドラコをそこから連れ出すことにする。

それにしても、本当に失礼な話である。ああも、ルシウスさんを敵認定できるものなのか。ただ、スリザリンだということだけで、ダン

ブルドアと考え方が違うというだけで。ふと以前の自分のことを考える。僕はドラコにたいしてそんなだっただろうか。もしかしたら、そう思っていた幼少期があったかもしれない。けれども、僕たちは彼らとは違う、その後、良好な関係を築いたのだ。やはり、同じだとは思いたくない。

「まあ、僕も正直、なるようになれって思ってたからね。けれども、結果、ルシウスさんに被害がいつて、ドラコが非難されるのであれば、最初から手を打っておけばよかった」

「非難？ハグリッドにか？」

「僕はそれが嫌なだけだよ。ドラコ。防げる痛みは防ぐにこしたことはない。しかも、ハグリッドは本気でそう思ってたよ。」

「ああ、グリフィンドールが正義で、スリザリンが悪なんだろうな。」

そう、そういうことだよ。そういう図式が当然のようにあるのが、全くおかしい話なんだ。

「そうやって、幼い頃から人を区別させてるよね。よく考えると。これって差別みたいなものだろう。それこそ、ジエームズは、アルが入学するまでずっと『スリザリン』のことをぶつぶつ言ってたよ。けど、それっておかしい話だよな」

「まあそだろうな。結局そういうシステムが、僕たちを偏った考え方に導いているのだからな。」

『そうして純血主義も同様に』

部屋に戻った瞬間のリドルである。

ずっと僕たちの話を聞いていたらしい彼は、彼の思う『純血主義』と『寮システム』について考えを披露してくれた。クリスマス休暇はサジッタも家に帰っているということと特にやることもなく暇なのだそう。暇なら僕のお願した宿題をやればいいのに。

というより、未来のヴォルデモートに純血主義について考えを聞くことがあるとは想像もしていなかった。

『あと、全く関係ないがダンブルドアがそんなに偉大なのかということには最大の疑問をぶつけるし、ハグリッドは何も変わっていない。あれは、グリフィンボールとかスリザリンドとかの問題ではなく、思い込んでしまう彼の性格に問題があるように思う』

「あー…なるほどね。それ以前の問題だね」

そうして迎えたクリスマスの朝は、プレゼントを確認するところから始まった。僕はというと、あのあと用意した僕お手製のブレスレットをプレゼントする。リドルからは『呪いのブレスレット』とつぶやかれたけれども、そんなことはない。たぶん。メイビー。僕の怨念がこもっていたら知らないけど、とりあえずお守りのはずである。女除け。

ドラコからは「フェリックス・フェリシス」だった。全く予想をしていなかったそのプレゼントに僕は、笑顔になる。こんな作るのが大変なものをドラコが作ってそれを僕にプレゼントしてくれたことが嬉しかった。そうして、ほかのプレゼントについてもあけて、追加のプレゼントなどの確認をした。その一つに、アストリアからのプレゼントを見つけて、とっさに落としてしまう。ドラコに「どうしたんだ」と聞かれて隠そうとしたけど、ドラコの方が早かった「それ、アストリアからだろう。同じ包だから同じものかな?」というので、本当は開けずに燃やしてしまいましたかったけど、「開けてみよう」というドラコの提案を断ることもできない。

「マグカップだ」

それは、本当にお揃いの、色違いのマグカップだった。明ける前は、リドルに頼んで、捨ててもらおうと思っていたのに、紛れもないお揃いのプレゼントに僕は、「何か裏があるのか」「意味があるのか」と、首をかしげていた。わからぬ。

クリスマス休暇でたっぷりドラコと過ごして、いろんな話をして、色々取り組んだらすこし心が落ち着いたような気がした。焦って不安に押しつぶされてた僕を俯瞰的に見ることもできていた。仕方がないのだ。そう、仕方がないのだ。

仕方ないと思いつつも仕方ないで済ませられないのが、恋なのだ。ジニー、僕はこんなしんどい恋愛が自分に待っているとは思っていなかったよ。それなりの壁はあると覚悟をしていたけれど、こんなに、胸がズキズキして、自然と涙が溢れてしまうものなんだね。好きなのに相手を疑って、嫌われるような行動を起こしてしまう。ドラコは優しいから、そんな僕を全部受け止めてくれている。こんなの「勘違い」しちゃうよね。僕だけを特別に思っていて欲しいというわがままは、友人のうちは聞いてもらえないのか、友人だから聞いてもらえているのか、そんなのドラコじゃないからわからないけど。

今は僕が一番だ。それを信じてみよう。ドラコが一番がアストリアになったら、そのときはその時で……。

「こんにちは、ルーピン先生！」

「おや、ハリーかい珍しいね。しかも一人なんだ？」

その日僕はルーピン先生のもとを訪れていた。手にはいつぱいのチョコレートという名の賄賂をもつて。

「僕が来るの珍しいですか？」

「おや、ハリーは自覚がないのかい？ 占い学で君の相方のドラコがない時はいつもスネイプ先生のところにいるのは、全職員周知の事実だよ」

そういうながら、紅茶を入れてくれる先生に「えへへ」とぶりつ子をかましながら、指さされた椅子へ座る。「チョコレート持つてきました」と袋のまま机の上に置いた。

「それで、なにかようかな？」

「やだなー。先生単刀直入すぎ。もう少し世間話しましょうよ」

「ふむ。例えば？」

「そうですね。例えば、本当にシリウスブラックは僕たちの敵なのかとか？」

先生のお茶を差し出す手が止まる。けれどもそれは一瞬だった。一瞬だけ、とまり、僕の目の前にカップを差し出して自分も座る。一口お茶を飲んでから先生は笑いながら言った。

「それが世間話？ 単刀直入すぎないかな。ハリー」

「え？ そうですね？ シリウスブラックが敵？ とかヴォルデモートの手下かとかいう話は噂なので、それこそ世間話にふさわしいかと。」

「噂話は世間話」

「はい。人の不幸は蜜の味。いま話題のセンサーシヨナルなシリウスブラックの話。どうせ真実なんて本人に聞かないとわからないのです。だから噂は噂。噂話は本題の前置きにぴったりですよね。」

そういつて、ぼくは差し出された紅茶に口をつけた。

先生がどう返してくるか様子を見るが、

「なるほど。そうだね。つまりは、この話題は受け流してもいい程度
の話題ってわけだね。じゃ、場もいい具合に温まった？冷えた？とこ
ろだし本題をどうぞハリー」

と、感情の読めないニコニコ顔で返されただけだった。流石だ
な。リーマス。絶対誰よりも賢かったでしょう。父さんやシリウ
スはなんでもできる天才肌な優秀さがあつたかもしれないけど、やつ
ぱ先生は雑味のない、力でねじ伏せるような破天荒さじゃない。頭で
理的に考え、丁寧に物事を判断する能力が高い。僕にはないもの
だ。どつちかかっていうと、ドラコとかその息子タイプだね。うん。
僕はジエームズポッターと名付け親シリウスの子供にふさわしい幼
少期だったな。

いや、話がずれる。

「ドラコの、守護霊の呪文の特訓のことなんですけど。」

「ああ、そのことかい。」

「なかなか難航しているって聞いて……」

「ああ、彼はなかなか優秀で筋がいいんだけどね。どうしても色々と
考えてしまっているみたいなんだよねえ。」

そう言いながら、リーマスは僕がもってきたチョコレートに手を伸
ばす。リンツ・リンドール。キャンデイのように包まれた、スイスの
チョコレートだ。手に当たったものを選び、先生はそのまま口元に
持っていた。

「ドラコは周りが思う以上に悲しみの引き出しが多いんです。しかも

綺麗に整理されているから、その引き出しも開けやすい。」

「悲しい記憶？けど、それなら、その、申し訳ないけど、君だってそうじゃないの？」

「先生、今僕は僕とドラコのことを比べてはいません。」

「ああ」

「けれども、敢えて言うなら、僕にとってあの出来事。つまり、そう両親が死んでしまったことですが、その悲しみは乗り越えられるものなんです。なぜなら、知らないでいられたし、そう、いられるから。そして、そばにはドラコやロン。ハーマイオニーやスネイプ先生など、僕に幸せを与えてくれる素敵な人たちがいる。けれどもドラコは違うんです。」

「違う？」

リーマスは、どうということだい、と僕に続きを促す。

けれども僕は曖昧に笑って答えなかった。自分で言っていてずるいとは思ったけど。

「あの子を、どうかよろしくお願いします。」とだけ言って、僕は部屋を出た。お土産に持っていったチョコレートは全部置いてきた。もともとあれは、リーマスのためのチョコだ。

「ドラコの悲しみの象徴は『僕』ですから」

言って悲しくなった。自分で言っていて泣くかと思った。なんなのだろう。この学年は平穩無事で何もないから簡単だよって誰が

言ったんだ。言わなくていいことを言っているとわかっている。けれども、きつと僕は誰かに聞いて欲しかった。「僕の大好きなドラコは、僕のせいで幸せになれないんですよ！」って。

「今日は珍しく来ないから、吾輩は有意義な時間をすごすことができると安心していただけだね。来てそうそう、気持ちが悪くなるような発言は控えてくれないか。」

「つまりはですね、僕と一緒にいることで、ドラコは不幸せになつていくということですよ。」

僕といるといつも辛そうな顔をする。泣きたそうな顔をする。僕のことなのか自分自身のことなのか、限定できるわけではないけど、けれども全て僕に関係して彼のあの表情になっていることは間違いない事実なのだ。色々なことを思い起こされてしまう。

僕はドラコを幸せにするためにここにいるのに。

「はあ、だから会話を心がけろ」

僕は、ドラコを幸せにするためにここにいると豪語してみたところで、僕がドラコを不幸せにしているなんて、なんという僕の不幸。

「はあ、ポッター。それはお前がいつも言っていることと矛盾しているように吾輩は思うのだが。マルフォイはポッターといることが不幸せだといったのかね？言っていないだろう。お前はいつも、噂と真実は違う。推測する暇があれば、言われたことを信じたい。と言っているだろう。もし、マルフォイが貴様のことが嫌いならば、一緒にいることが不幸せならば一緒にはいない。距離をとっている。」

「それは、そうですけど」

僕今センチメンタルなんです。

アストリアの顔がまたちらついているんです。

アストリアと一緒にいるほうがドラコの幸せなんだろうなって今頑張つて折り合いつけようとしてるんです。

「それに、吾輩からみれば……まあ。主観と客観はこの場合は無意味だな。」

そうですね。

「揚げ足をとるな。そういう悩みこそ無駄だというものだ。好いた人間を幸せにする自信がないのなら、とつとと離れろ。むしろ、そのほうが相手のタメになる。」

「いやです」

「だったら、そのうじうじをやめろ。もし、『お前』といると、不幸せなんだ』と直接言われたのならば、泣きつきにこい。毒薬をプレゼントぐらいしてやる。」

この人は、僕たちのことをどう見ているのだろうか。

僕のことをどう考えているのだろうか。僕のこのドラコへの気持ちをどう捉えているのか、正直言つてわからないけど、彼の慰め方は、今の僕にはびつたしだなどと思った。「やっぱ僕、先生のこと好きです」というと、追い出されそうになった。

「先生先生先生。ちよ、追い出すの待ってください。もう一つ、相談があるのです。」

「ほう、くだらない質問だったら、次の魔法薬学のペアはマルフォイと崩すぞ」

「やだ！」

くつ、脅し方のレベルが高すぎるぜ。

そうして、僕は、彼の怒りゲージに注意しつつ、言葉を選びながら相談する。僕の両親の死について真相が知りたいということ。そしてできれば、シリウス・ブラックを捕まえて真相を語らせたいということを。

僕は、今後のことを考えて念のためにとスキヤマンダー氏に手紙を送る。といっても、スキヤマンダー氏は文章を綴るのが苦手らしく、返ってくる手紙は奥様がかかれたもので繊細な丁寧な字でいつも書かれていた。彼らについては、前の世界でも折に触れて書物を読むことがあったが、僕としては本当に理想的な二人だと思っている。実際に関わるようになってそれは確かであったと実感する。

返ってきた文章は、「罪に問われるようなことはできないし、しない」というものだった。「そうかあ……まああの奥方じゃあなあ」と思っていたら別便でスキヤマンダー氏から直接手紙が来た。「どんな事情があるにせよ。危険生物処理委員会に任せておいたら、彼らは悲しい運命をたどってしまう。任せてくれ。」という内容のものだった。

これ、奥様に内緒で、バレないように書いたんだろうああとと思うとその微笑まじさに顔がほころんでしまった。とりあえず、任せておけばなんとかなるかな。と手紙を折りたたもうとすると、小さな紙切れが一枚。

「ダンブルドア先生は偉大だが、彼は全てを明かさない。君の幸運を祈っているよ。」

僕が読むとともに、そちらの紙切れは一気に燃えてしまった。

とりあえずヒップグリフの件も方がつきそうだし、寮に戻ってゆっくりするか。と部屋に向かうが、今日がドラコの守護霊の呪文の練習日であったことを思い出しそのまま行き先を変更する。

そこには、涙しているドラコの姿があった。

「えつちよ。はっ!?」思わず、挨拶もせず、ルーピン先生に詰め寄る。すると、ドラコに「そうじゃない」と止められてしまった。

泣くほど思いつめちゃうなら、泣くほど悲しい思い出を思い出すなら守護霊の呪文なんてマスターしなきゃいいのに。ドラコのことは僕が守ってあげるし、幸せにしてあげるよ。と思うが、それでは意味がない。彼のやろうとしていることを制限するような真似はできない。

そして、特別なことじゃなくて平凡な幸せでもいいんじゃないの？と伝えると彼は、つきものが落ちた顔になって、守護霊の呪文を唱える。「僕の幸福も、君と同じだ。今この瞬間が、幸せに溢れている。エクスペクトパトロナム」美しく、ゆつくりと、流暢に美しい発音で彼が唱えると、杖からするすると白銀色の光が出てきた。

それは、彼の目の前でぐるぐるとえんを描いていた。蛇のような。ドラゴンのような。なんだろうか。けれども、その守護霊は意思があるかのようにぐるぐると、ふわふわと彼の周りを漂う。「みてみて、私のことみて」と主張しているように。

ヒッポグリフの裁判については、以前と同様に資料はまったくなく、あったとしても悲しい、われわれにとって不利なものばかりだった。ハーマイオニーは一生懸命図書室で資料をあたっていたけど、正直「無駄だな」という感情が湧き出る。スキヤマンダーさんにいったし、もうどうにかなる問題だし…と僕は知っているからというのもあるだろう。

それにしても、この一生懸命さ、ひたむきさというのは、若者の、幼

年時代の特権かもしれないな。ということに思考を巡らす。僕がとうに失ってしまったものだ。僕が僕じゃなくて、正当な僕であったならば、きつと彼女と一緒になって一生懸命に事例を探していたに違いないのに。以前の僕も、そうだった…。あれ、クイデイツチに逃げてたんだっけ。

そうして、今日もいい成果が得られないまま、たがいの寮へと分かれていった。そういえば、パンジーたち最近ハーマイオニーと一緒にいることが多いって言われてたっけ、またあの子達になにか言われてしまう。と、寮に戻る足が自然と早くなっていた。

そのときの僕は、怒りが頂点に達していた。悲しみかもしれない。認めよう。みとめます。どうせ僕は癩癩持ちですよ。わかっているんだけど、カツと頭を支配するこの感情を自分でコントロールできないんだもん。

目の前には、椅子に座ったドラコとアストリアそして、それを囲うように立っているパンジーとミリセントとダフネの姿があった。彼らの会話はまったく聞こえない。「この状況」がどんな状況なのさえも考えたくなかった。すこしするとそこから女生徒たちが離れ、ドラコ一人になる。いけない。このままだと、ドラコに当たってしまう。そんな子供っぽいところだけは見せたくない。といってこのまま部屋に戻ったところできつと不安で大泣きしちゃうだろうし、僕が離れた空間がまた「さつきと同じ」になるのではないかと思うと、どちらも選択ができなかった。

『怒りの八秒ルール』

うるさい。リドル。

「インセンディオ」

『あーあ。また、やってるのかい』

スリザリン寮の部屋。

「何度燃やしても何度燃やしてもやってくるんだ」

『ひたむきじゃないか。返事がなくても何度も何度も差し出してくる。愛のこもったラブレターだ』

「はあ？そう、わかった。もしこれがラブレターだったとして、君は全てのラブレターをあけて読んでいたのか？」

『もちろん。しっかり名前も控えて丁寧にお断りの手紙を出していたよ。』

そうだろうとも、リドルはそんなやつだ。

「はいはい。それに、そもそもこれはラブレターなんかじゃない。愛がこもった？僕に？ドラコに？アストリアからの手紙なんて、僕が読む必要はない。」

そう、あの日からずっと僕に届く手紙。

それはアストリアからのものだった。僕はそれを、一度も返事を返していないければ、当然開封もしていない。アストリアが何を考えてい

るかわからないからだ。

『あの時逃げずに開心術かければよかったのに。』
「うるさい」

『この話題に関してのみ、君は語彙力がないね。まあ、僕には関係ないことだ。と言いたいけれど、そうやってイライラ八つ当たりされるのはやはり僕なのだから。すこし落ち着いて生きてみれば?』

「お言葉ですけどヴォオルデモート卿。あなたにそれは言われたくない。僕からすればお前もひどい癩癩持ちだ。」

癩癩で反マグルしたようなもんだろ。

『はいはい。わかりました。それよりも、トランク完成したから渡ししておく。思った以上に楽しい作業だった。すこし張り切りすぎたかもしれない。入ってみるか?』

そういわれて入ったトランクの中は、一つの部屋だった。目の前のドアをあけると、そこには大草原が広がる。心から「すごいな」という気持ちが漏れてしまった。『ふふふ』とドヤ顔のリドルに後ろ見ろといわれ、振り向く。すると、先ほどのドアは玄関のドアだったらしく一見の家が建っていた。

「これは…トランクの中は一種のシェルターだな。」

『生活できるよ。生き物も自然も全部再生しておいた。』

「まじで天地創造の神になりやがったのか」

『まあ、魔力ありきだけどね。やり始めたら細部までこだわってしまっただよ。魔力供給さえあれば、もし世界が大戦争になったとしても、このトランクの中で生きていける』

「なんか、僕が頼んどいてあれだけど。自然の摂理に反してないか?

大丈夫か？」

『さあてね』

そういいながら、もとのドアをあけ、部屋に戻る。リドルはその家の主であるかのようにカップにお茶を注ぎ、僕に差し出す。

「部屋の小物も全部用意してるんだな。なんか、きれいな家だ。」

『僕の理想の家だよ』

「ずずず。僕の理想の家？」

「リドル、こんな家に住みたいの？どうしたの？一年まだ一緒にいないけど、君の性格って本来『ソレ』なの？現実世界のヴォルデモート。僕の知ってるヴォルデモートと一致しなさすぎて思わず音出して紅茶飲んじやったよ」

『まあ、僕まだ学生だしねえ。あつちはもう70近い。色々あつたんだろうね。けれどもやはりマグルは嫌いだ。知識のない人間が知識のある人間を傷つける。自分の知らないことを『悪』だのなんだの騒いで排斥しようとする。バカバカしい。そうだね、たとえば君のおじさん。バーノンだっけ？あれは、僕が一番滅べばいいのにと思っているタイプの人間だ。そして機会があれば、僕は僕の父親を殺したい。僕がこうなったのはあの男のせいだ。そういう意味では、僕はヴォルデモート予備軍だろう？』

「君の父親については、本物の君が殺しちゃってるよ。そして、なんとなく言いたいこともわかった気がする。そう、たとえばハーマイオニーは？」

『あの子は賢いよねえ。馬鹿な魔法使いよりは上。』

「君さあ使える使えないで人を判断してない？まあいいけども。君がああヴォルデモートと性格分岐したのはなにかきっかけがあるのかねえ。」

ぶつぶつと僕はお茶をのむ。

このまったりとして空気が、おかしい。リドルと優雅にお茶を飲んでいるだなんて。

『僕はね。ハリー。ヴォルデモートの思想・思考については全面的に賛成だよ。それは、まぎれもない僕なんだろう。けれども、方法は馬鹿になって思ってる。もうすこし、内部から上手にできなかったものかな』

「それはまあ」

僕は言葉を濁す。せっかく曖昧にしてあげたのに彼が「ダンブルドアのせいか」と自分で答えをつぶやいていた。なんだか少しかわいそう。僕もこいつも。

「まあ君にはサジツタがいるからってことなんだろうね。あの子がなんなのか僕にはわからないけど、魅力があるの?」

うーん。トリドルは逡巡して「閃いた」とこれみよがしに手をうった。

「愛じゃよ」

うっせばーか! つい、キッチンを壊してしまったけどリドルが何とかするだろう。ダンブルドアもセブルスもシリウスもリリーもルシウスさんもヴォルデモートも僕もどいつもこいつも愛で、身の振り方を決めすぎる。

そんなこんなで、色々と自由行動をして悲しんだり、イライラしたりしながらも、学生の本分であるという勉強は消えてなくならないわけで、年度末の試験を終わらせ、ぼくはドラコと叫びの屋敷にきていた。このあとのことでドキドキワクワクしていたのに、彼は「試験は出来たか」と聞いてくる。ええい水をさすな。

シリウスと僕の再会は、今後の展開を左右する。といっても展開が変わるだけで、別にどうってことでもない。用意しているプランがAになろうとBになろうとなんだろうと、僕の生き方は変わらないのだから。

当時感じていた一人ぼっちはあまり感じていないし、そんな家族に憧れるような年でもない。ダーズリーの家にいるのは嫌だが、今回はマルフォイのお屋敷や隠れ穴などに早い段階からお邪魔させてもらっているし。

そんな話を聞いていると、誰かが侵入してきた音がする。ロンの声が聞こえ、予定どおりには進んでることを示していた。

「初めまして。シリウスブラックさん。といっても禁じられた森付近で何度かあなたをお見かけしましたが。」ハリーはシリウスに笑いかける。

「ああ、初めましてだな。俺も何度かお前を見かけたさ。」

こうして僕たちは再会を果たした。

特別なことはない。

全ては予定通りだ。

ルーピン先生が、僕たちのことを本当にみていて、信頼のおけるすばらしい教員だった。

スネイプ先生は、僕のことを信頼してくれていた、愛に一途な優しい先生だった。

ハーマイオニーは、本当に賢くて、今回の騒動についてだれよりも理解していた。

ネビルは、グリフィンドール生にふさわしく勇猛果敢で、彼の誠意は胸に来た。

ロンは、大人だった。僕のように感情を引きずらない。物分りがいい、ドラコの友達だった。幼馴染という立場に嫉妬した。けれども、それがロンで良かった。ロンでなければ……。

シリウスは、シリウスだった。

あのあとについては、大人たちは大変だったようだ。ペティグ
リユーの出現により、今まで考えられていたことがひっくり返るの
から。シリウスの身柄はアンドロメダさんが引き取ることになった。
ブラツク家から名は消えているが、そこしかなかったのだ。シリウス
と関係が近いのはいま生存している人で行くと、ナルシツサさん・ベ
ラトリクス・アンドロメダの三姉妹である。ベラトリクスはアズカバ
ンだし、ナルシツサさんはマルフォイに嫁にいつている。

けれども、シシーさんの泣き落として、ルシウスさんは裏でいろい
ろと動いてくださっていた。

「ルーピン先生。辞職なさるんですね」

「ああ、その話か。君たちが汽車に乗ったのを見送ったらそこで僕の
教員生活は終わりだ。楽しかったよありがとう」

ルーピン先生は最低限のものだけを残して、部屋を片付けていた。

「ぼくは教師をしていて楽しかったけど、でも月に一回。しかもその
前後も体調崩すなんて、生徒のみんなに申し訳なくてね」

「けれども、みんな先生の授業が大好きですよ。」

僕は本当のことを伝える。僕もずっとそう思っていた。

「そうだね。ありがとう。確かに、教師は僕に向いているとは思っ
たよ。じゃあ君の親友に頼んでおいてくれないかな。僕の将来のた
めにも脱狼薬の新薬期待しているよ。」と

「きつとドラコ頑張りますよ。守護霊の呪文もですけど、彼、先生のこ
と好きですから。」

ルーピン先生はそれは嬉しいねといって、机に腰掛けた。彼は、今
回の本題はまだかな。と僕に促していた。

本題は特にない。けれども、聞いておかなければならないことがあ
るような気がしていた。「話があるのは先生の方でしょ。」と微笑んで
返すと、彼は「そうだね」と肩をすくめていた。

「君がもってきたチョコレート美味しかったよ。あれは、僕のお気に
入りなんだ。といっても僕がいつも人からもらっていたものなんだ
けどね。あれは、ドラコの母親から託けられたもの？」

「そうです。何もおっしやいませんでしたが、あの人はチョコレート
がお好きと学生時代から噂だったの。何かあったら持つていくとい
いわ。と。」
「そう。」

そう。やはりそこはつながっていたのですね。先生。

「ハリー。それは違う。つながっていったという言い方はお互いに誤
解を招く。僕は卒業して一度も彼女にあつたこともなければ、それこ
そルシウス・マルフォイにもあつていない。ただ。彼女たちは、僕が
人狼であることを知っていた。」

「知っていた!？」

僕は、つい驚いて大きな声をだす。

「信じられないだろう。図書室でね。彼らはいつも図書室にいた。あ

の空間は宗教画のように美しく、誰もが見とれ、足を止めるが近づけない。そんな空間だった。そんな彼らが、僕に声をかけたんだ。彼らは僕に『月に一度それではしんどいだろう』と言ってチョコレートくれた。あのスリザリンのマルフォイのその婚約者が。だ、『黙っていて欲しい』と僕は真剣にお願いをしたよ。けれども彼らはね、「人の性質について、ベラベラいうつもりも何もない。シシーが、ルーピンを見ては、痛々しい、かわいそうと泣くものだからね」とだけ行って去っていったよ。それから、月に一度チョコレートが届いてたんだ。」

そんな、さすが。

「ただそれだけだよ。だから僕は彼らが好きなんだ。お互いを思い合って、人に優しくできるあの人たちが、当時からグリフィンドールだとか、マグルだとか狼人間だとかで差別をしない人だったよ。」

だったらなぜ

「そう。だから僕もルシウスさんが死喰人になった理由がわからない。けれども、それは彼自身の本意ではない。立場と環境がそうさせたんだと思いたい。ドラコと仲のいい君だから、両親がグリフィンドールでスリザリンになった君だから、頼みたいんだ。マルフォイ家を助けてあげて欲しい」

ルシウスさんは、ドラコの父親だった。それはまぎれもない。優しく、愛に溢れた人だ。けれども彼の抱える愛はグリフィンドールのような太陽のようににじみ出る愛じゃない。スリザリンの、うちに込める、心の中で炎を燃やすような愛だ。

寮にもどり、ドラコをみつけてうしろから抱きつく。
談話室で人がたくさんいるけど、きにしない。ぎゅうぎゅうとしがみついた。

「ハリー、どうしたんだ」

「どうもしないよ。ルーピン先生のところにいつてきた」

そうか。といって、僕の頭をぽんぽんする。いつまでも子供扱いしてほしい。そのままドラコに甘えてしまおう。部屋に戻ろう。声をかけると、ドラコは「いや、ちようどう用があつてハリーを探していたんだ。これを」

といって差し出されたのは何十回とみた、生成り色の上品な手紙だった。

「アストリアから君に。開封して中身を見るまで見守っておいてくださいませ。といわれたので今すぐあけて中身をよめ」

受けとりたくない。

「どうした？代わりに開けてやろうか？」

「いい。大丈夫！なんのことかな。いまさらもしかしてボガートでアストリアにしちやたこと怒られるのかな」

「まさか」

二人でケラケラ笑いながら、開ける。そこには、「今夜、必要の部屋で」と書かれていた。

「あら、来てくださったのですね。最初からドラコ兄様にたのめばよかったですわ」

そういいながら、彼女はどこかのカフェのように美しい真っ白な机と椅子の前でお茶を注いでいた。真ん中にはいくつかのお菓子。そしてお茶菓子としてスコーンがすでに取り分けられている。「ハリー様はスコーンにはなにか付けますか？いくつかジャムももってきましたわ」といってバケットからジャムを取り出し机の上に並べた。

「ハリー様。募る話もありますし、どうぞ椅子に」そういって彼女は、もう一方の椅子に丁寧に柔らかく座る。一つ一つの動作にぼくは、僕とは違う女性らしさを感じていた。

今日のお茶も渋かった。ガラスの透明なポットの中は綺麗な花が咲いていて、見る人が見たらスネイプ先生の研究室にありそう。というかも知れない。アストリアは「これは中国の茉莉花茶というんですよ。最初はまああるのですがお湯を注ぐとこのように花が咲きますの」と教えてくれた。お砂糖は？と差し出されたので、素直に受け取っておいた。

「さて、ハリー様。先日、そして連日私から逃げていることの弁明をお願いしても？」

「あの日は驚いてしまっただけで、別に逃げてはいない」

「私の手紙を一度も読んでいらっしやらないくせに？」

ぼくは言い返せない。

「それを逃げというんですの。あなたにとって私は牽制しておかなければならない存在でしょうに。それもせず、私から逃げて隠れて、なかったことにしようとするのは、それは男がすたるのではなくって？」

本当に言い返せない。

『私』が現れて驚いてしまったことについては仕方ないでしょう。けれども、ドラコ兄様が好きだと豪語して、自分が幸せにするんだ。とおっしゃるのであれば、私を睨む暇があれば私をどうにかしてみてもいいものです

「そもそも、あなたはドラコ兄様を独り占めして、独占するだけでほかに何もしていないではないですか。お姉さまたちにも伺いましたけど、あなたの恋心にはドラコ兄様は全くきづいていないようですよ。本当に彼を幸せにする気はあるんですか？自分が不幸せにならないようにするのに精一杯なのは？」

そんなこと言われたって。

自分が不幸せにならないようにするのに精一杯って、ドラコの幸せを願ってるよ。どうして君はそんなことをいうの。ドラコが幸せに笑ってくれていればいいと思う。そして、その理由が、原因が僕であればいいと思っただけだ。なのに。僕がドラコのことを考えず、自分のためだけに生きているって、そういいたいのか？

そうだとすると、そうだとしても。それを君に言われる筋合いはない。なぜ、君にそんなことを言われたいとけないんだ。ドラコに話すときに僕の許可がいらないと同じように、ドラコを幸せにするのに、君の許可が必要なわけじゃない。あくまでも君は、前の彼の奥さんで、今の彼の奥さんじゃあない。

「君に、それを言われる筋合いはない。」

「そうですか？私だからいうんですのよ」

決壊した。涙腺が。涙が溢れてくる。

アストリアはぎよつとして、ポケットから綺麗なハンカチを取り出す。

叫ばなかったただけでも褒めて欲しい。怒らなかつただけでも褒めて欲しい。

アストリアが「ごめんなさい。言いすぎました。」といって僕にハンカチを渡す。それを受け取る気にもなれず、ただただ涙をながしていたら、彼女が優しく、ハンカチを目元によせてくれた。

「ごめんなさい。ハリーポッター。そんなつもりは、なかつたのです。どうしましょう。お姉さまたちに怒られちゃう。泣くほどだったなんて。いいんです。いんですよ。ハリー様。それが恋というものです。相手のために自分のために、冷静になれなくて、ましてや『私』がいて、そんなの不安になって当然ですわ。我儘なものなのです。」

ひたすらに慰めようとしてくれる、焦っているのがよくわかってしまつて、申し訳ない気持ちになる。ごめん。アストリア。君だつてドラコが好きなのに。僕が泣くから、君の恋の邪魔をする。僕が痲癩を起こすから、恋のライバルにもなれやしないで、君の想いを僕が邪魔してるよね。

「違うんです。ハリー様。違うんですのよ。私は確かにドラコを愛しておりましたけれども、ドラコ兄様に恋をするつもりは、ないんです。」

なんだつて。

「むしろ私はあなたを応援したいと思っています。」

「アストリア。それは、どういうことだ？」

ああ、落ち着いてくれた。とアストリアはホッとして、ハンカチを僕に渡して自分の椅子にもどる。

「言葉の通りの意味です。私は、ドラコ兄様に恋するつもりも恋愛するつもりもないのです。あなたが、ドラコのためにここになるとおっしゃったように、私がここにいるのもドラコのためですが、同時にあなたのためでもあります。」

「私は、輪廻転生をしてここに来たわけではない。といえ、あなたはこの意味がお分かりになるでしょう？」

そういつてアストリアは、悲しみを残した表情で笑った。輪廻転生の結果の記憶持ちではない？ということは、

「僕と一緒に。」

「ええ。」

静かな沈黙が流れる。

ポットの中の茉莉花は桃色の花を咲かせていた。

「もし、今日の前にボガートが現れたとしたら、絶対スコープピウスになる自信がある。」

先に沈黙を破ったのは僕だった。

「スコープピウスは、僕のことをやはり応援していないということか。違うな。信用していない？」

「いいえ、それは違うと思います。先に伝言を一つお伝えしますと『ハリ、僕との約束。パパを幸せにする。を破つてないよね?』と言っていましたから。」

「じゃあなぜ君を」

「簡単に申し上げると、あの子にとってドラコが幸せになれば、誰でもいいということかと。あなたが失敗した時に私が記憶を持っていたら、私がドラコのことを幸せにすると考えたのではないかと思っています。」

「君はなんと言われたの」

「とりあえずは、『ハリーがパパを不幸せにしないか、見守って欲しいんだよね』と書いていました。」

そう、そういうことか、スコープピウス。そりゃあそうだよね。君なら、そうする。たくさんの「場合」を想定して保険をかけるよね。その保険がアストリアつてところがまた、君の性格の悪いところだよ。自分では気づいていないだろうけど。

けれども、アストリアの言った言葉を信じるのであれば、僕がドラコを幸せにする権利を一番に頂いている。と考えられる。それは、僕の後悔が一番に見ていたからだろうか。アルバスとスコープピウス。

「でも、だつたらというのはおかしいけど、アストリアは僕に譲らなくても、君がドラコを幸せにするという手もあるよね。いや正直想像するだけで涙出るけど。君がドラコと恋愛するつもりがないと聞いてくれて、めっちゃくちや安心したからいま平静取り戻してるだけけど、もっとうこう安心するための確信になるものが欲しい。」

本当、心の弱い方ですねえ。と書いてアストリアは続ける。

「あなたたち夫婦が愛し合っていたという真実の上で課題があったの

と同じように、私たち夫婦にも愛し合っていたと自信がありながらも課題があつたといっておきましようか」

「曖昧だな」

「そうでしょうか？自分たちのことを省みて考えたら結構な、安心がえられる情報だと思いますけど」

まあ、いいけど。もう考えるのが辛いし。アストリアがドラコと恋愛をしないという事実だけを信じて安心しよう。

「君はアルバスとも会話したの？」

「ええ、『母さんいわく、父さんはかなりの恋愛ベタだそうだから、迷惑かけるかもしれないけどよろしくお願いします』と言われました。可愛い子ですね。彼に頼まれたのもありますし、可愛い息子の願いでもありますので、私はドラコの幸せ、ひいてはあなたとドラコがくつつくように全力でアシストしますわ」

そんなことなら、もつと早く教えてよ。

ぼくのこの一年間のイライラとドキドキと悲しみの情緒不安定を返してよ！と叫ぶと、「ご自身が逃げ続けたのでしよう。」と冷たく言われてしまった。

そうして、しばらく話をする。

彼女は、会話も上手で僕の不安やら悩みを全部聞いてアドバイスをしてくれた。パンジー達もありがたかったけど、あの子達はひやかしが入っているの、やはり全然違う。ドラコの、僕を見て悲しそうな顔をするんだ。という言葉にも「させておけばいいのですよ。その代わりあなたがドラコのそばで笑ってそれを拭えばいいだけです。」といってもらうなどをした。手のひらを返すような僕の態度が申し訳ないなと思っただけで、それにも彼女は「いいえ。あなたが私の立場であつてもそうしますし。恋愛というのはいつの時代もそうなのです。」と優しく笑ってくれる。とても心が広くて、やはり、嫉妬してし

まうのは僕の心の小ささだ。そして、僕のアストリアに対する誤解が解けてからずっと考えていたことを彼女に頼む。

「それは、いいですけど。それで私はドラゴが幸せになるとは思いませんが」

「けど、そうしないと傷つく。それは嫌だ。」

「まあ、それもそうですね。後悔。絶対するでしょうからそのときは慰めてあげます。」

「後悔する前提？」

「絶対します。というよりこの計画で一番ダメージをくらうのはあなたですよ。」

それについては否定しない。

けれども、ぼくはもう決めていた。

結局どつちに転んでもダメージ食らうのだ。

だったら、いま「よし」と思っている方で、予定を進めていきな

「あ、忘れるところでした。彼らから伝言はたくさん頂いてるのですが、アルバスが忘れないで伝えておいてといったことを一つ。『最終決戦のあと、蘇りの石を禁じられた森にわざと放置するのやめて、あんなちっさい石を、愛するスコーピウスの鬼に頼まれて探す作業、何度か自殺を考えるレベルでした。』」